滿洲文學十年

910.29
O943

大內隆雄著

滿洲文學十年　大內隆

910.29
O943

株式會社國民画報社　刊

滿洲文學十年

大內隆雄著

910.29
O943m

滿洲文學十年 大內隆

910.29
O943

株式會社國民畫報社 刊

滿洲文學二十年

大內隆雄著

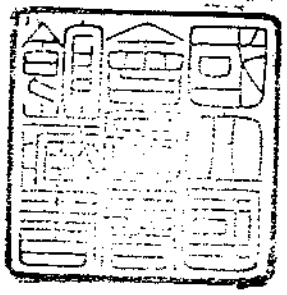
910.29
G943m

滿洲文學二十年

大內隆雄著

株式會社 國民畫報社刊

910.27
S41



U 56117

序

大内隆雄君は滿洲文學に於ける三つの時代を通つて來られた。

第一は建國前、滿鐵附屬地の生活を中心とする時代、第二は滿洲建國を境とする動亂と變遷の時代、第三は民族協和を基調とする藝文勃興の時代である。

大内君はこの時代を貫いて制作し指導し活動して來られた。だから大内君自身が生ける滿洲文學の歴史であると云ひ得る。

此度大内君の著はされた「滿洲文學二十年」は大内君自身の歴史であると共に、滿洲文學を反映せる滿洲建國の歴史である。時代とその背景をなす思想は生々と現實的にこゝに描かれてある。而して將來の滿洲文學の發展への約束はこの書によつて宣言されてゐるのである。この意味において之を江湖に推薦する。

武藤富男

自序

大正十年、筆者が長春に移り住んでから、足掛け二十四年の歳月が經つてゐる。筆者はその後、上海、大連、奉天等に住み、昭和十年また新京に歸つて來たのであるが、その間も絶えず滿洲の文學と關係を持つてゐたと言つてよいと思ふ。本書はこの間の滿洲文學を中心としての私の思ひ出の記である。また以つて滿洲新文學の側面史としての資料をも提供することを期したのであるが、更に讀み物としても堪へ得るやうにと考へたのであつた。そして第一章から第十章までは、康德九年の一月から十月までの雜誌『藝文』に連載した原稿に若干の修訂を加へたものである。第十一章以後は康德十年一、二月の間に書いた。

完全なと言へるやうな滿洲文學史の編著はなほ今後になさるべきことであると考へられる。本書は上述したやうな由來から生れたもので、精粗必らずしも均齊を得ず、また筆者の主觀に偏したやうな部分もかなりにあることをおことはりしなくてはならない。それでも、古く忘れられたやうな本について、いまは別な部分で活動してゐるやうな人々の會つての仕事について回想することは、若い私達にとつて必ずしも無意義なことではないであらう。今日の滿洲文學といふものが形成されるに至るまでには、そのやうな先人の勞苦が、營みがあつたのである。滿洲を愛し、この國土の上に文學を育てようとしたさうした人々の處女地に卸した鍬があつたのである。本書の成る、またそれらの人々のお蔭でもある。懷しい回想と感謝の念で私は筆を執り續けたことであつた。

なほ滿洲公論社小原克己氏、本書刊行を諾してくれた奥一君への直接の謝意を誌して置きたい。

著者

目次

第一章　大正年代の追憶と荒川義英『一青年の手記』……七
第二章　同人雑誌『黎明』の頃……二一
第三章　清島蘇水『三つの世界』など……三九
第四章　『我らが文學』、淺利勝、甲斐水棹など……五一
第五章　滿日の小說蒐集、『大陸生活』、『滿洲短歌』……七一
第六章　昭和初年の短歌壇と詩人たち……八九
第七章　續、詩人たち、『塞外詩集』『三人集』『無人街』など……一〇三
第八章　稻葉亨二、石原巖徹や『街』『線』など……一二三
第九章　『大陸文學』と當時の新聞雜誌……一三九
第十章　『胡同』『曙人』と『滿洲文學パンフレット』そして『滿洲文藝年誌』一五八
第十一章　滿洲事變と文藝界、『高粱』の創刊……一七七
第十二章　『高粱』のその後、『作文』その他……一九三
第十三章　新京日日及び各集團……二〇八
第十四章　『滿洲行政』と『モダン滿洲』……二二四
第十五章　滿洲文話會が出來て……二四〇
第十六章　『原野』刊行の頃……二六六
第十七章　『滿洲浪曼』そのほか……二八六
第十八章　滿系文學史の展望……三三四
第十九章　滿洲文藝家協會結成さる……四〇七
第二十章　康德九年以後の概況……四一七

第一章　大正年代の追憶と

荒川義英「一青年の手記」

新京に電車が開通したことからこの文章を書き始めようと思つたことであつた――と言つただけでは甚だ妙であらうが、新京に電車を敷くことになり、そのために新京へやつて來た或る人があつた。絶えて十何年（二十年近く）といふその人に偶然私は一百貨店のあたりで遇つた、その人といふのは、大正年代の滿洲文學に一つの位置を占めてゐた人であつた。私はその人たちとともに文藝同人雜誌を出したものであつた…さういふ因緣があつたからなのである。と、さう說明すれば、私のプランの成り立つたわけも理解していただけるであらう。

さて資料を探さうとした。（だが流浪十餘年…そして、あの頃の、今にして思へば貴重とすべきその頃の同人雜誌の類ひは、この流浪十餘年、轉居十餘度の間にも決して紛失などしないやう努めて來た筈なのであつた。――大掃除の度に、私は家を淸潔にすることはこれを專ら妻にまかせて、所藏

本を一冊とても読まれぬやうにとひたすらその方に神経を失らせて来たものである。そして私の所蔵本に何萬圓かの何分の一か火災保険も年來かけられてゐることではあるし、さうすることが保険會社に對して悪質な所以でもあつた、などと考へながら本を探した。明るいうちに家に歸り、しかも冬日暮れやすく、忽ちに電燈を點じて、手を煤けさせて、本の探求と兼ねてその整頓とをやつたのであるが、茅屋狹いながらも本・本・本のただずまひいとも複雑怪奇で、この一文のずつと後の方で欲しいと思ふやうな本は豐富に現はれ來つたが、肝腎かなめの、電車關係の大先輩氏を載せたところのものが眼の前に進行されて來ないのであつた。――さういふわけで、私の最初のプランはこれを變更することを餘儀なくされた次第である。（だが、茅屋もとより二十七平方米かそこらである。私はやがてこのプランを貫徹することが出來るであらう。家の隅々まで、押入れの奥まで、私は私の被保険財産を檢討するであらうからだ。閑話休題――）

突如として次の一文を御一讀ありたい。

「夜中の二時頃でしたらうか。わたしは起きて便所に出ました。わたしの家の便所は墓のはづれに別棟に建ててあるので小便は表へ出てやることに極めてゐますから、此の時も勿論浴衣の裾をスリッパを突つかけて外へ出たんです。何でも舊の四日位だつたと覺えてゐます、弦月が城内の空に高くのぼつて、寂しづまつた支那家屋が一層低く思はれるやうに伏してゐるんです。此の表道路は片側街で八月の日に照らされると藺草が六尺あまりに延びる、それが九月に入ると二三月の冷風で見る影もなくこんがらがつて倒れてしまふ。結氷の時候になると此の路一つ越した曠原から急に暖やかになる。日々奥地から大豆を拵ち出す馬車がつゞく、十數里の氷（氷の誤植であらう――大内）原を經て來た大頭立ての大豆馬車はわたしの家の近くから道路に入り、それが幹道をつたつてステーションに向つて、息を眞白に凍らした馬はヨチ〳〵と歩き去る。だから此の馬車が雪を踏みつけてゆく音がギュウ〳〵と夜半から耳に這入るのをきいて、あゝ又寒い冬になつたと思ふんです。」

讀者諸賢は右の一文をどうお思ひになつたであらうか？　ステーションなどといふ言葉が使つてあるので、相當に古代物らしくも思はれようが、これは大正七年に發表された小説の一節なのである。この小説は「霧明の夜」と題されてゐる。作者は荒川義英。それが載つたのは『民衆の發藝』と記録されてゐる。――記録されてゐる、と書いたのは、實は私はその雑誌を見たことがなく、私は荒川

義英稿『一青年の手記』から右の一節を寫したからなのである。

荒川義英稿『一青年の手記』といふのは大正九年に出版された單行本である。それは社會文藝叢書第二編である。（社會文藝といふ稱呼も、今にして考へれば面白いではないか）――因みに、社會文藝叢書の第一編は、長谷川小劍著『生存を拒絶する人』である。その廣告文には、

往年我が國文壇へ最初の社會的文藝の提供者たりし著者が、彼のピイタア・クロポトキンの著作により暗示を得たりと云ふ、奇しく妙えなる社會組織と人生を描く。

とあり、「空想の花」「新しき世界へ」「分業の村」「黒王の國」「美人國の旅」「生存を拒絶する人」以上六篇の小說題名が掲げてある。

さて、『一青年の手記』は荒川義英稿であるが、堺利彥編である。そして生田長江、佐藤春夫、尾崎士郎、土岐哀果、馬場孤蝶、生田春月、田山均、大杉榮の八人が跋文を書いてゐる。錚々たる顏觸れと言ふべきであらう。

堺利彥がどういふ譯でこの遺稿集を出したかは、「本書の編輯者として」といふその序文にある。

荒川義英君は私の友人荒川衛次郎君の子であつた。私は彼を『ヨッチャン』として、彼れの妹を『スウチャン』として、彼等の幼年時代から知つてゐた。ヨッチャンもスウチャンもおかあさんによく似た、丸い顏の可愛らしい子達だつた。

其後よほど久しく經つてから、或日突然義英君が私を尋ねて來た。其時はモウ十八九の青年だつた。然し私は矢張りヨッチャンを以て、彼を遇してゐた。所が、其ヨッチャンが、バアナードショウがどうの、ツルゲネフが斯うのと、いろ／＼文學談をやりだすので、半ば驚き、半ば辟易した。

それから間もなく、彼は一篇の原稿を私の處に持つて來て、讀んでくれと云つた。折角持つて來たものを萬ざら讀まないわけにも行かず、せめて二三枚でもと思つて讀みかゝると、妙に引きつけられる樣な氣持がして、たうとう一氣に讀んで了つた。……」

そして堺利彥は、その小說を安成二郎に讀ませ、荒畑寒村に讀ませ、土岐善麿の所に持ち込んだのであつた。土岐善麿はそれについて、

「荒川君は、小さな雜誌などを出してゐた僕からこんな口添へをされるにはもつと藝術家としてすぐれたものを持つてゐたことを僕も認める。その後雜誌に送つて寄越した小品等もみな彼の特別な素質を現したものであつた。彼は確かに文壇に現はれて一つの地位を占めるべき人であつたが、身體がいつも弱くて、思ふ程に力を出せなかつたことは、本人はもとより、紹介者の一人として僕も殘念に思ふ。」

と書いてゐるのである。

佐藤春夫氏――佐藤春夫先生はいま幾歳になるであらうか？　『文藝年鑑』で調べて見ると、明治二十五年生れとある。ならば、今年五十二――案外若いことを知つたが、然らば大正年代の始め頃である。佐藤先生も若かつたわけである。と、このやうに年齢についていろ〳〵と書いたわけは、同書に佐藤春夫が次のやうに書いてゐるからなのである。

「その頃、彼は二十一二であり、僕は二十三四歳であつた。僕と彼との交際はこんな風で（大内記――こんな風で、と言ふのは、その前の方にある――「荒川は考へ出すと實に怪しからん男であつた。何の因縁もなく僕の怪しげな貧乏世帯のなかへふらふらと這入り込んで来て、四五月ぐらゐも食ひ倒して、その間時たまには彼の女郎買ひや買喰ひの小使を徴發されたり、ちよつと貸せ大いに讀み度いと言つた本が直ぐ無くなつたり、例のゼンソクでヒーヒー言ひ出しては夜中に騒がされたり、出て仕舞つてからはいゝ加減僕の悪口をふれ歩いたりした」――といふ交際なのである。）二年ぐらゐつづいて、いつしか消えて行つた。――憶べば、そのころ唯物史觀から出立した社會主義に滿足しかねるやうな氣がした僕は、夏の晩など、あまり熱心でもない彼をつかまへて夜ふけまで論爭しかけたものであつたが、蓋し、彼の如きは明治末期が生んだ一種の青年として長編小説中の一

役ぐらゐには間に合はないことはあるまい。」云々

ところが、荒川義英は實際に長篇小説の中に登場したのである。生田春月の「相寄る魂」といふ小説がそれである。その中に荒川義英はよく似た名前で出現してゐるのである。生田春月といふ人は、純情な、そして小心な人であつたやうに思はれる。恐らく「相寄る魂」はその自叙傳と見るべきものであらう。その中に書かれてゐる荒川義英も在りのまゝの人物に近いことだらうと推察されるのである。

その生田春月は本書には次のやうに書いてゐる。

「荒川義英君は何處へ行つてしまつたのだらう？　荒川君は死んだと傳へられた。そして私はその賑かな追悼會（？）の様をも見た。それは私の心にあの人の善い不良青年の面影を再び見ることが出來ないと云ふ事を確かめさせた。それなのに、私は荒川君が死んでしまつたのだとは信じられない。いつか、その顔さへも忘れてしまつたやうな時に、ひよいと出て來て、また昔のやうに人の目色をうかがひながら、御世辭を言つてくれさうな氣がする。

私たちはその日からその日へと追ひやられてゐる、なくなつた友人を深く悼んでゐるいとまさへもない。友人の不幸は、それが癒やしがたいやうなものまでも、私たちにはどうすることも出來な

と書いてゐるのである。

佐藤春夫氏――佐藤春夫先生はいま幾歳になるであらうか？　『文藝年鑑』で調べて見ると、明治二十五年生れとある。ならば、今年五十二――案外若いことを知つたが、然らば大正年代の始め頃である。佐藤先生も若かつたわけである。と、このやうに年齢についていろ〳〵と書いたわけは、同書に佐藤春夫が次のやうに書いてゐるからなのである。

「その頃、彼は二十一二であり、僕は二十三四歳であつた。僕と彼との交際はこんな風で（大内記――こんな風で、と言ふのは、その前の方にある――「荒川は寄へ出すと實に怪しからん男であつた。何の因緣もなく僕の怪しげな貧乏世帶のなかへふらふらと這入り込んで來て、四五月ぐらゐも食ひ倒して、その間時たまには彼の女郎買ひや買喰ひの小使を徵發されたり、ちよつと貸せ大いに讀み度いと言つた本が直ぐ無くなつたり、例のゼンソクでヒーヒー言ひ出しては夜中に騷がされたり、出て仕舞つてからはいゝ加減僕の惡口をふれ歩いたりした」――といふ交際なのである。）二年ぐらゐつづいて、いつしか消えて行つた。――憶へば、そのころ唯物史觀から出立した社會主義に滿足しかねるやうな氣がした僕は、夏の晩など、あまり熱心でもない彼をつかまへて夜ふけまで論爭しかけたものであつたが、蓋し、彼の如きは明治末期が生んだ一種の青年として長編小説中の一役ぐらゐには間に合はないことはあるまい。」云々

ところが、荒川義英は實際に長篇小説の中に登場したのである。生田春月の「相寄る魂」といふ小説がそれである。その中に荒川義英はよく似た名前で出現してゐるのである。生田春月といふ人は、純情な、そして小心な人であつたやうに思はれる。恐らく「相寄る魂」はその自叙傳と見るべきものであらう。その中に書かれてゐる荒川義英も在りのまゝの人物に近いことだらうと推察されるのである。

その生田春月は本書には次のやうに書いてゐる。

「荒川義英君は何處へ行つてしまつたのだらう？　荒川君は死んだと傳へられた。そして私はその賑かな追悼會（？）の樣をも見た。それは私の心にあの人の善い不良青年の面影を再び見ることが出來ないと云ふ事を確かめさせた。それなのに、私は荒川君が死んでしまつたのだとは信じられない。いつか、その頃さへも忘れてしまつたやうな時に、ひよいと出て來て、また昔のやうに人の目色をうかがひながら、御世辭を言つてくれさうな氣がする。

私たちはその日からその日へと追ひやられてゐる、なくなつた友人を深く悼んでゐるいとますらもない。友人の不幸は、それが癒やしがたいやうなものまでも、私たちにはどうすることも出來な

い場合が多い。自分自身の生活だけが既に堪へられない重荷なのである。かうして荒川君もまた私の生活から消えてしまふのかと思ふと、單なる諸行無常の感では片づけられない、一種言ひ知れぬ寂寞の感に打たれざるを得ない。

然し、今日、夭折した才人の遺瘠が集められて、荒川君の記憶を私たちの胸にあらたにするのみならず、一般の讀者界にまだ十分に評價されなかつたこの人の眞價を示すことが出來るのを考へると、私は喜びに堪へないのである。すべての早世した人々の藝術は價値を別としても、なほ深く私の心を動かす、それがまして或る程度まで近接してゐた友人のであるに於てをやである。

荒川君は澤山の逸話を殘して行つた、然し私は今はそれを語るべき場合ではないとも思ひ、またそれを語るべき興味も有たない。たゞこの、その一生が既に一つの小說であつた人の藝術が、適當の評價を文壇に贏ち得ることを祈るばかりである。

思へば、このやうに書いた生涯春月は「その日からその日へと追ひやられ」るどころか、瀨戸内海に追ひやられてしまつたのである。今の若い人たちは、春月をさへ知らぬといふやうになつて來てゐるであらう。その「朽寄る魂」の如きは、何と幼稚な小說だとして卻けられてしまふかも知れぬ。しかし、そのやうな時代も曾つては存在したのであるし、そのやうな魂も、あの大正年代には生きてゐたのである！

どうも私は、荒川義英の外廓ばかりを語り過ぎたやうである。

『一青年の手記』が出たのが大正九年。その前年であらうと推察されるが、彼は二十六歳で大連で死んでゐる。

私が長春に來たのが大正十年であつた。私は荒川義英の殿父、荒川衛次郎氏を知つた。それは私の叔父が商賣の關係で氏と相識だつたからである。

荒川衛次郎も文化人であつた。俳人であり、エスペランチストであつた。滿洲エスペラント界の長老として功績あつたことは、同志（エスペラントの同志の謂ひである、これをエスペラントでSamideano と言ふ）諸君の熟知するところである。一昨年內地へ引き上げられた。（そして昨年、東京で病逝された。）

なほ荒川義英を知つてゐる人に、岡益こと岡田益吉氏がゐた。

「追悼會をやらうよ。」

などとよく言つてゐたものであるが、當時は益さんも忙しく、つひに實現しないでしまつた。……

さて小說「暗明の花」にかへらう。

それは次のやうに書き出されてゐる。

「一週間程前わたしの家にも二十名といふ出征軍人が泊り込んで、九十日といふものは商賣がまつたく中止の姿でした。軍人さん達が出發なさつてからは町のお客様もお待ち兼ねとあつて皆からそろ〳〵押しかけておいでなすつた。そこで急に家中が賑やかになり女供は連夜一人のお客（茶の誤植であらう）引きもない有様で、只困つたのは軍需品輸送の爲め貨車不足とあつて、大阪から一箇月前に送つたといふ小包の海苔や花あられが着かず、ビールのお肴類がすつかり品切れになつてゐる事です。」

遠客な書き振りだと言ふべきであらう、二十何歳でこれだけに書いてゐるのだから。それはそれとして、これでもわかるやうに、この小説は女郎屋の親爺が物語るといふ形式になつてゐる。

「斯ういふ好い目のつづいた或る晩の事です。わたしの家の女供のうちで古株で相當に賣つたお美代といふのがありましたが、それが今年の二月客に連れられて哈爾濱から齊々哈爾迄見物に行つたとき、汽車の中で冷えたのから病らひつき肋膜をやられて九箇月近くも寢たり起きたりして、近頃裏くなつて又どつとわるくなり、ずつと二十日も氷をあてゝ居るんです。勝氣な女で生れは天草ですが、一寸見は都會の娘らしく、客づきが好いので他の女供から多少の嫉妬を受けてゐたため寢込んでからは。自分で非道く氣にし、主人であるわたしの手前も具合惡く思つて今日から出る、明日から出るといつてゐますが、なだめて寢かしてあつたんです。其後少しは好いやうな顏をしてゐましたが、醫者はたうとう結核であることを私等夫婦に迄宣言しました。私も驚いたが、本人には國へ歸つたらどうだ、多少の借金ぐらゐは氣にかけなくとも好いと云つてやつても、國へ歸るのは死んでも嫌やだと云ひます。生みの母にはお金さへ送つてやれば好い、若し御深切がありましたら恐れ入りますけれども、二十三圓送つてやつて下さい、先月もこんなからだで稼げませんから送れなかつたんです、とわたしに云ひます。」

その女が、さういふ身體で、深夜に抜け出し、天幕の中へもぐり込んで商賣をし、擧句の果ては或る人を「西洋剃刀で殺さうとして」おさへられるといふ話である。淡々とした語り方で、しかも一抹の詩情をたゝへて、それが物語られてゐる。その一抹の詩情とはヒューマニズムに通ふものだとも言へよう。大正年代の文學の香ひが強いことが回想されるのである。

このやうな小說が、曾つて長春に於いて書かれたといふ事實は記憶に留めて置いてよいであらうと思ふ。

橋順四郎等の『燕人街』が出た。

文藝運動の多くが大連を中心としてゐたのは勿ひの然らしめた所であるが、長春に於いて大正十三年頃出た『黎明』（評論、創作、詩、短歌等）、撫順、遼陽の盛んな俳句熱等は特記していゝ。

創作は諸新聞、『讀書會雜誌』（のち『協和』）『新天地』『大陸』『大陸生活』『滿家』『月刊撫順』等で個々人によつて發表されたが、瀬野浩太、淺利勝、谷川らん、清島蘇水、井上巽吉。横澤宏、志野羊吉等があり、清島は『三つの世界』を出して歸國、淺利は『淺利勝集』を殘して早逝した。

第二章　同人雜誌『黎明』の頃

大正十年、私は渡滿し、長春に來た。

當時、長春には中學校はまだ無く、前年に商業學校が出來ただけであつた。私は內地の中學一年を修了して三月の末に渡滿したのだつた。

私は長春商業の二年へ編入試驗を受けた。私と同時に同じ試驗を受けた男がゐた。柿沼實だつた。尤も彼は滋賀縣の八幡商業の一年を濟ましてゐた。

柿沼と私は始業式の日に初めて名乘り合つた。爾來彼は長い間、私の文學の友となつた。彼の方が私より年上であつたし、すでに當時の『赤い鳥』に童話などを投稿してゐたそんな經驗も持つてゐたし、見貫格だつたのである。

私と柿沼とが加はつた學級に淺利勝がゐた。淺利については、後にまだ多くの書くべきことがあ

る。

長春商業第一期生には變り者が多かつた。ほかの中等學校に何年か既に行つてゐたといふやうな經驗を持つ年齢の者さへ若干ゐた。鮮系が二人ゐた。當時一學級だけで五十何人ゐたのだが、第一回生として卒業したのは僅か三十人だつた。死んだ者もゐるし、退學した者も居り、落第して行つた連中もかなり多かつたのである。柿沼なども後に退學した組だし、淺利などは落第を重ねて退學の已むなきに至つた念入り組であつた。

此處で、當時長春で刊行された文藝同人雜誌『黎明』について書かねばならない。

『黎明』について書くには、先づ小倉吉利と山本留藏とについて語る必要がある。

小倉も山本も當時滿鐵の下級青年社員だつた。當時は滿鐵社員と言へばなかなか威張つたものである。一流の料理屋へでも、月末拂ひで飲みに（遊びに）行つたものである。が、小倉や山本はそんな所へはあまり行かぬ方の組だつたのだらうと思ふ。相謀つて『黎明』を出すことを決議したのである。

初期の『黎明』はザラ紙に謄寫版で刷つて綴り合せ、それにコンニヤク版で刷つた表紙をつけた、そんな體裁のものであつた。

今思ふのだが、山本は一種の行動派であり、また劃策屋だつたのであらう。辯舌の雄でもあつた。それに比べて小倉は着實であり、默々として舞台裏の、或ひは地下室での仕事に專念するといつた型であつたやうである。そして、當時の舞台裏といふのは、滿鐵奮濟寮の一室であつた。小倉吉利が其處にゐたからである。

柿沼が何かの關係で（彼の父も滿鐵に勤めてゐた）小倉たちを知つて、私をも引き込んだのだと思ふ。このあたり私の記憶も些か曖昧である。ともかく、私も『黎明』の會員か社友かになり、詩や感想みたいなものを書いて謄寫版印刷時代の『黎明』に出したのであつた。

やがてこの『黎明』は發展し（それには滿鐵といふ職場を基礎に組織を擴げたのである、そして會費なども給料から差引くといふ堅實なやり方を採つた。）總領事館から正式の許可を貰つて活版印刷によつて發行されることとなつた。

此處で、前回の冒頭に書いた新京の電車開通に因む人物の登場となるのである。それは藤島鋪雪氏である。藤島（藤原が本名）さんはすでに相當の年齢の方であり、『黎明』のために大きな援助をされた方であつた。氏は岡本綺堂、額田六福の流れを汲む劇作家であり、作品數篇を『黎明』にも寄せら

れたのであつた。

その武藤さんと、私は久し振りで、新京に電車が開通する直前に遇つたのであつた。『黎明』が創刊されたのが大正十一年であつた。まさに二十年の昔を、お互ひに思ひ出して、感慨無量だつた次第である。

『黎明』は大正十三年に至つて滅びたと思ふ。中心人物が長春を去つたり、また後に續いた者が新しい發表機關を持つやうになつたりした結果なのであつた。

與謝野寛らの第二次の『明星』が創刊されたのが大正十一年であつた。手もとに大正十二年一月發行の第三卷第一號がある（『明星』は半年毎に卷數を改めたのである。）――實は私はこれに短歌を投じ、一首が私の本名で掲載されてゐる。平野萬里の選である。

ふるさとの寺の前なる電信の柱をおもふにくき瞬間

といふわけのわからない歌である。尤もこれは數首の嘱作のうちの一首なので、故郷の町にゐた愛

嬌者の氣狂ひをうたつたものなのだつた。一首だけ抜き出されてはどうも、當時永井荷風、堀口大學、茅野蕭々、高村光太郎、野口米次郎、竹友藻風等々のお偉方たちの書いてゐる雜誌ではあるが、嬉しくはあるが困つたことであつた。

『未踏路』といふ雜誌を城所英一たちが東京で出したのがやはり大正十一年である。私はその大正十二年四月號を持つてゐるが、卷頭に城所の次のやうな詩が載つてゐる。

月

地平にぼうりあげられた
血まみれのディスカス

血の半がぽたぽたと滴り
針葉林が吸ふ

積雪の青さよ

針葉樹の茂みに
無縁の卒塔婆

地下に　人間の骨の
めりめりと凍り

勝だしい狼の群が
おゝ　月に飛びつく

思へば、城所英一も元氣なものではあつた。後年、『協和』の編輯者として鳴らし、今は華北交通でやつてゐる。因みに、『未踏路』の同人は戸次正英、富田充、谷口傳、田畔忠彦、大井學、綱島貞、山村良男、牧野精一、福富靜兒、二葉夢都子、佐川義尚、城所英一、宮城三郎、白鳥信夫であつた。このうち、田畔忠彦はあの詩人にして映畫評論家たる北川冬彦の弟である。この弟も詩を書き、後に

『面』といふ詩の雜誌を出したりしてゐる。宮城三郎は『文章倶樂部』によくコヤ給を投稿してゐた。新文章日記』の表紙にも數回當選した。後に藝術的謄寫版印刷業を開業した。（私は大正十二年に口語歌集『砂』を私家版として作つたが、これはこの謄寫版印刷屋――黑船社で刷つて貰つたのだつた。）

富田充がいま歌人として大いにやつてゐることは人の知るところ。富田もこの『未踏路』には詩を書いてゐる。

白鳥信夫といふのは橋澤宏の當時の筆名だつた。右の四月號に確かに、滿洲での作品と思はれるものがあるから紹介して置く。

人　間　　白鳥信夫

枝にひつかゝつて
生命の絲は切れてしまつた
こうした高麗鳥の屍體に涅槃のそゞろな風に
冷たい胸毛を夢のやうに　ふむわりとそよがせてゐる

あゝ　憐愍のなみだを
人情は村はづれの丘辺に
思ひがけなくも拾ひはしなかつたか

こんなにのどかな
鯨のやうな季節にさへ
これほど人情はしべりあのやうに蔭鬱であるのか

どこにも　まんぢゆう基が起きあがりたさうに
いたましくも愁へてをる。

あゝお友達よ
こんな人情は廢寺のえんの下で
運命にくづれた乞食の木乃伊ではあるまいか

また因みに、あの有名となつた詩の雜誌『亞』が大連で創刊されたのは大正十三年であつたやうである。『亞』は昭和二年の十二月に第三十五輯を終刊號として刊行しその生命を終つてゐる。この終刊號に北川冬彦が次のやうに書いてゐるのである。

「わたしにとつて『亞』を回想することは、大正十三年以來のわれ〳〵の新詩運動が、わが詩壇に對してどのやうな貢獻をいたしたか、或はどのやうな罪禍をのこしたかといふことを檢討することになつて了ふのである。」云々

この『亞』に執筆した人々は、安西冬衛、瀧口武士、北川冬彦、尾形亀之助、三好達治、富田充、城所英一、加藤郁哉、春山行夫、水原元子、山道榮助、加藤輝、横井潤三、城戸又一、本廣禮、朱川雅之助、廣田文雄、中溝新一、岸貞吉、武井謙である。安西、北川、三好、尾形、瀧口が同人だつた。

『黎明』のことに返らう。

醉鶴版時代の『黎明』に原稿を書いた一人に佐藤通男がゐた。今は滿洲國の交通部にゐるが、當時は滿鐵にゐた。そしてチエホフの短篇などを譯したのだつた。

「黎明」の有力人物として、豐高亘が入つて來た。當時は堀川艷之助といふ筆名で活躍したものであつた。當時まだ獨身で、三笠町界隈でも活躍したが。今何處に居るのかと思つてゐたが、近着の「文藝春秋現地報告」に、牧野義男特派員の「厚生列車に乘つて」があり、それに濟南鐵路局の豐高亘生科長といふのが登場して來る。これがそのかみの堀川艷之助なのだらうと思ふ。艷之助科長は語つてゐる。

「最初、厚生列車を始めたのは滿鐵でして、多分昭和三、四年頃だつたと思ひます。當時は慶賀車と娯樂車だけの三輛編成で、名稱も確か慰安列車といつたと思ひます。巡回映畫班が民衆慰問に出かけるに當つて適當な宿屋がなくて不自由だつたところから思ひ附いたのでせうね。昭和九年頃から五輛編成にしました。滿鐵は現在この種の列車を二個列車持つてゐます」云々。

如淡山本留藏はやがて滿洲から去つた。

小倉吉利は雙廟子驛の助役になつて行つた。雙廟子では謄寫版刷りの小新聞を刊行したりしたさうである。

ほかに町田榮がゐた。彼は滿電の倉庫主任くらゐだつた。

「黎明」第三卷第三號の內容を御紹介する。

詩　　市木實二郎
燒芋と拾錢　　淺利勝
吸金鬼子　　吉田榮
誰の罪　　千島生
深刻　　吉本芳花
五年前の歌　　吉本芳花
石塊　　市木實二郎
蛾　　巳之留
銀の小箱　　上田玲子
第一戰　　山本留藏
冠者帳　　大顏冠者
三人評「ドモ又の死」　　耳、實二郎、隆雄
感じ　　首評生

机上語　　未血路　　X　X　生

市来震二郎といふのは椿沼震である。「屏」は戯曲。秋田雨雀あたりの影響を受けたらしい作品である。

淺利鷲の「焼芋と拾錢」は彼の初登場作品だつたやうに思ふ。

「土曜日の學校がへり、書生をして學校に通つて居るAは、辻の焼芋屋の所に立止つた。彼は拾錢しかポケットにもつて居ない。それを握りしめながら、

……百匁、トールチエン？

と日本語と支那語とを半分づゝ云つて、釜の中をのぞいた。

……百匁拾錢。

と支那人は全部日本語で流調ではなかつたが答へた。

……百匁、ケー。

……少々マンマンデ、センザイ少々かたい。

彼は焼芋の前にじつと待つて居るのが嫌だつた。

……ホー、マンマンデオーデライ。

と云つて歸りだした。」

といふ所から始まり、主家に歸り、掃除を濟まし、かつかりしてゐると、寄宿舎にゐる友達が三人訪ねて來る、火を貸してくれといふ、餅を持つて來たのだつた、みんなで餅を焼いて食ふ、彼は焼いもを買はなくてすみ、彼の腹は豫算外の御馳走に滿足する。

「餅はなか〳〵消化しないので（腹は）大きかつた。

その晩はバカに御馳走だつた。月は欲しがつたが腹がうけつけなかつた。

妙な腹立たしさがせなかをたてに走つていつた。」

×

彼が風呂にはいるとき、ポケットから拾錢白銅が落ちた。拾錢はコロコロと軒を滑いて倒れた。

彼は勝かにそれを拾つて又ポケットに入れた。」

で終る、微笑ましい作品である。「妙な腹立たしさがせなかをたてに走つていつた」といふあたりなかなか新しい描寫ではないか。「鏡手と拾錢」は一般にも甚だ好評であつた。「銀の小箱」は田崎手とは實は私である。雜誌を賑やかにしようと、こんな一時的な名前を使つたのだと思ふ。

有島武郎の「ドモ又の死」を豐高、柿沼、私の三人で批評してゐるが、これは本を翻覽し、各自が本の終りに書きつけたのを集めたものだつた。さういふ勉強の仕方もしたのだつた。

「黎明座第一回公演用上演脚本並役割書」とは次の如きもの。

作輝口上申上まする。此の度筆を執つては、小說、脚本、詩歌、俳句と一騎當千の若者達、舞臺に立つて、口で饒舌つて、仕積もやつて、行くとして可ならざるなきの境地を示さうと、即ち思ひ立つたのが、自作自演の黎明座一同。華々しく某月某日より某劇場に於きましてと言ふ所ですが、遺憾乍ら共に未定でござりますれば、表題の如く上演致しまする脚本並びに役割だけ、次の如くとどござりまする。

秋の一日（市木實二郎作）　小出　桂峰

正木源之進　松本多智男

或る男　未定

初音　堀井まさを

風　市木實二郎

武士三名　未定

離散（大内隆雄作）

おまさ（母）　藤木驪人

定一　奥田美登詩

その妻　堀川艶之助

慶吉　未定

蔵れ星（岩田力藏作）

男星　岩田力藏

女星　市木實二郎

遠山紋三郎

×

沈四郎　　岩田力藏
照さん　　市木實二郎
小母さん　　山本留藏

（註沈四郎は男星に、照さんは女星に、何處か似通つてゐることが必要なり）

内海蒲（夢島鋪雪作）　　夢島鋪雪
左馬頭源義朝　　白石餘潮
惡源太義平　　大内隆雄
中宮大夫朝長　　奥田美登詩
鎌田兵衛正家　　松本多智男
佐渡式部大輔重成　　市木實二郎
平賀四郎義信　　藤木驟人
淀谷金王丸　　吉田繁
青墓の長者大炊　　堀井まさを
大炊の娘延壽前

延壽娘の夜叉姫　　北島高
鷲栖の玄光　　小出桂峰
一空法師　　岩田力藏

以上のやうなものである。

本當に芝居をやるのかと期待した向きもあつたやうだが、實はこれは私の惡戯だつた。小出桂峰は小出啓漂で、眞面目な滿鐵社員、『黎明』の會計方だつた。堀井まさを、北島高は長春商業の後輩。白石餘潮はいま滿業にゐる白石吉男、餘潮は私が贈つた雅名である。

次に、長春實業新聞について書かねばならない。

大正十三年だつたと思ふ。同紙は創刊何年かを記念して短篇小說を募集した。これに一等入選になつたのが滿鐵蘇來で、二等が私、三等が滝利勝だつたと思ふ。

滿島蘇水は、牧水派の歌人で、田山花袋などに私淑してゐた相當な年輩の人。後に小說集『三つの世界』を出した。

清島氏が長春實業に出したのは「盗難」といふ作品だつた。實際に盗難に遭つた話を書いたもので、氏はその賞金で盗難による損失を取り返したといふ噂だつた。後に、清島氏は同志を集めて素人劇團・路傍社を作り、堂々長春座で公演をやつたものである。そのことについては、後年、柿沼が長春實業に次のやうに書いてゐる。

長春には第一に上げなければならない「三つの世界」の著者清島蘇水氏がゐる。清島さんは芝居の好な人で、例の今は無くなつて了つた「路傍社」といふ劇愛好者達のわづか計りで組織されたのに、舞臺監督をした事があつた。その時分上演したのは、菊池寛の「父歸る」山本有三の「生命の冠」「嬰兒殺し」里見弴の「新潮」等だつた。それが第一回で第二回には、菊池寛の「時勢は移る」大福の「眞如」赤松の「鶏舎」邦枝完二の「落花無情」なんどだつた。

清島さんは自分で柝をたゝき、プロンプターをやり、自分で犬の鳴聲迄やられた、私達はその眞剣さに涙ぐんだ事だつた。

第三章　清島蘇水『三つの世界』など

長春實業新聞が、たしか大正十三年に短篇小説を募集したことについては前に書いた。それは第一回のことで、大正十四年に同じやうな第二回の催しが行はれた。そして、その時にも私は投稿したのだつたが、それでも私の「感情の微聲」といふのが一等に入選した。

一泥にまみれた雪がきたなく汚れて、石のやうに凍ついてゐる夕方の道をだまつて歩いて行つた。私と私の父である。仕事に失敗して故郷の達磨を頼りに歸つて行く父と、それを見送る私との二人であつたのだ。

私達父子が清淵に渡つてから、五年の月日は流れてゐた。それは私にとつては、漸く子供の世界から、酸苦に満ちた世界の中に足を向けて行つた時代であつたが、父にとつては、失敗と焦燥と困窮とが計畫毎に幾度か繰返されて行つた生活なのだ。」

右のやうな書き出しで始まつて、

「運んで來た青い壺の酒を、私は何杯か飲み乾しながら、熱くなつて來た心で、心のうちで叫び續けた。

『俺にだつて出來るぞ、見てゐろ、俺の仕事を、俺は俺の仕事をやつて見せるぞ……』

叫ぶと心が瞬間に、すうつと擴がつて行つた。何もかも包んでしまふ事が出來た。椅子、卓、額、酒盃、時計、窓、建物、夜の空、みんながみんな私の心の中に飛び込んで來て、私に接吻して行くのだ。わくわくした歡び、悲壯の上に摑んだ生れ出るものの喜びがぐい〳〵と私の胸をゆすつてゐた。」

さういふ所で終つてゐる、その間に映畫「茶を作る家」を觀た時の感想が織り込まれてゐる短篇である。父が失敗して內地へ歸るといふのに眞實でないが、大體の境遇は事實に即してゐたと言へる。この時の二等當選が、前にも書いたことのある堀川艶之助で「衝動」といふ小說だつた。北へ向ふ列車の中で、會社勤めの二十一歳の女が、眼に煤煙が入つて困つてゐる、同行の支店長にそれを取つて貰ふ、それは自分から甘えて行つた姿態だつた、座席に歸つてから、急に男に惹かれる衝動を覺えて來る、さういつた題材を描いたものだつた。

こゝで、前回の時もさうだが、これらの小說の選をした人々について書いて置かねばならない。それは長春實業新聞の編輯長をやつてゐた老木近信と、上野由人、小澤開作の三氏だつたのである。

老木氏といふのは、一風變つた人物だつた。大體長春實業新聞といふのが、創刊當初から變つた行き方をして、何でも正式創刊の少し前に、或る一日の實際の出來事に基いて一枚の新聞を作つて見た、そしてその時の働き振りに依つて、編輯長以下を決定したといふのである。その初代編輯長が老木先生であつた。（後年、私が長春實業新聞の後身たる新京日日新聞に入つてからも、印刷工場の方には老木先生をよく知つてゐる十何年勤續の滿系職工がゐたものである。）當時は老木先生も若く元氣で、自ら毎日社說を書き、編輯をやり、そしてよく酒を飲んでゐた。あまり學歷も無いといふのに、趣味の廣い、そしてしつかりした識見を持つた努力家だつたのである。（あの時だからこそ出來たのだが、何かの問題でサーベルを持つた長のつくお偉方と大いにやり合つたといふやうなこともあつた。）

上野由人氏を知る人は多かつた。當時は村太商だつた。後年、カフエ・モナミ（今の銀座會館の場所である。）を經營し、更にダンスホール、キヤピタルを經營した。不幸、病に仆れた。菊池寛、久米正雄ら滿鐵の招聘で始めて滿洲にやつて來た時、長春で案內役を買つて出たりした人であつた。

小澤開作は當時長春で醫科醫を開業してゐた。言ふまでもなく、後の協和會の小澤開策である。今は北京に在つて『華北評論』をやつてゐる。

先づ老木、上野、小澤、それに後にツーリスト・ビューローに行つた藤田鎮寓夫などが當時の長春の文化人だつたのである。西田は野球の選手でもあつた、また高級映畫藝術協會などを組織し、優れた歐洲映畫の上映をやつたりしたこともある。その外、西春彦、井上信翁、土肥顯、野田俊作なども長春にゐたことがあるが、在住期間が短かかつた。上野や、小澤は長春野球界のためにも大いに貢献してゐる。

その頃、全滿的な雜誌としては『滿蒙之文化』（今の『滿蒙』の前身）『大陸』『新天地』『讀書會雜誌』があつた。この内、當時純文學的なものを載せたのは『新天地』であらう。

私の記憶に殘るところでは、富原欣、滑島蘇水、谷川らん等が主として『新天地』に小說を發表してゐたと思ふ。富原欣についてはなほ後で書く機會があらう。

谷川らんは、石川鐵雄夫人であつた、當時の滿洲としては稀らしい存在たる女流作家であつた。

滑島蘇水は當時の作品を集めて大正十三年の末に、東京都本郷區駒込坂下町一八三の岩崎書店から『三つの世界』を出版してゐる。この滿洲最次所が私達のやつてゐた黎明社であつた。

『三つの世界』の序文に曰く、

『三つの世界』を上梓しようと思ひたつたのは、私が大正十二年の夏、大連港を旅出しに四國、九州、本州から北海道の涯てまで數箇月の旅をつづけた時の途上であつた。小田原の椿白雨氏を訪ひ、いよ〳〵その決心を固くした。といふのは、この出版について一切引受けてくれたからである。その上好都合なことには椿氏の親友である垂木文立氏が印刷の方を快諾され、裝幀は彫塑家牧雅雄氏が骨を折つて製作された。かうして復とない機會を握つたものゝ彼の關東大震災は、私の小冊子の上へも及ばないわけに行かなかつた。

しかし、今やその努力は空しくなかつた。玆に謹で三氏の勞を深謝す。

南滿洲長春にて　　滑島蘇水

――といふのである。椿白雨とはどんな人か、私は知らないのだが、私がこゝにこの序文を引用したのは、いかにもこれには大正末期的な文學の時代色が出てゐると思つたからである。

ところで、著者は「小冊子」と謂つてゐるが、四六判三百八十六頁、ラフ紙を使つた堂々たる小說集である。定價も二圓二十錢といふのだから、當時としては大したものであつた。――ただ、この『三

つの世界』は、次のやうな挾み紙を帶びて現はれざるさを得なかつた。それには

> 缺丁に就いて
>
> 本書は、その筋の忌避に觸れ、差押へられたるも、百方之が諒解に努め、やう〳〵二十七頁より三十二頁までの削除にて發賣することを得ました。
>
> 依て缺丁の辯明とお詫申上げます。

とあつた。

收むる所、次の諸篇

木乃伊になる、鹽魚、三つの世界、盜汗、未練、死の價、飯、無情を感じた話、般若の小政、ルビトの指輪、戀も知らずに、工夫の子、死を願ふ心、曉、長幽、母危篤、良心、幼きもの、慾に絡る二つの話

――以上の十九篇である。そして削除の憂き目を見たのは開卷劈頭の「木乃伊になる」の一部分であつた。

この「木乃伊にふる」といふのは、嶺濱に一舊友を訪ねる、その舊友といふのが女のことでいろんな經驗をした男である、その奇怪なまでの思ひ出話に主人公は壓倒されてしまふ、さういふ物語である。その中に次のやうな章節がある。

「松川は聞き終つて笑ふと云ふより、餘りの幻滅に挨拶の仕樣がなかつた、この卑賤の事實を澱みなく語る村瀨の人格が不思議に思はれた、考へて見れば八年前のこの男も矢張かうであつたらう、然し自分はその頃若かつたのだ、村瀨の斯の種の話が寧ろ歡迎されたのだ。それは今度人の親となつて何時知らず村瀨の性格に遠ざかることになつたのだ。寧ろ村瀨の一筋な性格が自然であるかも知れぬ、自分は或時に烈しい愛慾の念と戰つたことがあつたではないか、始めて人の親となつた時、その青春の逃げ行くを悲しんだではないか、或る女事務員の誘惑に心を亂したではないか、唯、その業は理性で押へたに過ぎないのだ。この際何れが正しいのかと議論は愚であらう。人若し女を見て淫らな心を起さば、姦淫したるに同じといふ耶蘇の言葉は恥しい程自分に充て嵌つてゐる。村瀨はそれを外的に行つたばかりだ。斯く云ふものゝ自分はさう云ふ愛慾を充したい爲に理窟を立てゝゐるのではあるまいか。

松川は斯う考へ及ぼすと、その本心にぴつたりと觸れたやうにして、慄然とした。そしてこの友

達を訪問したことも或はさうした慾望を滿したいがためではなかつたらうかと、淺ましい自分の心を疑はないでは居られなかつた。

（お前は何と云ふことだ、妻や子を離れると直ぐにこの狀だ、お前の心は漸く眞の人生に觸れて來やうとしてゐるではないか、お前はなぜ出家とその弟子を崇仰して讀んだ、お前はなぜ一燈園の生活を憧憬した、お前はなぜニイチェの超人を學んだ。お前の內部生活は覗きからくりだ、次から次に變る、もつとしつかり、もつと摑むものを摑め）

松川は驛閣に激しい羞恥と悔恨の情に迫られて、このシンプルな舊友を憐に思ひ且つ羨んだ。

――こゝには大正末期の「時代精神」といふものが甚だ明瞭ではないであらうか。

大正末期と言へば、菊池寛が「人生戀すれば憂患多しと、戀せざるも亦憂患多きさ」などと言つてゐた時代である。葛西善藏が「夜、ストリンドベルグの『地獄・傳說』を女に買はせる。若き時分に讀みしことある本なるも、むづかしく讀みづらきこと甚だし。酒を飲みながらの故ならん。然しながら、僕の最も畏敬する愛讀書なり。嚮然たる巨匠の感じを如何ともしがたし、嘗て、スエデンボルグの本を自分も讀みたる記憶あるも、この作者の如く精透思實なる見かたを知らなかつた。イプセンの著作のことなど考へ偲ぶ。」などと書いてゐた頃である。

參考までに、大正十四年の九月に日本でどのやうな作品が發表されてゐるかを調べてみる。

廣津和郎の「抗議常習者」（新潮）、稲垣足穂の「武石浩玻氏と私」（新潮）、國木田虎雄の「囚」（新潮）、水守亀之助の「馬鈴薯と大根」（新潮）、中河與一の「地獄」（中公央論）、正宗白鳥の「昔の西片町の人」（中央公論）、牧野信一の「鏡地獄」（中央公論）、宇野浩二の「十軒路地」（中央公論）、野上彌生子の「茶料理」（中央公論）、同「一樹の蔭」（改造）、近松秋江の「銀河を仰いで」（中央公論）、松永延造の「淺倉リン子の告白」（中央公論）、室生犀星の「妻が星」（中央公論）、芥川龍之介の「海のほとり」（中央公論）、同「死後」（改造）、德田秋聲の「髮」（中央公論）同「幼兒」（改造）、武林夢想庵の「cocoのなげき」（改造）、里見弴の「蚊やり」（改造）、佐藤春夫の「この三つのもの」（改造）、瀨井孝作の「ゲテモノ」（改造）、志賀直哉の「瑣事」（改造）等の小說。

北尾鐐男の「女と氣をつけ」（新潮）、久保田萬太郎の「月夜」（中央公論）同「あぶらでり」（改造）、山本有三の「父親」（改造）、倉田百三の「或る警察署長の死」（改造）等の戲曲である。

「木乃伊になる」のこと、もう一つ。

この小説の中に「お互にMのM會社で机を並べた同輩が一度吹き募つた不景氣風に」云々といふ記述がある。無論これは、「滿洲の滿鐵會社で」の意味である。當時は滿鐵だけが滿洲を代表する大會社であつた。

以下『三つの世界』につき、私の流讃で簡單に解說して行くと、「鹽魚」は放縱な夫を持つて、滿洲の片田舍で苦勞する人妻の生活を描いたもの。作品集の表題にもなつてゐる「三つの世界」は或る鐵道從業員の過失についての物語に、二つの寓意的な他の世界を對比させた小說である。「蓋汗」は病氣になつた青年が、發者から呪はれてゐるのではないかなどと忘想する話。「未練」は「蓋汗」後篇に代ゆと傍題され、文學青年と一女性との心理の交涉を描いてゐる。「死の價」は滿洲勤務の兵隊の話。「彼」は惡戲心から鐵道線路に石を並べ、運行された貧しい支那人の子供がおいしい白米の飯にありつくといふ話。いはゆる滿人ものの先驅と言へよう。幼稚な作だと今日では感じられるけれども。

「無情を感じた話」は、病氣で仆れる友人をめぐつての感想を基にした小說。生と死、夫婦の間、金錢と慾情、さういふ問題がこの短篇の中で扱はれてゐる。

「殺若の小政」は、さう綽名をつけられた鐵道從業員の話。

「ルビーの指輪」は女事務員に失戀した青年が、今度はカフエーの女に輕くあしらはれるといふ物語。

「戀も知らずに」は平凡な結婚をした男が父となる際の感慨を扱つてゐる。

「工夫の子」は子供の眼に映じた複雜な社會相を描いてゐる。「死を願ふ心」は鐵道從業員が旅先で病み、漸く家に歸つて妻に介抱される話。「曉」は未婚の女教員が家庭の問題で苦勞する話。「長靴」は折角作つた長靴をコソ泥にしてやられる話。「母危篤」は、その電報に接して急ぎ滿洲から故郷の家に歸り家族、親戚の連中等に會ふ、そのこまかな記錄。「良心」は子供もある主人公が、若い女に誘惑されさうになり危ふくそれを切り拔けて妻の許にかへる話。「幼きもの」は滿洲に住む或る母の〻子供たちについての記錄。

「慾に絡る二つの話」は「捕らぬ狸」と「青色のダイヤ」から成り、前者は一種のファース、後者は避難婦人にひつかけられる話である。

以上によつて、十九篇悉くが、滿洲を背景とした（若しくは滿洲と深い關係のある）作品であることがわかるであらう。大正十三年の末に、私達はすでにこのやうな作家を有してゐたのである。

淸島氏はその後、暫らくして滿鐵を辭し、日本に引きあげられた。が、事變後、氏は再び渡滿し、

奉天の鐵道總局で人事の仕事をやつてゐた。本名は貫。熊本の産であつて、蘇水は阿蘇山に因み、また氏が崇拜した牧水の水を採つたものであらうと思ふ。

こゝに、加藤郁哉氏について少し書いて置くべきであらう。

當時、加藤郁哉氏も長春にゐた。露西亞語に通じてゐる同氏であるから、滿鐵對東支鐵道關係の仕事をやつてゐたのだらうと思ふ。尤も、滿鐵のことであるから、一應は車掌からやるといふ過程を踏んで行つたのだと思ふ。その頃、日本では『日本詩人』といふ清新な詩の雜誌が出てゐた。日本詩人會の編輯で、たしか新潮社から發行されてゐたと思ふ。加藤郁哉氏はこの『日本詩人』に時折詩を發表してゐた。貨物列車の車掌車にぶら下つて行くといふやうな題材の詩があつたことを私は覺えてゐる。筆名今枝折夫によつての活躍は後年のことである。

第四章　『我らが文學』、淺利勝、甲斐水棹など

清水信といふ歌人が口語歌運動をやり、『鄉愁』といふ謄寫版刷の雜誌を出してゐた。はじめは福島かで出してゐて、後に奈良に移つた。

私はその『鄉愁』に長春から作品を出した。

煤煙の冬の街だが
見上げると
空の一方に青さはあるよ

遲い馬車

老いた馬車夫は高々と
鞭振るけれど馬にあてない

恐れてゐて貴くも思ふこの胸に芽生えた反抗精神の生長！

後悔を
感じたくない
あへぎ乍ら
過した生活の
かけらとかけら

肥えた
支那の女が
兒等を呼びながら

元日の
家の前に遊んでる

野のはてに菫の花を拾ふ日は雨霽れを吹くひやつこい風

こゝに一つ畑の綠の薬の中に濃い茶色に咲く金盞花

二等車の入口に立ち二等車のまばらな客を眺めて旅する

寒村の小驛に人と急行の電車を待てば牛のなく聲

山峽の村に見るこの藪の濃さ電燈が消えて夜があけかゝる

朝八時妓樓の肥えた女らが煙草くはへて列車見上げる

ふと中年の女の着物のにほひなどかがされてゐる朝汽車の中

川原にうつすら煙あげてゐるアンペラ小屋の潤ひの色

によつきりと一本、毛布の間から出てるのは足です、汽車、少女、旅

姉妹が戯れてゐてつい讀んでる本から心がうばはれるのです

列車のなかに一人を守り誰も知らぬ一つのことを考へてゐます

ひとり旅窓に向つて動かない女のみぶん考へてゐます

以上のやうなのが當時の私の作品であつた。また、大正十四年一月には私は『私らが文學』といふ

謄寫版刷りの私家版的な小雜誌を出したものであつた。それは第一號を一月に、二月は休んで、三月に第二號を出した。私と柿沼實が主な執筆者だつた。

第二號の卷頭に「O」と署名した私の「時論」なるものがある。今、『藝文』誌上で、この十八年前の小文を紹介するのもまんざら無意味ではなからうと思ふ——。

滿洲と文學雜誌

滿洲を代表する一の文學雜誌があつてもよいと思ふ。往時『赤陽』の如きは、可成りの充實さをもつて活動したものであつたが、今これと言つて指示し得る何物もない有樣だ。詩のみ、俳句のみに布陣する小雜誌はあり、又評論雜誌、××の機關雜誌で頁を文藝に割くものもあるが、前者は限定的安住的で、後者は低個的非本質的である。

その希望する雜誌が出現した時に、地方的特色としては、謂ふ所の植民地情調氣分氣質もあり、鄉愁者の美しい詩句もあらうが、それらを超えて時代は、世界主義精神の實現、民族と民族との觸れ合ひ——その表現を要求してゐる。

我らの小さな力が、何を爲し得るものとも思はぬが、その必要な芽生の爲に、肥料としての役目

の一部分を果し得るならば幸甚とする所である。（O）

右の如きものである。大正十四年三月、既に私達には「滿洲を代表する一つの文學雜誌」を要求してゐた。また幼稚な表現によつてではあるが、特色を持つ滿洲文學の出現を待望してゐたのである。……私達の當時の希望が實現されるまでには、かなりの時の經過が必要であつた。

この私達の『我らが文學』がやがて『ドンキイ』に變形した。私がその時長春を去り、植沼覺がバトンを受けて、ついでに題名を變へたのであつた。

『ドンキイ』も最初は謄寫版印刷だつた、が六月號から活版印刷になつた。七月は休み、八月號はまた謄寫した私が編輯し、この時はリーフレット型になつてゐる。白抜き文字の題字は柿沼が自分で彫つた木版を使つたことを記憶してゐる。

『ドンキイ』には短篇、短い戯曲風なもの、短歌（口語歌）それに感想、小評論などが掲載された。一度、大連の甲斐水棹女史の寄稿を得たことがあつた。女史の最初の歌集『花あかしや』の出た直後であつた。

知る人もあらうが『花あかしや』の終りの方には新傾向的乃至は「生活派」的と言つていいやうな作品が收められてゐる。口語歌など作つてゐた私はその部分に共感したのだつた。それで手紙を出したのだつたらうか。その記憶は判然しないが、女史から貰つたハガキに、雄渾な筆蹟が躍つてゐたことをはつきり記憶してゐる。（一部には甲斐水棹つて男ぢやないかなどといふ評判もあつた。水棹をスキトウと呼び、その雄々しい詠ひ振りにさういふ印象を得たものであつたらう。私はすでに『花あかしや』を讀んでゐたから、女史のことは知つてゐたが。）

――因みに、こゝで私は『アカシヤ』第四卷第八號（昭和十四年八月發行）甲斐水棹追悼號を引つぱり出して見た。同誌卷頭にある「甲斐水棹年譜」を見ると、まさしく『花あかしや』は大正十三年の十二月に出版されてゐる。

なほまた、この年譜の一部分は、當時の滿洲の文學的情景を浮彫にした感じで覗かせるに足るものがあるから、少し抜き書きしてみよう。

明治四十三年（註　甲斐女史は明治四十二年に渡滿してゐる。）

旅順河村藤綱翁主宰いさを會に入會、此の頃より盛に遼東新報及滿洲日日に發表す。

明治四十四年

一月一日　滿洲日日に短歌十一首を掲載す

十一月　大典浩然吟社入社。高阪景顯氏等と知り萬葉、古今、新古今集を研究。詩集の編纂をなす、又海上胤平翁の指導をうく。

十一月　滿日紙上等に短歌を掲載す、ペンネーム　さゆり子、白梅女、磯馴松等。

明治四十五年

一月　滿日社渡邊三角洲氏と知り新派和歌の指導をうく。（註、渡邊三角洲も古い人だ。「新派和歌」のみならず、新しい傾向の詩に、評論に、活躍の跡は長い。最近では『滿洲行政』等によく寄稿してゐた。現に新京に健在で、いま出版協會に在る。）

大正三年

滿洲詩社（渡邊三角洲主宰）同人となり機關誌『霧』に短歌を發表す。

大正九年

角田笹舟、池内赤太郎氏其の他と獨賢雜誌をおこす。

曉社――赤陽社歌壇の選者をなす、同誌に歌論掲載。

大正十二年

五月　遼東紙上に新詩「早春」及「大連の四季」を發表（守田先生の作曲）

七月　滿鐵讀書會雜誌に「在滿の諸姉へ」執筆。

九月　極東週報に脚本「お人形」及「雀の子」を發表し、第二小學校兒童に實演せしめて好評をうく。

大正十三年

一月　南滿教育雜誌に「時代思潮と教育家」及び「藝術小論」を發表す。

四月　遼東紙上の新詩「園丁は去る」を發表す。

十二月　處女歌集『花あかしや』出版。（註、この時、女史は四十歳であつた。）

「明治四十二年氷土の解けそめた春大連の土地に足を踏み入れられました。それは日露戰爭直後のことで、日本的文化はまだ鋤鍬の入らない荒土でありました。豊かな詩歌の感情に一杯だつた先生にも、この荒野に直面して感慨無量であつたのでした。

日本橋まだ土橋なるころに來て赤坂の道に泪おとしき

先生の胸のうちには切々として短歌の道を通じて日本の大陸文化の建設が深く根ざしてゐたので

ありました。」

――後年、弟子の一人によつて女史はさう描き出されてゐる。

前記年譜にも出てゐる渡邊三角洲氏の追悼記の一節を引用しよう。

「私が甲斐さんに會つたのは、明治四十五年の春まだ淺い頃のやうに記憶します。私はその前の年の夏大連に來たのですが、その頃滿洲日日新聞に讀者から受取つた短歌を、よからうが悪からうが、全くその儘組んで置いてそれを適當な行數だけ埋草に使つてゐたのでした。この結果は中味も外形もどうにもならぬものが載るかと思ふと、然るべきものも組捨てのものに會ふこともあるといふわけでした。で私は社の事業として直接その方に關係はないが、野球記事と共に兼業としてこの二役を自ら買つて出で、寄稿中から適當に取捨加筆して掲げることにした。これが二箇月ほども續くと、めきめきとよくなつて來ましたが、拙くても作者には絶對であるところの作品を、勝手に修正するといふことは無責（任脱落か）と考へて、渡邊三角洲選として適當な數を適當に按排して掲げることにしました。これで二三箇月すると人が多くなつて一日一人一行としても十何人、大てい三十行を費す樣になりました。自然標準を高くしました。この初めの一年程の間に大連の角田笹舟、甲斐水棹、森野直樹（島東吉）牧雨蛙、旅順の彌吉筑紫、遼陽の清島蘇水、蘆子窩の池内蛙（赤太郎）などの諸君でありました。やや後れて他に數人の婦人連中も出たが、甲斐さんが一番年長でした。

甲斐さんはさうした私の周圍に集まつた人々のうちの一人でした。これより先、甲斐さんが新聞に寄せてゐた歌稿は他の人に較べて多ふつた。そして又全く形の整はぬといふもののないと共に「これは」といふやうなものも少なかつたのでした。これは初歩時代であり、當時の小學校教師といふ常識生活の中にあつては當然と思はれましたが、これを知的よりも情的に取扱ふべき事を返事を出しましたあと、子供連れで訪ねて下さつたのがはじめての面會でした。

うちあけたところ、甲斐さんのこの行き方は容易に改りませんでした。で、私はまづ形式を整へる事を話しました。つまり一通りの形は整つてゐるが夫れ以上の事はない。それには、そのうちのいいと思つたものを充分推敲する事です、そしてそれが進むうちに自づと思想方面も進んでゆくでせうと話した事でした。

かくするうちに仲間連中の作もよくなり、新聞に到底それを容れ難いので同人雜誌を作らうといふ事になつたのが『霧』です。私は同人に對して決して私の眞似を勸めませんでした。それはスバル、早稻田文學以來、あまり私が他の人と行き方がちがつてゐるのを知つてゐるので、私の作をこ

のまま「見本」にはしたくなかつたのです。そして遂にあたつてもよくその態度を生かしてゐるものを擇り、語法的に疵があれば正す程度にしました。

このゆき方はわるくすると例へば新交響樂團の連中のやうに、能のないのに自己を出さうとする缺陷を生ずる虞あるものですが、同人の多くはよく理論を整へて己を立ててゆきました。これは結果に於て佛蘭西音樂のゆき方でした。さうして同人諸君は自己を見出し、かたはら中央連絡をつけた人に、アララギの池内赤太郎と水甕の甲斐水樟氏があり、共に間もなくそれらの團體中での新進と目せられ、やがては中堅として大いに嘱目されるやうになつた事でした。

この二人のうち池内は八年前死去しました。（前引『デカシヤ』より）

さて『ドンキイ』のもう一人の寄稿者について書かねばならない。それは幾雅勝である。彼についてはすでに若干を前に書いたが、ここには私が昭和五年に編輯刊行した『淺利勝集』に收めた追憶記から彼の經歴や人となりを拾つてみたい。

先づ學生時代からの一友人は書いてゐる。

1

情熱、坦懷、痛快、突飛、經驗者、君の特性を表現する言葉は頗る多い。

が、燃ゆるが如き情熱と、鐵の如き信念とは、自分が斯くと信じたことに反對する者、又は自分と主義主張を異にする者に對しては、先輩、知友を不論、何處迄も反抗して行く性癖があつた。だから、極度に愛される反面に、又反對者もかなりあつた。然し君の純眞味だけは　君を知れる總ての人が、等しく認め且愛して來た處であつた。

2

君を初めて知つたのは、大正九年四月、長春商業の開校日だつた。新帽に滿鐵徽章をつけ、きちんと飛白を着た、色白の若き姿は、未だ鮮明に思ひ浮ばれる。そして初対の私の胸に、怜悧な感と言ふより寧ろ夙成といふ第一印象を與へた。中學に二年と、沙河口工場にも一寸ゐた關係であらう。

その四月二十四日、開校式を終つた午後、和泉、難波兩君と共に四月、日本橋通りの舊舍の二階六號室に入れられ、圖らずも、共に起臥する身となつた。同齢の關係上、二人は自然話も合ひ、一緒によく勉強もした。

其頃の君は、極く眞面目だつた。熱心な勉學家だつた。そして、中學を二年終へてゐた關係で、英語と劍道が特に得意で、第一學期の成績も、六十名中第五番だつたと記憶してゐた。

3

第二學期の末だつた。君の靖神上に、一大轉變が起つた。十一月三十日の朝、令姉危篤の入電、直に歸連したが間もなく逝去。弔ひを終へて歸校したのが、十二月中旬、學期試驗初日の朝だつた。流石に悄然として元氣がない。暫く休校せる上、何等の準備なく、直に其日より受驗、神ならぬ身の悲んぞ好成績を維持し得やう。結果は急轉的に下らざるを得なかつた。

令姉の死に、人生の無情と寂寥を感じた君は、暫く室内に姉の靈をまつり、朝夕弔つて僅かに自らを慰めてゐた。が間もなく慰安を小說に求めて行つた。

4

二年生末頃より小說に親しむ。菊池寛、久米正雄等の作物が多かつた樣に覺えてゐる。

青春時の誰しもが持つ特性でもあらうが、奇を好み、奇を衒ふ性癖は、此頃から殊に胚胎して行つた樣に思はれる。

其頃舍では、毎週一度、しるこがつくことになつてゐた。食事の鐘と共に、胸に、「六號室選手」のマークを掲げ眞先に駈け込んで大食、以て得意然としてゐたものだ、今は故人の井關吉男君等が、涙を流しながら、忙し相に喰つたのも、當時隨分有名な特種だつた。

5

三年生の春。校風嚴肅の目的で、君が主となつて正義黨を作つた。生意氣だと目指された下級生は、片つ端から、柔道場又は理科室に呼入れられて說敎された。

處が黨員の顏觸れが、從來餘り先生の信用が無かつた關係から、間もなく學校當局の注意する處となり、主謀者は職員室に呼ばれて行つた。手嚴しく取調べられた。辯明の要旨は一々記錄され、法廷に於ける犯罪者の訊問と何等異らなかつた。當局者の調査は尙各方面に及んだ。

それから一箇月の後、又呼ばれて行つたが、この時は、黨の主義と其效果は認められてゐた。だが此黨も一年と續かなかつた。

6

四年生頃は、づつと、支那町に近い田原洋行の裏二階に寄寓してゐた。もう此頃は、敎科書其處除けで、專ら小說を讀み、創作に苦心してゐた。「桃色の封筒」等は此二階で讀んだ樣に思つてゐる。（中略）

7

は又、創案し、計畫して行く、獨創力の男だつた。だから行商もし、洗濯屋もやり、靴屋も初め、陳頭に立つて靴磨も經驗したのだ。

君は又、義俠的な男だつた。弱きを援け、強きに抗した。知人の困苦に木炭を贈り、飛行機の壯擧を聞いては義捐金を寄へ、又は犯人をも隱匿してやつたのだ、人に頼まるれば、身を顧みず、飛込む處に、君の特性がはつきり見出される。（下略）

このやうな男だつた。その淺利は『我らが文學』に「珠數」を、『ドンキイ』に「子供が熊に養はれた話」を發表してゐる。ともに、愛すべき、微笑ましい短篇である。そのほか、彼がこの頃書いたものに「從兄」「主人」「豫言者」「秋なすび」「むしん」「ロシア町」「苦きビール」「對書」「トランタ」などがあつた。

前文犯人隱匿事件は彼らしい插話であつた。

加藤郁哉氏は斯う書いてゐる。

「淺利の商賣のことを少し書かう。淺利の商賣は誰でも知つてゐるやうに靴磨だ。彼は大連での創始者である許りでなく、京城での創始者だ。一體彼は長春商業を中途で退學してから、何だつて京城なんかに行つたのか？これには彼が俺に話した面白い插話がある。――郭松齡が一旗揚げた時の事だ。大連の電氣遊園下の廣場に痩せ細つた體を古オーバに包んで、離れると見えない無精髯をロの周圍にはやしてうそ寒く兩手をポケットに突込んで立つてゐる淺利を想像すると面白い。淺利は何時の間にか郭軍のクラークかなんかになりすましてゐる。郭松齡の麾下に參ずる滿洲浪人を三十人も集めて、それ〴〵旅費を渡して北上させる爲、勞働をやつてゐるのだ。彼は若い顏を心持ち上氣させて、ともすると心の隅から小英雄的な感慨が浮んで來るのを、寒さに紛らせてゐた。伏見臺から吹き降ろして來る風が一行になぐれて、ちよつと悲壯な情景を呈してゐる。すると突然風の中から警官が現はれて解散を命じた。彼はその夜、しよんぼりと列車で奉天に舞戻つたが、長春時代の師のもとに寄食し旅費をめぐまれて京城の友人のもとに走つた。話は前に戻るが淺利が、播磨町事件の首魁と知るやうになり、川崎が殺人後淺利の家に逃げこんだのは、此の當時の深い緣故ではないのか……一説には長春時代から交際があつたとも云ふ。（大内記――確かに、長春時代から交際があつた。私も知つゐる。）京城では洗濯屋の店員になつたが、彼の事だから大いに働いたに違ひない。何年目かの或夏の夜の「ブブラ」に、途中で主家の娘さんに出逢ひ、何と言つたか聞

きもらしたが、口を利いた爲逆鱗にふれ、人中で親しさうに口を利いてお呉れでないよ、とやられて、今度は淺利が感情を害して飛出し、何葉、腕一本で俺の勝手に働くんだと、靴磨を始めた。そして洗濯屋時代のお得意を片つぱしから磨いて行つた。その後はどうして京城を後して大連にやつて來たか、乾度、大連には母上も、兄上も居られたからの事だらう。それとも一つは滿洲ヲ子だから矢張り滿洲に歸つて來たのだらう。

或る日、淺利がやつて來て大連で靴を磨くと云ふ。俺はその前から、大連の奴は道にめぐまれてゐるくせに靴を始め履物類の手入れが不行屆なのが氣になつてゐたので大賛成をやつた。彼は忽ち滿鐵に入り込んだ。市内の會社商店に手をひろげた。彼の氣質は至る處に愛された。回數券を買つて自轉車を買つた。彼一人の手では磨き切れなくなつて、公孝堂出身の子供を使つた。一人、二人三人と殖えて行つた。彼は日曜日は早朝から得意先の家庭へ進出した。靴の修繕を引受行た。便利屋式に家庭の御用を勤めた。鮭を買つた、シロップを買つた。哈爾濱製の腸詰を買つた、サラシを買つて褌を作り、大町桂月の猿又亡國論を振りかざして、獨身宿舍を襲つた。彼の越中は、ナプキンになり、手拭になり使ひ古して褌となる三德褌といふものであつた。太平洋橫斷飛行に献金する爲、浪速町の街頭に立つて靴を磨いた。青年議會にもはせ參じた。彼の活動には休息がなかつた。

云々。

近頃、建國物語などがよく描かれ、その前驅としての青年議會のことなども扱はれてゐるが、淺利などもこの青年議會の一議員として活躍したものだつたのである。

こゝに、郁哉、武士、冬衞の諸氏がやつてゐた朱冬會での淺利の句を抄して置こう。

クリスマス氷れる天に祈りけり
やうやくに約したる日や降誕祭
節分や下駄を番して寺男
春の湖面に落ちて石一つ
大雨や鵲の巣を思ひけり
石楠花を煙草とかへし木樵かな
椽側の猫ながながと日向ぼこ
枯蓮の根元をあさる小魚かな
網を干す濱に人なき夕時雨

農座敷あかりほのかに金屏風
兵營や殘花のもとに銃磨せり
青蟲を新樹の中にみつけけり
蟻一つ行きつ戻りつ新樹かな
埃多き小店の棚に水中花
軍艦旗赤くくだりて春の海
文からを浮かせてしぼし春の海
杏咲く小山のほとりゑ地鎮祭
支那町にほとらしげなる杏かな
庭にある鍬の光や竹の秋

第五章　滿日の小說募集『大陸生活』『滿洲短歌』

大正年代に滿洲日日新聞が長篇小說を募集したことがあつた。それは二回に亘つて行はれたのだが第一回の分は手もとに記錄がない、ただ確か瀨野諸太氏が當選したやうに記憶してゐる。瀨野氏は滿鐵圖書館にゐた年輩の人(或ひは風貌のせゐでそのやうに年輩と見えたのかも知れないが)で、相當に當時の滿洲文學界で活躍した人だつた。

第二回の方は小生、記錄を持つてゐる。といふのが、私もそれに應募し、次席になつたからであつた。

當選者は進岡[illegible]といふ女性だつた。作品の題は「苦惱の光」。大正十五年の九月一日に發表になつてゐる。

當時の滿日の記事を書き寫して見よう。

「滿洲文運の促進と向上とに向つてそが本錄となり國士たらんことを念とし、從來尠ざる努力と犧牲とを拂ひ來つた事については讀者諸賢の夙に認識せらるゝ通りであつて吾社としても素懷の遂行に聊か欣快の情を禁じ得ざるものがある。

◇

この大旨に基き、滿洲を背景とし地方色的色調に富んだ清新なる作品を隱れたる作家に求め、滿洲文壇のために一層の貢献を致し文運發展の一路へ精進せんとする止み難き欲求の下に、前に第一回懸賞募集を行ひたること讀者の記憶に新たなるものがあると信ずる、而してこの第一回の成績に鑑みて更に第二回の募集を發表したことも一般讀者諸君の知らるる通りであるが、應募者諸君の絶大なる努力の賜である幾多の力作を得て締切ることが出來、爾來愼重なる審議を重ねたる結果を本日の紙上に發表し得るに至つたことはその衝に當つた吾々として何ともいへぬ愉快を感ぜざるを得ないのである。

◇

應募者の總數は第一回に比してやゝ劣つたやうな感があつたが、それでも十五名を算することが出來たは次第である、而して應募者各位が犧牲的文壇の士としてでなく全く一種の熱烈なる趣味から公務の餘暇を割いて炎暑と闘ひつゝ腦漿を絞られた越斯とも見るべき或は汗と血との結晶とも見るべき金玉の名篇を寄せられたことに對して滿腔の敬意と感謝の意を表したいと思ふ。

◇

先づ第一に吾々を悅ばせたことは、第二回の募集社告の發表と締切期日との間に餘り多くの時日がなかつた爲め力作の暇がないといふ多少の怨聲をきかぬでもなかつたのに鑑み、今回は時日を多少延長した關係からかと思ふが一段に力作に接したことである。

◇

吾々は數回に亘りて熟議を凝らした結果、佳作として左の四篇をあげることとした。

苦惱の光　上岡　コト
受難の花　宮田ふじ惠
地上の唄　越下假想兒
北方の雹にて　大內　隆雄

これ等四篇中より入選のものを選び出すために更に商議を重ねたこと勿論であるが、岩田、城下

兩氏のものは兎に角として上岡、大内南氏の作は夫々に長所があつて何れを採るべきかについて大いに迷はざるを得なかつた。といふのは作全體の感じ乃至出來榮からいつて大内氏の作品は遙かに上岡氏のものに勝つて居る。想といひ物を視る眼といひ地の文に會話に實に見事な出來榮を示して居つて、このまゝ中央文壇へ持ち出しても無名ながらも新進作家として識者の眼をひくに足る程の力作であると稱しても過賞でないと思ふが、作全體の調子が新聞小說として餘りに寂しすぎる、又局面もやゝ狹きに失するやの感がある。

◇

これ等の諸點を考査するとき大内氏の作は捨つるには惜過ぎる次第ではあるが新聞小說として稍物足らぬ感がある。最後に殘つた上岡氏の作品を採ることにした」云々。

その後、上岡氏たちがどうなつたかを知らない。別に作品活動もしなかつたやうである。城下假想兒とは誰かの假名であらうが、これも判らない。宮田ふじ惠も不明。

また、この小說の選は、上村哲彌、加藤新吉、能登博などの諸氏がやつたやうに後で聞いた。上村哲彌は今『公論』を出してゐる第一公論社の社長である。——建國直後の頃は彼は文教部にあて、一

日長順へ向ふ列車の中でひよつこり會つたところ、

「こんな廣い農場を持つた大學を作りたいものです！」

といふやうな大氣焰を聞いたものだつたが、これは大分後の話である。

懸賞募集と言へば、遼東新報が短篇小說の募集をやつたものであつた。そして、その選者は來野葉舟であつた。私も何度か出し、數回當選したことがあつた。聞けば、吉野治夫君なども當選だつたようである。

私の作品では「新年と人妻」「暗い船室で」「或る國民黨員の死」などがあつた。

「新年と人妻」に對して選者は次のやうに批評した。

「今回の中で一番貴族的な心のリズムをあらはした作品であつた。美しく且つ靜かで、そして鋭さをその内につゝんで持つてゐる。デリカスイのある作者の心持ちをなつかしみながら讀んだ。あんまり固くなつてゐるのは缺點だと思つたが、第一回第二回の全體を通して、（大内記す——これは第十三回分だつた、第十二回から水野氏が選をすることになつたのだらうと思ふ）誰のよりも文明だと思つた。」以下略

「暗い船底で」への選者の評。

「この作の表現の自由さが先づいゝ心持ちであつた。よく描き得る人だと思つた。そして元氣のいゝ心の持ち主である。ただ、この作はディテールズの平均がやゝ失はれてゐる。それは殘念なことだつた。もつと自在であるべきものの見方が少し煩はされてゐるためである。しかし今回の中では最も勝れてゐると思つた。」

この時には稲馬貴美子といふ人の「夕暮」といふのがあり、それへの批評と並べて掲載された。

「或る國民黨員の死」は身近かにあつた實際の話を書いたもので、自信もあつた。

これへの水野氏の評は次のやうなものだつた。

「實に面白い題材である。いつも何でもない戀愛ばなしばかりを聞かされてゐる耳に、これは何だか人間の心を本當に打つ事實に直面した氣がした、しかし、この作品はもつと深く眞劍に人間の魂にふん込んで行つて、その上で書かれたものだつたら、どんなに愉快であつたらうと思つた」これが為三十二回だつた。――この募集、少くとも三十何回は續いたことが知られる。大正十五年から昭和二年へかけてのことであつた。

大正十四年、『蒙』の三月號に私は張資平の「植樹節」といふ小説を譯して送つたのが掲載されている。

その目次を見ると――

中國共産黨と勞農政權　橘樸
支那の新文化運動の歸趨に就て　柴田驍
支那の現政局　淮汀
支那民謡から觀た家庭と婦人　稲川淺二郎
大連圖書館より　柿沼生

等の項目が拾へる。淮汀はY・Tで、高柳保太郎將軍の筆名だつた。柿沼生は柿沼介氏。稲川淺二郎氏は後に滿系文學のためにも力を致した人だ。

同じ月の『新天地』の目次を寫して見よう。――

支那革命の行詰狀態　橘樸
在外國居留地論　中濱義久
國民黨の六長五短　船橋半山樓

移住期より見る在滿鮮人素質　赤塚正朝
滿蒙産業統計整備の必要　野中時雄
大連市制の改廢問題　石田禮助
グループに入るまで　田邊敏行
無産黨代議士の素描　村山羊三
斷々室冗語　井上直太郎
九條武子夫人と白蓮女史、　春日晃一郎
深尾須磨子女史の詩　千田萬三
八手の花　松崎柔甫
南國集（短歌）　小日山直登
梅（同）　伊藤五丈原
淺春（同）　瀧口武士
　　山口愼一
　　島谷貞一
　　富田充
雪と溫泉（同）　西田猪之輔
未拓の池（同）　五丈原
七夜鈔　緒方春海
鍾津閣橋　安西冬衛
マドロスの血（創作）　コマチエリン作　三島隆譯
係（創）　中村無六

右のやうな賑やかな顔觸れである。後の日の鐵鋼統制會の親玉、今の滿鐵總裁も、麗歌人を語つたりしてゐる。春日晃一郎とは支那通で文化人だつた齋久雄の筆名。小說を譯してゐる三島隆は長春商業の先生で、後に滿鐵調査課に轉じた。小說を書いている中村無六は、滿鐵の調査課にゐて英語の飜譯をやつたりしてゐた男だつた。

昭和二年の十一月、大連で『大陸生活』といふ雜誌が創刊された。社長は鐵道雜だつた。石川鐵雄、田邊敏行、八日山直登、內堀維文、上村哲彌、高塚源一、山田蓉峰、立川雲平、板橋辨

治、早川己之利、難波勝治、橋樸、菊池秋四郎、田原天南、浦田繁松等が寄稿してゐるが、文藝方面では、柿沼實の隨筆、朱城、佐賀田日見雄、朝山寥々子、城川濁流、高林蘇城、江川三昧の俳句、加藤郁哉の詩、創作に瀧野浩太の「ある風景」、上野光の「盜難」等がある。

柿沼の隨筆は斷片的にいろんなことを書いたもので次のやうな一節がある。

「亞社の瀧口武士君が內地から奧隊をつれて來たそうだ、未だ拜顏の榮を賜らないが伺聞するところによると瀧口君と瓜二つだそうだ。安西冬衛君は武士君に先んじられて、いさゝか神經過敏の徵候あるらしいといふ、これもうわさ話。」

その後には私が彼に出したハガキの文句をそのまゝ勝手に書きつらねたりして。「吹いて飲むかゆのうまさや秋のくれ」といふ俳句で結んでゐる。

『大陸生活』の第二號には、瀧利勝が「散步封書」を發表してゐる。短いものだから引用しよう。

散　步　1

洋畫家のM氏は、右にステッキ左に女優と輕く散步して居られました

洗濯屋の小僧はそれをうらやましげにみやりました

だが、小僧はM氏のセルの襟がひどくきたないのに氣がついたのです。

散　步　II

主人の娘に彼は町で計らずも出會つたのです

彼は何氣なしにやあと云ひました。娘は一寸とめいわくしたらしいのです

彼が家に歸ると娘は彼に申しました

あんな人の澤山通る所で聲かけられては困るよ少し考へてもらはなくては

彼には考へるひまもなかつたのです

封　書

九時を過ぎてゐた、妻は洗濯をしてゐた

玄關に人の氣配がした。役所の給仕である、妻は手を拭きながら一通の封書を受け取つた。それは夫の名刺に走り書きでこう書いてあつた

山田のお嬢さんが御病氣の由、すぐ見舞に行け

給仕が返事はと聞いた

いゝえ、わかつてゐます、と答へると妻は洗濯もほつたらかして出て行つた

山田とは役所の主任である

淺利らしい作品であつた。

この號には大谷武男が「チエホフ小感」と「ある日曜日の朝の風景」を寄せてゐる。（今は大谷武夫と書いてゐるが、以前は武男だつた。）「チエホフ小感」は短いものだが、大谷君らしい研究的なもの、後者ももの靜かなスケッチ風のものである。

柳沼寶雄「仇討異聞」といふのを寄せてゐる。彼らしい才分を見せた讀物である。

「月日は十七年を矢の樣に廻つて、もとの松並木へ來る。（十七年間、重二郎も又二郎も病にもかゝらず、死ななかつたことはたいへん大きな小說に都合の良いことであります）」

といつた叙述である。

三島隆はデ・ブディシチェフの「森の兄弟」といふ小說を譯してゐる。

「讀者頒分」といふ欄に次のやうなのが出てゐる。

「殺風景な滿洲、よるとさはると不景氣不景氣といふ大連、金錢の話――物質以外には何物もないやうな土地に住んで居る我々青年は、いつの間にかズル〳〵と此の物質の渦中に引き込まれて行くやうな氣持ちがし、不知不識の間に荒んで行くやうな心地がします。

此の時にあたつて貴誌のやうな文藝雜誌の出たことは我々青年の救です、貴誌よ貴誌が發明さる

ゝやうに滿洲にも滿洲の詩があり、歌もあります。我々はあくまで貴誌が健實なる發達をとげられて、滿洲の精神界に盡すところあらんことを期待して止まないものであります(沙河口の一青年)」

「御誌が大陸に生活する私共のための文藝雜誌であり、そして家庭雜誌であるやうにといふ理由で生れたことは妾どものやうに實際大陸に生活して居るものにとつては非常に結構なことだと存じます。今まで滿洲には家庭的なものや、文藝的なものがなかつたので妾共は、しかたなく內地の雜誌を讀んで居ました。けれども、どこかに物足らぬ感じをおこさせて居ました。妾達は御誌がもつと家庭的記事を澤山のせていただきたいと思ひます。そして婦人の手になつた文藝的のものも出していたゞきたいと思ひます。(千代子)」

當時の若い讀者の意見を代表してゐるものであらう。

なほ同誌には、大連で文藝座談會を開催する旨が豫告されてゐる。場所は日本橋滿鐵倶樂部。會費三十錢。世話役は大連新聞社の三井鶴吉、大陸生活社の竹田齊治。

大正十四年來、私は長春實業新聞に各種のものを寄稿して來た。「歌へる日本人——民謠の歷史と其主流に就て」と題して、十三回に亘つて連載したものがあつた。また探愛緣といふ支那婦人の手記を「過ぎ去しかた」の題で記載した。

大正十四年の滿鐵の『讀書會雜誌』五月號には「朝鮮の古戰場」といふ短篇風のものを出した。平壤に旅行した時のことを扱つたものであつた。

『讀書會雜誌』九月號には「南山寮南京蟲の歌」といふのを發表した。戲れに書いたものを加藤新吉氏に見せたら、同氏が發表するやう手配してしまつたのだつた。そのため、九首のうち、二首は私の作でなく、加藤氏ものするものなのである。

「これは惡魔二つの穴を殘して姿を見せぬ南京蟲です」

「今日もまた南京蟲の喰つた跡のかゆさ掻き掻き血を出しました」

南山寮の南京蟲は全く物凄かつた。

大正十五年には長春實業新聞に發表した「密約」といふ短篇を譯して載せた。

昭和一年には雜誌若の「落葉」の一部分を同紙に譯載した。「落葉」は日本人の一女性が一支那留學生に宛てた手紙から成つてゐる小說である。

また蘇鶴人の「母の去りし夜」といふのを譯載した。

實は大正十四年の春から昭和四年の春まで私は上海にゐたのだつた。尤も年に一回は滿洲へ歸つて來た。

そのやうなわけで、この時期の事情については、以上のやうに殆んど自分中心に、しかも斷片的にしか書けなかつたことを卿了解願ひたい。

で、以下昭和四年頃からのことを書く。

昭和四年、私は大連に歸つて來た。

この年の五月、『滿洲短歌』が創刊されてゐる。

黍稈をめぐらす家に照れる陽の明るさに吾はしばしなごまむ　八木沼丈夫

ぬばたまの夜をかなしく目さめたる鵄鳥は鳴けりわが足音に　富田充

おのづから畜生どちはしたしかり鴉は豕の背にして遊ぶ　上村哲雄

鍬道はぬくもりふかし支那の兒ら尻あらはに群れ坐りゐつ　城所英一

妻なかく臥りてあれば朝戸出の吾が後追ひて子らは泣くかも　加藤多滿喜

深みゆくやまひ癒やさむと二十四のうつしこの身に傷つけにけり　三木靜子

癒えがたき病と宣らし老父は今宵もうまゐしたまはぬかも　江口とり子

産喉かばふたゝび來むと乙女子の浮ひ愛しもはや咲けすみれ等　若林初枝

さばかりの苦き命においてなほ死を思ふやと陽はうらゝなり　北川文子

まむかひてものを言ふとき首を搖る愛しきくせを持てり吾妹は　小山　暎雄

まがなしきをとこをみなの落書のある亭の壁我も見にけり　武田　尋市

敎へ兒を下思ひつゝ異國に稽を買はしけむうづのその稽　池内赤太郎

野の果の小さき驛にときつぐる鷄を驛夫が飼ひならす鷄　森　厚

これらが創刊號を飾つた諸氏の作品であつた。

第六章　昭和初年の短歌壇と詩人たち

前章に『滿洲短歌』が昭和四年に創刊されたことを書いたが、短歌雜誌としてはこれより先き、昭和三年に西田猪之輔氏らの『合萌』が創刊されてゐた。

昭和六年末頃に調べたものに依ると『合萌』を刊行した滿洲短歌壇の會員の顏觸れは次の通りである。

西田猪之輔、外川よしみ、松山みそぎ、木村いおり、淺野高俊、池淵鈴江、佐藤鐵之助、高尾雄峰、西島貞子、西澤流、河上知風草、末野稠、寺本初音、近藤銀子、長内澄、田舟水尾、安藤英子、荒川石楠花、永原いね子、深山幽明子、志賀折夫、鈴木澄秋、秋森菊子

この内、西田猪之輔は最後は滿洲電々の幹部として先年病逝した。歌集『みそゆく』がある。當時は滿鐵にゐた。恰幅も良いし、宛然『合萌』の頭領といよ印象を私達は受けてゐた。

『合萌』はこの西田氏のもとに良い輔佐役がゐたのであらう會の組織などはなかなかしつかりした運營が行はれてゐたやうである。

作品では私は西島貞子氏のものに敬服してゐた。滿鐵沙河口工場の幹部の方の夫人だつたやうに記憶してゐる。後年歌集も刊行されてゐる。

永原ゆね子は醫師で繪を描く永原織治氏夫人、若い連中を可愛がるいゝ小母さんで、私も一度お正月かに某女性に誘はれて家に遊びに行つたことがあつた。後年、歌集『雛罌』を出してゐる。

池邊鈴江の後年の『作文』同人としての活動は知る人も多からう。

高尾雄峰は奉天の滿日にゐて、いま九州の錦州新報に移つてゐる高尾雲太郎である。近年は映畫批評や映畫政策論に力を入れてゐるやうだが、彼、昔は小說も書き短歌も作つたものである。若い頃からでつぷり肥えた豪傑型の體格だつたが、それでゐてなかなかの感傷家だつたのだ。

一方、『滿洲短歌』に據つた面々は次の通りである。同人といふことになつてゐるが、必ずしも厳格に同人組織が確立してゐたわけではないやうである。

八木沼丈夫、城所英一、原眞弓、富田充、河東茂次郎、川邊悌二郎、峰尾滿久、有吉春雄、青木實、木田晴夫、河瀨松三、森厚、三溝沙美、上村哲彌、香川末光、河瀨みち子、三木靜子、柿本靜江、若林初枝、中島節子、野中雄次、高崎昌彦、大塚白穂、池野善雄、長谷川敏太郎、太田廣貫、出口玉仁三郎

出口玉仁三郎とはどうも變だが、この男も實に澤山の、驚くべき量の歌を作つた、ひねり出したといふことは卷末傳へられた噂で、また事實であるらしく、それに滿洲にも來たことはあり、寄附金でもして、同人の末端に加へて貰つたのだらうと思ふ。尤も『滿洲短歌』としてはそんな金などを有り難がつたらうなどとは思はれぬ。その送つて來た歌が面白かつたので、これを載せたといふだけのことであらう。

八木沼丈夫については、世人多く周知のところであらう。私個人のことを書くと、彼氏は當時私の勤務した職場で私の直接の主任であつた。あのギロリと光る凹んだ眼玉には昭和四年以來のお馴染なのである。……この間、大同劇團の會の歸りに鬼頭海介と磯部秀晃と街を歩いたら、彼は支那事變の初期に北京で八木沼と起居をともにしたのだそうである。そして八木沼は磯部をつかまへて「おい少年！　少年！」と呼んだものだといふ。（尤山海介も若いよ！　と小生思つたことであつた。）

ともあれ八木沼は『滿洲短歌』の御大としても、一家の風格を成してゐた。簡單に言つてみれば、あの長身を首から上を少しそりまげるやうにして、ギロリ眼玉を光らして、悲壯調をもつてものを言

ふ、或る點まで來るとワツハツハと笑ふ、おや笑つたなと思つて本人の顏を見ると、若蟲をかみつぶしたやうな顏をしてゐる。そんな風な姿態から生れた風格である。右肩を怒らせた風格である。八木沼に何十首かのすぐれた短歌作品があることは確かである。殊にその朗々誦すべき莊重、悲壯の調べは高く評價されてよいであらう。尤も、この莊重悲壯は一種の詠嘆に通じてゐる。それも觀念だけの空轉のやうにしか受け取れぬ場合さへある。肩を怒らせた彼の姿勢が其處にも出てゐるのである。その頃の彼の作品を若干書き拔いて見る。

やはらかに水すべりゆく吉野川百舌鳴きとほすこゑのすゞさ
吉野紙漉けるを見つつ心さへほとほと遠しいにしへおもふに
木の香立つ杉の紅身のしたしさや霧のはれ間を露重りにけり
山國に子と生れしかば流れよる香立ちしたしくかぎ分けにけり
海こえて十年經にけるむなしさや吾にしくしく沁むおもひあり
陸奥の吾家の山に霜ふりて柿もえしくなりか過ぎ「し
天誅組こもりし村に秋陽さし柿あかあかと熟れにけるかも

以上は昭和五年二月號の「大和、山城行（三）」から採つたものである。同じ號に平生のものが八首出てゐる。敢へて新しい形式に據つたものだつた。三首だけを拔いて置く。

胸に思ふ　ことひとつもち　ハルビンの冬の夜更けの街路を歩んだ
戒嚴令が　十一時に店を閉めさせる　裸形の女の收入が薄い！
聲あげて歌ふ踊り子よ！　ウオッカよ！　汽車の時間だ！　ドスヴィダニヤ

また同じ號に、雷田充氏が書いた「歌會記」といふ一文がある。これには私も出席した。こゝに『滿洲短歌』の創刊以來九輯を重ねて來た。みんな歩調をあはせて專心作歌に精進してきたので進境著しいものがあり、各々のゆくべき道もおのづから拓けてきたやうである。

ところで此際、みんな顔をならべて一日をゆつくりと過したい、未知の人たちと逢ふことは一層親しさを増すであらうし、お湯につかつてお互のしし、むらを眺めることも興があり、食事をして勝手に馬鹿振りを語ることも味があり、その上歌の話でもすれば、好きな道だけに日頃の鬱憤を吹きとばして、大いに痛快であらうと思はれたので、懇親會を兼ねて短歌會といふことにし、一月十九日午前十時から、松山台ラジューム温泉の一室に、みんな集つて貰ふことにした。

當日いろ〳〵準備もあらうと、定刻よりは少し早目に出かけて、松山館の玄關に靴をぬぐと女中さんが「おひとりお待ちで御座います」と云ふ。さても殊勝なお方だと感心して、長い廊下を渡つてゆく。冬枯れの庭土に雪の名殘りはあはれであるが、地に敷く光りは、なんといつても小春日和である。部屋に入ると、魁は鞍山の加藤多滿喜氏であつた。遠路御出で下さつた氏の熱心さがまづ嬉しかつた。そのうちぽつ〳〵みなの顔がそろつてくる。早速お湯につかることになる。お湯好きの八木沼氏が率先してみなに入浴を奬める。風邪氣分の加藤氏や、やせ肉の私（私も同樣風邪の氣分）にまで、奬めることと甚だ念である。

浴後、しばらく寛いだ座談で時を過したが、就中、昨秋旅行された八木沼氏の紹介る大和山城地方の歌壇に富んだ話は、私たちの歌ごころをそそるに十分で一同熱心に聽いた。ひきつゞいて歌をつくることにしたが、特に題を設けず、席上、自由に無際限につくつて貰ふことゝした。（以下略）」

さて同人中、城所英一については前にも書いてゐる。當時の作品に次のやうなものがある。

むらぎもの心もしぬに長れたれかたちなき子のいま生れむとす

病院に妻を送りてぬばたまの歸り路を寒く風は鳴りつる

みごもりてふたつき經ぬるさびしさやふ寢床に妻の眼の大いなる

鋭心は疲れ果てたり風のをと鳴りのはげしも聽きつつ言が寢む

――『滿洲短歌』一〇輯より――

當時、彼の精進については知られてゐよう。當時の作品に次のものがある。

勤務より歸りきたりて部屋ぬちのこもるにほひに息吐きにけり

洋服を着物に換へてころぶしぬ買ひわすれたる煙草を欲りぬ

茶をいれてひとり啜ればひとりなる生活のことを思ひいたりぬ

時すぎし夕餉にむかひうつつなしひたすらわれは魚むしりつつ

――一五輯所載「獨居」より――

同人中に青木實の名があるのは、最近の彼をしか知らぬ人には奇異であらう。が、青木君は以前には短歌にかなり親しんでゐたのだと思ふ。

岡瀬松三郎は永い間、滿鐵の『讀書會雜誌』の編輯をやつた温厚君子人である。のち滿洲國政府に入り、いま國立中央博物館にゐる筈である。當時の作品に次のやうなものがある。

とよもして谿づたひゆく呼子の音やひしひしと寄るさびどころかも

白楊の巨幹にのこれる光りさへうすれゆきつつ夕ざりにけり

――一〇輯所載「濃霧」より――

溝沙美は後に日滿商事に轉じた三溝文三である。短歌人としてより俳人として知られてゐる。

『合歡』『滿洲短歌』と、その後、甲斐氷樟のあかしや會が出來、この三團體が相對峙するといふ形になつた。氷樟大連支社あかしや會會員は昭和六年末頃の調査では次の通りであつた。

甲斐氷樟、安永廣子、黃村芙蓉、大下三雄、山崎かすみ、谷山つる枝、甲斐繁、山本枝折、濱坂日出男、野口節子、野口靜彦、森節野、宇野節子、角谷靜江、須野憲二、森谷つたお、谷岡智子、安見土筆、春野芳子、山田茂、神場麟須子

この會では主宰者が女性であり、會員にもはつきり女性が多いことが注目される。記憶が定かでないが、一度だけ『合歡』と『滿洲短歌』で合同歌會を開催したことがあつた。私も『滿洲短歌』側の一人としてその會に出席したが、割り合ひ和氣藹々たる會合だつた。言はば他流試合なのだから、も少し眞劍な論爭なども行はれるのかと豫想したのだつたが、そんなことはなかつた。短歌とはやはり大官人の流れを汲む文學なのであらうか。それとも、日本的文人のたしなみとでも言ふべきものであつたらうか。

筆者は昭和の初め頃の滿洲の歌人たちについて多くを語り過ぎたやうである。いまは、その頃の詩人たちについて語るべき順序であらう。

私はいつも思ふのだが、いつの時代、何れの國に在つても、一つの文學現象の時期の魁けをなすのは詩――或ひは、詩の運動であるやうである。滿洲の文學がつねにさうであるのだが、滿洲の日系の場合に於いてもこのことは例外をはなかつた。詩がいつも先頭に立つて來たのである。

大連で刊行されつつ、しかも日本の詩壇へまで滿洲はものを吹き込んだ詩誌『亞』の活躍については、すでに前に書いた。詩誌『亞』は北川冬彦、瀧口武士、安西冬衛等を育てて、第二十五號をもつてその輝かしい歴史を終つた。

昭和四年、加藤郁哉の詩集『遡水』が出版された。加藤郁哉は永く滿鐵に在り、露西亞語に通じ、『日本詩人』『亞』などに作品を發表してゐたのが、『遡水』出版の頃には大連に歸つてゐた。

大連では『遡水』と同じ頃に、吉田賢龍の『老子降誕』が刊行されたので、この二人の詩集を祝賀する出版記念會が日本橋圖書館で開催された。その頃、出版記念會など、滿洲ではまだめづらしかつたと思ふ。稀少價値などは肝煎りをやつたとの次記憶する。記念寫眞を見ると、いはれる加藤郁哉、吉川賢一郎を前に、西田猪之輔、橋本八五郎、平野博二、西村生、稲葉亨二、島崎恭爾、城小碓、それに小生などの顔が見える。橋本八五郎は當時日本橋圖書館長で、萬葉集に造詣深く、後に滿洲文藝會の役員として盡力した。武藤弘報部長が藝文指導要綱を日滿軍人會館に於いて發表する

や、弘報部に乘り込んで「しかと實行する旨であるか！」と念を押しに行つたといふ好漢である。『野蛮』はジャパン・ツーリスト・ビューローに在り、滿鉄などをよく書いてゐた。『蛮』も初期滿洲文學の功勞者で、詩の雜誌を出したりした人。『滿洲發祥期の人々』といふ尤大な本を編纂刊行したことがある。それは與信錄みたいな本で、それに長唄の師匠まで網羅したものだつたが、近頃言はれる芸能の内容をすでに當時に採用してゐたわけだ。稲葉亨二、島崎恭爾、城小碓らは當時の若い手詩人といふところであらう。

稲葉亨二、島崎恭爾、城小碓は和四年に詩誌『我克』を發行した。

『稲葉亨二』は、詩のほかに版畫をやり、また昆蟲學をやり（彼が『滿蒙』に發表した「ばふんころがしについての研究」は、文獻と實地觀察の兩方面から調べ上げた精細な研究の成果であつた。）支那民族性の研究などもやつてゐた。古川の『老子降誕』も彼が裝幀をやつたのだつた。『我克』の表紙も彼の描いたものであつた。

『島崎恭爾』は滿鐵沙河口工場に勤めてゐた。旋盤工で一日五圓稼ぐさうだなどと若い連中が騒してゐたが、背廣を着て會合などに出て來る彼はおとなしい、しつとりとした人物であつた。

『城小碓』は一風變つてゐた。

「僕、ジャンクのジョーです！」

『逃水』と『老子降誕』の出版記念會の時であつたか、彼は突如立ち上ると、そのやうにブツキラボーな自己紹介をやつたことを私はいまだにはつきりと記憶してゐる。

「ジャンクのジョー」は『戎克』の城であつた。小碓をまた正しく讀む人がなかなかゐない。あれは『おうす』と讀むのださうである。（前後したが、稻葉享二は「けうじ」でなく「おうじ」と讀む由である。）

城小碓は本名を本蒙鼎と言ひ、老虎灘街道にある或る醬油屋に勤めてゐた。稍小柄な身體に長髪をなびかせ、よくベレー帽を冠つて歩いてゐた。

昭和六年、城は詩集『黑麥酒の歌』を刊行してゐる。その前に、彼の編著として『塞外詩集』が出てゐるが、それは古川、稻葉、彼などの作品を集めたものであつた。

古川賢一郎は滿鐵の土地調査などをやる現場の方にゐて、當時はよく滿洲各地へ長期の出張をやつてゐた。彼の支那、滿洲民謡研究、滿人社會觀察などはこの旅と勤勉の間に養ひ育てられて行つたものであらう。後はなほ『氷の道』『蒙古十月』『貧しき化粧』等の詩集がある。內地の『詩の家』『詩』『九州藝術』などの同人でもあつた。また滿洲鄕土色研究會員としての活動も注目されるものがある。散文集には『浮柳』がある。

古川賢一郎は佐藤惣之助あたりに師事したのだと思ふが、根は敍情詩人であるやうである。ただその取り上げる題材の半ば以上は滿洲の自然を背景としてゐるために、そしてまた彼の詞句が多くの場合厳しい、冷徹なものであるために、根本の敍情詩人たることを蔽ひつゝ幾らかのがつちりしたものが出來上つてゐるやうである。『老子降誕』『氷の道』にはその種のものが實徹してゐたと思ふ。これに比べて『貧しき化粧』には意識して敍情的な作品が集められてゐた。また『蒙古十月』は、民謡調の作品を集めたもので、異色あるものであつた。古川賢一郎はまた支那の民謡や、滿系詩人の作品の譯譯などもやつてゐる。近來招かれて大連の土建協會に在り、いろいろな企畫に忙しいやうであるが、詩作や詩の譯譯にも大いに努めてもらひたいものである。

城小碓の『戎克』以來の文壇世話人的な役割も注目さるべきものがあつた。『戎克』がさうであつたし『塞外詩集』を出した塞外詩社といふのも城の經營に係るものであつたと思ふ。その後、大連詩誌の寄附行爲によるものであることも後に明らかにされた。

城の「黑麥酒の歌」の後半に言ふ——

56117

此の一群の浮浪者等は、白堊の大道で賭博に耽つてゐる。彼等は賭具は持たないが、仲間と樣に畸並に坐つて、向ふ角からあらはれて來るものを言ひ當てるのだ。例へば鳥なら鳥、。無論言ひ當てたものは勝つのに決つてゐる。

次に來るものは次に來るものは。來るもの來るもの皆彼等の仲間ばかりである。彼等は勝負に對する興味を次第に失つてしまふ。それでゐてやけに聲高々と叫けてゐる。

その次に來るもの、その次に來るもの、その次に來るもの、嘘來るもの、來るもの皆彼等の仲間ばかり、仲間ばかり……

思ふに、滿洲文學の保姆としての城が、このやうな姿で、次に來るものを待望してゐたのではなからうか。

第七章　續・詩人たち、『塞外詩集』『三人集』『燕人街』など

昭和四、五、六年頃の滿洲では詩が非常に盛んであつた。

前に『塞外詩集』について少し書いたが、說明不足であつたので、こゝに改めて書いて置く。

昭和五年六月の刊行で、編輯兼發行者は本家勇、[illegible]は城小碓である。

執筆者は——

安西冬衛、稲葉孝二、加藤郁哉、小杉茂樹、島崎恭爾、城小碓、瀧口武士、古川賢一郎

以上の八人、何れも當時大連の住人であつた。そしてこのうち、安西冬衛は詩集『軍艦茶利』を、加藤郁哉は『逃水』を、古川賢一郎は『老子降誕』を出してゐた。代表作を拔いて、作風を一瞥しよう。

安西冬衛

黄河の仕事

回回教は混凝土を發明した
Lo—lo族は巴里警視總監よりも優秀である

甘肅省といふ文字は、建築群の機構を暗示する。私は堆蔵された都市の發掘を、支那政府に建言する

燈燈の發火集中を見よ。地球開發會社に投資せよ
Yangtsekiang Bagdhad EXpress は、拉里ヂリー間の tube を要とする
主として藏地に於ける蘚苔類が作用する、軌道の峻烈なる腐蝕を避けるために

黄河は地球を削つてゐる
Catalyzer を與へよ
ミシシッピーと河底を共産させるために

稲葉亨二

黄土層

とゝには、茫然たる視野の廣大さが注目されると思ふ。それとともに、とゝには新しい東方のニヰゾテイシズムとも稱さるべきものがある。そして、それは稲葉亨二へも通じてゐる。すなはち——

紹の群が素通りする
甘肅黄土層は一層黄いろくなつた

月が織を塗る
穴居民族が闇で瞳を輝かしてゐた

の如くに、

遊河の流水

（窓口にて）

加藤　郁哉

悲しい白いものが行進する、それは流れるのではない
黎明の底をかい潜る無數の白いものの行列
それはこの茫漠たる原野の荒い靜けさの正體である
ああ、この旺んなるものの動きを見よ、それは全宇宙の動きですらある
しかし、これらは動きの爲の動きではない、これら白きものの流が一瞬にして凝結するのを私は知つてゐる
これらは實に烈しい靜けさの爲の動きである
おお、このすさまじい情熱を見よ
この果て知れぬ原野にあつて
朝暾と共に誕生した熾烈なる思想を見よ

ここには加藤郁哉のおほどかな作風が代表されてゐると言へよう。一方には次の様な作品もある

哈爾濱即興

——キタイスカヤ風景——

戰塵のやうに艶光りのする夜です。
どうかすると行き違ふ拍子にお互の肩がぱつと鎧にでもなりさうな夜です。
鵬翼にかけてなんともとりとめのない動きやうをさせてお孃さんが流れてゐる夜です。
口紅がぬれてかきぼくろがいきいきしてゐる夜です。
ある家並を出はづれると風！
（みなみだな）

辻馬車の馬の句が
闇の中にそこらおうしみひろがつて
安全燈の赤ガラスが汗ばんでゐるのです。近よると馭者が鞭を動かす鞭で、雫汁をはねかえして
頭ける二頭馬車の上では

私の腕にお嬢さんがもうさつきから可愛い荷物のやうに凭れてゐるのでした

この輕妙さ。それが崩れた形に發展して今枝折夫――彼の筆名――の戯文的滿洲風俗集内となるのである。

小杉茂樹は「霧」と「秋」の二篇を書いてゐる。

秋

ビルディングとビルディングとビルディングとビルディングとに圍まれた菱形の海

菱形の海

といふのである。その頃の詩の一つの典型的なものであらう。これはまた島崎恭爾にも通じてゐる。彼の「大陸」といふ一篇は次のやうなものだ。

大　陸　一

カノ白猫ハ地平線ヲ嗅ヘテ動カナイ

坡小確の作品からは「遺産」を採らう。

遺　産

故郷の友よ

父の遺産は貧窟に汚れた日の丸の旗ばかりだ

これには城の清いつぱいな詠ひ方があると思ふ

瀧口武士の「旅順」を見よう。

旅　順

×

緑顔は三日月がある。ぼやけ非常に雑踏する。その風光を感ずるようである。
柿木の下に緑色のベンチがある。街灯が点る。水鳥が鳴くにゴロゴロ。シャガールを思はする
河。

×

新月がある……詩人が河岸に出て話している。私はそこを横切る。
橋の外で人達が手摺を動ある。開けた国にはもう春が動いている。
山吹色の紳士が傾きかけている。後に手を入れている。ズボンキが鳴に出ている。緑色の岩か
ら蛙が音を出した。
私は新月のふちの夜面を、無中に車上で走り過ぐ。

×

防雨服の医は中川一政氏だ。樹の間から郵便配達が来るに過ぎ。
何をかいてやると言葉がかかってくる「詩人様大変毒ロさんー」
そんなのがちょいと聞こえる河岸。

石川啄木の作品「ニイ・ヨクの夜」を探る

ニイ・ヨクの夜

詩人達の古を通じ過ぎる
五月の夜風のなかを
若い手のそこに深くそりしてゆくが
ふるえの間に、微笑みの間にも聞く
ふるえの間に、青年の涙しも聞かせらの言葉を

何の様子をつかるのかもそう
詩人の大きな口唇は
心臓を中の夜に深く横断ってゆく
黄の様をこれのふるえの言葉

笛の音のやうな愛情の子守唄をうたふ

ユイ・リンよ
あなたの嬌羞は、夕闇に飛ぶ白い蛾である
ユイ・リンよ
あなたの戀は、強言の洞窟をよろこぶ
羽柔らかな蝙蝠である

このやうな詩が昭和五年刊行の『塞外詩集』に盛られてゐた。この詩集、奥附の所を見ると檢印票に中華民國郵票、それも「限吉黑貼用」と黑字を印刷した半分のを使つてゐる。編輯者城か、裝幀者稻葉の好みによるものであらう。

『塞外詩集』について書いたから、それと對比される『三人集』について次に書こう。これは昭和六年に奉天の胡同社から刊行されたもので、土龍之介、森橋順四郎、落合穂麿の三人の詩作品を一冊

にまとめたものである。

「黃塵の底に喘ぐ奉天」　土龍之介

五月の白天
旋風は街々を馬賊のやうに襲撃する
人も、馬も、犬も、木つ葉のやうに追ひ散らされて渦巻き、吹きまくり荒れ狂ふ黃塵
街頭は射殺された馬賊の鐵熱の生ぬくさだ
城市はじつとりと油汗をにじませて
疲勞、倦怠、困憊
城壁は陰謀を孕んだ爬蟲類のやうに默して動かず
城樓は徒らに高く黃天にさしのべた蒼さめた世紀の觸手…
黃天には血のやうな日輪が喘いでゐる、疾風を突いて、黃塵の底深く潜入する影
つぶてのやうな影！

同

北上夜行苦力列車

漆黒の曠野の闇に突入する列車の前燈の模索。喧嘩する機關車の前方に光る軌條の直線の曲線の生命の運命の方向。闇を截る星燈の赤線の速度の計算。——時速五十粁。激動する貨車の内部の測量器を携帯しない灰色の測量隊の一群を照明する古びた洋燈の怪奇な明暗の幼兒の空腹の蠢めく異様な群像の堆積と悪臭。激動する車體の生理的昂奮の意慾。破れ毛布にくるんだ家財一切と一家眷族を引連れた豚の如き一群の異狀なる生存力の中に潜在する征服力。驀進する列車の貨車の内部の怪奇なる明暗の鈍重なる豚に似た異様なる測量隊の波等退害と搾取と殺禍に退はれたる無人群の驀進、北へ！

土龍之介たちは奉天で詩を中心とした雜誌『胡同』を出してゐた。

弟の手紙

高橋順四郎

兄さん手紙ありがとう

ケシンイッウの阿母は
床の上で起きたり寝たり

とつても喜んでゐたよ
阿父は田を旦那に取られてからは
毎日　阿母の着物を米婆さんの處に持つてつて
酒ばかり飲んで歸らない時もあるんだよ
阿父は酒に醉ふと、旦那のことを
畜生畜生と、わめいてゐるよ
兄さん　田をとられたんだからもう旦那ではないな——
兄さん　阿母は毎日メソ〳〵泣いてゐるよ
俺ア學校は好きだけど休んでゐる
修公や平太郎が馬鹿にするけれど

毎日山に行つて茸を取つて町に賣りに行くよ
でも、近頃雨が降らないから少くなつた
村の人は孝行息子だといつて賞めて呉れる
俺アちつとも嬉しくはないよ、なアー兄さん
賞められたつてなんにもならないものなア——

手紙着た次の日、町の郵便局に行つて
送つて呉れた金を取つて、阿母の藥を買つた
兄さん　くすりつてたかいな——
殘りの三圓　阿母渡したら
蚤の下に入れて阿母は恐い顏をして
誰れにも云ふな、阿父にも云ふなつてよ
俺アー　鉛筆がほしいけれど…
俺アー　阿母の氣持ちがよくわかるよ

兄さん俺アー兄さんの處に行きたいよ
なんでもよいから働くよ
そしてこ二人で働いた金を阿母に送つてやろうよ
阿父だつてもとから悪い人ではなかつたんだから
欺されて　旦那に田をとられたんだから

阿父も兄さんの處に行けと言つてゐるよ
でも　汽車賃がないから行けないんだ
兄さん　すまないけれど
仕事があつたら汽車賃を送つてください
阿母が達者で暮らせつてよ
ではたのみます。さようなら

此處に來て、私達は今までに無かつた新風の吹くのに面する氣がする。高橋順四郎たちは大漁で詩

を中心とした雑誌『蠶人街』を出してゐた。高橋の作品をもう一つ書いて置こう。

滿洲秋の斷章

雜多な雲を孕んだ蒼空の秋である
縹渺たる曠野は
弱き日輪の光を金色に照りかへして
凋落の前期を飾る野菊は
楡木をなぐるほろ寒い風に戦いてゐる

×

木乃伊の様にやせこけた乳飲子を懐に赫土の一本道に細い影を落しては
殺子兄弟
生活に追れた山東苦力の一團は安住の地を求め
あえぎ〳〵カラツポの水壺をさげ

一

弔ひの行列の様に重々しく過ぎ去る
一聲　雁は南へ行くものに
北へ——北へと

蒼空耕の作品を見よう。彼も『蠶人街』で活躍してゐた

苦力の詩

走り去るものを追ふなよ
彼奴は野鶏と一緒にくたばる連中だ
十年の計なんか汗と共に流してしまへ
俺はお前を信用してゐる、お前も俺を…
…それだけでいゝんだ
野が無限でも、俺達あ歩こう
百萬よ、高くさえずれよ、足が軽いぞ

山東は奴等にとられてしまつた
季節だつて俺達にや無關係だが
百靈よ、お前が鳴かないと淋しくなるんだ
昨日知つた友だつて、別れるのはつらい
だが笑つて送るぞ、彼奴は元氣で行つたから
胃の腑が一ぱいになつたら眠くなつたから眠ろう
明日はいゝ天氣になつてくれ

なほこの詩集には舞藤都哉と吉川覆一郎とが跋文を書いてゐる。加藤は言ふ——

「街頭の詩集——かういふ言葉がゆるされるものとすれば、まさしくこの詩集から受ける感じである。今までに滿洲にゆかりをもつ詩集、それから毎月のあちこちに散見する詩の大方は、せまいわたくしの眼界では、どちらかと言へば、美麗なアヤをもつ布片をつぎあはせ縫ひあげた、人形の着物のやうなもので、ひどいのになると、糊と鉄とでベタ〳〵やつて出來あがつたやうなものさへあるやうに思へるのは、わたくしばかりのひがめではあるまい。そのなかにあつて、少くとも、三人集の作品は、從來の滿洲詩人の好んで書いたものとは、自ら異なつた世界を摑んでゐる。さすがに、自ら「老兵」と言ふ、加藤長老だけの觀察であると言ふべきであらう。

それに比べると、吉川の跋文はまるでそれ自體が詩みたいである。

「『吼えろ！』と誰かが云つた。それは嘘だ。先づ噛みつけ！　である。滿洲の民族は、現實のパンに噛み付く事が第一條件である。例へば、楊柳の林を突切る。其處には蛇行せる濁流がある。高粱畑がある。雪原がある。然も尙、追へども〳〵近づけない、地平線上の遙水に向つて、吼えろ！と云ふのか。

あゝ　凄まじい音を立てて流れる、足元の氷河。千里の草原を荒れ狂ふ黃塵の龍卷。その中で、パンよりもウオツカのロシアルンペンだ。白と黑の密賣日本人だ。そして汚れた朝鮮人の性殖と、支那百姓の淳い高粱粥だ。

私は三君の作詩中より、之等の渾沌とした民族の唄を掴み出そうとしたが、三君の詩は、未だ、日本人らしい潔癖を捨て切らないやうなものを見受ける。君達よ、山と水の美しい、日本の菓子を欲するな。——これは強ち飢ゑた私の嫉妬ばかりではない。寬城子の支那兵士が、その頬と腰を砲彈にえぐられ、蟲の息になりながらも、ロシア飴をしやぶつてゐる、私に言つた「涼水……金涼水」

と。

然し私は失望しない。今まで出た滿洲の詩集の中で、これほど眞實な態度を持してゐる詩集を知らない。詩作品の善惡は批評家にまかせよう。私は三君が今後、滿洲の泥水を呑み、蒙古の黄砂を吸ふて生長し、その將來に大なる風雲を呼ぶであらう事を深く信じてゐる」

第八章　稲葉亨二、石原巖徹や『街』『線』など

先般、稲葉亨二君から突然手紙を貰つた。同君の近狀を知らずにゐたのだが、なんと何時の間にか同君は新京に來てゐたのである。同君は往年の事情について筆者にいろいろと教示を與へられた。そこで小稿に補正を加へる必要が生じて來た。同君が曾つて勤務してゐたのは、滿洲鹽入組合聯合會であつた。

同君の、ぼふんころがしについての研究は『蜣蜋考』と題されてゐた。『蜣蜋考』の第三回を載せた『滿蒙』を筆者はその後偶然に發見した。古代エジプト人がこれらの蟲をいかに觀察し、そして、いかにそれをその工藝品にまで取り入れたかを考究し、轉じて支那の古い文獻を探つてはその藥用としての效用を發見し、更に東西相通ずる媚藥としての用法を想到し、

「凡そスカラベ、サクレの歴史的意義は、藥用、裝飾用、宗教用としての人類に對する關係にあつ

て、之を大別すれば一は肉體的に、他は精神的に古來數千年間世界民族の靈肉に刺繍され來つたのである。而も今尚幾多の謎を殘して吾々の前に横はつてゐる。既に神格の高御座から引き下された今日のスカラベをして再び即位せしむべき幾多未知の事實が、塵土の地中若しくはエジプトの砂中からツタンカアメンの王墓の如く、此の事の光に發き出されんことを望んでやまない次第である」と結んだ絢爛たる、彼獨特の論稿であつた。なほ同君が裝幀をやつたのは春山賢一郎の『氷の道』『貧しき化粧』その他、『塞外詩集』、未原[illegible]子『鍵盤』等である。なほ同君は『[illegible]』といふ個人誌（詩、フランス詩、文學論纂譯、創作版畫）を出した由、これは筆者知らなかつた。また同君は康德元年に詩集『[illegible]』を出してゐる。

夜航船

中華は神經喪失の
不治の疾に眠る
闇を覆めて秘かに龍口を解纜した「永利號」
山東の雜草を滿載して
渤海の夜陰に民歌を放つてゐる
船長邦傑は爽如戰慄を覺えて
元寶を抱いたまゝ海中に身を投ぬた
船長を失つた火輪船は
闇の支配に任せて
消え行く燈火を伏つより外はない
不安な身に帶びた工人群が
流亡の相を知つて
新たな燃料を
船板に焚きはじめた
野花は夜開く
中華は赤動脈に針を入れたらしい

巡捕李順は俄國染料によつて呼倫貝爾の染り行く相を驚嘆特有の容景の如く眺めてゐた

恐るべき野火が雑草を縫ふて甘珠爾の大廟に迫る

ノロが渴泉を貪り

カモシカが火にすくみ

群鳥が燒野に狂舞する

咆哮する嵐

蒙古包から吠え出た狗の群

忽ち溢れて染料の密輸者に躍りかゝつて往く

これ等の詩二十篇を收めたもの、卷頭に渡滿する苦力群の寫眞がある。

稻葉君の版畫については前にも書いたが、圓畫會等にも出品したのであつた。

古い雜誌類を探してゐると、『滿蒙』昭和三年五月號に木村莊十が『奉海鐵道を觀る』といふのを書いてゐることを發見した。無論例の直木賞を得た、後年の大衆小說家である。「奉海鐵道を觀る」は堅い文章だが、それでも。

「…大洋上に一隻の船が姿を消して行つた、極めて簡單なる一現象事は地球圓しといふ一大發見を爲さしめたのである。同じ樣な場所で同じやうな眼で林檎が地上に落ちたのを見た人は幾人かあつたであらう、しかも何等の疑問を起さなかつた人は同樣にそれを見た犬と同じであつた。張作霖氏の最近の態度に疑問を起さざる人はそれに等しい。買被り過ぎる點はあるかも知れぬが、筆者は、奉天から北京へ出た張氏は、明かに北京にある大元帥の張氏で、昔日の奉天の張氏ではないと斷言することが出來る。圍繞する人々も昔日とは同一でないであらう。明日の運命は兎も角その考へにしたところで、昔の張氏よりはその輪郭大ならざるを得ない。」

といふやうなところには、いかにも大衆小說作家らしい物の見方、彼流の仕方が豫示されてゐると思ふ。なほその頃の『滿蒙』を見ると、樂田天馬氏の『聊齋志異』のあの獨特な飜譯、三浦義臣氏の『封神演義』の飜譯、そのほかでは井上藤吉、大島濤明、岩淵甚四郎、横澤宏、森田富義、中澤新一、大野斯文、赤塚吉次郎、石原嚴徹、佐々木秀光、大谷武男、加藤郁哉、藤田虔三郎、西田猪之輔等の諸氏が書いてゐる。

東澤新一先生は私が知り合つた頃は大連の滿洲文化協會（一時は中日文化協會とも稱した）に在つ

て『滿蒙』の編輯をやつてゐた。その以前には大連新聞で學藝欄を擔當、初期の滿洲文藝界に力を致した人、童話の大家で、詩を書き、廣い趣味を持つた小父さんだ。先生は聖德街に住んでゐたので「笑吐空」などといふペンネームを使つた。那廻三藏とも稱した。S・Nをもぢつた恵須園といふのもあつた。

ペンネームと言へば、加藤郁哉の今枝折夫は前に書いたが、春野繁平とは誰だつたか？　[illegible]郎は藤田一雄氏だつた筈だ。

石原巖徹先生は最近では『月刊滿洲』誌上で大いに活躍してゐるが、この人のペンネームは相當なものであつた。先づ石敢當（これは滿映の近藤伊與吉先生が最近にやつと石敢當をフエード・アップしてフエード・インすれば石原巖徹になるといふことを發見したと書てゐるくらゐだから、内情を知らん人も多からう。）それから俳人としては夢人。川柳となれば青龍刀。それでゐて、本名は石原秋朗といふ――（これはほんとに知らん人が多いだらう）……尤も、學生時代には蚊とんぼのやうに痩せてゐたさうで、それが今はあのやうにペン〳〵たる太鼓腹、歩く時には臍を中心に、右肩、左肩、右足、左足を妙に捻つて歩くといふほどに肥えてしまつた。それくらゐの變化振りを見せる人だから、ペンネームの使ひ分けぐらゐ屁でもないのであらう。閑話休題、この石原先生と淮清は數年間机を並べて働いたものだ。先生、もとより東洋家傑の士――（あれで、青島でむかしは外交官だつたといふ洋服の腰に日本手拭をぶらさげながらである！）――朝に悠々と出勤する。豊長は喰はなかつた。その代り[illegible]時時詩神時びに肉體の休憩――つまり豊雅をやる。しかし仕事はしてゐた。ポイントを外さない仕事のやり方であつた。――とき偶々変者などあり、興至れば支那劇の一節をうなり出すこともあつた。その唱は必ずしも巧者だつたとは思はないが、変氏らしい氣概に溢れたものであつた。（先生、目下滿北交通附業局參與といふ職に在る。「一味據雜記」のうち改め「望書樓雜話」いよ〳〵冴え渡る！）

因みに、「望書樓」は「ヒマラヤを望む」の意の由、何處までも大きい？）

大島濤爾氏は今も健在。上記の連中のうち、岩淵甚四郎、佐々木秀光は無分子だつた。と言ふのは一つには時時滿洲組の意である。岩淵甚四郎といふのは、ちよつと變つた人物で、東京藝文界の情に通ずるとともに、日本料理に通じその方の師匠になれる腕と持つてゐるといふ御仁だつた。佐々木秀光は青年詩人、その後どうなつたかを知らないが、當時は新聲社の池整次の滿洲への傳達者であつたと思ふ。別な見方をすれば、近頃のやうにいろんな文士連中が滿洲へやつて來る。その魁けをした人物だつたとも言へると思ふ。

文士と言へば、平林たい子と大連との關係も忘れてはなるまい、手許に材料がないので、年代が不明確だが、彼女は大連で當時の夫君某と苦鬪の生活をした。それが後に彼女の「施療病院にて」といふ當時評判高かつた一作となつたのだと聞いてゐる。筆者はしかし彼女とは一向面識も何もなかつた。

もう一人、佐藤春夫の「西伊之助」がある。彼は「汝等の背後より」その他などで知られるやうに「朝鮮もの」（そんな言葉はなかつたが）並びに東京交通勞働動關係で有名になつたのだと今思ふが、私は大連の一下宿屋で彼に遇つたことがある。その時、彼がどんな話をしたか忘れてしまつたが、彼の何に當るのかその下宿屋のお主婦らしいのがひどくパトロン女振つて彼の面倒を見てゐた姿態だけが記憶に殘つてゐる。彼が雜誌『東洋』に連載した「アカシヤの町」とかいふ小說があつたが、それは無論大連を舞台としたものであつた。ちよつと尾崎士郎に類するやうな風貌であつた。昭和初年、上海で會つた前田河廣一郎にも似てゐた。（近頃中西のことを聞かないが、前田河は時々飜譯を出したりしてゐる。些かの感慨無きを得ない）

內地から來た文士では黑島傳治を案內したことがあつた。確か古川賢一郎と一しよだつたと思ふ。その時、小崗子のP屋を見て廻つたりしたあと支那料理に行つたのだが、黑島が海鼠は氣味が惡いと言つてどうしても食はなかつたことを覺えてゐる。シベリア出兵に行つたといふ彼にしてだ。それだから——そんな風だから後年肺病になり瀨戶內海の小島で療養しなければならんやうになつたのではなからうか？

滿鐵では年々文士、畫家などを招聘した。菊池寬、里見弴、直木三十五、齋藤茂吉、橫光利一、久米正雄等々といふ人物がやつて來た。當時としても、作家は作家なりに滿洲を見、そこから題材を得ようとしたのであらう、滿鐵としてもそれによる滿洲宣傳といふ效果を狙つたのであらうが、一面在滿邦人のための敎養に資するといふ目的もあつた。夏期大學などもそのために催されたのであつた。（私は當年の三太滿の「唯物史觀と現代の意識」と題した四回に亘る講演を忘れ得ない）

また、これら作家の心構へも、近時來滿する作家たちのそれとはかなりに違つてゐたと思ふ。それは客觀的情勢がさうさせてゐたのでもある。だがまた、それだけに、以前はのんびりとしたゆとりもあつた。

一

洮南蒙古境。行旅太艱辛。驕卒浸遮路。雄獒吠向人。（謂蒙古狗、一種惡狗）天陰湖尙夕。草短夏猶春。霜白朔邊土。風黃沙漠塵。（地主曹達、白似霜、沙漠風起、黃塵滿天）風中忽聽銃。車上欲廻輪。朽木存胡祀。（城中一老榆樹、胡人祀之、今既朽）新城多漢民。（洮南本胡、人遂牧

地、清末治盟府）雀躍催聲早。羌笛引愁頻。喜遇同鄕客。唱酬相與親。

これは與謝野寛の『滿蒙遊草』の一篇である。ゆとりある風情ではないか。招かれて北滿白秋が來たことがあつた。先生は年青の同鄕の大先生。鄕里へ歸れば「白秋シエンセイ」、白秋シエンセイ」とみな崇敬してゐる大先生だ。（――追記、先生は昭和十七年十一月二日逝去された　長き過りではその文藝の道になさる功に對し勳四等を賜ふた）

この詩聖、さながらの童心の持ち主で、大連の協和會館でも童謠について語つたが、內地各地での歡待に慣れてゐると見えて、滿洲の田舍ではどうるわしを歡迎してくれんと言つて寂しがり、同行者を困惑させたといふ。

しかし、白秋先生は滿洲の知らぬ以前から「雪の降る夜は樂しいペチカ」「鬼待ち待ち木の根つ子」などといふ滿洲的、滿洲向き童謠を作つてゐたのだから、實地に來たことをよろこばれうる大先生にプラスしたか、尤も、それよりなほ以前「行こか戻ろかオロータの下を」の作があり、全日本を風靡したのだから、ペチカや滿洲見ぐらゐ何でもなかつたらう。

卿か記述が續道へそれたが、森田富藏氏には滿洲の傳說をきとめた著述がある。赤塚吉次郎氏は新京商業の校長にもなつた。稻川淺二郎氏は教育畑の人で、滿洲の民謠の採集などをやつたが。初期の『明明』を育て滿系新文藝のために盡した功績を忘れてはならないであらう。

さて、こゝまで雜誌『街』のことを書こう。それははじめ昭和五年、六年に聽鶯版刷で出た文藝雜誌であつた。

昭和六年一月號を見ると、金子與助、喜重子、永島正德、橋本善和、山崎忠遊、松本武雄、喜人哲三、篠塚鐵夫、鈴木秋花が編輯同人となつてゐる。――この內、篠塚鐵夫、鈴木秋花と私は知り合つた。篠塚鐵夫君、かの中學秀才君である。

この前期の『街』については私は多くを知らないが、それが昭和六年の六、七月には後期の『街』として活版刷で出ることになつた。先づその更生六、七月合併號の目次を示さう。

扉	諸兄姉へのレポ	高尾　雄二
詩	墓の中になる詩	城　小碓
民謠	每飯不忘（劉太白）	冬木　卓譯

創作　るんぺん苦力　稲葉亨二
同　朝開く窓　高尾雄一
同　やくざな話　青木實
同　わらふ魏怡春　志賀志賀之助
同　朝から次の朝まで　篠垣鐵夫
同　撰ばれたる者（戯曲）　三沼柳子
隨筆　旅、女、文學　大内隆雄
コント　霧の街を行く　藤木美邦
同　配達夫　英靖男
短歌　寺本初音、近藤銀子、長内澄、出丹水尾、安藤英子、荒川石楠花、永原いね子、源由幽明子、志賀折夫、鈴木澄秋、秋森清子、外川よしみ、杉山みそぎ、木村いおり、淺野高俊、池淵鈴江、佐藤鐵之助、西島貞子、西澤流、

以上のやうな目次だが、高尾雄一（今の高尾憲太郎）の辺の言葉を紹介しよう。曰く、

「一句の趣意書も改めて必要ない。何の理論も述べずに信じたい、たゞ信じたい、理解ある諸兄姉を。

街角にあがつた文藝運動！　行進せずばなるまい。

私は知つてゐる。小さい文藝誌ではあるけれど――、理解と同情ある諸兄姉は、熱とがつちりした力で屹度守りたてゝ下さる事を私は知つてゐる。どこの地方でも文藝雜誌の二つ三つ位は出版されてゐる處のない土地はない。此處で皆様と唯一の木誌を育てゝ行く……と言ふのだ、この土地の上に私達はどんなに美しい果實を孕くむと言ふのか、貴方は知つてゐる。私は知つてゐる。貴方を信じてゐる。何が何でも信じてゐるのだ」

文章はだいぶん雅いやうに見えるが、純情拘すべきものあり、更によく讀めばその底に熱々たる心構へのあることもうなづかれよう。

この『街』の更生といふのは、舊『街』が鈴木秋雄の手から、高屋の經營に移つたことを意味してゐた、高尾を最も助けたのが篠垣、次いでは筆者等であつた、稲葉亨二君も好意ある援助を惜しまなかつたやうである、その表紙も同君のものだつた。

並んだ顔觸れも當時の滿洲として相當なものと言ふべきであらう。その人々の後年の活動振りと今

考へ合せてさう思ふのである。青山、城、青木、篠塚、永原、[illegible]みた健在で現に滿洲藝文のために努めてゐるのだから。

青木君の「やくざな話」といふのは東京での出來事を書いたものだが、同君の持味を立派に示してゐる短篇である。

志賀[illegible]之助といふのは[illegible]だが、後年にもあちらこちらに書いてゐる志賀清[illegible]である。「わらふ聲信者」は[illegible]八年三月氏の話」と併載し、野心的な中篇第一回であつた。

三浦[illegible]子の[illegible]だつたやうに思ふがはつきり覚えない。

後頁の「[illegible]」には「[illegible]風に」といふ題へ書きかゆる。彼の才能を見せる作だが、粗雑だ。そのことは[illegible]には言ひ切れないが、やはり近作「[illegible]」にまで通じてゐると思ふ。鵜越分水」についての[illegible]の意見には筆者は異論がある。が、これは他の機會に——)

『[illegible]』には「ゴーストップ」といふゴシップ欄があつた。その一例、

讀物作家[illegible]氏、滿月に[illegible]載してゐた「曠野に築く夢」を中斷したが、理由として、あの作品を[illegible]欄に書き込んだ事に端を發した憤激ださうな。往年「藝術家の個人生活を論ず」なんて[illegible]しい尊嚴性を示してゐた氏としては、眞にさもあらん事ながら、近頃の鳴鶴あたりの骨

見たいな[illegible]とのウルトラ、エロはいさ、か。

——これはちよつとニゲッナイと思ふのだが、それで通つて行つた。それだけの「ゆとり」の慢しさがその頃にはあつたのだと思ふ。初期『文藝春秋』なんかの影響と言つてしまへばそれだけだが、相當貝殼[illegible]に[illegible]つた短文もあつたと思ふ。近頃の新聞のゴシップみたいに[illegible]抜きの、形を變へた[illegible]になつて[illegible]どうも面白くない。

この頃、今の『[illegible]』[illegible]前身に『[illegible]』といふ小さな（形の上で）雜誌を出してゐた。いま手許にはその第三號があるが、次のやうな目次である。

詩	殘の眼（ポール、フオール）	長谷川泰造
隨筆	春よみがへる	長谷川泰造
創作	插話として	竹内正一
同	白心	高木征三
同	こんな話	青木質
批評	文藝月評	大谷武男

同　滿洲ジャーナリズム一瞥　一　S　O　S

同　卓上噴水　同　人

四六判七半ポ三段組本文十六頁だが、內容には一種の良さがあつた。「卓上噴水」欄に於ける「大谷。人形師が人形を造るやうに丹念に小說を書き、批評を爲し、又その樣に生きた彼女をも作り上げようとする男。青木、小娘のやうによく笑ふ。そのくせ笑ひ乍らに相手に油斷をさせて置かない。某喫茶店にゐるベティ、アーマンに似たお嬢さんを見たいばかりに『室で珈琲を呑む會』を眞先に脫走した男。高木、この記憶力の化者は何時も憂鬱さうに何を考へてゐるのか。晴曇定かならず、向意氣も中々に強し、但し御婦人を除く。管內、此の男最も淺間し――これはケンソン、美點あまりに多し」といふ一文の如きなか〳〵たのしいものではないか。そして、これにはあの『白樺』と脈を通ずるものも感ぜられ、今こして思へば、最近自燥した『作文』にまで貫いてゐた同志的結合、それも淸純な氣質、眞實をすでにそこに豫示してゐたではないか。宜なる哉、『線』の同人は言つてゐる。

『線』同人は夫々の立場に於いて、絕對に自由である。その創作態度に於いて、その對人關係に於いて、只それを貫くに兄弟のやうな友情を感ずるのみだ。その點誤解のないやうに願ひたいにところで『街』は更に發展する――

第九章　『大陸文學』と當時の新聞雜誌

前章に書いた『線』の第三號に『滿洲ジャーナリズム一瞥』といふのが出てゐる。當時の滿洲の文學を中心としてのジャーナリズム情勢を語る一資料として興味があるので左にそれを寫して見る。筆者は『SOS』といふ匿名。

「協和」ヤワラカクした社報。唯それだけのもの。然し社員會はこの雜誌に依つて僅かに存在を認めさしてゐる。ある人が短歌を投書したら、特に批評をつけて返送してくれたさうである。この雜誌に於てさういふ事をきくのは面白いことではない。

「合萌」誌代が「滿洲短歌」より十錢安いだけに、內容體裁どちらも十錢方劣つてゐる。

「滿月」文藝欄をやめたのは、急進的分子の活躍がコワかつたらしい。學藝欄をよしたのは、

新社長の意志らしい。何れにしても、散々寄稿させておき乍ら、無斷廢止するなどバカにしている。

今後ハセ塲とか、三宅やすとかジャーナリズムの中古（チウブル）が寄稿をする　しいが、そんなものは讀みたくば滿日より安い東京の新聞を購讀する。紙上で內地の延長を排し乍らそれを同時に持つてゐるのだから笑止である。

「大陸文學」とこの大陸隆雄氏の貧弱な態度には好感がもてる。

「大陸新聞」內地新聞雜誌からの轉載は、その由を紙上に明かにすべきである。讀賣の文藝欄から誤植を發見するのは、困難である。この文藝欄から、誤植のない記事を發見するのは困難である。

「無人島」寫眞集的古典要素と、プロレタリヤ的色彩とが、どんな點で握手できるのか？

「胡同」早く大道に踏み出すべし。

「新天地」マンネリズムに墮ちてゐる。

「亞東」陳い型の雜誌だが、相當面白いものが載つてゐる。

「新東亞」かく變つたものを、果して子供は喜んでゐるのであらうか？

「滿蒙」次第に學術的になつてゆく。

「運動と趣味」カジノ、フォリーを見たあとのやうに、讀んで頭にのこる何者もなし。

「月刊樂順」滿洲で最も商賣氣を出してゐる雜誌。それだけに一寸手にする興味が湧く。

「線」自己陶醉から脫してゐない。

以上の如く、相當に辛辣なものである。滿日や大滿新聞についての評言の如き、その學藝欄に關する限り、當つてゐたやうである。

文中『大陸文學』といふのがあり、筆者が「とこ角」賞められてゐるが、これは獨立した雜誌ではなく、或る期間、私が『大陸』といふ雜誌の文藝欄を引き受けて編輯してやつた、それを指してゐる。尤も、若干部數の別刷でこしらへたので、實質的には一刊行物とも見られたらう。

『無人島』寫眞集的古典要素とは、橋本八五郎のものを指してゐる。

『亞東』といふのは亞東印濃協會といふ所から出してゐた支那各地の寫眞集に附錄として出されてゐたもの、櫻井といふ人が支那各地に出掛けて寫眞を撮影して廻つたもので、私に會つて寧波、紹興でその人たちに會つたことがあつた、同じやうなもので『亞細亞大觀』といふのも出てゐた。『亞

東』には小佐野之、加藤新吉、奥村義信等が書き、『亞細亞大觀』には石原嚴敏、八生などが書いた。

『新童話』には石森延男あたりが活躍してゐたのだと思ふ。

『運動と趣味』は西村半旗がやつてゐた頃であらうか。或ひはもつとその前かも知れない。長唄か乾馬、ダンス、映畫、いろんなものを載せた雜誌であつた、一時、高尾憲太郎もこれに關係したことがあつたと思ふ。

『大陸文學』のことが出たから、それについて少し書く。

昭和五年十月の目次が次の通りである。

何　氷　江　　日本人
大内　隆雄　　長沙テロルの記錄
一石　半量　　人間風景、酒々
柿沼　實　　五月の感傷

何　氷　江　　九月の詩
同人雜記　　紹介と短評

何氷江は吉田實一郎である。彼には珍らしい短篇小說を書いてゐる。

一石半量とは後藤計吉。後藤は昭和五年頃、大連での演劇運動に努力した男だつた。これは戲曲の筋書のやうなもの。柿沼實のも短い戲曲。何氷江の「九月の詩」は批評で、その頃の滿洲詩壇への解說になる。左にそれを寫さう。

九月號『燕人街』の數ある詩篇の中から、僕は北邊氏の「雨の日」を面白く讀んだ。單純性と明朗性（形式に於いて）を具備したところこの一篇はいさゝかのすきもない。而して面面的には、生活を基調としたところにこの詩は迫力を有してゐる。すべてを云ひつくして猶ほ胸に殘るものがある。ルンペン、プロレタリヤ（生活的に）の憤怒がぶつ〳〵と湧き上つてゐる。

『燕人街』はその標題の如くよく苦力の詩が出てゐる。僕は苦力を描いた詩に多大の興味を抱いてゐるものであるが、宮川氏の「列」に於ける苦力は單なる「列」で終つたことに失望を覺え

る。水島氏の「華工」又然りである。

「李兒溝あたりの支那人の生活は、日本人の（インテリと云ふ意味を含めて）常識などで同情したりフンガイしたりされたくないものだ」

と云つた感る『燕人街』同人の言葉を思ひ浮べて今後の『燕人街』の中よりあらゆる苦力の諸相相が現はれるであらうことをたのしみにしてゐる。

そんな意味で『戎克』九月號に現はれた島崎氏の「苦力養殖公司」は面白いには違ひないが現實性がない。もしシューレリアリズムと云ふハンデキャップつけて、僕自身意識と理解したとしても「苦力養殖公司」の六字だけでいゝやうだ。ともあれ「苦力養殖公司」と云ふのは面白くて皮肉なだけだ。

其外同じ『戎克』の第一頁にある加藤氏の「赤の作用」の第一章はいい。恐ろしく速度がいゝ。

次にある稲葉氏の「悪臭」瀧口氏の「崖の上」なども面白い。

面白いと云へば城小碓氏の「大陸に消えて行く裝甲列車」の牌々々は論決。

然し僕にはこの牌々々……の文字がマントウのやうに見えてならなかつた。

『街』の創刊號を感る人に見せてもらつた。詩が少ない。載つてゐるのは少女詩四篇だけであつた。滿洲鄉土藝術を盛り立てる『街』の今後の詩壇に期待してゐる。殊に民謡方面に對して——

なほ同號に、筆者の書いた「紹介と短評」があるから、それを紹介して置く。

『青泥』第六號　九月

こちらは川柳は素人だが、讀めば面白い。殊に興味を持てるのは、鋭い社會批判の作だ。「失業の雲の行衛を見るばかり」（天弓氏）などピリリとする物がある。

『戎克』第十七冊、九月

どうも難解だと言ふ者がある。

だが諸氏の氣力と精進は尊敬したい。

古川君のは異彩があると思ふ。加藤郁哉氏の「赤の作用」には氏の轉向が現へる。

『滿洲短歌』九月號

今月は頗觸れが少し寂しいやうだ。河本茂次郎氏、城所英一氏は新しい取材を示してゐる。水樹譯夫氏の作は深刻直截である。新人にはもう少し勇躍を望みたい。

『燕人街』九月號

篠垣、太田兩氏の論はうなづける。詩作に、鍛錬が足りないと思はれるのは如何？　高橋氏の詩は素朴な形式の中に強いものを凝集しつゝある。

『月刊撫順』九月號

特殊な雜誌だが、豐富な內容で、讀ませる所が多い。都路氏の「支那劇の話」等は素晴しくいい、創作はもう少し金を掛ける要があらう。

この「短評」は自分ながら、大體當を得たものであつたやうに思ふ。『青泥』について書いてゐるが、これは[illegible]先生がその仲間とやつてゐたので、當時私は石原先生と勤め先で文字通りに机を並べて居り、石原先生は『青泥』が印刷所から屆けられて來ると「ホイ、一つ出來た、まア見てくれ！」さう言つて私に一部寄越したものであつた。

『月刊撫順』がちよつと賞められてゐるが、城島君は當時から例の商才とエロ味で雜誌を賣つたものであつた。「創作はもう少し金を掛ける要があらう」と言はれてゐるが、『月刊撫順』が無代の原稿を集めて得意にしてゐたのは有名な話で、創作欄はどうにもお粗末であつた。

さて『大陸文學』十一月は、次のやうな目次で現れてゐる。

初冬　古川賢一郎
五月の感傷　柿沼實
インテリ決算　篠垣鐵夫
秋　懸橋淺夫
ロシアの小說二三　川內堯
輪を描く　五斗計器
秋晴れ　西山一雄
大陸文藝陣、後記

この古川賢一郎の詩は異色あるものであるから、こゝに寫して置こう。

古川賢一郎

初冬

北平薛慎微氏作畫展覽出品目錄

一、菊　花　金十四元
二、荷　花　金十二元
三、月季海棠　金十六元
四、菊花老少年　金十元
五、……
六、……

私は畫會の案内狀をひろげ、ストーブの傍で机に向つてゐる。外は北風。

詩の書けない焦躁の、何かに打つつかりたい激しい心情を抱いて、私は案内狀の餘白で金の勘定をやつてゐる。

魚屋　二圓
野菜屋　一圓五十錢
三義興　二圓十九錢

新聞代　二圓二十錢
ガス、電燈、購買組合
外套の月賦
石炭代
通院料
入院料

（あゝ、限りない生存費の支拂ひ……）

美しい案内狀の餘白を、煤煙のような鉛筆の文字で、白々とうゑ寒い紙のおもてを埋めてゆく

篠塚錢夫は中村秀男である。縣橋淺夫は近東綺十郎。

川内塾の「ロシアの小說三三」といふのは次のやうなものであつた。

社會的に、又文化的に興味深き「新生活」を反映させたロシアの小說が英譯された。アナトー

ル、マリエンホフの「冷笑家」はその一つである。この作者は一九八一年から二一年への暴風時

代に育ち、以前は難しい詩を書いてゐた。これは日記體に書かれてゐる。オルガといふ女が主人公だ。インテリで美貌で教養のある女だ。それだけに革命の波の泡の上に乘つて行くやうな女だ。彼女の最後は自殺である。かゝる女性の型は近年のロシアに屢々見出されたといふ。グーミレヴスキーの『大小路』は注意すべき作である。地方の大學生が描かれてゐる。テーマは「新しき性生活」に關係してゐる。青年は仕事の合間に數々の女性と交はる。彼等の「知的な、リアリスティックな兩性間の關係」を見出するのだ。イリヤ・イルフとユウゲン・ペトロフの「腰掛けダイヤモンド」は「間違ひ喜劇」ともいふべきもので明るい笑ひを提供してゐる。——アレキサンダー・ナザロフに據る。

この雜誌といふのは筆者なので、これは「ニューヨーク・タイムス」の『文學週刊附錄』所載記事に基つて紹介したものであつたと記憶する。

少し飛んで翌年の六月になると『大陸文學』の目次は次のやうになつてゐる。

滿洲人文地理　楠　肇太
おれたち（詩）　殷　夫
ストロング女史の近著
遼河の春（詩）　懸橋　淺夫
大陸文藝陣
中國の文學小說選集
苦力の如く——威小雅君に與ふ——　大內　隆雄
『蒙古十月』——生活萬歲だ　古川賢一郎
作家よ手をつなげ　大內　隆雄
同　人

懸橋淺夫はこの頃から賣り出し、と言へるであらう。『遼河の春』といふのは次のやうな作品であつた。

遼河の春　懸橋　淺夫

冷えた陽炎よりも動かない大地は
まだび乾びた恐龍の木乃伊の如くによこたはる
最後の馬賊を撃ち殺した巡警の、最後のピストル
つい一週日前の北園林子（綏化）からの通信である
――どこか南の方の街角の赤ポストに投りこまれる桃色風の封筒――
そよぎ出した血脈に似た枯草たち
乾いた凍雪帯の鯖斑たち
風は凍氷つた大地の肋骨の間に
静かな蒼い鏡！　生命！　をはめこんで行く

水滴のやうに融け出した大地が
地熱のやうな力を眼覚めかけてゐる
崩れ出した崩岩（ベタ）群よりも廣漠いツンドラ原野の春への遁走である

紅興鎮の馬賊の通信が断絶した
景星山の星が死んだ
松花江（スンガリー）から紅杏の花信を擁へた風がやつて来て、満洲野一杯をひうぞうと吹き流れた

解氷季来了
流氷
流氷
徐々と露き出した自然の優しい暴力
これがどこかの山の上で振られてゐる、遼河汎濫出帆信號旗だ

雪崩のやうに北上する飢ゑた山東の苦力達よ
痩せこけた満洲水田の寄生群よ
決潰する遼河のひろさでとび廻れ

蒲團を捨いで心一杯の夢を背負つて
耕域の奪取戰だ
滿洲の放浪鮮人達よ
掘立小屋を出て見よ
春が來たのだ
大遼河が笑ひ出したのだ
芬々匂ふ杏の風だ
曠野をはつて來る蛇のやうな雪融の快足だ
むづ痒い濕疹にかゝつた大地が
今、旺んな萌芽に向つて發疹しようとしてゐるのだ

あゝ、行程千里の大遼河に
結氷砂利の如くに碎かれ始めた
滿洲は今

零下四十度の慘虐を不毛と暴風との夜から
阿片中毒の冬から解放されるのだ

芬々亂れ匂ふ杏花の風——
熊岳城、瓦房店——南滿一帶の莊僻は今白線を綴り合せたやうな
林檎の花の眞盛りだ

その懸橋は、『我克』の十九號には「胡秋信」といふのを出してゐる。島崎恭彌の書いてゐる後記によれば、これは投稿だつたのである。そして懸橋は當時は長春にゐたのであつた——

胡秋信

懸橋　淺夫

晴暗の多い秋の日の昏れ、冷たい髮を梳きながら
故國の秋をおもふと言ふ女——
冷えた身體を溫める火さへもない閉鎖の秋の深さ

徐かに笑いたあとのさびしさも、男に肌を任せると言ふ女——
梳櫛にたまる抜毛を投げすてゝ空虚の心を驕慢させる白い笑ひ
あゝ、人に捨てられ人を恐れなくなつた女——
その酔ひどれの夜つ姿は曠野に没る落日光よりも荷傷々しい

——好いお天氣よ、あなた——
ほのかに濡れた硝子の外に流れる暁の色、どこか心をうるませる
青流の朝のひとところ、いつに染みたか離れがたい情思に引きづられ
哭きあかされた哀歌の夜のあと今は感情も透き脊せ、さびしい微笑の流れる
——日本も秋だね——

街を行く支那馬車の鈴に聞き惚れると心もはれて、窓際に立つ女の姿體が脊せ細る

懸橋はその頃から「花杏」とか「胡秋信」などといふ文字を使ふことが好きだつたらしい。それは後

年の彼のものにも及んでゐる。『戎克』は後に島崎恭爾の個人詩誌となつたが、その『島崎恭爾の『國際都市』は豪勢な詩集であつた

その一篇——

朝なり
見よ変醇なる鉛色の空に
赫黒き汽鑵車工場の唇は
生命の煙を吐く

見よ雪上を歩みよる黒き鴉の群は
生活の扉を押す

朝なり

島崎　恭爾

第十章　『胡同』『曙人』『滿洲文學パンフレット』そして『滿洲文藝年誌』

こゝで、奉天で刊行された二つの雜誌について書いて置く。

一つは『胡同』。これは詩と短歌の雜誌であつた。手元にある第一卷第五號（昭和六年六月號）を見ると、詩に瀨々洸、柿沼實、土龍之介。落合郁郎、清武丘陽、極銑郎、大川一夫、園淑郎、杉島豐彥が作品を並べ、短歌では初野實、沙きをしみづ、小山暎雄、岩永雪子、兒玉二郎、長野祐俊、神山哲三、園淑郎が並んでゐる。……今日、その二三の人を除き、名を聞くことのないのは寂しいことである。

もう一つは『曙人』。これは滿洲醫科大學文藝部から刊行されたものであつた。手もとにある第五號（昭和六年一月號）の目次を見ると次の通りで、なかなか元氣なものである。

苦悶の田園文學を目指して　駒越　哲貞
恐慌と戰爭　水原　繁夫
炙をすへる（文藝時評）　月島　燐太郎
一九一四年の日記（譯）　コロンタイ
新しい仲間に（詩）　[illegible]　大内　隆雄譯
何を話せばいゝのじや（戲曲）　清水　敬
水野の話（小說）　築地ふ沙子

滿洲醫大といふのは、曾つての滿洲文化史の中では相當な役割を果して來たことが想起される。大正年代に、全滿中等學校辯論大會を催したことがあつたし、音樂の方面での活動も周知の如くである。文學の部門でも白石義太（冬木羊二）をはじめ、かなりの作家を出してゐるが、『曙人』時代の活躍もなかなか光榮あるものであつた。（冬木羊二はこの年週間朝日に「青島から來た女」が當選し松竹で映畫化された滿洲で公開されたのは翌七年秋だつたが大した評判だつた。）

さきにも書いた大連の『青』は、第二號では新鋭十作家短篇集といふ特輯を行つた。並んだのは次のやうな顔觸れであつた。

雨と肉體と	近東綺十郎
天幕生活	青木實
チロー ク隊	大内隆雄
守衛（戯曲）	志賀志賀之助
死灰の街	多木卓
彼等の雇主	藤木美邦
アパートの女	大谷武男
子守唄（戯曲）	篠垣鐵夫
街の小英雄	高尾雄二
專有する女	大澤壯一

この内、大部分は今でも滿洲で健在だと言へるのだから　十二年前の滿洲文學もたのもしいものではあり得たわけである。

近東の「雨と肉體と」は、いかにも彼らしい表題であるが、内容は當時の風潮を反映してかなりに傾向的なものであつた。

青木實のは珍しく諷刺的な小話集。

多木卓とは古川賢一郎。「死灰の街」は隨筆風なものだが、法庫門、鄭家屯間の一色調の實相を描いた異色ある一篇だ。

大谷武男「アパートの女」は彼らしい小品だ。

篠垣鐵夫（中村武男氏である）の「子守唄」はやはり傾向的なもの。

高尾雄二の「街の小英雄」は彼の才分を示したもの。

なほ同誌の「文藝時評」を見ると、「ジャーナリズムの新扮裝」「いかなる藝術國策をか？」「同人雜誌の役割の限度」といふ三項目で、それを見ても、およその側向が察せられよう。

ほかに、中島鳳兒、城小確の詩　三沼柳子の短歌がある。

また同誌には、サノシャンで吉川賢一郎氏『蒙古十月』出版、『無人街』廢刊、及び『街』復活な

併せ記念して文藝座談會を催した、出席者二十八名、談論風發だつたとの報告がある。

さて、相當な意氣込みだつた『街』も意の如く行かず、つぶれてしまつた。そして
そのあとを受けたやうに、『滿洲文藝研究會』が生れ、『滿洲文藝パンフレット』（滿パンと略稱
した）を二回、刊行した。第一輯は『創作と研究』と題され、第二輯は『十一月』と題した。昭和六
年秋のことである。『創作と研究』は即報正夢の表紙で、次のやうな内容であつた。

創作	一つの型	青木實
同	耳を病む私達	阿武洸二
同	或る友への手紙	三沼柳子
同	歪められた人生、	檜美代子
同	支那犬を殺した鮮人	多木卓
同	施療病院點景	篠垣鐵夫
同	大尊老六とあいつ（周青思）	大藤槻譯
詩	鹽	城小雄
同	秋	英靖男
同	お月樣	中島嵐兒
同	引御詩	山尾水呼坊
短歌	切れた心	
短歌	アカシヤ會詠草	
ビリニヤークの「ヴオルガはカスピ海に注ぐ」		エディス・エナ・ウルトン
出漢は如何に轉換したか？（1）		吳士晨
ゲーテ賞を得たリカルダ、ヒユツフ		ガブイエル・ロイター
ロシアに於ける政治、戰爭そして映畫		屋野てつ譯
朝鮮文藝界の現作		松野光一

内容に於いて『街』の時代よりずつと眞摯になり、また世界文學研究に努力してゐることが注目さ
れる。

『詩藝實學』「一つの型」では彼が廣く眼を社會に向けて來たことが知られる。

蓼木庫は『支那犬を殺した鮮人』で當時の在滿鮮系を扱つてゐる。

天藤譯の支那小說は當時南京で刊行された『時事月報』から採つたものであつた。

ピリニヤークの新作が紹介され、蒙漢の變化が研究されてゐる。リカルダ・ヒツユフが紹介され、ソ聯映畫『帝國の破片』『都市と年』が紹介されてゐる。朝鮮の文學についての報告もある。

編輯後記を見ると「報告」として次のやうなことが書かれてゐる。

○滿洲文藝パンフレットは一定の恒常的イデオロギーに於て編輯されるものではない。だから作品も、文藝的レベルに達したものは全部抱容する。

○研究會總合會で全員の承認を得たものに次のやうなのがある。

A、作品は大衆的基礎に立つこと。

B、研究的なものも掲載する。等

當時の情勢をよくこゝに反映してゐる。

『滿洲文藝パンフレット』第二輯『十一月』は次のやうな內容をもつて現れた。

一、創　作

嵐（戲曲）	篠原　鐵夫
神樣の話	青木　實
五生	曲　德　和
K生・譯稿	T・O・
めばえ	西條　明子
ある男の終焉	阿武　流二
國境近く（ラジオドラマ）	大藤　巽
彼女等の秋	近東筒中郎
さあ、一緒に起ちませう、外一篇	英　禮　男

一、詩

ひからびた風景	中島　嵐兒
ないだあ	島崎　恭顏
秋	山中　一

一、短　歌

秋の渚　　神場磨須子

秋　　甲斐　水棹

歌壇　　山崎かすみ、谷岡智子、森笙野、岩野豊子、橋口裕子、濱田松代

二、論　文

植民地文學のために

何を為すべきか？　　星野　てつ

日漢はいかに轉變したか？（2）　　新藤野太郎

一、研　究　　吳　士　星

ロシア研究書三つ　　L—M—STO

近代詩に及ぼせる Dante の影響　　安達　義信譯

二、報告、通信

理想都市建設　　アラン・S・オウスアイン　星野てつ譯

沿線通信

滿洲文藝文化報告

このうち、篠塚鐵夫、青木實の兩作品はやはり相當に傾向的なものであつた。

曲傳和といふのは、のちに青年書局を經營した曲傳政の弟で、當時、隔東州の小學教員だつた。（今は、河南省の建設廳長とかをやつてゐると聞いた。この「K生」といふ小說は、上段に原文を掲げ、下段に「T・O」と署名した筆者の日譯を掲げたもので、滿洲文學の一つの新しい發表形式の試みと言へたと思ふ。

西條明子とは、後に『月刊滿洲』などに「未亡人論」その他で氣を吐いた、當時の安藤光義のペンネームである。彼女、日本の古典に詳しく、明眸、近代性を持つた女史で、一方には川柳などもつくり、筆者は親しく交際してゐた。彼女、藝閥織枝などといふ逞しい女性とともに、滿洲婦人文化のために當時努めたものであつた。彼女たちによつて出された刊行物もある。…月下、川口姓の人となり、新京に幸福であると聞く。

ラヂオドラマの天藤纖は大內隆雄の別な筆名。（後藤、近東、篠塚、小生らで、大連放送局から何度かラジオドラマ放送をやつたこともあつた）なほ「滿洲文藝文化報告」の中に、次のやうな一節がある。當時の滿洲文學の一面を傳へるものである。

「中國の文化問題に對して新しく創刊された『滿洲評論』が毎號記事を載せてゐるのは良い。我々はそのやうな資料をこそ求めてゐるが、青年聯盟の內鬨の事などは同誌から追放して貰ひたい。

『協和』の文藝は一向振はない。九月十五日號の如き寡集質話物で逃げてゐるが、あの溝山の記事の中で我々の胸を搏つのは「下級社員の生活相――家族手當の半減について」一つである。大高岩夫氏の「上海に於ける工場勞働者の日常生活」があるが、平板な記述であつて積極的價値は見出されない。

『新大地』は文藝欄を失つたやうだ。『滿蒙』も近頃創作を載せない。『合萌』『滿洲短歌』はそれ〴〵やつてゐるやうだが近頃はちつとも社會的影響を與へることもない。

滿鐵圖書館發行『書香』は時々良いものを載せる。九月號、佐藤通男氏の「聯農氏文學に就いて」書いたものはその一例である」

こゝで少しく、その頃の滿系文藝を一瞥して置こう。

一九二六年の夏、奉滿社といふ文學團體が奉天で組織された。それには南滿、北滿の人々も參加した。その幹部は周笑漢、蔣雪僊等であつた。それが主張したのは民衆藝術であつた。刊行物として『浸聲』といふのを出した。

かこの團體は翌年春自動的に解散になつた。『浸聲』は一號を出した切りだつた。しかしこの團體の分子は各新聞でその作品を發表して行つた。

一九二六年から二八年へかけて、滿洲各新聞の副刊はみな新しい作品を掲載した。盛京時報の『墓陌』や、民報、晨光報、新亞日報の副刊である。二七年の秋には、新亞日報は『綠藻』を出し、奉天の商工日報も「文學副刊」を附錄として出した。新人作家には、王一樂、孫學堅、楊一、張愛、張麥、王語嫣、新擬女士等があつた。

この期の作品は前の期に比べて進歩してゐたのは內容が比較的充實してゐたことであつた。題材も以前のやうに戀愛一色には限られてゐなかつた。そこには新しい進路といふものが目指されてゐることが知られた。

一九二八年の夏には、東北文學研究會といふ文藝團體が組織された。その首腦部には王一樂等がゐた。

この外、東北大學の學生たちによつて『萌芽』といふ定期刊行物が發行された。張士勇は『長城』

を出した。未墨は『闘争』を出した。

その外、國際協報、泰東日報の副刊も改新された。延吉の民聲報の副刊「荒原」の作品は殊に尖鋭であつた。要するに、社會の新しい變化に應じて、新興文學の思潮が滿洲の文藝界に流れ始めたのであつた。その意識は必ずしも正確でなく、取材と技巧また十分ではなかつたが、このやうな變化は注目に値ひするものであつた。

一九二九年になると、多くの作品が現れるやうになつた。單行本も種々刊行された。蹇鮮文の『昭陵紅葉』、林雲龍の『鮮血』、張聲藝の『情歌』等みなこの年に出たものであつた。

この時期、作者も大いに增加した。彼等が示したイデオロギーは、表面から見れば甚だ複雜であつたが、詳しく考へると、やはり二つの流れに外ならなかつた。一つは更に一歩を進めて新興文學の方に進まうとしたものであり、一つは小市民的なそれを固守したものであつた。後者は或ひは半驅を洗らし、或る者は彼等が認めて光明となすものを追求したが、その光明といふものも彼等に與へたのはただ幻滅であり悲傷であつた。

過去の作家の或る者は實生活に赴き、或る者は滑り落ち、或る者はもう續けて書かなくなつてゐた。新しく起つた作家には、張聲藝、陳隱愚、林雲龍、李別泰、蹇鮮文、鄭國、蕭軍、蕭紅等があつた。

彼等はみな勞めて不斷に書いた。すぐれた作品といふのは少なかつた中、量の方ではどの時期よりも多かつた。同時に各學校の刊行物も前後して刊行され、その內容は自づと文藝が主要な地位を占めてゐた。

一九三〇年になると、滿洲農村は激しい恐慌に襲はれた。當時の作家の中では、蕭軍が農村恐慌を題材とした數篇の小說を書いた。それは表現に於いて充分に巧みではなかつたが、農村の破產の全面的な滿洲の經濟の根底の動搖、この事實を作者は見、表現しようとしたのであつた。

この年の春、泰東日報は『文藝週刊』を出した。それには比較的好い作家が網羅されてゐた。發表された作品の殆んどは甚だ尖鋭なものであつた。その中でも蕭軍の「白村的風光」など注目さるべきものであつた。

これを總說するに、滿系文學の發動期は五四運動の後であつた。初期の色彩は全く小市民的であつた。やがて文藝團體を組織するに至つた。時代の進展につれて、小市民中に分化が行はれ、新興文學を唱へる者も出て來た。

內容から言へば、この期の作品の多くは空虛であつた、何もつかんだものがなかつた。しかし滿洲で意義ある材料をつかむことは決して困難ではない。しかしこの期の作品にこのやうな材料を生かし

た作品は幾つと存しない。それは作家の社會を見る力が足らず、思想的にも徹底してゐなかつたからである。技巧の上に於いても、未熟であつた。文藝批評も不充分であつたと言はざるを得ない。

こゝで滿洲事變となる。

その直後、或る事件のためにかなりの文藝人が暫らく不自由な境遇に置かれたといふ出來事があつた。

昭和七年の三月に『滿洲文藝年鑑』といふものが、滿洲文藝年誌刊行會から刊行されてゐるが、これは右の事件の後にまた空隙を埋めるために企畫されたものであり、また自づとそれまでの滿洲文學に一つのしめくくりをつけたものともなつたのであつた。

その内容は――

詩

白の倫理他三篇　安達義信
地理學講義他四篇　稲葉亨二
五月他一篇　柿沼一實
水車他一篇　小杉茂樹
黒麦酒の歌他五篇　城一平雄
月夜の星他四篇　高木恭造
ひからびた風景他一篇　中島風兒
秋の歌一篇　英靖男
理髪師他三篇　吉川賢一郎
生活　南栄信

論文

與謝野晶子論　中斐水棒子
プロレタリア文藝の一翼として短詩無産川柳を提唱　渡部研吉
訪問川柳　渡部研吉
創作八句　大島壽明
辛未創作

俳句講座
俳詩雜感と創作二十句　堤　水叫坊
創作十句　大河平蛙酒
自選句　大河平吐詩子
稲荷雅堂
宇林曙鳥
佐々木三福
佐藤升南
白井鼠堂
高木滿山
筒井酒人
永井草刺
中村銀糸
長谷川路晃
宮崎竹州
矢原夢潮
井上元不動
渡邊雨明
菱田世紀
吉佛庭句抄　阿武洗二
小説　青木汎郎
或る日の下級生
ブッシャーナー
豊力計

感談　青木寶
陳夜　谷根正雄
生活の片鱗　大内隆雄
百合　大谷武男
往事　曲[illegible]和
北滿平康里の女　近東綺十郎
萌芽は地殻を破つて　介崎徹
亂れ花　近藤義長
童話作家になぜなつた　志野羊吉
今日及び今日の讀者　高尾雄二
變された苦力、宋　高橋順四郎
大きなお人形　中村秀男
ビラ　西條明子
譯（ドーデエ作）　長谷川泰造譯

附　錄

滿洲文藝運動史

滿洲文藝家名簿

いま本書を觀みて、興味があるのは、この附錄の部分であらう。『滿洲文藝運動史』は實は筆者が書いたものであつた。

『滿洲文藝年誌』の實際の仕事をやつたのは草野芳郎で、近藤綺士郎がこれを助けた。

この刊行物企畫の協助者に、上記執筆者以外に、樂田天馬、城島德藏、西巻逸二（井田敬二）、村隨禪太郎（樂童）などがゐた。西巻、村岡はすでに故人だが、その頃の滿洲文化界に働いた人物であつた。

外に文藝家名簿中に、藤山一雄、早川正雄、石森延男、丘瓊二、白藤六郎、青山捨夫、元木瑞枝、藤森圓郷、高山峻峰、平野博三、永賀見太郎、和氣傳、石原秋郎、長谷川泰太郎、小田島與三、三井鶴吉、小澤開策、田中總一郎、栗栖義助等の名が見えてゐる。彼等また初期滿洲文學の援助者、同情者等であつた。

第十一章　滿洲事變と文藝界、『高粱』創刊

滿洲事變――昭和六年（皇紀二五九一年）九月十八日

今にして思へば、この時を境として滿洲文化史も劃然新しい段階へ突き進んで行つたのであつた。

筆者はこの頃滿鐵にあて、なほ許可を得て『滿洲評論』の同人となつてゐた。最初は專ら大塚令三が編輯に當つたが、彼は昭和七年初頭北京に轉勤し、そこで筆者が二代目の編輯者の仕事をやることになつた。

まことに目まぐるしい時代であつた。滿鐵では經濟調査會といふのが出來、私はその資料編纂班主任を命ぜられ『滿鐵調査月報』の編輯をやることとなつた。經濟調査會の働き手連中は多く奉天に進出してゐた。私は何度も奉天に出張した。一方、若い滿鐵社員で外間の雜誌類を讀む會――二十日會といふのがあつて、そこでも月刊の報告を出してゐた。私は忙しく二つ三つの刊行物の編輯をやつ

たのであつた。殊に『滿洲評論』は週刊であり、普通號三十二頁である所、印刷は小さい印刷所でやつて居り、ために隨分多忙な思ひをしなければならなかつた。全く、好きでなくては出來ないことだつたらう。

外は急轉變化する情勢、私としてはさういふ仕事の中にあて　しかもこの年上海へ行つたり、東京へ行つたりした。雜誌『改造』の特別附錄『建設滿洲讀典』の編纂などもやつたのだつた。――さうした事情のゆゑでもあらう、文學方面でのあまり詳しい記憶が今は殆んどないのである。尤も、多かれ少なかれ誰しもがさうした時勢の暴風雨の中に捲き込まれてゐたのであらう。

それでも、『滿洲評論』昭和七年四月十六日號には『滿洲文化建設私案』（一、〇〇字）小文がある。

「これは粗放な空想である。だが、少しのヒントをでも與へ得たならと考へる、執筆の動機は現實的なものである。

第一に、滿洲には各種の民族が雜居してゐる、そしてその文化の程度も違つてゐる。異なる色彩の民族文化の存在は眼前の事實であつて無視することは出來ない。（社會主義ソ聯を見よ、各民族はその特有の文化をますゝ發展せしめつゝある）

普通教育に必要な最大の注意點は、民族融和精神の浸透――いはば社會連帶心の醸成であらう。侵略主義を排せよ、また卑屈な排外主義を展ずるがいい。尤も、この根本には、各民族の實際生活に於ける平等がなければならぬのだが。――經濟的にも、政治的にも。

一の共通語の普及は、極めて有益であるだらう。私は、それには支那語とエスペラントとを推奨

數に於ける支那文化（支那語）の優越と、補助語の利用。

中等教育、そして專門教育は尚更ら、單なるインテリの增産であつてはならぬ。分化した、實際人を養へ。農、工、商各方面に、本當に土に立つて、事業に向つて働き得る人間をつくれ。封建的な、乃至アジア的な官僚は不要だ。

一つの、最高研究院が造らるべきだ。自然科學と、社會科學とのそれは、潤澤な經費を與へられ、研究の自由が與へられねばならぬ。研究員はあくまでも研究の自由、身分の保證を認められねばならぬ。

宗教。自由なるべし。行政事項より完全に分離すること。

文化の領域に於ける、各種の出版は優越した保護を與へられていい。これにも內容の自由を與へ

よ。新聞、雑誌の發行を容易にし、内容に出來るだけの自由を欲する。今の暫時の過渡期が過ぎたら、大衆は眞劍に、言論、出版、讀書の自由を要求するであらう。

藝術。國際流行の包囲と、郷土的（島崎的）創造の苦悩。それが大切だ。演劇、音樂、映畫、ラヂオを最大限に利用し役立てよ。「公立劇場」があつて「巡回」するがいい。映畫、ラヂオは特に當面、發展させるべきだ」

右の如きもので、些か當時流行の誇張などもあるが、主旨は大體認められてよいものであらう。その後に實現してゐるものもあり、さうでないものもある。ともあれ、建國當初の頃にあつても、われわれは滿洲の新しい文化といふことに決して無關心ではなかつたのである。

昭和七年四、五月の『滿蒙』に大庭武年郎戯曲「張學良」を發表してゐる。大庭武年は日本の『青年』に特異さを持つた探偵小説を發表したりして、一部に知られてゐた。滿洲日日新聞にやはり探偵小説趣味を盛つたやうな小説を連載してゐて、それが何かの事情で中絶したこともあつた。

また『滿蒙』同年一月號には、田中總一郎の戯曲「馬占山の魂」といふのを出してゐる。（その前、同誌昭和六年十一月號に「故郷」といふ戯曲を田中氏は發表してゐる。）その愛妻と大連にやつて來た田中氏はその後ジヤーナリスト生活に入つて行つたやうだ。戯曲の世界への郷愁は深いものがあつたのであらう。

後年「鵜越分校」を書いた[illegible]藤義夫は「滿蒙」の昭和七年二月號にメロドラマ「萌行列車」なるものを發表してゐる。

大庭武年はまた同誌七年七月號に「凱歌あがる下に」といふのを書いてゐる。

『近東綺士郎』七年三月號に「女學生陳青娥の更生」といふのを書いてゐる。

「新天地」には谷川ちゑ、[illegible]藤[illegible]などやはり多く書いてゐたと思ふ。

なほ[illegible]藤光子らが『在滿女人文學集』といふものを出したのもこの頃だつた筈である。それには松岡[illegible]校書が部隊者の戯曲解譯を載せてゐた。

近東綺士郎は大連で演劇運動をやつてゐた。その後、奉天に移つて行き、新聞記者になつた。

昭和七年九月、興亜書房の『高粱』が創刊されてゐる。

創刊號の卷頭に酒井悟朗の「滿洲文藝家諸賢に寄す」といふ一文がある。その頃の事情を知るのに好い資料であると思ふから、こゝに寫して見る。

「世界視聽を一點に集めてゐる滿洲に我々は棲息してゐる。

我々の生活から湧き出る文藝的素成が我々に沈默を許さない。人間は言葉をもつてゐる。――これが人間的の特徴でもある。我々の生命は活動してゐる。そして自己保存の本能を主張せずにはゐられない。この絶大なる生活力を持つ我々は此處に文化水準昇揚へ一大發展に盡力せんことを期して、文藝誌高粱の名のもとに、一小誌を汎く滿洲在住の諸賢に送り出さんとしてゐる。

請ふ。諸賢の誠意ある批判と酒捷の程を。

雜誌『曙光』は六號をもつて廢刊に至つた――花々しい文藝史を殘して――。

筆者はその歴史の詳細には暗いものである。が然し、遲々たる滿洲文藝の動きの中に、躍進の目

さましきもののありしを否定し得ない。唯悲しむ。餘りにも、夭折とは云へその期の早かりしを。

滿洲文藝界の現狀は死の曠野を彷徨する放浪人のそれの樣に、その足取りは見られたものでない。見る者をして、冷汗を――。

悲しき哉。悲しき哉。

けれど、我々希望と或る程度の將來の期待に、心を躍らせる若き青年達は悲歎に暮れてはゐない。常に飛躍をモットーとして突進してゐる。機關車の驀進の如くに、生氣が溢れてゐる。生命の躍動を胸に感じつゝ、文化貢獻のために、勞力を打ち込んで　ユートピア建設の努力に快感を覺えるものである。

我々の前には、特別なる確固たる道を開けてゐるわけではない。從つて、我々の盛りあげる文藝作品は、自由なる分野の中を走り廻る自由を持つてゐる。卽ち我々は統制ある傾向のもとに走ることはあり得ない。自由の成長こそ人間の熱望であるから。然し、文藝といふものが、作者の生活を通しての生産であるから、類似の生活條件のもとにおかれた我々の生活であるから、計らずも傾向の一致を見るかも知れない。その如き結果になつたら、それは偶然的一致で、計畫的のものではない。之を要するに、我々の小誌は傾向を持たずに只管文藝道を進むといふスローガンのもとに發展

して行く。――と此處に宣言して置く。

滿洲には滿洲の文藝を。

[illegible]下圭太郎氏を中心とする、奉天文藝部主催の座談會にて、氏は云はれた。日本人が內地から折角滿洲迄來て、何年か後には再び內地に歸る。日本人は何故滿洲に永住しないのであらうか。その原因は又種々であらう、その一原因として、滿洲の地方色をもつた、繪畫にせよ、文學にせよ、優美なる作品がないからではないか？

滿洲をバックとした優れた作品を通して、滿洲の印象がすぐ浮ぶ樣な親しみを持たねばならない。滿鐵あたりで率先して、內地の見込ある作家を滿洲に呼んで五年でも六年でもその生活を保證して、よき文藝製作の道を開くことが必要であると力說されてゐた。――筆者はこの考へ方全部を無條件で承認し得ないものではあるが、その目的に於て一致する。我々は必ずしも內地の作家に力をかりる必要はない。我々は惠まれた條件下に生存してゐるではないか。この眞實の滿洲に生存する我々がその目的の貫徹のために出來る限りの勞力を傾けることは、又重大使命ではないだらうか？

從來の滿洲文藝作品を見るに、それ等が餘りに、內地の思ひ出に耽り過ぎてゐたり、內地作家の模倣に現夢を投かしてゐた。或る時にはマンネリズムに、自分の個性をも忘却してゐたではないだらうか？　と云ふて、筆者自身理論的には此處まで到達したのではあるが、現實において撞着を悔ひるものであることを告白する。

最近の滿洲文藝に就いて――。

筆者は交際範圍が極めて狹小であるから、視野に漏れないものもあるかも知れないが知つてゐる範圍に於て一言して置きたい。何と云ふても、滿洲文藝の現狀は見苦しき淵落にある。活潑なる文藝雜誌は一冊と雖も店頭で發見し得ない。發綴せる現狀に至つた原因に就いては視野の狹い筆者には測り得ない所が多々あるであらう。然し過去に於て、幾多機關誌の歷史を持つ、少なりと雖も滿洲文藝界である。

積極的なる努力の前には、復活も絕望ではないと信ずる。現在、勞力は小ではあるが、奉天每日の文藝欄が孤立的に、活躍してゐる、二三年前は見るべき影もなかつたが、最近一年間に於て、可成りな進步を見せた。何時か机上檢討を經て今日に至つてゐる。まだまだ成長の過程である、諸賢の壓倒的なる反響をもつて、成長の促進の參加が必要である。特に大連の諸賢は、滿洲の地理的に

僅かなパーセンテージの所有者である大連を、恰も滿洲文壇は大連以外にはないと、自惚れずに、視野の擴大につとめられんことを。この他に新聞紙としては、大連新聞が形式的に、チャンバラ講談の後に文藝的なるものを、おしこめてゐるが、あんな人を食つた態度では、云々する氣慨も湧いては來ない、編輯者の責任を問ひ自覺を促すものである、この他に雜誌として、新天地、協和、月刊撫順がある。協和は比較的誠意をもつて、文藝の編輯に心を入れて呉れてゐるが、月刊撫順は、廢頽的なエログロに溺酔してゐて救ひ出すべき術もない。新天地に於ては、紙面の少ないのが欠點ではあるが、僅かに誠意の片鱗を見る。

結局滿洲のヂャーナリズムは文藝に對して、冷淡であるから、それ等を刺戟する文藝中心の雜誌を文藝界が持つ必要がある。

定期ではないが最近のもので、滿洲文藝年誌なるものがある。大連を中心とするもので、得る所は少なかつた、第一あんな高價では仕方がない。それと[illegible]氏の發行の[illegible]を見た。感じのよい本だと思つた。唯内容の少ないのが惜しい。これも經濟問題であるのだからあれ以上の要求は無理であらう」

この[illegible]はどんな人だつたか私は殆んど知らないが、その後「吉岡文枝のこと」「[illegible]」等の小說を同誌に發表してゐる。

雜誌[illegible]については、[illegible]がその一周年記念號に「たどつて來た道——一ケ年の思ひ出」といふ一文を書いてゐる。それから拔き書きして見よう。

高粱も今月號で滿一ケ年を迎へた。

一年、私はそれを考へると實に感慨無量なものがある。

四月、初めて滿洲の土を踏んだ私は當時市内雙葉洋行の店員だつた。

馬糞とほこりの町新京、毎日印刷物を自轉車に積んで顧客先へ配達した。

一二ケ月はあはたゞしく過ぎた。珍らしさと忙しさの中に、が、やうやく落付くと本を讀まぬ物足りなさが、駄文を書かぬ淋しさが襲つて來た。

私はよく僅かの時間を倫んでは書店をあさり歩いた。

だが私を喜ばせる樣な滿洲の文藝が盛つた雜誌がなかつた。

「滿洲には文藝雜誌がないのだらうか」大連の書店に照介して見ると「今の所一つもない」との返事だ。

「今の所」この意味を私は「過去にはあつたが今はない」と「まだ一つもないから誰か一つやつて見ないか」と云ふのと二つの意味に解釋した。

一つやつて見ようが……と考へたのが六月の中旬だつたろう。

「一つ俺が文藝雜誌を出そうと思つてゐるんだが」

「そいつア面白からう」と言つたのが今は政府の印刷局にゐる、當時同僚だつた龍瑛といふ、これも好きな男。

何か藝術的で滿洲を連想させるいゝ名がないだらうか。

で、二三日二人で考へた。

「赤い夕陽」「新京」「新興滿洲」「滿洲藝術」およそ千はかりあつたらう。「赤い夕陽」はお伽話だ、何だかだで結局一つもいゝのがなかつた。

或日町を歩くと支那人乞食が赤い飯を食つてゐた。

何だと聞くと高粱だと言つた。

高粱、高粱、文藝雜誌高粱。私は何度も繰返して言つて見た。（中略）

「高粱……そりやいゝ」

で雜誌名は高粱と決定した。

發行者に主人の名を借りて早速出版物許可願を關東廳に提出した。

奉天毎日と北滿日報（今の新京日報）に原稿募集の廣告をした。一週間も經つと未知の人達から激勵の手紙が來た。私は嬉しかつた。

一ケ月たつと原稿もぼつ〳〵集つて來た。「雜誌なんてペラボウに金のかゝるもんだからよせ」なんて注意してくれた人もあつた。

「金なんかどうにかならア」もう私はやめる事は出來ない。原稿を、手紙を何度も何度も讀み返しては、どうあつてもやるといふ決心を固めた。

その頃奉天帶大文藝部の移篤豐氏吉氏（だと思ふが、今手帳昨年の日記を持つてゐないので）が原稿を集めてわざ訪ねて來た。

「我々グループとして高粱には非常に期待をかけてるんだからしつかりやつてくれ」と云つて歸つた。

あとは只許可を待つばかり。

（中略）きたない支那稿の一室、そこで私は原稿の蟹興をーながら許可を待つた。

一ケ月半、「まだ出きないのか」「何してるんだ」なんて、厳しい便りもあつた。

もうじつとしてはいられなかつた。警察で聞くと、内地の方の身許調査が遅れてゐるんだとの話、でもなるべく許可しない方針なんて言つてるんだから若しも許可にならなかつたらどうしようなんて考へてゐる時、やうやく二ケ月ぶりで許可が下つた。

私達はコオドリして喜んだ。

さて　創刊號が出來上つた。用紙は更紙、六十頁、至つて貧弱なものだつたが、でも嬉しかつた。

これが恐らく新京で、雑誌と名のつく物の出た最初であつたらう、（これから五月遅れて政治經濟雑誌『滿洲改造』が出た。）

創刊號は移島豐比吉の「なばさん追放」稲垣啓民の「前行循環經路」氏はるみの「蠅」だつたと記憶する。

十月號、一冊にまとめるだけの原稿がなかつた。次に經費の問題があつた。むりに出して出せぬ事はなかつたが十一月號で伸びる積りで休刊した。

十一月號を眼の前にひかへ私は積極的に廣告も集め、雑誌をよくする考へで、適當な家が見つかるまで事務所を置かせてもらう事にして變發洋行を退社した、店主新井氏はその時百圓ばかりの金をくれた。私は涙が出る程嬉しかつた。（其の後も百圓ばかり補助してくれた。）

その頃元長政局長の鹽本良明氏の「滿洲國獨立の精神」を其氏の斡旋で發行權をもらつた。四六版百二十頁、眞に滿洲國を思ふ切々の眞情を披瀝した快男子彼、鹽本氏の書だけに實によく賣れた。書店なんかでも、五十冊積んであるのが僅か十日か半月で賣れ盡したんだから。

十一月號、これは割合によく出來た。

表紙も效果的だつた。内容は忘れたが『蠅』の芳賀[illegible]氏の「國際四等列車」山谷三郎氏の「高粱」があつた。

（後略）」

「高粱」は昭和七年の十月、八年の四、五月を休んで九月一周年記念號までに十冊を出してゐるわけである。主なる文藝ものの執筆者に、移島豐比古、鈴木濟、岡田廣美、山谷三郎、宰町哲二、木俣

川徹、近東綺十郎、綱治隆夫、中村秀男、紫苑等がある。ほかに志村夏江といふのが活躍してゐるがこれは今元久＝綱治隆夫と同一人と私は睨んでゐる。

八年七月號に藤野繁太郎の「文藝三三」といふのがあり、それには大連を中心とした『移民文學』『大陸文學』『燕人街』『鄙土文學』、奉天の『曙人』、そして滿洲文藝研究會の「滿パン」等の推移の跡を述べ、近狀として、大衆派の白石義夫、大陸武年、藝術派の近東綺十郎、青木實、安達義信小杉茂樹などが「相當文藝的成果をおさめてゐる」との記述がある。

また「文藝ニュース」に雜誌『新京』の創作欄が陸續されたとの記事がある。それから、佐和山一郎らが文藝雜誌を出さうと計畫してゐるとの噂が載つてゐる。

八月號には齋尾壹夫郎が『滿洲公論』から『滿洲評論』に移り、鈴木啓佐吉が『滿洲公論』に入つたとの記事がある。

第十二章　『高粱』のその後、『作文』その他

『高粱』が創刊されたのが昭和七年九月、まだ長春時代であつた。

『作文』は昭和十七年末に終刊號を出したが、それを見ると、作文社は十一年間活動して來たとある。

すると、『作文』の前身とも言ふべき『彩』の頃から數ふべきものであらう。

『彩』には昭和七年二月に發行されて居り、その執筆者は古川賢一郎、城小雄、三宅豐子、橋本英子　大谷武男、竹内正一、近東綺十郎、青木實、島田幸二である。

前章に書いた『滿洲女流文藝集』は滿洲新女性會が『滿洲婦人問題論集』に次ぐパンフレットとして昭和七年十二月に出したもので、執筆者は、笠原正江、相原菊、下村悄、宮崎智惠子、波奈加根子甲斐水棹、遠藤埋子、西條明子、三沼柳子、多木敏子、大内隆雄であつた。（相原菊は綱野菊で、當

時奉天にゐた、「ノートから」といふ隨筆で、觀た映畫や讀んだ小說についての感想を書いたものであつた。大內のは特別寄稿で「文藝上の在滿婦人の業績」といふ一文だつた。）

ところで、大內隆雄は昭和八年三月大連を去つて東京へ行き、同年末奉天にかへり翌年いつぱい奉天にゐて、昭和十年二月今は新京となつた、彼の第二の故鄉へ歸つて來た。この間まる二年、內外の事情から彼は文藝、文筆から全く遠ざかつてゐた。『高粱』のことなどもあまりよく知らなかつた。奉天にゐた近東綺十郎は入れ違ひに東京に行つてしまつてゐた。

が、北に『高粱』あり、南に『作文』ありとは言へ、當時の滿洲文學はあまり振はなかつたと見るべきであらう。僅かに『滿蒙』に昭和八年中に大庭武年が創作「故國」戲曲「燐火」同「滿朝終焉」同「馬占山」を書き、九年に戲曲「滿洲開基」「蔣介石」同「劉愛護村長」を書いてゐるくらゐが記錄されるだけである。しかし雜誌が廣い讀者層を持たなかつたせゐか、あまり世評にも上らなかつたやうである。なほ『滿蒙』八年十二月號には近東綺十郎が小說「間諜茉莉」を寄せてゐる。

なほこの頃の『滿蒙』には大高巖、松井秀吉らの支那文學研究ものが出てゐる。

ところで、『高粱』にかへらう。

高粱社からは昭和八年、二つの單行本が出てゐる。奥富美子遺著歌集『夢の國に戲れし蝶』と、岡田廣美の小說集『大陸の旗』である。

その後の『高粱』では、和波薫、佐和山一郎などが登場し、八年四月には青木實、同八月には近東綺十郎が稿を寄せてゐる。

また高粱社を背景に滿洲文藝家協會が結成された由である。それに關聯して八年三月號に寄せた藤長雄の一文があるが、その中に「現在滿洲國側の文藝作品を日文に譯し在滿日本文藝家の作品を滿文に譯して日滿の新聞雜誌に掲載し或ひは更に適當なる方法によつて發表する等の文藝を通じての日滿の精神的融合等の企ては多く行はれてゐないと聞くが、斯る國家的意義を有する文化工作は之れを國家に於て助成の要がありはせぬか。世界各國に於ける國家機關と文藝との關係、近くは日本文藝院設立の經緯文化の高揚と共に文藝の國家に對する關係は至大なるものがあることは論を俟たぬところである。滿洲國政府當局に於ても滿洲の文藝愛好家各位に於ても滿洲文藝の前途に就いては關心を要するものがありはせぬだらうか」と言つてゐるのは卓見であつたとしなくてはならない。

岡田廣美が四月號に書いてゐる所によれば、當時、哈爾濱日日新聞には梨野紫苑、その他北滿在住

者の作品が出、哈爾濱新聞には平佐三郎、小田切、鈴木等の隨筆、短歌、詩が出た、『新京』には佐和山、富美らの作品が出てゐる。『大滿蒙』には曾つて文藝欄があつたが、今はない、なほ新京劇研究會といふのがあつて、宮部、池邊、曾田、和波、山岸らがゐる。四平街には帆足潮がゐる、奉天新聞では近東が活躍し、相川、白石も書く、安東に小田、宮本がゐる云々といふ。

なほ同誌に三月に催して文藝座談會の記事があるが、出席者は東一、西山俊、西藤辰雄、赤平達彌、岡田廣美、室町哲二、北村茂、飯島英一その他であつた。

五月號を見ると、近東綺十郎の滿洲ペン倶樂部の企畫書が出てゐる。近東は東京へ行つてゐて、「正しい滿洲の姿を、日本の大衆に認識させることは、何ものにもまして大きな、力強い日滿親善への文化運動である。地理的に不遇な滿洲に在つて日本進出を企圖しつつある在滿文藝家は先づ滿洲それ自體の内に於いてお互に手を握り合ひ團結しなければならぬ。我々がこの滿洲ペン倶樂部を創設せんとする野望否意圖は、文筆による日滿親善への貢獻と、在滿文藝家の結成及びそれによる日本文壇への進出を期するの三つの意義に依る」との趣旨でこの計畫を立てたのであつた。そして若干の仕事はやつたが、時不利か、協力熱せずか、翌春、彼は滿洲に舞ひて戻つて來ることとなつた。

九月號に佐和山一郎の一文があるが、それによると和波孝が大滿蒙の文藝欄をやることになり、彼の外に、佐藤光、花戸章、池邊青季などが書いたとある。花戸章とは佐々木文哉である。

『商梁』はこの年の八月『滿文商梁』を附録として出した。あまり新味ある内容は見られなかつたやうだが、金てとして注目さるべきことであつたと思ふ。

さて、昭和九年には、大連で宗錢耋といふ人が『黎明滿洲』といふのを刊行してゐる。創刊號には鈴木啓佐青が協力した由で、それには藤平田文吉、末光高義、西村不二、井上紅梅、中溝新一、大川周三、竹内正一、中島荒登等が執筆した。しかし、この雜誌は創刊號は立派だつたが、その後質が落ち、やがて廢刊した由である。

昭和九年八月、大連で滿洲ペン倶樂部といふのが出來た。これは近東綺十郎が計畫したそれとは別個のものである。この大連の滿洲ペン倶樂部は、大木一男（大阪商船會社大連支店にゐた）、吉川哲二郎（賢一郎の弟）、鈴木啓佐吉、堀内久良太（これが現在の北屋敷三である）、横澤宏、樋口春是（詩人、大連新聞の工場の方にゐた、のち病死した）、齋藤和夢（雜誌『大陸』にゐた）等で結成さ

れた。のちには宮川靖、吉野治夫、佐々木勝造、加藤飴明、岡二郎、西村眞一郎等も參加し、昭和十年十二月以降、數回に亘り雜誌『滿洲評論』を舞台として特輯の『滿洲ペン倶樂部』を出した。壽川哲二郎は武禮業之輔、鑓澤宏は柊意一、大木一男は田耕之介の筆名を使つた。大木はのち大阪へ轉じた。宮川、鈴木は新京へ轉じた。

大連で文話會がのち出來るやうになつたのは、この滿洲ペン倶樂部がその母體みたいなものになつたのだと考へられる。

昭和十年(1935)に入る。大同三年、康德元年(1934)である。

前に記したやうに、私はこの年二月、新京に歸つて來、新京日日新聞で働くこととなつた。それは會つての長春實業新聞である。社主は業谷保藏、總務が七河榮忠、編輯局長が松本勇。

佐々木文哉が整理をやつてゐ、やがて近東綺十郎を私は呼び、和波業も入つて來た。私と近東と和波、これが新日三羽烏などと稱られて、暴れ廻つたのであつた。

新京日日の文藝欄はトタンに活氣づき、忽ちにラヂオドラマ研究會が出來て當時南廣場にあつた假スタヂオから放送をやり、文藝座談會なども何回かやつた。協和會には佐藤岩之進、池邊青季、會田

などがゐ、情報處には龜谷利一、岡田益吉などが宮脇義雄のもとにゐた。今元久は『滿洲改造』に據り、やがて雜誌『新京』も青井、小原の手に移つて前月を一新して來る。

東一先生とどうして知り合つたか記憶が定かでない。私が訪ねて行つたやうにも思ふが、和波か近東か紹介したのが最初だつたかも知れぬ。それとも座談會でも顔を合せたのだつたか。

『高粱』九月號に、私は須臺作「追懷斷片」といふ譯詩を寄せてゐる。それが『高粱』への私の最初の寄稿であつた。それは前年出た『曉鐘』といふ滿文雜誌から採つたものであつた。

(私は、この頃から漸く滿系文學に對する熱情を募らせて來たのであつた。ずつと以前から心がけ注意はして來たのだつたが、今や私のなすべき仕事の一つは確かにこの方面にあるといふことを信ずるやうになつて來たのだつた。——この年の八月の『滿蒙』には、私は愛蘭作の小說「祖母」を譯して寄稿してゐる。そして、この攻究とは、今の石雷なのである。——私はだん〳〵滿譯に力を入れはじめたのであつた。)

『高粱』の經營がどうも思ふやうに行かない、もつとくだけて、豐富な內容で行きたいといふ議が起つた。よからう、賛成だ——そんなことを、あの頃の喫茶バー「ナナ」あたりで一同で決めたのだつたらうと思ふ。斯うして出來たのが、『高粱』十月號

蘭西亞墓地の秋……海拉爾の思出　吉見　明
秋草の想出　佐和山一郎
秋の女　群家陸夫
紅いドレスを着た女　山谷三郎
東部線の匂ひ　今元久
すしの感傷　和田邦夫
名馬の歌（蒙古民謡）　西藤辰雄
文藝家とダンサーの座談會
文藝家側、大内隆雄、近東綺十郎、佐和山一郎、細川明、今元久
ダンサー側、篠原美好、柴田マミー、今村久米子、小林光子（以上新京會館）千葉一子、柳律子（以上キャピタル）
社側、奥一
九月の文藝界
國都戀愛第一課（國都映畫研究會製作、小型劇映畫紹介）

彫像　川崎ちよ子
ラヂオドラマ「秋聲」紹介
映畫のページ
映畫雜記から　江來蘭
私の映畫批評　耶麿
十四行詩　遠藤輝子
秋の夜　田賀路朗
秋の胡風樂（連載）　近東綺十郎
赤平滿スケッチ集
滿洲踊り場風景　大内隆雄
十月のレコード界

といふ賑やかな編輯であつた。ところが、これが『高粱』最終號となつてしまつた。何とも遺憾千萬なことであつた。右のうち、群家陸夫は近東、和田邦夫と佐藤辰雄は和泉、耶麿は大内である。グンサーの内、篠原は讀書家として知られ、今村は小説を書き、千葉も讀み書く、柳は演劇界出身だつ

た。小林は今、新京の酒場「光」をやつてゐる。

また、右の『九月の文藝界』を讀むと、次のやうなことが知られる。

○日々文藝座談會

九月一日新京日日文藝部主催同社會議場で開催

集る者、泉芳雄、稲垣輝安、大塚正雄、根本誠一郎、今元久、高木恭造、奥一、西川正光、和波、近東、佐和山の諸氏

○『吾が鎭魂歌』發行

新京滿鐵病院醫末恭遊氏詩集

『吾が鎭魂歌』一〇〇部限定版東京堆の木社より發行、七〇頁六十錢

○『滿洲映畫旬報』發行準備進む

新京日本橋通りに事務所を持つ合資會社滿洲映畫旬報社が、着々準備進み、十月一日より當分月二回發行する事になつた。

○日日懸賞短篇小說募集

滿洲文藝界にその人ありと知られたる野武士[illegible]東綺士郎、友岡隆雄のたてこもつてゐる新京日日新聞文藝欄に短篇の募集が發行された。賞金一等五圓二等三圓だが選者が選者だけに賞金と云ふより自己の眞價を決定するはこの時にありと全滿文藝人から何と百二十餘篇の應募がめり、質に於いても從來の懸賞小說に見るやうな低級なもの一篇もなくほとんど水準以上のものであつた由。

○『蒼丘』發刊さる

奉天明星ダンスホールでは同ホールダンサー達を中心した機關雜誌『蒼丘』創刊號が發刊された。謄寫版刷五十ページではあるが仲々桃色や黃色い氣炎がはかれてゐる。

○『[illegible]』發刊

これも奉天、營大文藝部の福家、花澤、小澤、林など、わが『高粱』創刊當時滿壓の後援を措しまなかつた人達が中心に今度待望の彼等の機關誌が出來た。內容外觀とも仲々立派なものである。

昭和十年、大連から（發行所は下關迄いてゐる）『日滿春秋』といふのが出た。

二月號を見ると、大內隆雄「街の歌」、安藤光子「奉天女人風景」、佐々木三福「川柳談」、川上章子「熱河紀行」、近東綺士郎「裏切り沙里」等がある。

文學だとは自負しない、なぜなら建國十年にして、一國の代表的世界文學の水準を抜いたものが現はれるといつたことを性急には信じない。誇りと、自負とを抱いて世界文學として發展すべき滿洲文學の捨て石にならうとする。「作文」同人の或る者は、勤勞者の文學をも主張する。滿洲の現實は、職場に就き、異民族の中に喰ひこんでいつて、そこに根を下ろした生活をもたない限り眞の生活者の感情は掴めないからである。滿洲文學とは國土の照應されたものでなくてはならない。地方によつて國土を異にし、異つた風習をもち、異つた言語を話す民族が分布されてをり、そのどの部分をも文學的照應がなされ、はじめてまた滿洲文學とも言はれ得るのだ。そしてこれを骨肉化して作品を爲すには、一介の旅行者では決して多くを期待出來ない。即ちこの土地に必死に生きようとする感情を抱く者に俟つて、初めて滿洲文學の門は開くのである。

同人の著作としては、詩集に、[illegible]著『老子降誕』『氷の道』『芽柳』『蒙古十月』『貧しき化粧』。[illegible]著『一月の河』。高木恭造著『まるめろ』『我が鎭魂歌』『鴉の窩』小松茂樹著『麥の花』。坂井艷司著『崖つぷちの歌』。野田隆著『九篇詩集』。

歌集に[illegible]著『朱の音』。[illegible]著『七草』。

小說集として[illegible]著『氷花』。[illegible]著『第八號轉轍器』。野原善三著小品集『是好日』隨筆集としては、[illegible]著『濃むらさき』。[illegible]著『花筵』。

また同人短篇選集『[illegible]』。『日滿[illegible]花滿作家短篇集』『滿洲小說選集』『滿洲文藝年鑑』第一—三輯には、同人の評論、詩、小說が多數收錄されてゐる。

尙權威[illegible]には、『夢と愛の小說』『女の水車小舍』『惜春の賦』『クヌルプ』等々の獨逸文學の譯者がある。

近刊豫定のものとしては、[illegible]小說集『塘の歌』[illegible]評論集『滿洲文學の哀情』、[illegible]一小說集『復活祭』、坂井艷司第二詩集、[illegible]短篇集『綿服』、高木恭造詩集『まるめろ』再刻版、加納三郎評論集等々がある。

更に[illegible]の『氷花』、小松茂樹の『麥の花』、吉野治夫の「手記」は當時唯一の滿洲文學賞たる第一—三回G氏文學賞を授與され、[illegible]の『第八號轉轍器』、高木恭造の「鴉の窩」は第一回滿洲文話會賞を授與されてゐる。また改造社『文藝』推薦作品には、第一回以來最近に到るまで、[illegible]「沙草地」、高木恭造「田舍醫者」、秋原藤三「葬送」が有力なる候補作品として擧げられた。「下略」

『作文』の成果を最も單的に要約したものと言へよう。

第十三章　新京日日及び各集團

新京日日新聞で短篇小說の募集をやつたことについては前にちよつと書いた。その後も新年などにはやゝ大規模に創作、詩、短歌、俳句、川柳の募集などもやつた。さうしたことから、常時の文藝ものの寄稿も殖ゑて來た。

斯うして出て來た人々に、[illegible]久米平、今村榮治、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]雄、[illegible]一良、[illegible]、大[illegible]一雄、高木喜久雄、佐和田一郎、[illegible]千里、[illegible]、[illegible]、西條正夫等々がある。無論これらの中には、他の方面ですでに活躍してゐた人もある、が、新京日日でデヴューし、それからひろい場面へ乘り出して行つたといふ人も多い。

この頃、私は『若草』の懸賞小說に出し、入選になつたことなどもあつた。「三十路に近き」と題したもので、上海時代の生活に取材したものだつた。

大同報がこの頃、新文藝を募集してゐた。それに『[illegible]』の名で『北滿詩篇』と題した滿文の詩を送り一等に入選したこともあつた。この詩は大同報社で出した新文學選集の詩に收錄されてゐる。なほこの頃、奉天の鐵路總局の若い人たちが『蒼穹』といふ豪華な雜誌を出したことがあつた。近東、私がラヂオドラマを寄稿したりした。

昭和十年は私には多忙な一年であつた。

前に、『高粱』の記事に『滿洲映畫旬報』發行準備進むとあるのを引用したが。この『滿洲映畫旬報』といふのは[illegible]といふ企畫屋がゐて、それに數人が共同して發行されたものだつた。遼東綺十郎が內職にこれの編輯に當るといふので張り切つて數號を出した。四六倍判、表紙はアート紙にオフセット刷、支那の映畫女優の寫眞を入れ、瀟洒たる雜誌だつた。[illegible]、[illegible]なども寄稿した。まだ滿洲映畫協會などの出來ない頃のことであるが、雜誌經營の資金路が映畫館經營者の方につながつてゐたし、續けて發行されてゐたら面白く、またそれだけの意義ある役割をも遂げたことだらうが、その內ボヤケタやうにしてポシヤツてしまつた。

この年、佐和田一郎が『課木』を持つて來たといふことが私の日記に殘つてゐる。『高粱』はなくなるし、新聞はあるにしろ、何か同人雜誌風なものが欲しく、そんな薄い文藝刊行物を出したのだつ

た と思ふ。

私も近東たちと相圖つて、『滿洲文學』といふ、これは滿系同人をも糾合した文學月刊雜誌の計畫を立て、書類を當局に提出したのであつたが、これは許可にならなかつた。どうも私たち（君と近東）の前歴がたゝつたのらしかつた。いろいろ計畫も立ててゐたのだが、定期刊行物としての許可が得られなくては計畫の遂行は出來ず、勇圖空しく挫折する外なかつた。

その間、私は本職の新聞以外に、『滿洲評論』『旅行滿洲』等に書いてゐた。また、大連へ奉天へ行き、その土地の文學人たちと會合を持つたりもした、「滿洲文學」賞設定の計畫を立てたこともあつた。（計畫だけでおしまひになつたが）滿洲ペン倶樂部の組織を劃策したこともあつた。（大連にあつたそれとは別個のものである。）

こゝに、その頃の刊行物について若干書いて見よう。

『卷頭』については、前にちよつと書いたが、それは鐵路總局青年交淳倶樂部から出されたものであつた。創刊號の出たのが、昭和十年七月。

向野元生が「卷頭言」を書き、安部眞が「發刊に際して」と「法律の文藝と文藝の法律」といふむつかしいものを書いてゐる。英雅之介とは誰なのか、「ソヴエート演劇史論」を書き、小說「第二の人生」を書き、コント「はるさめ」を書くといふ活動振り。創作欄には大庭武雄が、『滿蒙』に出した。「劉愛護村長」（戲曲）を再びこゝに載せ、外に資格將軍「ふらんす人形」、津野瓜一「影」がある。ラヂオドラマ脚本として既記したやうに近東詩千駒の「春夜狂奏曲」と大内隆雄の「五月のガセクション」「歌壇」「女性」等の特別の頁を盛つた四六倍百四十頁餘の大冊。

だが、この雜誌も滑り出しはよかつたやうだが、二號か三號までであとは振はなかつたやうである。結局、職場の雜誌でありながら、一般的內容を盛らうとしたところに無理があつたのではあるまいか。雜誌の配布はそれでゐて一般化しなかつたやうであるから、明らかに矛盾があつたと思ふ。

佐藤山一郎たちの集團は『新興詩人倶樂部』と名付けられてゐた。

昭和十一年六月までに『裸木』『氷原』『春郊』『花杏』等の不定期刊行物を出してゐる。ちようど今の俳句の雜誌『柳絮』が、いろんな名前で出しゐるやうな行き方である。『花杏』の目次は次

のやうなもの——

はなあんず　服部匡佑
春潭　伏木龍三郎
過渡期　鎌田奇洲
友と春　奈多進
椿花譜　白河諒
沙漠の菩提　佐和山一郎
渡滿後記　岡村邦子
壁泥　池戸五穂
春のノートから　室町哲二
一中國人のアンドレ・マルロオについての感想　大内隆雄譯
春の芽　皆川董

以上のうちははじめ六人のは詩、岡村、池戸、室町のは短歌、私の譯稿は佐和山から何か原稿で援助してくれと言はれ、出したものだつた。

『作文』は昭和十一年の八月に第二十輯を出してゐる、その目次は——

仲間（五）　秋原勝二
亂菊　三宅豎子
詩　若い季節のために　小杉茂樹
月蝕む　松原一枝
花瓣　池淵鈴江
隨筆
古い手帖　町原幸二
二匹の猫について　小杉茂樹

作文後記

表紙・カット　中尾　彰

――といふものである。

落合記す「作文後記」には次のやうにある。

本誌も漸く二十輯を迎へた。その間、止むを得ざる同人の移動は相當あつたが、感情的トラブルは一度もなかつたし、經濟的危機に際しても、只同人の眞摯な態度だけで切拔けて來た。うたゝ感なきを得ない。だがわれわれの仕事はいよいよこれからである。かつて當地から詩誌「亞」が新しきゼネレーションを以て日本詩壇に呼びかけた花々しさはなくとも、文學の地道な進路とやがては、日本の視野に現れたこの土地の特殊性をわれわれは明示すべきである。尤も前者にはアマチュアーとしての、後者には主に客觀的な、困難を伴つてゐるが、それらを克服することにわれらは愉快な任務を感じてゐる。

本輯は大木の五十枚が遂に間に合はなかつたため、頁數が減少し、幾分寂寥を免れなかつたが、讀者は同人と共に若冠秋原の若々しい努力を買つて頂きたい。

「ノート欄」は都合あつて本輯だけ休載することにした。「下略」

そして、この時の同人は、青木實、秋原勝二、池淵鈴江、大木一男、大谷健夫、落合郁郎、小杉茂樹、園多彦、竹内正一、富田壽、町原幸二、松原一枚、三宅聖子、吉野治夫の十四人である。この内大木が大阪、竹内が哈爾濱にゐるだけで、あとはみな大連居住者である。

『滿蒙評論』の昭和十一年一月號、これは鈴木啓悟吉らの「滿洲ペン倶樂部」同人が乘り出して來てゐる頃だが、これに「滿洲文藝運動の方法と將來――作家クラブ設立計畫に對する私見」といふ一文が載つてゐる。署名は藤野信道とあるが、吉川春雄氏あたりだらうと私は睨んでゐる。大連に偏した記述であるが、當時の情勢を知る資料にはなるので、次に寫して見よう。

滿洲の文藝と稱しても、我々在滿邦人間の文藝に關することを指すものであつて、その運動の主體を爲すものは、人口的に最も多い大連であり、奉天、新京、安東等は、これに對し從屬的關係に

おかれてゐる。從つてこゝで滿洲での文藝運動とは大連での、それを指すことを意味するものである。

順序として、文藝運動の簡單な歷史を一瞥すると……

大正初年より、短歌、俳句等の運動が起り漸次旺んとなり、昭和初年に到るや詩、文學等の勃興をみ、四、五、六年頃になるや最も盛となり、各種の文藝家團體が設立された。斯くて乱立された文學グループの中には、昭和六年九月檢擧せられたる滿洲共產黨の運動が多數參加し、且つ彼等は、これらの文化團體を通じて、文化的アジ・プロを勇敢に行つてゐたので、自然、滿洲文壇ではプロレタリヤ文學運動が旺んとなり、實質的にも表面的にも自稱プロ作家が幅をきかしてゐた。それに當時は、現在滿洲文壇で既成作家として沈默を續けてゐる人々も第一線に立つて、活躍してゐたので、大正初年後、滿洲に於ける文藝運動らしいものが表面的に現はれて以來の活況を呈したのである。而るに作家的コムミューニスト達が一齊檢擧の嵐に會つて文壇から去つてしまふと、まるで夜店をハネた浪速町の樣に、ひつそりと火が消えたかの如く、淋しくなつてしまつた。この原因に就ては、一、コムミューニスト達と共に活躍してゐた作家連中が檢擧の嵐に怖氣付いたこと、二當局が今回の思想事件に就て、文藝團體がその貯水池、或は培養地となつてゐたことに對し、文藝グループに對し鋭い眼を光らし始めたことが擧げられてゐる。又客觀的には、政治的、經濟的に大轉換を餘儀なくされた滿洲の一般的、狀勢の變化が大きな外部的力として作用したことである。

その後、滿洲の文藝運動は、昭和九年初頃に到るまで「文壇不振」の掛聲ばかり大きく、何等具體的な運動は絕無に近かつた。滿洲の治安工作も確立に近づき、人心も比較的安定し、文化も新らしく建設文化として現はれ始めるや「文藝復興」の聲は、內地文壇のそれと相呼應して、各所に起り、大連新聞が、明中總一郎君去つた後、なくなつた文藝欄を復活し、次いで恩田耕君が「藝術滿洲社」を作り、事變前より辛うじてその存在を續けてゐた『作文』（現在『一家』と改稱）の同人達も活氣づき、昭和十年の七月以降になるや、「新興詩社」が起り、次いで「滿洲ペン倶樂部」が設立されて、文藝運動も昔日の活況の端初に就かんとして、昭和十年は暮れてしまつた。

昭和十一年は、如何に文藝運動が轉開するであらうか、この見透しを爲す前に、最近、表面に活動してゐる、「新興詩社」「滿洲ペンクラブ」『一家』の代表的な三團體に就て、紹介的な提燈持ちの一面的考察を行つて見る。

滿洲ペンクラブに就ては、未だ結成趣意書といつたものが發表されてゐないから、具體的なこと

は判らぬが、先月號の『滿蒙評論』に發表されたメンバーと作品とを通じて、その活動を推察するだけであるが、創作に、隨筆に評論にグループ同人を總動員して、潑剌たる活動の第一歩を示してゐる。（作品の藝術的價値は別として）斯る最初の意氣ごみから推して、將來、相當に活潑な活動性を期待出來よう。且つその活動範圍も文藝全般に亘る廣汎なものであり他の同業團體に對しても對立的なものでなく、協調的、要協的なものの如く見受けられる。

『滿蒙評論』（詩人クラブ）のグループは、滿洲評論（大內記すこれは間違ひで、『滿洲公論』か『滿蒙評論』であらう）に依つて第一聲を擧げた。元來、詩人と稱するグループなり、個人は文藝界に於ては、非運動的な或は非活動的なものとされてゐるが、この團體は結局當初から街頭進出を行ひ、詩と繪の展覽會開催をモーメントとして生聲を擧げた。一寸從來の文藝グループ等と趣を異にした動機をもつて結成してゐる。文藝運動の能動性を多分に欲してゐる滿洲では同グループの誕生に對し拍手を以つて迎へなければならなかつた。だが、文藝運動の內でも特に限られた。「詩」のみの運動であり、詩と稱する一つの限られた文藝カテゴリーの內の活動であるから、文藝運動といふ一般的な大きなカテゴリーの立場から見れば、より專門的なものとなり、行動の範圍も限定されてゐる。我々の立場からは、「詩」と云ふ限られた小さな文藝運動の一つのグループだけでなく創作も、小說評論もと云つた樣な、廣いグループのものとして欲しいと考へる。だがこのことは、文藝運動の一部門として、同グループの存在價値を過少評價するものではない。

『文藝』はもと『作文』と稱して、相當活潑な活動をしてゐたが、最近は外部的に、餘り活動してゐないやうである。或る友人が『作文』は未だ續いてゐるのか、と文學運動を揶揄するやうに筆者に質問したことがある。筆者は藝術的良心の立場から「馬鹿云ふな。『作文』の同人連は十年一日の如く、藝術の道に精進してゐるんだ藝術なんて、そんなに華かなものでなく茨の道なんだ」と大見得を切つたことがある。――それ程、『作文』はこゝ二、三年間といふものは對外的な活動を行つてゐない。一つの殼に入つたカタツムリの樣に、何してゐるのか判らない。外部から見て「文學の持つ行動性を」失してしまつたか、忘れたか或は善意に解釋して――對外的な文學運動よりも、先づ內部的な充實、即ち宗教家が山にこもつて悟りを開くといつたやうなことを、先決問題としてゐるのであらうか。と角一つのグループではあつても、同人を限定し、高い城壁を作つて、外部からの進入を防ぐと同時に、外部への積極的な働きかけが見られない。要するに、一つの文藝團體であつても、文藝運動が附隨してゐないセクト的なグループである。（下略）

このあと、いはゆる『作家クラブ』についての意見が書いてあるのだが、その部分は省略しよう。また、同じ雜誌に太宰治氏は滿洲ペン倶樂部について「滿洲ペン倶樂部を作つた發端はうちわのことではありますが鈴木君と北尾君が私の家へ訪ねて來られ、雜誌を出したいと言ふ相談があつたことに初まつてゐます。その時私は同人雜誌は成程文學を勉強する上に於いてひとつの方法には相違ないが、必ずしも唯一の手段ではないとも思つてゐましたし、且つは滿洲殊に小說を中心とする方面は未だ未だと言ふ氣がし、是を盛んにするにはさゝやかな同人雜誌では非常に六ケ敷いことだ、とも考へてゐました。それに經濟上の問題がどこまでもつきまとつてきます。それで、私としては經濟上の困難性などを理由として再考を促したのであります。事實、私は、私自身にしても二つの矛盾した氣持をもつてゐます。ひとつは綺麗な雜誌に美しい活字で、自身だけの文學的欲求を滿足させるために、たとへ微々たりとも小ぢんまりしたよい同人雜誌を作りたいと言ふ事。それから、もうひとつはそんな個人の感情は別問題にして、滿洲の有力な雜誌の協力を得て、有意義なつまり一層社會性のある文學的活動を試みたいと言ふ事、これであります。そして(二回目に鈴木君がやはり此の問題で訪れて來られたとき、此の後者の意見を呈したのであります。それが、急轉直下滿洲ペン倶樂部となりました。鈴木君に北尾君、それに私の愛友武禮君が「君の遣ることなら何でも一緒に遣る」と言つた意氣込みで參加しました。其他二三の人達、また忘れてならないのは横澤氏や宮川君など、もう逢觀してゐる苦勞人までが我々の若々しい計畫に顏を貸して呉れました。……」と書いてゐる。だが、この「滿洲ペン倶樂部」も同人の轉出や何かでやがて姿を消した。『滿蒙評論』が本當に力をあまり入れなかつたとか、作品に傑出したものがなかつたとかいふ事情もあつたかも知れない。

ついでに、ほかの雜誌を見てみる。

『滿蒙行政』の三卷三號(康德三年三月)、いかにも堅い、その中で、わづかに武藤富男「笞刑を見る」、谷濱曝「ことば漫語」が柔か味を持つた記事である。

『月刊滿洲』昭和十一年八月號、「本號は思ひ切つて金をかけて見た」と廣島榧禮君が書いてゐる創刊八周年記念號である。發行所はまだ撫順にあつた。次のやうな記事が拾へる、

滿洲產業の開發と日滿ブロック經濟　河本大作

奉天市政と協和會　上村辰巳

戰さと煙草の話　谷萩少佐
新聞班の思ひ出　柴野少佐
支那民衆は斯う言つて居る　秀木公
綫・五千萬閑話　寺田喜治郎
秘密結社在家裡の研究　小林生之介
ベミールは招く　林君彦
鮎　三溝沙美
隨感錄より　田原豐
撫順醫院にて　木村毅
繪及び文　池邊青李
支那婦人笑林　堀江憲治
コロンブスの弟子達　庄司通惟
蒙古包の一夜　龜谷生
王道は日本人から　石敏當

血染の寫眞　東野潤
一口漫談　小林茗八
新京西公園の午前四時　鯉木沙禮
狐　岩根正雄

綫・朱唇に聽く座談會
あたまをかくページ
くさめをするページ

なか〳〵賑かなものである。萩谷小佐は當時奉天特務機關にゐた。鯉木沙禮は近衛綺十郎。林君彦石敏當は滿鐵嫌疑。この編輯には平井武が大いに働いたらしい。彼は後に滿映に入り、更に北支へ行た。湯屋子へ鞍山の藝者や女給を呼んでの座談會などタ〳〵シタモノである。

第十四章　「滿洲行政」と「モダン滿洲」

康德四年六月の『滿洲行政』に野崎[illegible]氏（民生部事務官）「滿洲國に於ける出版界の現況」と題ある一文の終りに言ふ——

「之を要するに滿洲國の文化事業に於て最も急を要するものは、自國民の間に著作能力を養成することである。之が爲めには凡ゆる機會に於て各種の天分ある者を發見し、之を日本に留學せしめて或は科學者として、或は文藝家として、或は又美術家として之を養成する等、以つて是等建國精神を把握した自國民の手に依つて著作せられた出版物を國民に供給することを圖らねばならない。斯くの如きは一見迂遠の感無きにしも非らずではあるが、又それだけに急を要する問題であり、且つ拱手傍觀して居たのでは、百年河清を待つが如きもので、到底其の實現は困難である。されば政府に於て良く國內の現狀を洞察して、此の種の助成策に相當多額の豫算を投ずる決心を必要とし、且つ民間の各種團體、殊に國民の指導者を以つて自任する各新聞社、雜誌社に於ても、絕えず建國精神の作興に努力すると共に、學術論文、小說、文藝、美術、音樂等の懸賞募集を行ひ、或は講演會音樂會演藝會又は展覽會を開催する等國民の創作能力を養成することに助力す可きである。斯くの如く官民共力して自國文化の創造に努力するに非ざれば、國民精神の統一を期することは不可能である。若し文化を自由して衣食足りたる後の贅澤事であると考ふる者ありとするならば、其れは文化が國民精神の發露であると共に、文化に依つて國民精神が左右せられる事實を忘れ、且つ國家の建設は國民精神の確立を以つて其の大本と爲す可き重大事を忘却したる偏見なりと云はざるを得ない。」

まさに卓見であつたと言ふべきである。

因みに、この號には鷲部秀見が三、四月號から續けて「滿洲國宗教國策論」を書いて居り、岡田[illegible]書が隨筆「角力と明治時代」を寄せ、西田猪之輔の短歌「察哈爾に行く」三十首があり、なほ下島[illegible]三の小說「黑い金魚」が出てゐる。そしてこの頃の同誌編輯者は[illegible]であつた。

さて、少しそれより時を遡た昭和十二年八月の[redacted]を繰ると、文藝欄名時計[redacted]の署名で次のやうに書かれてゐる。

淋しい地元文藝

原稿料を出さない。或ひは手が足りない、其の他色々な理由はあるだらうが、新京日日學藝欄の淋しいのは淋しいことである。新聞文藝欄としてまだ滿洲が、新京が、さほまで文藝が認識されず、書く人も、讀む人も少なかつた頃から毎日五段六段のスペースを取つて華々しくやり初めたのは、滿洲でけいや內地新聞でも珍らしい事であつた。

そして最初は、その誕生をあれ程までに祝福された日日が最近あまりにも淋はず、只僅かに「ぱくげき機」と「赤ペン」だけで辛ふじて特徴付け、出口の振出欄、一篇に三つ四つ署名で書いてゐるなど、實に眞の淋しさへ覺へるのである。

新京の誇ける人間よ、君達は必ず一度は過去に日日の厄介になつたんじやないのか。

今でこそ原稿料云々を云へる身分になつたのかも知れないが月に一度は書いてやつたらどうか。

大新京は實に活潑だつた。

僅かにも！ろ「原稿料を出す」、と云ふ餌も作者を引つけるには十分效果的ではあつたが、製版部を持つ面白さ、插畫、カットなどのオマケまでついて完全に先輩日日の文藝欄を壓倒した形であつた。

特に在滿作家と讀者を動員して中篇連載を始めたのは、何と云つてもヒットであつた。

が、和田社長になつてから虐待されてゐる樣に見えるのは筆者一人だけの僻みであらうか。

新聞は結局事業である、だから學藝欄は一體にどこでも廣告の犧牲にはなるものではある。

だが最近は目立つて出ぬ日の多くなつたのは又單に廣告部が淋んになつてそれだけ新聞の景氣がいゝのだと、一概に考へられない。何故かならば、和田社長の特ダネ的宣傳をしてゐる「東京だより」は、新京の新聞に是非必要なものであらうか。

あれを讀む人は恐らくあれと同じ樣な、いやあれ以上のものを內地新聞を通じて讀んでゐるのではなかろうか、

人間の和田日出吉、鮎川一族の和田、そして卓絕したジャーナリストとしての和田日出吉は、何も室伏高信あたりが、而も和田の新聞に書かなくとも、我々は十分御承知申し上げてゐるのである。

この無駄を、切角出來た地元滿洲の文藝の爲に、より以上活用してくれてこそ和田の和田たる所

じやなかうか。」

情勢は漸次變つて來たのだつた。（それにしても、和田君は近頃でもまだ在滿文學者を輕視する傾向があるやうだ、この一文、誰が書いたのか、鋭い所を衝いてゐる。）

雜誌『新京』が『モダン滿洲』になつたのはこの年、五月からだつたと思ふ。

『新京』十三年一月號から我々は次のやうなものを拾ふことが出來る。

戰爭と文學　紀藤男
あの頃の支那　三井貫雄
流水の幻想　長谷川濤
中國映畫漫談　守山淳
滿洲に於ける藝術論　長谷川正雄
新しき日への舞踊論　中山義夫

昨年の映畫についての走り書　木崎龍
狂歌師河田家のこと　板垣守正
久米仙人にあつた話　山川博
南京陷落（短歌）　津田八重子
結婚の仲人　河利致
老劉の正月（小說）　大內隆雄譯作

錚々たる面々が顏を並べてゐるわけであるが、木崎龍の「昨年の映畫についての走り書」など、珍重すべきものであつた。

日記に散見する感束ないメモを顧りに、自分の感想を書きつらね自分は自分なりの昭和十二年映畫總決算を作つておかうと思ふ。だから、自分の見損つたものには、當然ふれないことにするし、だから「科學者の道」だとか「人生は四十二から」など、好評だつたものでも、ここからこぼれ落ちることになり、嚴密な決算にはなり得ないが、同時に又、こんな覺え書もあつてよからうとも思

ふ。大體、映畫は現代人にとつて生活の一部分になり切つてゐる、洋畫輸入禁止が痛切にたへるのも、自分の體の一部をはぎとられるやうなものだからだ。だからその影響だとか、國策的對策の確立だとかも、痛切な問題になるわけで、更に、その發展と發展の方向も、ゆるがせに出來ない問題だ。やれ時間の浪費だとか、奢侈だとか、放縱だとか言つて、みたところで、唐變木の寢言に過ぎない。映畫は、ずつとその先の深い所まで進んでゐるのだ。大體、日本の映畫對策なんぞなつてはゐない。歐米の企業は、日本といふ市場をいゝ喰物にしてゐる。アメリカ物なぞ、特作物一本にお添物數本つかなければ買へない仕組になつてゐる。だから、その餘計な入費は觀客層にふりかゝつてくるし、それでなくても買ひ漁るやうな始末にもなる。一體日本の在外公館は文化的には無能に近い。覓ひは無能をしひられてゐるのかも知らないが、それにしても、一寸動けば、映畫の合理的な輸入位わけなく出來ようといふものだ。我替理で歐洲映畫の輸入は統制出來ても、日本支社を持つアメリカ物には、それが利かないなど、相當のどかさを通りこした風景だ。輸入禁止などより、根本的な映畫對策を樹立すべきだ。尙輸入禁止は十二年一杯といふのが、今年四月まで持ち越しとなり、更に半永久的たるやも計られぬといふ有樣になつた。非常時だから、といふのではおさまるまい。非常時なればこそ、文化對策は充分愼重を期せねばならない。他人事ではない滿洲映畫協會も、充分覺を据えて萬全を期して貰ひたいものである。

右のやうな書き出しで始まつてゐる。（木崎がつねに、何を論じても、第一級の意見を書いてゐたことは右の引用でも判斷される。）そして「禁男の家」「紅天夢」「永遠の處女」「振鈴の青春」「女性の反逆」「波氏と女學生」「新しき土」「女だけの都」「ジプシイ男爵」「からゆきさん」「平原兒」「嵐の家」「潛水艦SOS」「目撃者」「家庭一代記」「結婚クーデター」等についての感想や批判を書いてゐる。木崎はこれらを東京で觀たのであつた。そして昭和十二年映畫總決算と題して、「結切りは過ぎてゐるし、傳ら聞いてゐるので、今度はこれだけ」と言つて、四月までに觀た分をしか採つてゐないのである。四ケ月に十六本――彼は映畫にも熱心であつた。このうち「女だけの都」と「傑作」とし、「樂しかつた」とし、「それにしても、市長のアレルム、夫人のロゼエ、スペイン公のミュラ、伯爵のジューヴエ、說にすばらしい傑作の演技である。彼等は發聲一杯に動いて、われらを壓倒する。特にロゼエは體全を以て語すべきだ。長夜の場面、窓台から市民に演說するところ、正に傑作である。われらは迫力の塔をうつうに想及された自分を、しばらくは取戻せないのである。傑作である。」と書いてゐる。「からゆきさん」については「滿洲大村氏十二は、これを可成

内面的に堪下げて、われらの前に提示して見せた。荘十二は常に努力の最後の一點で敗れ去る未完成作品に終始してゐる。僕は、彼の「河向ふの青春」以來、何がなし彼に心惹かれて、常に次々をと期待してゐるのであるが、この作品では、スピイディな運びに彼の腕のよさを見、特に村の公會堂の落成式の場面、村民のカラユキさん罵倒による混亂の美事なさばき方には、思はず拍手を送らずにゐられなかつた。だが、この作品でも、彼は遂に投げをうつてしまひ、自分も土俵を割つてしまつたのだ。もと〳〵彼には粘りといふものが缺けてゐる。彼のよきリアリズムは常に最後で、恰度根負けしたやうに潰れおちるのである。それは又、個々の場面にさへ指摘出來るのである。最後の場面での「アントンさん」の呼び聲へのこだはり方に、彼がどうにかして惹にしてしまはふとする投げである。さうして、彼のからゆきさんへの内面的追及からは、てもなく身をかはしてしまつてゐるのである。しかし、僕は依然として彼に期待をつなぐだらう。それは、何といつても、この國の監督中心で、創作の意欲に燃える逞しさを持つ少數者の一人が彼だからである」と。なほ「目擊者」について激賞的な言葉を書いてゐるが、ここには省略することとしよう。

前後するが『モダン滿洲』十三年五月號に私は[redacted]の一文を書いてゐる。

最近滿洲に於ける文學行動が異常に活氣を帶びて來たことは明瞭な事實である。此の事は日本人が此處で書くものについても滿人が書くものについても言へるのである。

これは建國後すでに相當の年月が經ち、此處に住む人々が一應の落ち着きを得て來た證左でもあらう、官邊的方面等に於いても、文藝文化の問題に對して相當の關心を拂ふやうになつて來たことも指摘出來る。例の民生部大原賞の設定などもその一例である。

ただし注意すべきこと一斯うした官邊的關心などに、全幅の信頼をかけて、この國の文化の問題が悉く盡されるなどといふ考へを持つべきでないといふことである。由來日本に於いても、滿洲支那に於いても、優れたる文學は實に人民の側から生れて來たものなのである。この事は現在の滿洲に於いてもあてはまるのだ。

× ×

さて具體的に見よう。纏つた形で文學の仕事を精力的に發表しつゝあるものとしては、『新京文藝集團』『作文』等をあげるべきであらう。もつとも、彼等の業績に相當のムラがあることは免れない。最近のものとしては後者に於ける高橋恭遷の「新興國」が注目される。

次にこれらのグループの外に在つて講新聞雑誌に活躍してゐる連中がゐる。[illegible]、今[illegible]清、今村久米子、山下[illegible]、[illegible]、多木羊子、波多[illegible]その他である。兎に角作家は書くことが肝要だとみんなについて言ふことが出來よう。

詩、短歌、俳句等の諸集團もあるがこゝにははぶく。

滿人の文學について書きたい。

彼等にとつての不幸は、作品發表の舞臺に乏だ限られてゐることである。

これは實に滿洲國の不幸でさへあると言はねばならぬ。新聞は乏しく數が減つた。雑誌として見るべきもの故今のところ『[illegible]』と『新青年』くらゐである。それも一部の特定的な作家群に占領されてゐる傾向があるやうだ。

作品は色々と現れてゐる。滿洲の現實をいきいきと描き出そうとすることに努力が拂はれてゐるのを知り得るのは欣ばしい。なほ技術的には缺陷、未熟[illegible]もあらう。これから適切な改善策を講ずべきである。さきに計畫された滿洲文藝協會がどうなつたかと筆者は知らないが、斯うした方面でそのなすべき仕事があることを思ふのである。

――右を見ると、この頃にも別に「滿洲文藝協會」の計畫があつたらしい。尤も、滿洲文話會はすでに前年の夏出發してゐるのだから、それを更に擴大發展させようといふ案を指してゐたのかも知れない。

右の一文に出て來る人物のうち、[illegible]については今や周知の所だが、當初は『滿洲』などにかけて、『滿洲行政』等にも作品を出すやうになつたのだつた。

[illegible]は、私は新京日日[illegible]として知つてゐるのであつた。やがて、[illegible]の同人として活躍した。何處かの物置みたいな所で深夜[illegible]をつけて原稿を書いてゐてボヤを惹起し大火傷を負つたといふ知き、文學に燃ゆる彼の姿を語る逸話であらう。

[illegible]も新京日日で勤務した。當時ゲンサーで、夫君と[illegible]だつた。『滿洲行政』にも書いてゐる。

[illegible]は滿映にゐた愛すべき文學青年で、熱情を持つた國粋的の支持者だつた。新京日日にもよく書いた。彼が編輯した『滿洲映畫』は若い彼の熱情と才能とを傾けた記念碑だと言へ[illegible]と言ふの

は、彼は長春座が焼けた時、折悪しく座内の友人の部屋に泊り込んでゐて、無惨な死を遂げたからである。

椿繁雄は天理教にゐた人で字のうまい人だつた。

渡多傳は山岡萬之輔――後年、童謡集『まーちよ』を出してゐる。

次に、『モダン滿洲』八月號の文藝欄の時評の作品評の部分を寫して見よう。

文藝集團第六輯

『文藝集團』はこの集から隔月刊定期刊行物になつた。そしていよ〳〵同人雜誌としての體裁だけはとゝのへて來た。

先づ新人森崎貫三郎、「空しき部落」、長篇の一部であり未完であるが、これはこれだけでも十分面白く讀ましてくれる。

筋も面白いし、筆も立つ樣である。只素材が內地の田舍で、少くとも明治年間のものである。作者は最近渡滿しただけだそうだが、今暫らく、滿洲に生活し、滿洲を題材にしたものを書いてもらひ度い。

作者はどこまでも通俗作家である。通俗物で結構、次の活躍を期待する。

傍點のあまりに多いのはキザだし、わざとらしいルビは却つて讀み難い。

大鶴二雄「洋火工」、これも未完だから批評は差控へるが、これは田谷三郎が生前よく書いた勞働者である。

下級勞働者である、洋火工が鋸に噛まれて殉職する。その後に殘つた女房と六人の子供達の生活苦、工場は機械を買ひ入れねばならんから今は一錢の金も惜しいからと慰藉料を拂はうとはしない。しその買ふと云ふ機械が入れば何十人かの職工の職を奪ふ事になる。

そこに資本家と勞働者との對立が出來てくると云つたものだが、最初の說明が少し冗長に過ぎないだろうか。

何にしても少年大鶴の熱心な態度とその精力的な筆を買はう。

奥三「大地の歌」これは創作じやない。一つのルポルターヂュであり農村風景のスケッチである。前々號の「天使は欠伸する」と云ひこれと云ひ輕文學家としての作者のもう一つの片面としてこうした純滿洲物に手をつけ出した事は喜ばしい事であるが、いづれもまだ習作時代である。次の作を待つて批評しよう。

通過して今の『文藝集團』ではまだ國都を代表する同人雜誌三三ふ域にはまだ遠い感がある。決戰熱に刺り惑んでるるメンバーの中には、錚々たる顔ぶれを揃へてゐるが、その人達の出馬は待つてゐる。

『滿洲行文』七月號には三つの創作がある。[illegible]「廣場」、これは明るい溌剌とした青年滿洲の姿である。新緑の廣場（希望に滿ちた）と八方に擴がる道路（國威上でも云ふか）へインケルンと協和青年の結束び、そしてその時、この土地の延長であるどこかでは歴史的な、地圖の色が塗りかへられてゐるんである。輕い筆致と巧妙な技巧はなか〳〵立派なものである。

[illegible]「出發」、これは不健康な小說である。不健全な結婚生活をしてゐる女が家出する書き出しである。

こんな女はきつと新しい生活への「出發」でなくて、恐らく北滿を流れ歩く淫賣婦にでもなるのだらう。前の「廣場」の明朗さにくらべていゝ對照である。

[illegible]「臨海」、筋は平凡な、小市民的な家庭生活を扱つたものである。

只筆が調れてゐるだけで讀ませる小說である。

今月の國都の文藝界はゞこれゞと云ふ大物も出なかつた。何となく覇氣を感はせる淋しさである。

――ちなみに、[illegible]は女名を用ゐといひ、[illegible]にゐた若い女流作家であつた。『[illegible]』に多く書いてゐる。[illegible]と現実あり、私ものちに彼と交りを結んだが、昭和十三年十一月十日、三十歳で、[illegible]愛妻[illegible]見をのこして死んだ。遺作「採炭夫」が『モダン滿洲』同年五月號に載つてゐる。北支の炭坑[illegible]働者に取材した。異色ある小說である。

（本書執筆中に分つたことであるが、モダン滿洲八月號の[illegible]G[illegible]W[illegible]あつた、彼はモダン滿洲五月號掲載から廢刊に至るまで終始編輯に從事した。）

なほこの年一月、若い詩人[illegible]が自殺してゐる。

第十五章　滿洲文話會が出來て

滿洲文話會について書くべき順序となつた。

滿洲文話會ははじめ大連で發祥したものである。昭和十一年の春だつた。

『滿洲文話會通信』の第一號は同年九月十五日に出てゐる。それによれば、七月、八月、大連では例會が開かれ、七月には隨筆集『寶騎薄餘白』を出した柴藤貞一郎博士が「文學と醫學」について語つてゐ、出席者に井上鱗二、橋本八五郎、西村眞一郎、岡一郎、奥行雄、川口彦太郎、筧太郎、吉野治夫、瀧口武士、中島新、八木橋雄次郎、藤井圖夢、秋原勝二、城小雄、田川亮、坂井鑑司、福家富士夫、上村哲郎等が見え、八月の會では綿由貞家、大谷健夫、大野斯文、横澤宏、高尾憲太郎、松畑優人、青木實、坂口千馬太、平井孝雄、島田幸二、小山田忠男、秩父忠敬、古屋亘芳等が加はつてゐる。

なほ綜京では八月、支部設置を議し（その參會者は、堀善照、宿紗智、奥一、今村久米子、魏野重明、大坂嚴、高木喜久藏、今村榮治、江草茂、竹田讓、桃北好澄、大内隆雄、今井一郎、宮川靖）、郎、夏本草朗、池邊青拳等が加はつた。

きたこの頃、G氏文學賞委員會では『滿洲文藝年鑑』第一輯刊行の仕事を進めてゐた。また、參豐子の歌集『七草』が東京のあしかび社から出版されてゐる。

昭和十三年一月の全會員の名を擧げてみよう。

大連　伊藤順三、井田透二、井上鱗二、井上一郎、石森延男、池田孝、絲山貞家、濱田篤一郎、西村眞一郎、富田充、大野斯文、大島清明、江野想、川口彦太郎、香川末光、筧太郎、甲斐永棹、横澤宏、吉野治夫、高尾憲太郎、高山峻峰、田中總一郎、武田一路、田川亮、武田勝利、瀧口武士、津田雄編、橋原健三、八木橋雄次郎、抑生昌勝、松畑優人、古川哲次郎、福富青生、藤井圖夢、藤井千鶴子、青木啓、青木實、秩原勝二、齋藤欣志郎、坂口千馬太、三溝久三、城小雄、島田幸二、進藤智惠子、田中武夫、大脇武夫、奥行雄、奥藤多藏、長濱哲三郎、中瀧新一、中島新

三井正雄、三好弘元、水口徹郎、[illegible]藤貞一郎、島原進治、進藤武之輔、中澤[illegible]人、横内國夫、鈴木[illegible]兵衛、島崎恭爾、木原いふ子、長谷川四郎、橋本末喜、林一郎、竹内晋、富島正美、大下三雄、下田孝雄、土田淳一、有田貞助、加藤二郎、古[illegible]重芳、秋父忠敬、坂井鈴司、渡部榮、細井常夫、加藤節男、長谷川晋、仙原東一、大谷健夫、平井孝雄、鹿島雪秋、富田進、藤原定、大岩[illegible]吉、吉田智貞智、中川潤、[illegible]家哲士夫、

[illegible]　今井一郎、大内隆雄、富川靖、[illegible]田[illegible]之輔、三井貞雄、[illegible]北好淺、北村[illegible]次郎、[illegible]照、[illegible]沙智、今村久米子、奥一、武本正男、竹田[illegible]、山川博、佐藤[illegible]郎、夏木章助、大坂[illegible]、今村榮治、高木[illegible]、[illegible]野[illegible]、美濃谷善三郎、[illegible]谷[illegible]郎、坪井興、松本[illegible]、佐々木勝造、藤山一雄、[illegible]、江[illegible]

[illegible]　富田[illegible]、[illegible]、加藤[illegible]、[illegible]長靖、小杉茂[illegible]、三宅[illegible]子、白井[illegible]子、平野博三、富井一郎、大[illegible]武年、林[illegible]生、

[illegible]　伊東[illegible]、伊東千鶴子、菱田正雄、[illegible]治、矢[illegible]三郎、島田のはぎ

[illegible]　志賀清一、村[illegible]三、小池[illegible]天

[illegible]　吉賀[illegible]、竹内節夫、城島[illegible]、砂[illegible]

その他　上野凌碧、吉田孝一、島田清、高木恭造、松原一枝、岡二郎、川上旗男、西島貞子

[illegible]　竹内正一、近藤[illegible]十郎、古川賢一郎、荒井[illegible]、[illegible]川[illegible]、日向伸夫、渡邊[illegible]、[illegible]永節子、渡邊[illegible]の

昭和十二年末頃、新京で[illegible]といふ文藝同人雜誌を出さうといふ計畫が進められた。その同人たるべき二十の顔ぶれは次の通りだと報ぜられた。

赤川[illegible]一、岡田益吉、一谷清昭、飯田秀世、牛島春子、今井一郎、木崎龍、今村久米子、木島、阿部好雄、北田良平、[illegible]部秀見、杉村勇造、美濃谷善三郎、高田[illegible]吉、[illegible]、長谷川四郎、[illegible]宮繁、武藤[illegible]男、坪井興、三枝朝四郎、野澤榮二、矢原[illegible]三郎、藤山一雄、北村謙次郎、佐藤政郎、[illegible]藤伊與吉

これと見ると、大體の見當はつく、[illegible]文藝集團が在野人の團體だつたとすれば、『白想』は[illegible]、[illegible]峡のたりの連中を集めようとしたものだつた。だが、この『白想』はつひに刊行の運びに至らなかつた。

この頃、詩誌[illegible]の活動めざましいものがあつたことが追想される。

十一月下旬、大連で『文話會懇親會を兼ねた「滿洲に於ける文學活動」同座談會を催してゐる。その要點速記が『滿洲文話會通信』第四號に出てゐるが、これは粗雜な、誤謬の多いものであつた。

『奥太もんのマンシュー』を出したのもこの頃。收むる所、「孤は死んだら何を殘すか」「秋のアパートの住人たち」「曇り後晴」「ザハロフさんの話」「秋と長屋のお神さん」「マルーシヤと云ふ女」「フラフラ行進曲」「空想部隊」と表題の作。何れも、彼らしさをよく示した作品だつた。

『北滿追悼詩集』（大連、裸跣詩社）、『水師營』（島崎恭爾の小說「風」、宮本のぶの隨筆「裏道」、城小碓の詩「待避線」を收む、大連詩書倶樂部）等もこの頃に出てゐる。

昭和十三年三月には、文話會と大連放送局の協力により詩の朗讀の放送が行はれた。詩作品は高木恭造、城小碓、井上鱗二、富田充、古川賢一郎、北川冬彦、安西冬衛、瀧口武士、小池亮夫、落合郁郎、八木橋雄次郎等のもの、朗讀者は瀧口武士、絲山貞家、千種光子、松本美穗等であつた。

昭和十三年初夏には、近來詩人部が哈爾濱から北京に移つてゐる。

七月には滿洲歌友協會が生れてゐる。

その年八月、新京文藝集團の刊行物は第六號ともつて終焉した。

多木羊二の作品集『青き夜の醫師』がモダン滿洲社から刊行された。

大連詩書倶樂部は『普蘭店』を出した、島崎恭爾、宮本のぶ、三宅豐子、城小碓のものを收めてゐる。

衛藤正二の『氷花』が作文發行所から出た。

『滿洲文藝年鑑』第三輯は昭和十三年末、滿洲文話會によつて編纂され、滿蒙評論社から刊行された。

その內容は次の如きものであつた。

概觀　西村眞一郎

評論　大谷健夫

小說　城小碓

詩壇　中斐水棹

和歌　高山峻峰

俳句

兒童文學　石森延男

評論

滿洲文學の精神　城小碓
滿洲文學に就て　角田時雄
當爲的と自然的　大河節夫
建設の文學　木崎龍
幻想の文學　加納三郎
滿洲文學の特有性　金崎利光
滿洲文化の文學的基礎　上野凌嶺
東洋の猶太民族　西村眞一郎
滿洲に於ける文學の方向　川上旅男
滿洲文學運動の主流　佐藤四郎
滿洲文壇の回顧　古川哲次郎
最近の國文學研究思潮につきて　渡部榮

川端康成論　大谷健夫
チェーホフに於ける「戯曲」　紫藤貞一郎
「天才論」執筆の序説　西川清六

詩

黃河　高木恭造
殿堂　井上驟二
蝶の宵　城小碓
天邪鬼一　吉川賢一郎
湯　小池寒夫
滿洲百年詩集　三好弘光
七月の滿洲　古尾直芳
蝶の歌　坂井艷司
遼北斷章　矢原邊三郎
遼　甘地滿

鴉　小杉茂樹
小說
手記　吉野治夫
一農夫　青木實
夜の話　秋原勝二
西嶺木倫河　福家富士夫
ある少年の記錄　木崎龍
泥家　鈴木啓佐吉
老家行　長谷川四郎
滿洲の受胎　工清定
隣一二軒　町原幸二
逃亡　今村久米子
母へ　西川清六
桔梗の李節　松原一枝

安東　島崎恭爾
幾山河　富田壽
流離　竹內正一
短歌
事變は進む　甲斐水棹
栗原大尉　富田充
離心抄　荒川石楠花
旅順　伊藤千鶴子
年若き僧　香川末光
雨と滿人　新井重美
激流渡舟　相川澤
苦力　宮島正美
吾兒　椿田正東
北支事變抄　永原いね子

俳句

南嶺　三澤沙美
新京　三木朱城
氷山　高山峻峰
不毛の地　久米幸蟲
幸天　石原沙人
月　金子麒麟草
春耕　江川三味
柳絮　森鶴袋治
春驚　青山靜丘

短歌

馬の聲　筧太郎
落葉衣裳帳　磯本八五郎
止渦花火　石森延男

深谷温泉にて　竹内節夫
川柳と滿洲　石原徹徹
秋の隨筆　三澤沙美
雜錄（略）

これが第二の「滿洲文藝年鑑」第三輯（これは滿洲文話會で發行した）では、次のやうな目次となつてゐる。

詩論　酒井眞一郎
小說　青木實
詩　八木橋雄次郎
別　鶴山貞藏
短歌　金子麒麟草

俳句　柳生昌勝
兒童文學
評論
最近の滿人文學　大内隆雄
決算と展望　林適民
滿人ものについて　青木實
藝術と職業　井上麟二
國策文學論　上野浚嶺
滿洲文學雜考　古川哲次郎
滿洲文學理論の整理　西村眞一郎
詩論　八木橋雄次郎
肉體の悪闘　三好弘光
日本古典主義文學における女性描寫覺え書　太谷健夫
とりかへばや物語について　渡部榮

火野葦平論　木崎龍
室生犀星の圖　宮井一郎
滿洲雜誌論　加納三郎
隨筆
沿線八種　秋原勝二
日記とカレンダー　紫藤貞一郎
水野さんの話　三宅豊子
隨想　木原鐵之助
大晦日　大岩峯吉
國郷雜記　加納三郎
朝鮮見たまゝ　山崎元幹
競馬と子供　鹿島鳴秋
暴風雨の前と後　金崎賢
哈爾濱の憂鬱　排北好澄

長歌、高城子村の記
夢だけは同姿に肩に

詩

日本島歌園　加藤　都哉
建設工事　石森　延男
一輪車　瀧口　武士
稲　畑　古川賢一郎
鶏の詩　八木橋雄次郎
馬の詩　城　小雄
インテリの歌　高木　恭造
解氷期序情　小杉　茂樹
雪の朝　三好　弘光
やどかり　西原　茂
獨　言　落合　郁郎
宮下　秀雄
太田　正

二五四

猫をせるアポロ神の詩
編輯期ボ夕間に佇みて

歌　港　敬甘地　清
沙漠の植物　井上　藤二
樺兵衛和歌　鈴澤　宏
五月の風の中で　坂井　龍司
航海船　松畑　優人
矢原檀三郎
藤原　定

短　歌

冬滝　泉　相川　澤
身　邊　安倍　喬
白き太陽　新井　重美
現　實　荒川石楠花
興　亞　伊東千鶴子
小川　皓司

出發　香川末光
聖戰二歳　故甲斐水棹
重貨　甲斐雍人
夏日抄　神山哲三
送別　木田晴夫
戰場の友　樺田正東
明暗　島田のはぎ
戰況　鈴木清
哈爾濱　高橋房男
春雜　武田尊市
南京陷落　津田八重子
母逝く　寺本初音
事變下吟　富田充
櫨の林　富永幸子

一首一題
金剛山そのほか　中島新
無題　西田猪之輔
夜の青葉の演奏　橋本淺夫
思靈塔大祭　平山斌
秋冷　故平山登志夫
鷺　三井貨雄
淺茅が原　宮島正美
俳句　桃北好澄

伊太利親善使節を滿洲へ迎へて
雜詠　高山峻峰
軍旅餘詠　石原沙人
滿洲四季　栗生純夫
四季　森脇要治
志和斗史

雑詠三句	三木朱城
雑詠	金子麒麟草
小説	
同行者	今村榮治
蘇へる花束	長谷川滑
生地	北村謙次郎
土龍	鈴木啓佐告
雪室	牛島春子
雪子	吉野治夫
きち	三宅豐子
馬家溝	福家富士夫
窓口	白向仲夫
蛤	富田壽
天使は欠伸する	奥一
空しき部落	宍戸貫一郎
雪の日	島崎恭酒
村會	上野凌磨
小さな石	近東鑄十郎
風	横田文子
ギルマンナバート諸描	竹内正一
秋の頃	菅木實
滿洲の胎動	工清定
アリョーシヤ	国[illegible]義
人造絹糸	[illegible]松
雑録（略）	

なほ、この本により、滿洲文話會、滿洲歌友協會『俳文』のほかに、『滿洲浪曲』（後述）、『文志』（後出）や下記諸團體があつたことが知られる。

○『鶴』（大連）同人――松畑優人、小池亮夫、宮下秀雄、三好弘光、西原茂、瀧口武士、井上鱗

一、八木橋雄次郎

○撫順文學研究會（『蹄聲』不定期刊行）、會員――相原繁、今井修二、東郷皇枝、鶴田和平、竹内節夫、母里山正夫、西澤千之、松本亞士、不二亭、市來一郎、梶原貞次郎、安藤一明

○『三〇三高地』（大連）同人――島崎曙海、川島豐啟、舟木白波

○『文學地帶』（新京）同人――今村榮治、大脇一雄、太田正、高木喜久藏、酒井悅子、宍戸貫一郎、篠原捷三、下島莊三、庄野ふみ、廣中一雄、桃北好澄

○『滿洲文學』（新京）同人――草川千章、志賀修、ささきつや、堀善照、遠藤美津雄、熊城次、佐和山一郎

○アカシヤ短歌會（大連）主宰者　甲斐雍人『アカシヤ』刊行

○滿洲郷土藝術協會（大連）代表者　香川末光『滿洲短歌』刊行

○滿洲短歌會（大連）主宰者　西田猪之輔『合萌』刊行

○滿洲歌話會（哈爾濱）主宰者　三井哲雄『滿洲歌人』刊行

○北滿歌人社（哈爾濱）主宰者　相川澤『北滿歌人』刊行

○平原俳句會（大連）機關誌『平原』

○大連俳句會（大連）機關誌『滿洲通信俳句』

○滿洲俳句會（大連）機關誌『滿洲』

○雲口俳句會　主宰者　古川而作　機關誌『白豚』

○滿洲石硝鑛盟（奉天）機關誌『山磯子』

○哈爾濱學院黑水會　主宰者　佐藤青水草　機關誌『蹄聲』

○滿洲新短歌協會（大連）機關誌『短歌開拓』

○新俳句聯盟（大連）

○滿洲番傘川柳研究會（奉天）

○川柳大陸社（奉天）

○國部吟社（新京）

○大連川柳社

なほ右年鑑で指摘のほかに、甲斐水樟、平山登志雄が故人となつてゐる。平山登志夫は昭和十一年來新京神社に在り、十四年急病で死んだ、『滿洲歌人』八月號は彼の追悼特輯であつた。

甲斐水樟女史の死は昭和十四年五月。

戰ひはすぎて久しき樹山の
　起き伏しさやに澄むそらの色

この歌を刻んだ大連中央公園山の茶屋中腹の女史の歌碑除幕式が前月に行はれたばかりであつた。なほ當時の新聞文藝欄を語る一資料として、「モダン滿洲」康德六年一月號から佐々木勝邊の「新聞文藝欄展望」を左に寫して置く。

大連から奉天へ、本社機構の移轉を契機として「滿日」の學藝欄がどう動くかは、頗る興味を惹く問題であつた。

而してこの「滿日」の奉天進出は、從來その姉妹紙的存在であつた「奉天日日」を合併すると共に十二月一日を期して斷々行はれたが、關東州內一體に對しては、本社機構の奉天移轉完了後も引續き大連支社に於て從前通り「滿日」を印刷發行するといふことになつた。即ち、奉天本社では全滿向きの「滿日」を、大連では關東州一帶を主とした「滿日」をそれぞれ別々につくることになつたわけである。

しかし、それまでに屢々巷間に傳へられた如く、結局、この「滿日・學藝欄」だけは分離移轉を見ず、依然として大連に於て全滿共通の編輯整理が續行されてゐる。

あらゆる意味で、かつての滿洲文化の母胎であつた大連を中心として「滿日・學藝欄」が傳統的に其の地盤を固めて來たことは、今更繰返すまでもないが、中樞機構の奉天移動といふ「滿日」月報の重要な轉換期に當つて、舊學藝欄陣容の引續き大連存置も勿論必要にして且つ意義有る事乍らしつゝそれぞれの學藝欄をつくつて行く傍ら、絕えず學藝欄相互の文化的交流を圖る事も、寧ろより以上有意義で「滿日・學藝欄」自身の發展活動を一層助長するものと考察される。無論これは人的にも技術的にも種々なる關係から、早急に實現を望むことは困難であらうが、日本に於ける「大每」「東日」或は「東朝」「大朝」的な、この「滿日」の體制が暫行的なるものでない以上、滿洲の文化的特殊性から言つても、將來充分に試みらるべき問題として殘されよう。

○

最近各紙學藝欄の著しい動向は滿洲に於ける農民文學の問題に關する提議、檢討、論議が盛んに行はれ出したことであらう。これは日本に於ける「農民文學懇話會」をはじめとして和田傳、島木健作等の農民作家の來滿が、其の拍車を加へたことは事實であるが、言ふまでもなく此の農民文學の問題は、滿洲に於て當然提議され、檢討され、論議されなければならぬ大きな問題であつて今後

益々必然的に滿洲農民文學は各紙學藝欄を飾る旺盛な課題とならう。

「滿洲にこそ農民文學」といふ「滿日」皮下注射の提唱。同じく「滿日」で湯淺克衛の「先驅移民」を中心に秋原勝二氏が論及した「思考の距離」「農民文學新動向」探求を試みんとした「滿洲新聞」吸取紙。又「哈爾賓日日」に於ける青木實氏の「滿洲文學の所在」を滿洲農村の文學に追究した所論等々。各紙共に何れも時宜に即した取上げ方であつた。

○

文藝時評は、西村眞一郎氏が滿洲に於ける作品批評を「滿日」で行つたが、他紙には無し、滿洲現地の作品を中心とした文藝時評は各紙一齊にもつと頻繁に取扱はれるべきであらう。

演劇の分野で大同劇團の森斌氏が「滿洲新聞」に「日本公演を終へて」の報告をなすと共に其の自己批判並びに劇團の進むべき方向を檢討した一文は、協和劇團の上原篤氏が「奉天毎日」に國家的意圖の下に協和運動の一翼として發展すべきこの國獨自の演劇文化を論じた「滿洲新劇運動の出發と其の特異性」と對比して、多分に興味と注目を惹くものがあつた。

小說試論として現代文學の一人の鬼を俎上に上した木崎龍氏の「火野葦平論」（滿日）破壞と建設の渦中にある現代中國文學の苦悶と更生の姿から「若い方の支那」に眼を投ぎよと言ふ「滿日」皮下注射、そして「滿洲新聞」の蘇星氏に依る「知識人の任務と東洋」は、それ〴〵の觀點、立場から事變下の時局を濃厚に反映してゐた。

又、竹內正一氏の「途上に在る宿命の文學」（哈爾濱日日）、青木實氏の「職業作家と素人作家」（滿日）は、共に滿洲に於ける文學運動の歷史的發展の特殊性を論じ、殊に青木氏が滿洲にこそ素人作家のより多くの輩出を必要とする事を熱望した「職業作家と素人作家」なる評論は、滿洲に於ける素人作家の位置、役割に確信を持つて其の意義づけを行ひ、幾多の問題を提示した。

○

滿洲文學界一ケ年の回顧は、大內隆雄氏が「新京日日」に、古川哲次郎氏が「滿日」に書いたが大內隆雄氏も言ふ如く「新京日日」が學藝欄の殆ど大半を割いて纖纖たる滿人及び中國人作家の作品の紹介は、獨自の燦彩を放つて大きな功績を殘したが。滿洲の土に根ざした農民文學の問題に相呼應して、この努力は將來更に一層續けられて欲しいもの。

登場間もない「哈爾濱日日」「奉天日日」學藝欄も、各々特色ある新生面を開拓しつゝ漸次其の內容充實を堅實に示して來てゐるが、「哈爾濱日日」は坪井滋氏のラヂオ・ドラマ放送台本「拓けゆく沃土」に學藝欄全スペースを提供する等、頗る張り切つてゐる。（五・一二・一三）

第十六章　「原野」刊行の頃

昭和十四年になると、日本文學人の來滿が目立つて來た。十三年の秋から冬へ、林房雄、和田傳、打木村治等が來、十四年には寺崎浩、阿部知二、眞船豐、島木健作、伊藤整、湯淺克衛、田郷虎雄、福田清人、田村泰次郎、近藤春雄、今日出海等が來た。

滿洲文話會では七月二日、大滿協和會館で創立二周年を迎へての定期總會を開き、同夜左の演題と講師で文藝講演會を開催した。

日本文學と滿洲文學に就いて　木崎龍
滿人文學に就いて　大內隆雄
小說に於ける親と子　上村哲彌

右の總會で、文話會本部を新京に移すことを決定した。

その後の來滿者には田邊清三郎、小田嶽夫等がある。

刊行書では坂井艮司の詩集『崖つぷちの歌』、野原幸一の隨筆小品集『是好日』（以上は作文發行所かと）、加藤郁哉の『滿洲こよみ』、篠崎曙海の詩集『地貌』等が出た。

九月、三村哲彌氏は第一公論社を創設すべく東京へ去つた。

八月末に新京文話會は滿洲文化映畫の夕を開催、九月十八日には新京陸軍病院へ傷病兵慰問映畫會を行つた。

その內、大內隆雄譯編『原野』が黃色っぽい圖案の表紙で東京の三和書房から出た。『原野』は幸ひ各方面で評判となつたが、こゝに木崎龍が『滿洲文話會通信』に書いてゐる「『原野』について」を引用してみよう。

『原野』は、古丁氏以下九人の作家の十二篇の作品を集めたものである。私は此處でそれらの一つ一つについてのべる場所をもたないし、ましてや其處から何らかの滿洲文學への其礎づけをひきだ

すことは斷念しなければならない。只、この著作集が、文話會員は勿論のこと、すこしでも澤山の人の眼にふれ、何らかの形で問題にされ、やがてはより飛躍した段階へ吾々の文學活動をひきあげて行くよすがともなればいいと、心から思ふのである。

文話會で、吾々自身の作品ばかりでなく、いやそれ以上の興味と期待とで、滿系作家の文學が問題にされてゐたのは、決して最近のことではない。しかも、言語の障碍のために吾々の多くがそれらに親しく觸るることが出來ず、從つて古丁さんなどと話しても、表面的な當々巡りばかりで、そこから掘りさげて、つつこんで話し合ふといふ所までゆかず誠にいらだたしく物足りない想ひであつた。だから、吾々もうんと支那語を勉強して、などと古丁さんたちと笑ひあつたりするのが落ちだつたのだが、それとて急場の間にもあふことではなかつた。結局、吾々の唯一の「通譯」たる大內氏の譯業が、さうした問題を埋める據り所となつてゐたのだ、昨年の秋頃から、作品集の話が具體化し吾々は双手をあげてその企てを歡迎し、大內氏の顏をみるごとに未だかまだかと催促する始末であつた。大內氏はその度に、自分が出版書店であるかのやうに、溫顏を滿くして、うゝんと大いに困つてゐたのである、それが、やつと出たのが、この『原野』である。欲をいへば滿洲で出版したかつたのだが、それもいつて詮ないことである。要は多くの人々の眼について眞面目に讀まれてくれることである。

滿洲の作家といへば、酒軍などもその一人だが、彼も今では中國の作家としての方が有名だし、何よりもまづ、吾々と手を握つて歩みを共もにしてくれてゐる古丁氏以下の人々の方が、親しみも深いのである。この人たちについては、先だつての大連の文藝講演會で、大內氏が一々作家をあげ紹介されたし、私も今は蛇足を省くことにしよう。一讀して、全體の感じがひどく嗜いことと、流れに唐突さがあり人物がぎくしやくしてゐることが眼につくけれど、そこにこの人たちの大きな惱みもあることがおもはれ、吾々はその意味でも、お互にしつかり結びついて、少しでもさうした苦惱をきりひらいて行きたいと思ふのである。かうした仕事は、文話會のこれからの仕事ともならうが、とりあえずこの九人の作家の御健闘を祈り、大內氏にありがたうを言ひたいのである。

（文話會通信二六號）

『原野』は日本でも甚だ評判になり、先づ龜田三郎氏が『日本評論』の匿名時評で取り上げ紹介した。次いで、大陸開拓文藝懇話會がこれを推薦書とした。秦房雄は『文學界』に巻中の作品について詳しく書いた。

新京では九月、文話會例會として『原野』出版記念會をやつて貰つた。その記事が『滿洲文話會通信』十月號にあるから、記念のためにこゝに寫さして貰はう。

新京文話會では、九月例會として近刊せる委員大內隆雄氏の滿人小說譯譯集『原野』の出版記念祝賀會を開催することに決定、幹事今村榮治氏、文化協會主事杉村勇造氏等のお骨折りによつて、九月一、十三日午後六時半より、同都飯店にて開催された。先づ今村幹事によつて開會、當夜、上梓された『原野』未着を遺憾とする旨報告あり、杉村勇造氏によつて、祝賀挨拶が始められた杉村氏は氏の十數年の滿洲生活に於ける業績を讃へ、最後に、滿人小說集が日本內地に於て廣く讀まれることを喜びとする意をのべれば、新京文話會に代つて岡田益吉氏が、氏の新京日日新聞に於ける學藝欄の功績をあげ、新興滿洲國の前途に文化事業の眞摯な發展を期することを希つた。ここで、當夜、出席された、賀作者の三氏（吉丁、小松、疑遷）を紹介し、次いで、北村謙次郎氏が、ユーモラスなスピーチで、氏の生活所を紹介し譯譯ぶりの文學的立派さを讃へた。滿人作家陳巒巒氏は、大內氏の『原野』は、日滿文學の交流の爲めに意義あるものと推賞、『藝文誌』を代表して日語の挨拶を述べれば、『滿洲行政』の新井氏は、終場たる言辭で、氏の滿洲雜誌界に於ける功績を顯彰し氏の譯譯は、又創作でもあると言及し氏は滿洲文化界に於ける彗星であると結んだ。その他天野光太郎氏、藤川研一氏、小林正譯氏、宮川靖氏等のユーモラスな祝辭について賀酬はにして、原作者を代表して、古丁氏が丁寧な日本語を以て謝し、大內氏が今夕の出版記念會出席者に萬腔の謝意を述べ、最後に、大內氏が、文話會委員として文話會に對する諸會員の後援を希ふ辭をもつて散會した、當夜の出席者は

大內隆雄、池邊青李、北尾陽三、美濃谷善三郎、磯部秀見、坂井艷司、[illegible]、天野光太郎、永野善七、神戸錦、小松、古丁、高木喜久藏、北村謙次郎、藤川研一、森斌、桜本捨三、杉村勇造、新井練三、岡田益吉、下島莨三、太田正、宮川靖、長谷川潛、陳巒巒、金澤覺太郎、古長波明、藤澤忠雄、新井清五郎、中村秀男、江草茂、今井一郎、攝會壽光、小林正譯、江島福一、和波蓊杉山正三郎、安達世志子、森信、今村榮治

なほ、當日臨時應召中の奧一氏より、祝電があり、モダン滿洲社主幹小原克巳氏より清酒一斗、新京日日新聞社長城島舟禮氏より金一封の寄贈があつた。こゝにその御厚意を感謝する次第である。

更に十月の例會では『原野』批判座談會を開催し、その速記を新京日日に載せた。座談會出席者は山田清三郎、古丁、小松、長谷川濬、阪井艶司、逸見猶吉、今井一郎、阿南隆、今村榮治、大内隆雄であつた。

この頃出版されたものに王清定の小說集『黄龍旗異聞』、天野光太郎の雜文集『海にくさる』永原しゐ子の歌集『鏡盤』等がある。

なほこの頃の出來事として、古丁氏が盛京文藝賞を作品集『燕飛』によつて授賞されてゐる。

和木清三郎氏が來滿した、これが後に『三田文學』の滿洲文學特輯として結實した。

十一月、西田猪之輔氏が逝去した。『滿洲文話會通信』の記事を轉用して置こう。

> 當々理事西田猪之輔氏は（病氣經過略）急逝した。享年五十二
>
> 西田猪之輔氏は曾て滿洲の歌壇が殆ど無形に等しい時代、その未踏路を開墾して今日の「滿洲短歌會」を創立、機關誌々合萌々を發刊して之れを育成今日あらしめたのは實に氏の精神的な努力と物質的援助に據るところであつたと言つていいだらう、更に昨年五月全滿に割據する歌人結社を結合して、滿洲歌友協會の創立が計畫された時、今夏物故した中斐水棹女史と共に自ら陣頭に立つて其の實現に盡瘁したのも忘れることの出來ない氏の大きな歌壇的足跡の一つであらう。氏は又最近その主宰する歌誌々合萌々に自らのポケットマネーを割いて西田賞を設ける等、滿洲歌壇に遺された氏の功績は枚擧に遑なく、歌壇今日の隆昌の蔭には氏の存在が忘ふべからざる強力な支柱であつたと言つても敢て過言ではない。

十四年末には滿洲春雄が來、日滿文藝協議會を作るために劃策したが、精神的には一致しながら、形の上では實現するに至らなかつた。日本側の組織が未だ統一されてゐなかつたことも大きな原因であつた。言はゞ出直して來い！といふやうな滿洲側の態度だつたのである。

なほ北川謙次郎、吉野治夫、大内隆雄、小松、今村榮治等がこの頃、文話會の派遣で滿洲各地に現地視察を行つてゐる。小生は、敦化、延吉、圖們、清津、羅津、雄基等を視て來た。

昭和十五年になると、先づ民生部に文化科が新設されたことが特記される。すなはち文化行政の總元締として厚生司内に新設、文化運動の指導助成その他を行ふことになつたのであつた。

こゝに康德六年の回顧を吉野治夫君並びに小生の一文で、まとめて置こう、（ともに『モダン滿洲』十二月號所載のものである）。

作品について

吉野　治夫

康德六年度の滿洲における文藝作品を回顧するとなると、先づ擧げなければならないのは何といつても滿日懸賞募集に當選して發表連載された二つの中篇小說「鋪子」北尾陽三作と「ザオドスカヤ街」蓮晶子作とであらう、

いつたい滿日中篇小說の懸賞募集は、果して、その準備が應募者側にありやと、未開發の文化資源自體が疑はれ、從つてその成果が大いに危ぶまれたのであつたが、結果は意外に相當水準の作品が多數集り、譽を並べて意を強うせしめたといはれてゐる。前二者はそのうち最も難點の少い二作として世に現れたが、その他に多數の夫々の特色に生きた捨て難いものがあつたであらうことを思へば、滿洲における文藝界の前途も洋々たるものである。

「鋪子」は新京の一小鋪の主婦が滿人ボーイと協力してアイスケーキにより商運を挽回するほゝ笑ましい筋を、日滿民族の極めて自然な心理交錯を描きながら着實に展開したもので、無難の意義もあり、危つ氣のない佳作であつた。北尾氏は以前に力作「ぬかるみの記」を發表して居り、その實力は充分知られてゐる人であつたが、此の作で一層廣く世の認めるところとなつたのは喜ばしいが、描寫が非常に新鮮で個性的で既成常套の筆に藉りることがなく、全く獨自の手法と表現を持つてゐた點で高く買へる。特に新人紹介といふ場合は此の他物を藉りぬ獨自の個性をこそ求められるのであつて、因襲的な人々にはそれが不慣れなため稚拙に見えることがあるかも知れないが、新鮮とは常に斯くして生れるものである。此の才氣横發の女流を滿洲に新たに見出したことは色彩を點じたといへよう。

由來、滿洲では男性よりも女流作家の方が着實な活躍をしてゐるが、本年度も牛島春子氏の「九目先生」の騷々たる味や、未完作「處女地」の本格的な身構へなど幾多の作品の群を拔いていたことを忘れられない。三宅豐子氏も驚くべく多くの作品を書いて、その筆力の堅實を示した。更に山口もと子氏の北滿における活躍が眼立ち、滿洲を去つた松原一枝、池淵鈴江、横田文子の諸氏も小品に作品に隨筆に點々各誌を彩つて、むしろ男性作家を量的に比較すれば後に樗若たらしめてゐるの觀がある。また新人として青木郁子、藤堂惠美子、知識初枝氏等が出てゐるが何れもしつかりした

筆力の所有者で、青木郁子氏は『滿蒙評論』に數篇の好短篇を、藤堂惠美子氏は『滿洲婦人新聞』に中篇「愛撫」を連載、獨特な果實つやうな筆致を見せ、知識初枝氏は『協和』で着實な作力を最初から一部の人々に確認された。

新聞では前記の北尾陽三氏の作の他に同じく滿日に石森延男氏が連載小說「もんくうふおん」を發表、獨自な、むしろ革命的な香のするスタイルをもつて登場し興味深々であつたが注目を集めて此の作を選土產に東京へ去つた。

量的に多くを書いた人としては北村謙次郎、日向伸夫、高木恭造、上野凌嶝、宮井一郎、北尾陽三等を擧げよう。日向伸夫は滿洲取材に作品界に持に一進展を與へたと見られてよく「一時期」「第八號轉轍器」「其池滿洲文學のため拍車的活躍が多かつた。宮井一郎は「樂土序章」を上野凌嶝は「大陸」を何れも『作文』に發表し始めたが兩者とも腰を据ゑた長篇らしく『作文』誌には珍しい通俗味があつてどう進行するものか興味がある。何れにもせよ腰を据ゑての長篇へと志す作家が二、三に留らなくなつたのは本年度の注目される現象であつたといふことが出來よう、大衆的な作品としては、工清定、多木羊二、奥一氏は依然として健筆、藤川研一、楳木捨三、母里山正夫、此小木壯介氏の作品も華やかに讀まれた。

今年度はまた新人を多く出してゐる。殊に本池繁一氏の活躍は著しいものであつたが、『作文』によつて下田浮造、園部定香、日下熙氏等、『滿蒙評論』及『新天地』で吉川一男氏が紹介されてゐる、

日下熙氏は忽然現れて、『作文』の同人となり後半期になつて矢繼早に相當量の作品を發表してゐるが、文章に特殊のニュアンスを持つた作家で、やゝ個的なところが力弱く同時にその點がたのもしけで、懷疑的で浮薄氣作家的なところがあり、特異な新鮮さで注目されてよい。

吉井一男氏は滿洲では新人と見られやうが豫て『九州文學』の同人で文學修業も一通り積んだ人らしい落着きを見せ、小品『はらから』の水際立つた藝術味、すつきりした輪郭は拔群のものであつたし、小說「背德」の心憎いまでの手慣れた筋運びや心理解說は垢拔けた熟練の程が見え、これは新人といふよりは今後の滿洲の文學のため技術的指導の立場に立つ人で、氏の親切な活躍が望ましく氏の渡滿を喜びたい。

批評家の新人として薊一郎氏が現れ、後半期において北滿の御垣衛士に桔抗する批評活動を南滿で受持つてゐた。丹念に、よく讀みその親切な理解的態度に敬意が表されるが。どこか閃くやうな鋭双の足りないのが不滿である。

その他、福家富士夫、町原幸二、長谷川濬、青木實、富田壽、竹内正一氏等、例年のごとく作品を發表したが、竹内正一氏が小說集『氷花』を出版したのを昨年度のこととすれば、氏が『新潮』に小說を發表したことなど記憶されるほか、此の人々の實力としては特記すべき年ではなかつたやうに思ふ。

更に本年度における同人誌『斷層』の誕生と活躍は目醒ましく注目に價するものであつたが、入手の機會が少く讀んでゐない私は何も言へないのを遺憾とする。

結論として今年は創作活動が盛んな年であつたかといふと、さうとは思はれない。初頭において非常に盛大になることを豫想させたが、案外それほどではなく、傑作といふべきほどのものなく、活動は極めてばらばらに持續してゐたといふに過ぎないやうに思へるが、特に舊人の活動が著はす、その代り新人がちらほら現れて新しい花園を開き始めた、或ひはその開園を暗示したといふやうな年であつたやうに思ふ。

日本文壇人の往來が繁く、從つて刺戟も小刻みに散分しながら絶えず揺き廻され、戰爭の影響も漸く精神的に顯屈したやうにたまつてきたといふ風で、文藝活動が來年はどうなるか大いに興味の存するところだが、『作文』『滿洲浪漫』等のごとき純文藝誌は小搖ぎもしさうにないし、諸文化雜誌も少しづつ向上線を辿り、或ひは合同氣運に向つて來てゐるところを見ると或ひは絢爛たる進軍期となるかも知れない。

期日に迫られ、短時日で調べもせず、記憶のみをたよりにしての回想なので或ひは大變な覺え落しや書き落しがあるかも知れないが、御海容を乞ふ。

二伸——大内隆雄氏の諸滿洲人作家の作品飜譯、宮下秀雄氏の「老殘遊記」飜譯（『滿蒙評論』）が諸誌の文藝欄を援け彩つて餘りあつたことは特記しなければならぬ。これは諸種の意味で大きな功績でもあり歡迎すべきことでもあり、感謝し且つ些か作家達は恥ちねばならぬことでもある。

滿洲文學回顧

大内　隆雄

1

出來るだけひろく材料を揃へた上で、この小稿を書きたかつたのであるが、最近種々さし迫つた用事に追はれてゐたためその餘裕を得ず、そこに本誌の原稿締切日が迫つて來た狀態で、ほんの思ひつき式に、手許に何らの參考資料も置かず、たゞ今日一日で考へたことを順序もなく書いて行く、はじめに頭を下げておゆるしに預つて置きたい。

また、作品の檢討といふやうな方面は長友吉野治夫君が書かれる由であるから、筆者は專ら概觀的な動向、傾向といつた點について書くことにしたいと思ふ。

2

第一に言へることは、今年の滿洲文學界は表面非常に活氣を呈して來たといふことであらう。これは日系、滿系、雙方についてさう言へるのである。

その若干の具體的な事實を言へば、滿洲文話會はその本部を大連から新京に移し色々の事業を以前に比べ目ばすつと活潑に押し進めるやうになつた、作家・評論家たちは各同人雜誌の上では勿論、一般新聞、雜誌の上でも大いに積極的に活動するに至つた、滿系作品の日本への紹介も行はれた、日本の作家も多數來滿し日滿間に文學の部門に於いて相當に緊密な連絡が取られるやうになつた、滿系作家は『藝文志』をはじめとして種々の自主的な發表機關を持ち先づ何よりも書く、書いて發表するといふ努力に傾注するやうになつた、また滿洲國政府の民生部がこの國の文學のために關心を持ちその育成のために方策を講じようといふ段階に到達した、協和會では文學運動の重要性を認識しその助成の要あることを思ひ工作を始めるに至つた等々……何れも喜ばしい現象が見られたのであつた。

だがここに考へねばならぬことは、これらは何れも表面的には甚だ活潑さを示した現象であり、本質的にも喜ばしい出來事であつたのであるが、その內容はどうか、その內實の成績はどうかと言へば、われらはまだ單純に樂觀すべきほどのものではなかつたといふことなのである。

文話會の活動にしてもまだその端緒が作られただけのことである。その組織にも、事業にも、なほ檢討を要し、新しい計畫を要するのだ。時流に乘つたジャーナリズムへの進出の如き、嚴に批判の必要があらう、日本文壇との接近にしても、また滿洲文學を一種の植民地文學扱ひするやうな、また端的な文化侵略論を說くやうな論調が日本には存してゐたことを思へば、簡單にこれを喜んではゐられないのである。滿系文學が盛んに出るやうになつたことはいい、しかしその作品自體の價値はどんなものであつたか、だれだけの到達點を示してゐたか、仔細に見れば、未だしの感を覺えさせられるのも多かつたではないか。

更に、滿洲國政府の積極的な文化政策への乘り出しといふことも慎重に考へねばならぬ問題である筈なのである。

3

前にも書いたやうに、筆者はこゝでは、動向といふものを問題にする。單なる作品や會合、出來

事等についての記錄のやうなものは寧しくこれを年鑑式のものに求めたらよいと思ふからである。

そこで、滿洲國の文化政策への乘り出しといふことについて少し書いて置きたい。

尤も、このことについてはまだ何ら正式に、具體的に發表されてゐるわけではない。ただ觀測記事として報道されたり一部の人が多分に自己の希望を混へて抽象的に語つたりしてゐるだけのことである。しかしともかくも、來年度から、どれだけかの程度に於いて民生部などがこの方面に乘り出して來るであらうことは間違ひないと見てよいであらう。

この問題については、筆者は他の機會にも書いたことがあるのであるが、重複する點をゆるして貰つて、こゝにも書いて置きたいと思ふ。

先づ一般的に言つて、建國以來すでに七星霜を經てゐることを思へば、今日このやうな動向が見られるに至つたことも別に不思議でなく、また早や過ぎるとも言へないであらう。それに國家權力による統一的な文化政策の實施といふことは一種の近來の流行とも言へるのであつて、特に獨逸のナチス政府が行つたそれは顯著な先例となつてゐるであらうし、つねに新しくあらうとする滿洲國官吏がこゝに考へを致したのもさもあるべきこととも思はれるのである。且つまたこの國は知らるゝやうに複合民族國家であり、しかもその大多數の民族は文化的に甚だ遲れた狀態にあるのである。良き文化政策の效用は明白である。

それ故、いま言へることは、第一にはその方法に於いて周到な用意が無くてはならぬことである。遲れてゐる民族を引き上げ進ひつかせるための考慮がなされねばならぬ。先進民族が持つてゐる高度の文化をそのまゝに押しつけることは出來ぬ。この方針はあくまでも貫徹されねばならぬ。

第二に、問題としたいのは、果して當局にさうした文化政策を效果的に實施するのに必要な人的スタフが整つてゐるかどうかといふことである。意圖だけでは、それがいかに良くても、何んにもならぬのだ。協和會についてもまた然りだ。最近の若干の經驗よりして、この點についてわれらは多大な憂慮を感ぜざるを得ぬのである。繰り返して言ふ、計畫と豫算だけあつてもどうにもなるものではない、人を！　先づ人を！　である。

4

筆者に與へられた紙幅にも限りがあるので少し急がねばならなくなつた。

今年の滿洲文學を回顧して言ひたいこと、作家、評論家への注文として言ひたいことを簡潔に言葉に壓縮して言ふと、もつと勉強すべきだ！　さういふことになるのである。

これは色々な點について言へることであつて、題材に於いても然り、技巧に於いても然りである。

る。だが、それ以上に筆者は各人の思想について、その社會觀、世界觀についてこの注文を豎高く發したいと思ふのだ。みはるかす限り何とそこには思想なき文學、思想なき文藝評論が多かつたことか！　滿洲文學の貧困はまさにその思想性に於いて横ぎつてゐるのではないか！　もとよりこれは筆者自身をも含めその評語である。わが友よ、一緒に力をあはせて前進しようではないか！　東亞協同體といふことは空語ではない筈だ。

文學人もまたそのこれの分野に於いてなすべきところに努めねばならぬのだ。

次にもう一つの、回顧より發する注文は文學をもつと社會的に進出させるべきだといふことだ。文學と連繫するところの多いラヂオに、演劇に、映畫に、今年の滿洲文學はどれだけを與寄し得たか、顧みて寂しいのである。そしてこの努力が足りないが故に、非藝術的なものを、また滿洲文化創建の方向と背馳したものをさうした分野にのさばらせるいとふことにもなつてゐるのではないか。象牙の塔から、乃至は溫度八十度的溫室から、われわれは荒々しい風も吹いてゐる原野に打ち出でねばならぬ！

草卒なこ走り書きなこゝに終る。意熟しての妄言は海容を乞願する。

第十七章　「滿洲浪曼」そのほか

ここで『滿洲浪曼』について語ろう。

「滿洲浪曼」第一輯は昭和十三年秋に出た。次のやうな內容であつた。

小　說　　吉野　治夫
姉妹のこと　　長谷川　潔
傳　說　　下島　甚三
一つの記錄　　鶴家富士夫
浙江旅社　　今村　榮治
同行者　　

鶴　北村謙次郎
白日の書　瑞田文子
アリョーシャ　田兵
詩
霧宿　大内隆雄譯
なめくぢの歌　矢原禮三郎
長城論　坂井艷司
隨筆　長谷川四郎
雑草　町原孝一
六月の雪　坪井與
詩論
窗をひらけ　木崎龍
農村を描け　牛島春子

映畫演技論　アイリスベリー　松本光廸譯
滿洲演劇の建設　藤川研一
特輯
滿洲文化について　諸家

『滿洲浪漫』の中心になつたのは眞村謙次郎である。第一輯に書いてゐるので同人と言へるの村謙次郎、長谷川濱、木崎龍、坪井與といふところであらう。第三輯を見ると、飯田秀雄、今井一郎、松本光廸、長谷川濱、北村謙次郎、木崎龍、綠川貢、逸見猶吉、黄田文子、矢原禮三郎、荒牧芳郎、岡田壽之、坪井與、大内隆雄等同人として名をつらねてゐるが、この同人の中で、北村への協働といふ點ではかなり濃淡の差があつたやうである。『滿洲浪漫』ははじめ滿洲文藝堂が發行所になつてゐた。清新な裝ひではあり、相當な作品を相當厚味のある各輯に盛つたので、かなり重厚味を持つてゐるといふ感じで一般に受け容れられたやうに思ふ。掲載作品を同人のものに限定せず、各方面から寄稿を求め民生部募集の、文藝入選作を載せたりしたことにも新味があつた。

第二輯の内容は次の如くであつた。

小説

白根堂禪祖　竹内正一
家鴨に乘つた王　長谷川潔
浮雲　青木藝吉
狂人日記　長谷川四郎
踊り三人　大内隆雄譯
滿洲の胎動（承認記念文藝當選作）　工藤清定
魚骨寺の秋（同右）　大内愛雄譯
詩
天壇にて　藤原定
地平の門　坂井艷司

行山隨筆　逸見猶吉
映畫的とは　吉野治夫
映畫雜記　多木羊二
新京斷片　荒牧芳郎
佳木斯滯日記（繪と文）　今井一郎

評論

文學の表情　木崎龍
滿洲文化映畫について　森信
同人語　編輯同人

第三輯は次の通り

小説

大同大街　長谷川濬
マーシュカ　H・A・バイコフ
畫　夜　大谷定九郎譯
石田君の幼な友達　吉大内隆雄譯
お談義部落　岡田壽之
或る環境　北尾陽三
日記帖の飜譯（建國記念文藝當選作）　北村謙次郎
春の復活（同行）　北士川久雄
詩　李夢大内隆雄譯
地理二篇　逸見猶吉
天使變形　坂井艶司
黄昏の訪問　矢原禮三郎
唄　長谷川四郎
ショパンに　藤原定

隨筆
叔父とランプの給　町原幸二
言葉の衣裳　中村能行
國語と映畫　坪井與
牛（繪と文）　池邊菁李
俳句
春より夏―　金尾梅の門
武藏野の初夏　伊東月草
評論
竹内正一論　西村眞一郎
映畫の作家精神　松本光庸
島村抱月論　木崎龍
特輯　文化關係當事者に訊く
金丸精哉、根岸寛一、青木實、吉野治夫、磯部秀見、山崎未治郎、大塚淳、藤山一雄、奥村義

信、金澤覺太郎

次は特輯で『滿洲作家選集』と題し、次のやうな内容であつた

秋	吉野一治夫
烏蘭順河	長谷川濬
梨花落つ	疑遲譯
虚脱	大内隆雄譯
或る環境	北尾陽三
地の種子	北村謙次郎
緑の歌	大瀧重直
怨	品埜ふみ
炷一支	石[illegible]編
北邊	大内隆雄譯
	木崎龍
	青木實

（これに北村謙次郎の「時評」、大内隆雄、長谷川濬、木崎龍、北村謙次郎の「四季語」と題した同人雜記を加へた。）

以上の作家、詩人等のうち、吉野治夫、竹内正一、坂井艷司、町原幸二等は『作文』同人であつた。上島英三、今村榮治等は新京文藝集團の同人、品埜ふみ（もと、庄野ふみと署名した）は新京日日等に出し、のち『文學地帶』に加はつたりしてゐる。彼女、近時、新聞などにもきめのこまかい隨想類をよく書いてゐるが、會合等には顔を出すのが嫌ひらしく、彼女の實物を知つてゐる人は少いであらう。

鎌田文子の「白日の書」は曾つて日本で發表し、芥川賞の候補として取沙汰されたこともあるといふ作品。彼女は飄然と新京にやつて來、寬城子に住み、「滿洲行政」あたりに短篇を書いたりしてゐたその後、いつの間にか坂井艷司夫人となり、いいお母ちやんになつてしまつてゐた。矢原禮三郎は日本の『麵包』等に出してゐた旅順育ちの詩人、滿映に入り、その後北支、中支へ行き最近また滿洲に歸つて、「日本人には寒い所が身體が緊張していいですよ」と言つてゐる。長谷川四郎は濬の弟、アルセーニエフの『デルスー・ウザーラ』を譯してゐる。坪井與は新聞人から映畫人になつた男。桂本光廉も久しく滿日の映畫批評で鳴らし、ついに映畫人となり、今は華北電影にゐる。青木實は大同報にゐた鮮系の青年と聞く、才能を有してゐる人と思はれたが、その後どうしたかを知らない。

満定は撫順高女の先生、最近は『月刊満洲』に入り、『迎春花』を出してゐる。

バイコフが紹介されたのは『満洲浪曼』第三輯あたりがはじめではなかつたか。中村能雄は若い満映の脚本家だつたが後に病んで日本で死んだ。大瀧重直は日本の東北にゐる農民作家、満洲に来、暫らく開拓地にゐた。

『満洲浪曼』は康德十年五月には特輯『満洲文學研究』を出した。それには次の諸篇が收められてゐる。

第一部

建國文學私論　長谷川潔
満洲詩論　三好弘光
満洲文學の基本概念　西村眞一郎
満洲文學の特質　大内隆雄
探求と觀賞　北村謙次郎

満洲文學の方向　吉野治夫

第二部

批評に就て　村岡勇
満日文學交流雜談　王則
臨床的満洲文學論　廸一郎
満洲文學私觀　日向仲夫
自然描寫に就ての　丘益太郎

第三部

古丁に就て　羊[illegible]
寒馳とその作品　小[illegible]
満人作家論・序說　木崎龍

第四部

『作文』四十輯まで　宮井一郎
満洲ジャナリズムの一面　新井練三

第五部

御用學家に就ての斷片　池邊　育李

滿洲清樂序說　陳　其　芬

この特輯はいろいろな意味に於いて、非常に意義ある企てであつたと思ふ。いろいろな角度から文學を中心とする滿洲藝文の探求がここで行はれ、一應の結實を示してゐるのである。

この後、『滿洲浪曼』第五輯は興亞文化出版社（大學書房）に移り、四六判となつて康德七年十一月に出てゐる。內容は——

憩　魚　筒井俊一

月地抄（詩）　檀　一雄

春　鶯　北尾陽三

回歸線　黃地作　森谷祐三譯

蜜柑に寄せる（詩）　高森文夫

松花の流れは輝いてゐる（戲曲・三幕五場）　大內隆雄

更に翌年春には春季作品集『薤玉殘歌』を出した。內容は——

薤玉殘歌（詩）　檀　一雄

鐵路機廠　鈴木啓佐吉

蟹　長谷川滑

樹々に匂ふ魚　檀　一雄

皮　鞋　黃地作　大內隆雄譯

私の平凡な生活の記錄　北尾陽三

附錄　白系露人作家紹介　大谷勇夫

跋、長谷川滑、大谷勇夫、鈴木啓佐吉、北尾陽三、檀一雄

そして、康德九年には『滿洲浪曼叢書』として北尾陽三の『明暗』、大內隆雄の『或る時代』、鐘

末廣恭雄の『愛情の緩急』、喜多亮春の『流沙香綺譚』を出版した。

年四季刊といふはじめの案は必ずしも實行されなかつたが、『滿洲浪曼』は以上のやうに續いて來た。ひとへに北村謙次郎の頑張りに依ると言はなくてはなるまい。

康德六年、新京で出た『滿洲文學』には遠藤美津男（重川千童）、熊城次、綠川貫、志賀修、ささき・つや、堀善照、佐和山一郎、吉川直志、西谷正夫、白石傳、砂山楠雄等が書いてゐる。遠藤、熊、佐和山、吉野、志賀、砂山、西谷のほかに吉留幹雄、永井光春、重村貞雄、川口了が同人だつた。このうち、重川千童、西谷正夫は新京日日にも頻繁に投書した連中で、私には懐しい人たちだ。どちらも後に日本へ歸つたと思ふ。

『文學地帶』の同人は、[illegible]、大脇[illegible]雄、友[illegible]、高木[illegible]、酒井說平、安戸貞[illegible]郎、篠原捷三、康野[illegible]、[illegible]雄、[illegible]北好登だつた。

[illegible]北も新京日日の文藝募集で登場して來た男で、高等商業を出てゐるといふのにそれらしくない、鹿兒島生れの純情歌人、のちには新京日日に入つて來た、その後。哈爾濱日日に轉じ、今は牡丹江に愛妻とおとなしく暮してゐるやうである。

忘れ難いのは高木[illegible]、彼また新京日日で登場、新京文藝集團の能動的な詩人として活躍した。はじめ明治製菓新京營業所に勤務、前年滿拓に入り、四月出張中、北滿で匪襲に遭ひ二十五歳の生命を殉職したのであつた。新短歌から出發、詩作に熱心だつたが、殊に重厚な風格、友情に厚く、みな痛惜したことであつた。

これより先、大連では長老井出（西巻）[illegible]が逝いてゐる。詩師としてより、演藝研究家として知られ、放送界への盡力も大であつた。

『滿洲文學』に詩を書いてゐる『ささき・つや』といふのは、新京日日にも短歌が入選したことのある某婦地にゐた年增の女性だらうと思ふのだが、或ひは誰かの假託なのかもしれない。

なほ康德七年春、大連で『大陸（ングラブ）』といふのが出來、『大陸文藝』を刊行してゐる。西村良雄、松谷優里、井久保健次、岡本勉等が書いてゐた。

撫順の『新[illegible]』はいつ頃から出たのであらうか、康德七年にはすでに七、八輯を出したやうである。最近出たのが二十一輯であるから、この撫順文學研究會も續いて來たものである。

滿鐵哈爾濱圖書館の『北窗』は昭和十四年に創刊されてゐる。文學關係では渡邊伸吉、三宅豐子、木崎龍、赤川幸一、山口もと子、大瀧重直、加納三郎、紫藤貞一郎、藤原定、唐木順三、島木健作、富田壽、石森延男、吉野治夫、合志光、井田淺三、村岡勇等が書いて來てゐる。

なほ同誌二卷一號に石森延男氏が書いてゐる一文は資料たる部分があるので拔き書きして置こう。

私が渡滿したのは大正十五年の春であつたが、その時、滿洲に住む子どものために、讀物が全くなかつたのが、何よりもなさけない氣がした。成人たちは、それぞれの娯樂もあり、讀書しようと思へばいくらでも圖書はあるが、子どもには、極めて冷淡な仕打ちをしてゐた。兒童文化などといふ運動が、やつと今日本に起りかけてゐるのでもわかるやうにその頃、滿洲には、子どもを想ふ人は僅かであつた。幸ひ私は、教科書編輯部に勤めてゐたので、子どもの文をかゝねばならなかつたのを機會にして、兒童文學に身を入れ、いくつかの讀物を、自費出版する決心をした。

『ますの』（これは、小學生のために、上年用と下學年用の二種、月刊）をだし。中等學生のために『帆』を、年三回に刊行した。道のないところに道を拓くことのむづかしさは並大抵ではなかつた。たとへ細くとも一本の道ができれば、その道を傳つて歩いてくる人があるものだ、そして、『童心行』といふ同人雜誌になり、『童話作品』となり、『日本の少女』となり『裝』となつた。しかし同人の住所がちりぢりになり、めいめいがよき實を結んだので、『裝』をこの十一月をもつて解散してしまつたのである。この間十三年、もし、滿洲にも兒童文化史といふのが編まれる時がくれば、この流れはひらひあげられていいものもと思ふ。

――確かに、『帆』などは私も見たことがあつた。それと、『月刊滿洲』がやはり一時、稚い者のための附錄をつけたことがあつた。これには寺田喜治郎氏などの助力があつたのだと思ふ。

この頃の來滿文人には、村山知義、岸田國士その他がある。岸田氏は滿洲からの旅の歸りに製糖會の文化部長就任交渉を受けたのだつた。

康德七年六月、滿洲文話會でこしらへ關東軍に獻納した『滿洲よもやま』について少し書いて置こう。それは前年の總會でその刊行を決議したもので、一年近くかかつてやつと出來上つたわけであつ

た。菊判二七〇頁に地圖、グラフを添へた内容豐富な一冊本、執筆者の顔觸れは在滿文事人を總動員した賑かなものであつた。すなはち――

表紙　池邊一寿李
口繪（風俗・風景）　三枝朝四郎
滿映演員寫眞　滿映宣傳課
扉
卷頭言「滿洲よもやま」に寄す　白崎海紀
小說　牝鶏　長谷川少佐
童話　兵隊先生　牛島春子
滿洲の歷史の話　山田健二
滿洲の地理と住民　奥村義信
隨筆　山崎末治郎
滿洲好き　高橋源一

新京と無作法　新井練三
滿人の日語勉強　橋本八五郎
戰線とラヂオ　金澤覺太郎
車窓にて　井上壽二
樂屋裏とぼれ話　綠山貞家
總愛統制委員會　丸山海介
コント
王さん　青木實
水洩り事件　長谷川潛
半田半平のこと　木崎龍一
ホントにサヨナラ　町原幸二
勝雨　今村榮治
延長戰　富田壽
皇帝カツレツ　下島浩三

十郷　誠
三谷　善衛

銃後に協和會あり
産業五ケ年計畫と特殊會社

詩

沙漠の中　小杉　茂樹
春の國境　城　小碓
白熊淵歩　島崎　曙海
宗瓦賦　坂井　艷司
獄　禱　小池　亮夫
繪と文　國都　池邊　青季
〃　年齢　武田　一路
關東州の話　西村　眞一郎
滿洲田舍のことども　上野　凌響
短　歌
七月の北滿　藤山　一雄
心境をうたふ　永原いね子
兵　發　つ　富田　充
初　日　影　島田のはま
北滿の春　富永　幸子
をみな我　津田八重子
銃後一束　中嶋　雍人
なはとび　寺本　初青
新短歌
日記より　白井　尚子
硝子の歌　藤井千鶴子
滿鐵縱斷　朝倉　嗣郎
開拓村の概要と逸話　宋次　嘉平
滿人の娯樂　奥村　義信
滿人の風俗　大内　隆雄

猫　二題　三好弘光
コント　酒井美津子
スイートピーのやうな女　北村蘆次郎
チエの一人ぐらし　近東綺十郎
季節　日向仲天
バスを待つ間　北尾陽三
祖父　秋原勝二
秋のコント　吉野治夫
滿洲の傳說　編輯部
漫才　滿洲見てある記　古長敏明
隨筆　農の家一ちやん　嘉の家惠ちやん
客舍　藤山一雄
兒童點々　八木橋雄次郎
奉撫傳道　田村光子
息子　大野斯文
武運長久　天野光太郎
人情ととうがらし　今西忠一
實話小說　ひとはたぐみ　藤川研一
ユーモア小說　鶴と兵隊　山下義行
俳句
早蕨の聽下にて　金子麒麟草
川柳　軍國調　森脇裏治
花柳哲學　大島・濤明
女性よもやま　鷲崎哲二
滿洲の娘たち　加納三郎
滿洲女學生氣質　柳生昌勝
密蜂の如く　山口もと子

コボちゃん　三宅　豐子
哈爾濱・奉天間　原　三千代
今は昔北京籠城手記　磯部　秀見
滿洲十勝（川柳隨筆）　大島　壽明
浪花節　日の丸供養　滿鐵社員會選
琵琶歌　柳田驛長、　滿鐵社員會選
浸　蟲

梅林秀麟、杉田八郎、李平和、エボス、坂本牙城、藤井日出刀、王仲子、佐々木じゆん、杉田八郎、久保田天津生、藤井日出男

江戸小唄
古川柳
小說　滿洲の受胎　工　清定

右のやうな內容である。文話會では一般からの購讀希望が多く、軍の諒解を得て、一般向けの分を作つて賣つた。一圓といふ安い値段だつた。

『滿洲よもやま』の序文は仲賢譲、大內隆雄の名で書かれ（仲が書いたものと思ふ、或ひは吉野か？）、編輯人が仲、發行人が山口愼一となつてゐる。實務に多く當つたのは今村榮治で、今さら乍ら、感謝に値ひする。

原稿では磯部、丸山、鷲崎の三位一體氏が大いに活躍してゐることがわかる。そのほかに、古川柳、古小唄も彼の選したものであつた。ところが、これらは好色乃至反道德の故を以て大分御難を蒙つた。私個人の感想を言ふと、國枝光子の「奉撫街道」など、ちよつと史的な（？）意味を持つてゐるものなのである。彼女、その少し後、川口姓となり、私をしてその事あつて奉撫街道晴れてゐるの一句をものさした……。

奥三方の漫才も凝つたものであつた。知らず、合方の名は、當時の……彼女を藉れるものに非ざるか？

書き洩したことを少し追補して置く。

康德七年、民生部大臣文藝賞は古丁「平沙」に與へられた。

康德七年の文話會總會は六月三十日、民生部講堂で開催、議長代議員會に杉村勇造、金澤覺太郎、山崎末治郎、木崎龍、大內隆雄、吉野治夫、今井一郎、北村謙次郎、[illegible]樣、坂井艶司、今村榮治（以上新京）、橋本八五郎、城小碓、西村謨一郎、古川哲次郎、島崎曙海、絲山貞家（以上大連）、富田壽、今西忠一、青木實、小杉茂樹、飯河知記（以上奉天）、竹內正一（哈爾濱）、上野凌嶝（齊々哈爾）が出席、傍聽者に民生部深井文化科長、同科清水鐵一兩氏があつた。本總會講演者は、金澤覺太郎、高原富士郎、美濃谷善三郎、佐藤甫、高橋房男、橋本淺夫、劉國瀧、劉儀青、吉野治夫、大內隆雄、杉村勇造、木崎龍、[illegible]實、[illegible]、[illegible]樣、坂井艶司、津村雅雄、小川久次郎、森斌、楳本捨三、藤川研一、鮎川三彌、境野一之、伊藤正次、阿蘇高行、八木一平、北尾陽三、森信、信濃悠久、江幡寛天、島田和夫、竹部勝之進、小島保太郎、山崎末治郎、今井一郎、[illegible]樣、新井綵三、[illegible]、山田清三郎、北村謙次郎、磯部秀見、[illegible]、今村榮治、寄本司麟、綠川貢、下島甚三、筒井俊一、町原幸一、安達義信、[illegible]、山內利之、青木實、日向伸夫、中山美之、飯河知記、小杉茂樹、今西忠一、富田壽、宮井一郎、橋本八五郎、西村謨一郎、古川哲次郎、島崎曙海、絲山貞家、城小碓、竹內正一、大野澤綠郎、上野凌嶝、岡野清平、[illegible]、秋原勝二、伊藤豐、高木恭造で、傍聽者に關東軍報道班長長谷川少佐、同鈴木騎託、民生部深井文化科長、同清水鐵一、村山知義、國通吉良記者等があつた。

この頃、故[illegible]の歌集『埴道以後』が出、島崎曙海は『宮廷班戰記』を出してゐる。國民[illegible]部へ入つた。

八月には朝鮮の作家[illegible]氏が來、新京では座談會を開いた。

更に、『滿洲年刊歌集』第一輯が、紀元二千六百年奉祝の意味で滿洲歌友協會から刊行された。一百六十餘人の短歌作品を集めものであつた。

[illegible]城湖塔氏の遺句集『[illegible]』は大連文話會から刊行された。

『作文』同人の作品を淺見淵が編纂した『[illegible]』が發行された。

九月發表された滿洲文話會の役員一覽を寫して置こう。當時の文化的人材の配置が知り得られる。

本部

會長　岡田益吉

理事會（理事）

文藝部長　淺枝青甸

美術部長　馬場冠樵

演劇部長　大塚淳

音樂部長　根岸寛一

映畫部長　紫藤貞一郎

大連支部長　衞藤利夫

奉天支部長　杉村勇造

新京支部長　牛田敏治

哈爾濱支部長　近藤喜助

齊々哈爾支部長　石原嚴徹

北京支部長

東京支部長　未定

事務局

事務局長　吉野治夫

文藝部委員　大內隆雄

山田清三郎

衞藤古琴

陳辛鑫

美術部委員　吉野治夫

杉村勇造

池邊青李

甲斐巳八郎

演劇部委員　佐藤功

板垣守正

藤川研一

磯部　秀見
[illegible]　北小路功光
美濃谷善三郎
小貫雲四郎
中山　義夫
木崎　龍
高原富士郎
[illegible]　今井　一郎
古川哲次郎
青木　實
高崎　草朗
上野　凌嘩

音樂部委員

映畫部委員

新京支部幹事長
大連支部幹事長
奉天支部幹事長
哈爾濟支部幹事長
齊々哈爾支部幹事長

北京支部幹事長　近東綺十郎

支部

新京支部

支部長　杉村　勇造
幹事長　今井　一郎
文藝幹事　長谷川　潛
[illegible]　青
美術幹事　今井　一郎
演劇幹事　白崎　海紀
森　武
音樂幹事　楳本　捨三
八木　一平
映畫幹事　酒井　義雄
森　信

奉天支部
支部長　衛藤利夫
幹事長　青木實
文藝幹事　富田壽
美術幹事　小形茂樹
演劇幹事　日向伸夫
宮井一郎
青木實
横山繁行
野田武太郎
前田昇
飯河知記
中山美之

一坪井與

音樂幹事　今西忠二
映畫幹事　酒井英津子
高尾憲太郎
澁谷哲夫
橋本壯介

大連支部
支部長　紫藤貞一郎
幹事長　古川哲次郎
文藝幹事　城小雄
井上麟二
平井孝雄
大野斯文
橋本八五郎
武田勝利

美術幹事　島崎曙海
　　平山斌
　　川崎陸奥男
　　河野想
　　三井登
　　栖原健三
演劇幹事　青山奉路
　　絲山貞家
　　池田孝
音樂幹事　古藤孝子
　　池永由雄
映畫幹事　西村眞一郎
　　古川哲次郎

哈爾濱支部

支部長　牛田敏治
幹事長　高崎草朗
文藝幹事　加藤齡明
美術幹事　山口もと子
映畫幹事　高崎草朗
　　東紀江
演劇幹事（舞踊）　多田修
音樂幹事　小野崎仁
　　山路一郎

齊々哈爾支部

支部長　近藤喜助
幹事長　上野凌嶺
文藝幹事　鬼木魁
　　古足重芳

美術幹事　宮脇謙太郎
　　上野　淺嶺
　　藤居　二郎
演劇幹事　兵頭　青史
　　河合　利貞
　　田中藤四郎
音樂幹事　馬場　豪
映畫幹事　稻岡壺之助
　　野木千代壽
　　西本　終吉
　　瓜生　吟

北京支部
支部長　右原　嚴徹
幹事長　近東椅十郎

東京支部
諮問機關
會長顧問　未定
關東軍報道班長　長谷川宇一
大連市長　別宮　秀夫
協和會中央本部輔導部長　恒吉　秀雄
齊々哈爾市副市長　橋尾　信次
民生部教育司長　田村　敏雄
奉天市副市長　多田　晃
滿鐵理事　中西　敬憲
總務總弘報處長　武藤　富男
齊々哈爾鐵道局長　大橋　正己
奉天省次長　松田　令輔
黑江省次長　松田　芳助

民生部文化科長　深井俊彦
滿洲映画協會理事長　甘粕正彦
關東州廳長官　三浦直彦
滿洲演藝協會副社長　三浦義信
大連商工會議所會頭　首藤定
最高檢察廳次長　平田勳
滿鐵新京支社長　平島敏夫
滿洲弘報協會理事長　森田久
新京特別市副市長　關屋悌藏
理事會參與
滿洲弘報協會業務課長　田中總一郎
滿洲日日新聞社長　松本豐三
滿洲行政學會常務取締役　新井綱三
民生部編纂官　寺田喜治郎

滿洲電業理事　山崎元幹
新京日日新聞社長　城島舟驛
新京特別市公署教育科　和泉德一
滿洲新聞社長　和田日出吉
滿洲國通信社編輯局次長　瀬沼三郎
マンチュリア・デーリーニュース社長　小野敏夫
滿洲國共配給會社取締役　駒越五貞
滿洲車情案內所長　奥村義信
滿洲拓植公社總務部長　村山藤四郎
新京書籍院副院長　坂西輝信
立法院秘書長　[illegible]
民生部厚生司長　玉乘錦
新京滿鐵、電業プラスバンド樂長　加藤哲之助
協和會中央本部實踐部長　[illegible]

協和會奉天省本部事務長　山口重次
滿洲醫科大學教授　黑田源次
滿洲醫科大學教授　鈴木直吉
協和會大連事務所長　小山貞知
大連市會議員　恩田明
纐道總局弘報課長　芝明研三
大連　木原幾之助
大連　田村詢一
大連　平島信
齊々哈爾新聞社長　片山敏三
齊々哈爾放送局長　向利夫
協和會龍江省本部事務長　平山節
哈爾濱中央放送局長　三井實雄
大連音樂學校長　國山民平

大連音樂教授所　村岡樂童
滿鐵嘱託　高津啟
哈爾濱日日新聞社長　寒河江啓吾
東滿日日新聞社長　須佐美芳男

これを見ると、些か感慨も覺えさせられる。その後の身分の變動。離滿した人々もある。すでに故人となつた人もある。

蒼水瀬治三郎氏など、まことに惜しい人物だつた。遺稿句集は後に友人によつて刊行されてゐる。

――私とは、氏が北支を引きあげ大連に立ち寄つた頃から縁があつた。氏は「儒林外史」の飜譯を、石本憲治氏に預け、私はそれを原文と照合したものだつた。後に滿日に連載されたあの飜譯である。また新京に來てからは、よくその氣焰を聞かされた。われわれはそれを「おでん屋談義」などと名付けて、尊敬したものだつた。談論風發、あの禿げた頭から湯氣を立てて、熱辯主張した。のち、胸を病み、一時は孟家屯に療養、その強い意志で一と頃盛り返してやうだつたが。つひに逝いた。岡田益

吉氏が日本へ引き上げる際には、新京初湯の新聞人だけでの送別會をやつたが、その時には老も出席したものだつたが……。

村岡業輩、須佐美芳男等もすでに亡い。（なほ前記の、會長顧問の中には、交渉中の人もあつた。）

康德七年度には、民生部の援助により日本及び國内奥地への會員派遣を行つた。

その顛末は次の通りであつた。

日本派遣

池邊青季、[illegible]、[illegible]、富田壽、日向伸夫、[illegible]、今村榮治、坂井艶司、[illegible]、大内隆雄

國内奥地派遣

川崎陸奥男、竹内正一、樣本捨三、[illegible]、北田一男、平山敏、[illegible]、町原幸二、[illegible]、北尾陽三、小杉茂樹、古屋重芳、青木實、赤羽末吉、上原三郎、今井一郎、綿山貞家

この企てはかなりの收穫があつたと考へられる。坂井艶司、今村榮治などはこの時、初めて日本内地の土を踏んだのであつた。私も七年振りに東京へ行き、紀元二千六百年のお祝ひの日を過し、鄉里柳河へ寄り柳河へ寄つて歸つて來た、私の報告は「最近に於ける日本文化界の動向」として提出した。日本文化界が漸く新體制組織へ進み入らうとしてゐる時であつた。東京では石原、坂井、今村、大内のために上村哲彌、阿部一郎、近衛榮十郎、日下恭、野村正良、池澤鈴江らが歡迎會を開いてくれた。また文藝家協會及び日本文藝中央會常務理事今日出海、日本文學會諸會員（河上徹太郎、横光利一、上田廣、阿川弘之、小林秀雄、中島健藏等）、『文藝』の小野田文夫などに會つた。

さきに齊々哈爾の文話會支部發會式があり、それに私は派遣されて行き、齊々哈爾の劇場で講演をやつた。（これは富井一郎が『滿洲行政』に「齊々哈爾文話會發會式」と題して小說に書いてゐる。）その後、牡丹江支部が出來、吉林の支部も發會式をやつた。吉林では折柄來滿中の石井柏亭氏が講演、私も講座を勤めた。滿系の女學校が會場だつたが、良い聽衆だつた。吉林では新井清五郎、秋原勝二兩君に大いに奔走された。

この年の終りには文話會組織と協和會との聯絡についての協議が進められた。が、それはつまり

した具體的な形をとるまでには行かなかつた。

蘆溪利夫『短笛』、川島豊敏『北保壘』（詩集）等が出版され、滿日出版部企畫の『大陸の相貌』の編輯が進められてゐる。『大陸の相貌』は滿洲及び北支在住の文筆人を總動員して、滿洲、北支の實相を傳へようと企畫された一書であつた。

長谷川濱雄はききに滿日にバイコフの「偉大なる王」を「虎」と題して譯載したが、これが文藝春秋社並びに滿日から出版され、世評を呼んだ。

康德八年。

二月には、安東支部發會式が擧げられてゐる。

が、漸く、新しい情勢の展開が迫つて來た。三月十五日發行の『文話會通信』には、次のやうな標語が掲げられてゐる。

◇如何なる組織の變遷あるとも、文話會精神だけは堅持しよう
◇各地の文化會を永久に榮えさせよう
◇文話會はあらゆる文化問題の精神的母胎である

なほ上野白人氏がこの年死んだことを書いて置く。『滿洲』に寄せた「長春思ひ出記」が遺稿となつた。前年あたり、鎌倉から滿洲へやつて來、元氣に見えたのだつたが。

この年の夏、新京日日新聞の學藝欄に「新京文藝人イロハ歌留多」なるものが掲載された。それには次のやうな前書きが附けてあつた。

「新京文藝陣の惡太郎ども、先夜某所でビールを飲みながら合作したといふイロハ歌留多の文句を送つて來たから御紹介する。合作者の氏名は預るがまア怒らずに味はれ賜へかしとのこと、責任は當方にないですから……」

史實の正確を期するために、合作者の一人は大内隆雄であつたことを告白して置かう。そのほかに藤川研一、春信、今井一郎、北尾陽三、北村謙次郎などがゐたやうである。（記憶は些か朦朧としてゐる。）

なほ今日、四十八人中、二人の物故者を出してゐる、虔んで弔して置く。

この餘興的内容の原稿を掲載するのについては、あらかじめ當時の城島新日社長の諒解を求めたのであつた。寒井禮また四十八人中の一人でもあつたし。「宜からう」彼はさう答へた。そこで直ちに、翌朝の紙面に出、さかんなる物議をかもしたり、賑かな長い話題となつたりした。

事の起りは確か數人の連中が「武蔵」あたりで、飲んでゐて、おでん鍋の向ふ側の娘さんをつかまへて「君イロハ歌留多のロを知つてるか？」てなことを言ひ出したのに始まり、それから、新京藝文人を扱つた新作品ことさへようといふことになり、當時の「コルト」「馬芳グリル」等を移動しながら協議討論――「雰囲」を集めてデッチ上げものなのだつた。

以下、本文を掲して置く。

× ×

イ　ろ好みの捨三さん…
ロ　れつの廻らぬ長谷川潔
ハ　んそう宵の今村荣治
ニ　たもの夫婦の牛島一家
ホ　ラで鳴らした森信さん
ヘ　ラ〳〵するのは漫談の今井
ト　んだり跳ねたり鍛部秀見
チ　の氣の多い岡益さん
リ　巧過ぎるは木崎龍
ヌ　らりくらりの綠川
ル　ンベンまがひの北尾陽三
ラ　とこ泣かせの百合子女史
ワ　けのわからぬ赤川理論
カ　んで含める奥村義信
ヨ　ふてくだまく北村謙次郎
タ　めてゐそうな藤山一雄

レ　イ儀樽はぬ牧野清男
ソ　ラ向いて行く植一雄
ツ　かれ顔なる吉野治夫
ネ　ン湖を入れた清三郎
ナ　かす飛ばずの板垣守正
ラ　ク天公子は高眞の三枝
ム　かし呼らした總一郎
ウ　は氣性なは藤川研一
キ　なか廻りの森武さん
ノ　んべんだらりの上脇進
オ　つとり樽へた北小路
ク　ち手十六丁の武藤さん
ヤ　け肥りの恒太郎
マ　たも出ました杉村勇造
ケ　ウ緒居士の清水民生
ブ　ン學を語る長谷川班長

コ　ひ知ひりそめた坂井艶司
エ　ン談前科の高柳
テ　イ操堅固な安達女史
ア　かぬけしない東一
サ　ケ飲みや鍾鬼の池邊青李
キ　を見て資る大内隆雄
ユ　ウ辯居士の新井謙三
メ　に來た飯田秀世
ミ　かけ倒しの坂巻辰男
シ　んみりとする町原隆筆
エ　ロ談上手な城島社長
ヒ　からひてゐる高原富士郎
モ　ッサリとした逸見猶吉
セ　イ年館長米治郎
ス　みに置けない筒井俊一
京　の夢根岸の夢

第十八章　滿系文學史の展望

本章で、滿系文學への史的展望を試みる。滿系文學の歷史については、各所で語り、また書いて來たが、『觀光東亞』昨年十月號に滿系の一文『滿洲文藝史話』が出てゐるので、先づそれを見ることとする。

滿洲の新文藝はその胎動期から、今日のやうに發展して來た經緯を、若し正確に言へば、二十年餘りの歷史しか持たないので、その成長と發展の過程については、今日に及ぶまでの事情を系統的に述べることは甚だ困難である。その最大な原因は、卽ち滿洲文藝が胎動期よりその後の發展に及ぶまでは殆ど全滿が新明紙のお副へものとしてその生命が支へられてゐて、且その發展して來た徑路は甚だ散漫でうつたからである。今日參考になるやうな文獻が殘つて居ない許りでなく、試みにこの二十年間に辿つて來た發展の足跡を取纏めて、はつきりした輪廓を描き出さうと思つても、恐らくそれは不可能であらう。現に筆者が本文で僅かにその過去及現在の文藝刊行物並に執筆者を概略的に述べられるのが、はつきりした歷史的姿態は明晰に書き得ないことを遺憾に思ふものである。

滿洲文藝の歷史を時代的に觀て、大體次の三つの時期に分けることが出來る。卽ち第一は滿洲事變前の東北時代の文藝、第二は滿洲國建國後の文藝、第三は近年來の所謂滿洲文藝である。滿洲事變前の文藝は、その當時「東北文藝」と稱してゐた。卽ち滿洲が支那の東北に位して居るから當時は「東北文藝」と稱したのであらう。滿洲事變後になつては、もう「東北」など云ふ人は居ないが、然し滿洲文藝の名稱が考へつかなかつた。近年になつて「滿洲文藝」と呼ばれるやうになつたが、これは卽ち日本人の云ふ滿洲文學になるのである。次にこれを三つの段階に分けて述べることにしよう。

一、東北文藝

支那の邊陲地方に位して居る滿洲を、試みに歷史的に觀察するなれば、この地域は昔から文化程度が遲れ勝ちな地帶であつて國內一般の文化が如何に昂揚しても、滿洲だけはこの文化運動の波流に卷きこまれるのが常に緩慢であつた。支那の五四、五卅運動は民族解放の二つの偉大なる段階で

あり、そして又文化運動の最高潮時代とも云へよう。文化に關する限り滿洲は常に遲々として進まない地域であるとは云へ、然しこの二度の大きな波のうねりが遂にこの邊陲荒蕪地にまで打ち寄せてきて、時代の激動に伴ひ、新文藝の萌芽も自ら萠え出し始め、ぐん〳〵生長し來つたのである。

民國六、七年頃まではなほ、舊文學が甚だ盛んであつたが、五四運動の洗禮を受けた滿洲の青年達は、いづれも舊文學の桎梏から解放せられて、試驗的に新らしい形式で文章を書くやうになつて來たのであつた。然しながら當時の作品は、形式と云はず內容と云はず、執筆者達の、舊文學の風格より離脫せんとする、あらゆる努力にも關らず、その幼稚、淺薄さは避け難い事實であつた。これはつまるところ當時は白話卽ち口語體を利用して文章を書かうとしても、語彙の缺乏と作者達に正確な世界觀がないために、僅かに口語體を利用して平凡な故事しか書き得ない。題材選擇の眼識もなければ主題の發揮もなし得ない狀態であり、甚だしいのになると新文章の中に時時舊文學中の慣用熟語等を持ちこんだりして、自ら新しい語彙を創造する力が全然なかつた。

但し初期の新文藝作品が形式上に於て古典華麗難解な舊文句をして平易な親しみ易い言葉に置き換へたことは事實であつて、それらの作者達が一樣に古風な解り兼ねる語彙を使用して事物を表現することを欲してゐなかつたのである。

初期作品の內容は半ば以上は意識的になされた朦朧たる厭味を伴ひ、堅實な觀念がなかつた。故に書かれた文章も均しく抽象的に流れ、具體的な論據を持たなかつた。

當時の文藝運動といふものは、謂はば從來の勢力に對する反抗であつた。だから青年達の書いた文章は、殆どが古來の暗い家庭的の束縛制度と、男女婚姻の不自由とを描いて居る。或は男女の自由戀愛思想に憧れて書いては居るが、そこに選擇された題材があるのでなく、只身邊の微細なる雜事を取扱つて平凡な物語りを綴つてあるに過ぎない。

これらの初期に於ける文藝の主なる思潮は、總括的に言へば、家庭的の壓迫に對する抵抗、延いては戀愛に憧れ婚姻の自由を欲するそれであつた。換言すれば卽ち現實に對する反抗と思想上の憧れとでいふことにならう。

初期の文藝的の刊行物としては、奉天では『學藝會』より發行されてゐた『學藝旬刊』と新東學會より發行の『新潮』とがあり、吉林に於ては白楊社より發行されてゐた『白楊』があるが、三種共に既に廢刊されたもの。前者は民國十二年頃の出版で其の編輯人は趙鴻光氏である。又初期の文藝の執筆者としては、奉天にあつては王卓然、吳竹村、卡煥階、王雪彤、趙小蕙、王捷俠、郝卿風等が居り、吉林に於ける白楊社關係の作者には穆木天（該氏は現在中國文壇に重要な地位を占む

る名作家である）劉或同、何諾人等が居る。『白楊』の創刊されたのがおよそ民國九年頃で、約七回程發行された。この『白楊』と『啓明』とが滿洲文藝最初の文藝團體である。

上記三種の刊行物以外は、恐らく當時の滿洲文藝は何れも新聞紙のおそへものを以て甘んじてゐたのである。

『啓明旬刊』の後を受繼いで奉天に在つては奉天青年會文學研究會と云ふ組織があつた。民國十七年に及んでは春潮社より『漫聲』も發行された。『漫聲』は僅かに一回きりではあつたが、然し過去の文藝陣容に較べると、著しい進歩が見られる。春潮社の幹部同人としては周楽舞、[illegible]等が居つて、この團體には、南滿各地の會員に限らず、北滿地方の文學青年も多數含まれて居た。そして『漫聲』廢刊後に於いても何此等會員達は矢張り長い間ずつと活動をつゞけてゐた。

大連では大連青年會から『青年叢』が發行された。內容は純文藝雜誌ではなかつたが、然し文藝に對しては多少の貢獻がないでもなかつた。其の他新聞紙のおそへものとしては、例へば「奉天民報」「哈爾濱公報」並に「晨元報」等何れも文藝作品を多數に登載した。民國十四年より十六年迄の間には、支那革命の勢力が漸次滿洲內に侵入して來た。この新らしい勢力は若干の新文藝讀物をも齎したので、その當時は新文藝が東北に於て逐次に領域を擴大し、奉天では更に「東北文學研究會」なる組織もあつて『[illegible]』がその中堅であつた。

出版方面では、東三省文藝編譯廠より出版された『東北新潮』なるものがあつた。これは久しき間に亘つて發行されてゐたが、內容を檢討すれば、殆ど新舊文學が雜然と掲載されてゐて、文藝の選錄に新又は舊の觀念が乏しく、文語體或に口語體文の小說を載せ、又舊詩舊詞をも載せて居た。新文藝の創作に就て若しその內容意識を檢討すれば、矢張り舊小說中の才子佳人のローマンス的事柄を脫して居ない。故にその『小說新刊』なるものは、當時の滿洲文藝運動の代表的出版物とは認め られないのである。

外に關外社より出版されてゐた『關外』なるものは、生氣に充滿した純文藝雜誌と云へるが、又眞に新文藝途上を邁進する強者とも云ふべきであつた。『關外』に載せられた作品は未だ完全に初期的作品の幼稚性を脫して居ないとはいへ、その作者等は確かに「文學は人生の表現なり」と云ふ事を洞察してゐたらしい。だから其の書かれた文章の意識上に於ては確かに進歩したと云ひ得るのである。

當時の滿洲社會の情況は、一方に於いては外力の壓迫を受けて居り、內面に於いては少數の軍人及び政客達が極端な淫慾生活を營み民衆は如何かと云ふと、その多くは困苦缺乏、饑寒の生活をし

て居た。だから多數の作者達が、好んで取上げる作品の題材は、大半が殆ど軍人政客達の野蠻な振舞と社會の暗黑並に農村の荒涼さであつた。

其の外に淺薄なる戀愛物語りを書く人々も居つた。當時に於いては一般の青年等は何れも舊禮教の束縛から迅速に解放されんことを唱へて居る。事實自由戀愛と云ふのは舊禮教より觀れば絶對に許されない事柄なので、舊禮教の壓迫に對し積極的に攻擊して居る。そしてもと〳〵自由戀愛と云ふのは青年達の憧れであるから、當時書かれた文章の殆どは女に關するロマンス的なこと許りであつた。

これは卽ち作者達の新文學に對する修練がまだ〳〵缺乏して居るのを示すものである。故に作品の風格等は均しく素樸簡略でその言葉遣ひも自己の使ひ慣れた言葉だけをならべて、單純な故事を表はして居るといふ風で、斯樣な狀態は殆ど當時一般の作者の通弊になつて居た。例へば『蘭外』第四輯に載せられた『計畫村氏執筆の』『場後』の如きも、其の內容は匪賊達が或る圓滿家庭を破壞、離散させる經路を描き、以て役所、官吏等の無能振りと野蠻な振舞とを現はして居るのだが、これらを表現する言葉遣ひは殆に贅言は求めずとも、餘りに簡略單純であつた。然し乍ら當該作品は當時の幼稚な文壇上にあつては確かに佳作の類に屬して居ると云へよう。

尙同じ作者の第九期『白雪』に發表した『國魂の情緣』と云ふのは往復書翰類の形式を以て、或る人が或種の權域の壓迫を受けて種々殘酷なる待遇を受けて居る有樣を描いて居るが、讀者をして作者の熱情が字裏行間より迸るかの樣に覺えしめると共に、人々の感情を激昂に導きもする。其の他『蘭外』、『旅』等も秀れた作品を書く作家である。

『蘭外』は創作方面許りでなく、文藝理論の紹介にも非常に盡力した。尙新詩も澤山掲載せられて居るが、これらは然し形式上に於ては矢張り舊詩の風格を脫脫して居ないのである。

『蘭外』と『小說新刊』の外に、當時に於いては又『長虹』『夜航』『浪花』等の雜誌があつたが、いづれも長期の發展を得ずして短い生命で終つた。

これ等雜誌の外に、各新聞紙の副物にも從前より逐次新文藝作品を載せるやうになつて、奉天新民晚報の『文學週刊』並に東三省民報の『文學副刊』等の如きは殆ど何れも文學を以て主體として居る。

個人が出版した黃振卽ち單獨本は、『夏孟剛氏著『寂寞之友』及李殘僕氏著『驛魂』』と、云ふのがあるが、『寂寞之友』の內容を通觀するとその題材が低級であこ許りでなく、形式も非常に陳腐である。

民國十七年頃の滿洲の文壇は、與者を二種の思潮に依つて形成されてゐる。本來から云へば滿洲

の文藝の動きは、主に中國文壇によつて左右されて居る。これを顧みるに其の當時に於て東亞の無產階級文學革命標幟を立ててから、その影響が當然滿洲にも波及して來た。そのため一般作者の多くは、小資產階級に採りながら自發的にその資產階級より離脫して、無產階級の立場に立つて階級對立を宣傳する無產文學を書いて居る。但し一方に於いて時代の要求、並に社會現實の情況から又一種の熱烈なる感情を抱いて民族奮起の爲の文章を書くやうな作者も現はれて來たのである。要するにその時期に於ける作品の大多數は從前よりも抒情的な文藝を改めて今度は宣傳の手段に振向けて居たのであつた。

第二期の『[illegible]』などは一般の讀者が手にすれば直ぐ解ることだが、その內容はもと〳〵無產文學の旗幟を高く振り翳して毫も忌憚する所がなく、彼等の態度を表明すると共に當時の文藝の赴くべき新途を指示してゐたのであつた。その爲に直ちにその筋の命令により停刊の憂目に遇ひ、落日の如き運命となつたのである。

然し乍ら無產文學は此が爲に消滅されたのではなく、むしろ反つて益々其の勢力を增加し、例へば『[illegible]』、『[illegible]』、『現實』等の雜誌は何れも齊しく無產文學に對する努力を續けてゐた。只雜誌そのものが離れた程貧弱で、又長い壽命を保つことも出來ないで間もなく消滅し去つた。然しこれらの雜誌中『[illegible]』だけは比較的長期間に亘つて發行され、尙且新興文藝の理論に付極期に詳しく紹介して初者の功績を擧げて居た。創作技術の上では未だ幼稚であつたが、その創作意識だけはもはや漸次確立されて來て、文藝の現實性を把握するに至つた。

これを又民族主義的文學に付て見ると、『遼風』と『動車』との兩雜誌の出版があるが、その作品の內容は一種宣傳的のそらごとで、本當の情理を盡した作品はなかつたが、これらの中で[illegible]氏作「櫻花第一枝」と云ふのは民族文學の傑作と云ひうる。作者は報唱者の有力なる一人であつて又『遼風』及『動車』の編輯者でもあつた。作者は「櫻花第一枝」の自叙中に次のやうな事を書いてゐる。

「我が宗教は救國なり、我が人生は救民なり『救國のみ知つて其の他の一切を顧みない』と云ふのが我が人生主潮なり、愛國文學を宣傳鼓舞するは我が終生の目的なり」

但しこの作者の作品は大方誇張な作り事で、人生の眞實を描き得ず、詩に至つては徒に詞句の堆積に止まり、毫も深刻な感銘を與へ得ない。

この二種の主要な思潮の他に、個人の專集中、これの影響を受けないで自己を表白する文章を書いた人も少くない。[illegible]の「昭陵紅葉」の如きは、即ち純粹な自由的作品で、如何なる主義の束

線をも受けてゐない。

鮮文の作品は完全な頽廢感傷の情調で、當時の中國作家[illegible]氏の影響を強く受けた所が見受けられる。衰弱した病的な筆致を以て放浪且つ無節制的な頽敗生活を描いてゐる。小資産階級の立場に立つて自己の生活を赤裸々に表現し肉慾色情の描寫に對しては殊に手馴れたあとが見られる。

『昭陵紅葉』と同時に出版されたものに[illegible]の「風紋」があり、其の作品内容は均しく主觀の強い抒情的な筆調を帶びて居て、主題の表現に完全な構成がなく、篇中何れも暗い蔭があり、且つ又物語に於て常に主觀的に自己の議論を插入する爲め全篇の意識統一が缺如してゐた事が屢々であつた。

築後に「廢言三題」を附してあるがこれは三篇の雜文で、作者は故意に社會に對して冷罵熱嘲を加へてゐるのであるが、いさゝか諧謔に過ぎた爲め全く失敗に歸してゐる。

新詩巢の出版に關しては、[illegible]の散文詩集『鮮血』及び[illegible]の詩集『情曲』等があつた、これらの内容も矢張り淺薄な悲哀と感傷的な字句を連ねたものであつた。

[illegible]の詩體は當時の文壇では大變流行した。行毎に字數を整然と揃へ對句になつて居る。それ「此れはまるで豆腐の並べ方だ」と嘲笑されたことがあつた。この作者の詩は人々から惡魔派だと惡評を受けた。それは詩中に血屍、白骨、魔鬼、毒酒等の字句が充滿されてゐたからである。

この外に又[illegible]の長詩集『苦訴』と云ふのがあつたが、内容はこれも又單純な苦悶と情感的な表白に過ぎなかつた。

[illegible]の詩體に良く似寄つて居るものに[illegible]『落葉之笑』と云ふがあつて、これは民國十九年の出版であつた。詩の内容は僅かに自然の美への詠歌と淺薄な戀愛感情に限られて居た。

民國十八年から十九年の間に發行された雜誌は『北岡』『嘲語』『怒潮』『南郊』『紅蕾』等の小雜誌で、内容も非常に貧弱で殆どが一、二回を過ぎずに廢刊してしまつた。

かくの如く「東北文壇」の發展過程は後に民國十九年九月十八日の事變當時迄は政治の停滯に從つて完全な發展の跡も見られず、秋風に吹き散らされた落葉の如く儚かな存在であつた。

二、滿洲國後の文壇

事變後の文壇は一時は突然衰頽的狀態に陷つたのであつたが、しかし一度その沈滯を經た後、終に一つの新活躍を示し出した。事變翌年の春微風の吹きそめる頃には文壇も次第にそれに誘はれる如く更生した。但し文藝の形態は再び初期の狀態に退轉して專ら新聞紙の副物として寄生してゐたに過ぎなかつた。久しく荒廢してゐた藝園には更に新らしく種子が蒔かれ、多くの作家は何れも滿

洲報の「星期副刊」を以て活動の地盤と做し、僅かに作品を發表した。しかし長夜の如き沈默を續けてきた文壇は、作品の發表があるとは云へ、滿足を得らるゝ作品は見られなかつた。

それでも當時最も活躍した幾人かの作家中、[illegible]の創作並に[illegible]、[illegible]文の批評の如きは實に文藝愛好者の注意を喚起するに足るものではあつた。當時の作品を見ると組織の感はまぬがれないが、然し非經濟の作品に較べて誇大空虛の弊は少くなつた。そして幾人かの作者は現實の題材の練磨を企てたが、これを適確に表現することが出來ず、何れも重苦しい形式となつた。

復活後の新聞紙副刊は滿洲報の「星期副刊」が稍可なりと言へるが、その外に又泰東日報の「文藝週刊」及び民報の副刊があつた。但し後者は比較的幼稚且つ通俗的であつた。

大同元年の末頃になつて當時の文壇には突然一種の新らしい現象が現はれた。と言ふのは發表作品の後に、時として「○○社」と言ふやうな名稱が附されてゐた。但しこの「○○社」と云ふのは何の組織もなければ又なんの計畫もない、只幾人かの文藝を愛好する青年が一緒に集まつて、その「社」を以て彼等の團結を代表する外にはなんの意味もなかつたのである。この社の組成は漸く熟して、終に社刊を發行するやうになつたが、しかしその力は未だ非常に微弱であつた。その最初に[illegible]あり、大同二年民報副刊によつて「[illegible]」の刊行があり、內容は[illegible]を以て主體と爲し、形式及び內容に巧を凝したが、爲作の態度は超然的抽象的で、所謂架空藝術であつた。因つて多くの人の不滿を招き「冷霧」の詩を以て朦朧と批評した。「冷霧」の中堅分子は[illegible]、[illegible]等で、社刊上に幾多の新詩を發表した。

「冷霧」の出刊に續いて撫順「[illegible]」生れ撫順民報の副刊によつて「[illegible]」の創刊を見た。主なる同人は[illegible]で、僅かに六回を出して廢刊してしまつた。內容も幼稚且つ非常に空虛であつた。

その後民報副刊に「[illegible]」と云ふ新社の出現を見たが、是は理論を以て主となしてゐた。新聞紙副刊に次つて社刊を出版するやうになつてから暫くして、「白光社」と「[illegible]」が大同二年に於て更に一歩進んで獨立した社刊を發行した。但しそれは憐れな程淋い本で、內容の貧弱も又甚しい。「白光」が僅か三回發行をつゞけ得、「[illegible]」は一期にして廢刊した。

此處迄書いてきて今度は當時の北滿文藝に筆を伸ばすが、ハルビンは實に北滿作家の活躍地と言ふべきところである。而もハルビンに於ける作家の作品は、南滿に於ける作家のそれに較べると確かに優れて居る。「國際協報」副刊の「文藝週刊」の如きは、曾て幾多の優秀な力作を掲載した。北滿に於いての比較的傑出した作家は、先づ三郎、[illegible]夫婦を推さねばならぬ。この二氏は現在も

やはり蕭軍、蕭紅をペンネームとして中國の文壇上に活躍しつゝある。

當時二氏は、曾て合作した短篇小說集を出した。『[illegible]』といふ題で、作者の創作態度は終始執拗に現實を把握して居る。內容は多數の被辱者及び壓迫を受けた連中の如實な生活描寫である。作者の技巧は未だ成熟を缺如してをるけれど、題材の選擇及び嚴肅な作風は確かに當時文藝愛好者の注意を喚起し、相當の好評を博したのであつた。

之と同時に新京大同報に更に『[illegible]』の出版があり、この雜誌は三郎等の北滿作家を中心にして居り、內容は當時の他の新聞紙副頁、社刊に比して確かに高度の水準を備へてゐる。

康德元年より二年迄の間は、新聞紙副葉によつて社刊を出版する風が、依然として其の儘つゞけられてゐる。奉東日報により大連響滿社が出版した『[illegible]』、民報によりて平凡社が出版した『[illegible]』及び當日の『商日報によりて前後出版した『[illegible]』『[illegible]』並に『[illegible]週文學』の如く殆ど數へ切れない程多かつた。新聞紙の副葉にして滿洲報の「曉野」「北國文藝」及び民聲晩報が創刊した「文學七日刊」の如きは何れも當時ベストの文藝副刊となつて居る。

康德元年『[illegible]』の創刊に當つては、當時の文壇に正に最大の注目を惹起し、國內唯一の大型雜誌となつた。『鳳凰』の內容は純文藝とは言ひ難いが、毎回文藝作品に關し相當の紙面を提供した。

その後これは量の方を減少したけれど、內容は矢張り文藝性を失はない。尙『鳳凰』の發行により更に數多くの有望な作家を生み出した。前期に於ける『[illegible]』『[illegible]』の如き後期に於ける『[illegible]』等の如きがそれで、作品は形式及び內容とも均しく幼稚の段階を脫却した。

『鳳凰』出版の後を追ひ、定期刊行物はぐんぐんと榮えてきた。奉天の『[illegible]』『新青年』の如きは文壇の貧しきを一時飾つたばかりでなく、而も壯麗な發展を遂げつゝいて作家も輩出し、一時は非常に活躍した。

三、近年來の文藝

康德四年になつて雜誌『鳳凰』は終に廢刊した。これは當時の文壇にとつて最大の損失と言ふべきである。尙國內の各新聞紙は弘報協會の言論統制政策に基き、これも大部分廢刊となり、その爲に文藝界にも自然影響を及して落寞たるものとなつた。但しこのときに於いて月刊『明明』は却つて異軍突起の姿を以て淵落一方の道を辿る文壇を背負うて出現した。『明明』の出版は更に強烈な新文藝性格を表現し、一方に於いては大增に舊文學の既存餘勢を攻擊し、一方に於いては又新文藝の生長の培養に盡力したのである。

この『明明』の強靭な苦闘により、更に幾多の有力な作家を發見し、重要な地位を確立した。[illegible]丁、疑遲、李[illegible]、[illegible]、看雲氏の如きは、皆當時の『明明』に於いて最も活躍した作家達である。

各作家は夫々異つた風格を持するとは云へ、このときに於いて一種共通な主要な思潮を形成してゐた。即ち暗い描寫で、作中に陰鬱な雰圍氣を充滿させた。『明明』に相對する雜誌は、即ち大同報の『[illegible]』で、兩派は一種の對立形式を取つて居り、作品の內容も相互に摩擦してゐた。明々社は更に城島文庫を出版し、續いて幾種かの專集を出版した。擧げてみれば古丁氏の短篇小說集『[illegible]』、雜文集『[illegible]』等である。疑遲氏の短篇小說『[illegible]』、小松氏の短篇小說『[illegible]』、百靈氏の散文集『[illegible]』等である。

この一種澎湃たる氣運は、僅か一年しか持續することなく『明々』廢刊と共に終りを告げたが、康德六年に到つてもこの充滿的情緒のほとぼりは未だ全く冷却せず、遂に『明々』時代の若干の作家は再び『[illegible]』を組成し、大型季刊『藝文志』なるものを創刊した。但し『藝文志』の出版は依然として新文藝活格を失はなかつたが、もはや『明々』時代の銳拔と強靭な精神は疾に消失し去つた。而も內容上から觀察すれば却つて虛空藝と手を相携へるが如くである。

『藝文志』は前後を通じて三回しか發行してゐない。就中主要な創作は[illegible]の『平沙』と[illegible]氏の『[illegible]』で、何れも八萬字位の中篇であつた。

其の次は小[illegible]氏の『滿公夫』と『鐵檻』で、量に於いてはかれこれ四萬字位もあつた。然しも較的好評を受けたのは[illegible]氏の『[illegible]』で、創作の技巧上から見ても爵青氏は極かに相當の成功を收めたと云へよう。

その後『藝文志』事務會は更に『[illegible]』なるものを四周ほど出版した。內容は主に批評及び短論を重んじた。

以前大同報の『文藝專頁』に活動してゐた諸作家は『藝文誌』と同時に文叢刊行會を組成し、『文選』季刊の出版を計畫した。實現には到らなかつたが、その後は却つて個人專集の方向に向つて發展を求め、前後を通じて文叢叢刊を四種程出版した。即ち吳瑛の短篇集『雨藝』、山丁の『[illegible]』、指眼の『[illegible]』、秋螢の『去故集』等がある。

奉天に於いては更に文選刊行會より季刊『文選』を發行した。形式は『藝文誌』と同じ大型雜誌であるが、內容は『藝文誌』に較べて遙かに生氣があつた。該會は『文選』の外は『每月叢刊』を二周程發行したのが即ち『[illegible]』、『文選』で、これ又評論を偏重した小型雜誌であつた。一昨年に到つて更に文選叢書兩種を出版し、秋螢の短篇集『[illegible]』及び[illegible]の短篇集『混沌』がそれで

あつた。

康德八年[illegible]が『詩季』を創刊してから滿洲の詩壇も一時に高まつたやうであつたが、新詩そのものが滿洲に於いてはどうしても理解されないので、近時はまた落寞の情態に陷つた。

次に最近二、三年以來は、創作界の健全な發展を目指して滿洲に於いても長篇小說に試みに手をそめる人があらはれ、既に出版された本の中に小松の『[illegible]』『北[illegible]』、秋螢の『河流的[illegible]』及び石軍の『[illegible]』等がある。

『藝文誌』が發刊されて以來、滿洲の文藝は新聞紙の副刊から離れて夫々異つた集團を形成するやうになつたが、然しそれも最近一年來は出版の困難が伴ふことが原因すると思ふが、又均しく熱と力を消失して沈默の狀態に在る。

さて終りに滿洲文藝の發展を總觀するに建國前の文藝は內容に於いて熱情的魅力に充ちてゐるけれど、作品は尚幼稚の域を脫却し得ず、建國後の文藝は、只一種の浪漫的個體の發展で、作品としてはやはり幼稚であつた。其後最近の三、四年に到つて滿洲の文藝は始めて軌道に乘つて堅固な地位を確立したと云ふ得る。

秋螢君は滿文の『滿洲文學史』を書き、滿洲圖書會社では近く刊行すると豫告してゐるのだが、本稿執筆時までにはまだ出版されてゐない。それが出れば、我々はより詳しく滿系文學の歷史について知ることが出來るであらう。

今は乏しい資料と、私自身が經驗したことによつて、本章を綴るほかはない。

秋螢君の前引「史話」は古い部分を說いて劉合仁詳しく、その新しい部分に關してはかなりザツと述べてゐるやうに思はれる。

古い部分で、哈爾濱の國際協報に於ける[illegible]（すなはち殖軍）の活躍については、私も試み、知つてゐた。昭和四、五、六年の頃だつたと思ふ。それは、私が驕として、滿洲、支那の主要な漢字新聞にも眼を通してゐた頃だからである。

次に、別な資料として、[illegible]陽博といふ署名で『鳳凰』に載つた『滿洲文藝史料』の一部分を紹介して置こう。前引秋螢君の文章と重複する點もあるが、やはり參考になると思ふ。

「五四」は中國の劃時代的な一つの運動であつた、その影響は全社會意識形態に波及した、ただ

に政治の上のみならず、文藝上にも新しい種子を蒔いた。それは新興分子の舊存關係に對する反抗であつた、殊に二級小市民はこの波の搖れるのに乘じでようとした、この想像は後には悲劇をつくる結果となつたが、しかし今や一切の動向が其處から發生した、といふのが「五四」を出發點として形成された多くの流派である。いま暫らく文藝について言へば、白話文の提唱から、進んで新文學の建設となり、前には古典の羈束下に束縛されてゐた思想と形態がみな自由に表現されるやうになり、その後社會經濟の變轉につれて、國外文學の紹介と新興文學の寫作も相當の成績を得るに到つた。だから「五四」は文藝上の新生期であつたと言つて宜しい。

滿洲では過去に於いて因より所謂文學は在つた、だがそれは若干の特殊な人の利祿を謀取するための工具、或は餘酒後の消遣品であり、時形的であつた、特殊な人間の手に握られたものであつた。眞の平民化として新しい生命を有つ文學の生產はやはり「五四」の波によつてもたらされたのであつた。勿論「五四」の波が滿洲に流れ來り得たのは、やはり滿洲の當時の一切がこの波を受け容れ得たからであつた。そしてこの新文學の具體的表現は當時の幾つかの新聞の上に見られた。凡そ過去の滿洲文壇に心を留めてゐる人は記憶してゐるであらう、一九二三年以前に、盛京時報の[illegible]、[illegible]の[illegible]、民報の[illegible]…みな新しい作品を載せ始めた。それらの一部は固より

平凡な[illegible]であつたものであつた、だが滿洲人の作品がやはりその大部分を占めてゐた、作品の[illegible]深いものはなかつた、しかし新しい生命は確かに斷片的に表現されたゐた。就中盛京時報の[illegible]欄は、少なからず文藝に關する理論を紹介した。

一九二〇年以後は、まだ小市民が眼覺めた時代であつた、當時小市民はまだ過重な經濟壓迫を受けてゐず、政治の切實な問題は婚姻問題であつた。一般青年たちは殆んどみなかかる苦痛を嘗めた、當時の文學は未だ少しも自覺しなかつたので、依然として彼等の子弟を處置しよしとした、しかし當時の青年はすでに部分的に覺醒してゐた、彼等は戀愛の甘さに憧憬し、舊家庭の束縛を厭ひ、毫も知識を有たぬ同分の女房を憎惡した、このやうな思想が若干普遍的に當時の青年たちの心中に流れてゐた、それ故初期の滿洲文藝作品は婚姻問題を描寫したものが多數を占めてゐた。たとへば盛京時報の「[illegible]」（作者の名を忘れた、奚といふ姓だつたやうに思ふ）で、この小說は當時の文藝作品の代表的なものであつたと言へる、そのやうな題材が當時の一般作者が描寫した對象であつた。

家庭戀愛の作品を除いては、すなはち東北舊政權に反抗ある意識を藏した作品であつた、當時の東北の政權はまだ充分に封建的であつた、毫も開明的な施設は存しなかつた。一般民衆の受けた壓

迫は非常に重大であつた、就中剿匪の軍隊は田舎を騒がした、多くの者がこれらの題材を取つて小說を書いた、當時の軍閥の罪惡を諷刺し暴露した。それに、時代の啓蒙のために、小市民は前途の光明を夢みてゐた、希望と青春の火に滿ちた作品も少數ではなかつた。その他に、『禮拜六』『玉梨魂』（大內註——上海の美辭佳句艶情小說を指す）一派の文學の影響を受け、才子佳人の香艶哀情を主題したものも若干あつた、要するに、滿洲初期の文藝作品は四つの大きな類に歸納出來る——家庭戀愛もの、腐敗官僚に反抗したもの、希望に滿ちたもの、香艶哀情ものである——これにはみな社會經濟的な根據があつた。——封建社會が頹毀しブルジョアが抬頭した時期の意識形態であつた。

當時、作者が續出し、研究者——或ひは嗜好者と言つてもいゝ、が增加し、文藝團體も自然數多生れた。だが當時のこの類ひの者は殆んど學生と小職員に限られてゐた、各學校に於ける三人團、五人團が非常に多かつた、そして社會で表現されたのは、遼天基督教青年會の文學研究會、及び奉天醫學校であつた。組成分子に至つては、前者は學生が多數を占め、後者は學校の教員、新聞社の記者及び各機關の小職員を包含してゐた。前者は『春天學生』（定期刊行物）、後者は『啓明學報』（？）を以つて、彼等の作品發表の地盤とした。この二つの團體は一九二五年以前の滿洲の唯一の文化團體だつたと言へる。

我々はいかなる時代の藝術もみな社會的「クラス」構成を反映してゐること、一定の「クラス」に適應してゐること——大體に生活を支配する「クラス」の要求に適應することを知つてゐる。同時に作者自身は彼が意識してゐると否とに拘らず、總じて彼が屬してゐる一群を代表してものを言へる。前者は一般小市民の代表であり、小市民的氣味が非常に濃厚であつた、後者は新興分子の代言人であつたと言へる。新興分子の要求と色彩を溢れさせてゐた。因よりこの二つの形態はまだはつきりと彼等の分子の一切を明確に表現してゐたのではない、だが彼等が代表したのは確かに上述のやうであつた、それはその後のこの二つの團體の幹部の人生行路を見れば判るところである。

滿洲の文藝界の初期の作者は甚だ多かつた、彼等の作品は何も好くはなかつた、評價にも値いしはならない。これらの作者の出身は殆んどみな小市民であつた、彼等は時には現在を悔ひ、將來に惱れた、時には弱小者を憐憫し、時には個人の幸福を追求した、時には現在を呪ひ、將來に甚だ大きな期待を抱いて偉大なる時代の降臨を希求した。彼等は社會に對して深い切な認識を有しなかつた、大半は學校の窓から社會を覗いてゐた、そのため書かれたものは內容に於いては空虛であつた、技巧について言つも甚だ拙劣であつた。これら一群の作者中、私の記憶にまだ思ひ出され、

るのに盛小天、郭心晴、李雷晨、趙鏡寒、趙崇文、郝心影、趙石溪、周雪溪、周東郭、周以識、蕭手元、楊予蕭、孫同愈、王亞龍、吳以角、羅嘉雍、張重行……等がある、私はこれらの人々の身分を悉くはよく知らない、とともに彼等の當時の作品も今見付からない、で一々詳しく批評すること が出來ない、しかしこれらの人々は殆んどみな當時の學生であつた、彼等の作品はみな小市民の產物であつた、この點は私は斷言出來るのである。

一九二五年になると、社會に又新しい轉變があつたために、新しい思想が又流布され出し、影響の及ぶ所、滿洲の文藝界もいろいろな新しい形態を示すに至つた。一九二五年以前の一般小市民の思想は殆んどただ新時代に憧憬してゐ、新しい時代の到來を待つゐただけであつた、一九二五年になつて社會的な幾つもの大事件の刺戟と教訓とから、待ち憧れるのでは大した希望も持てないこと を知り、若干の前進分子は實生活の中に入つて行く必要を感じたのであつた。これは歷史の法則である。歷史がすでにこれらの人の方向を決定したのだ。

當時滿洲の文藝作家で、實生活に入り込んだ者は甚だ多かつた、また實生活には入らずして新しい光輝の下に自ら苦んでゐた者もあつた、それ故この時期の作品は殆んどすべて生氣物々としてゐた。黑龍報副刊、『青年』、哈爾濱長報副刊、戰甲、哈爾濱日報副刊に載つたものは、數多く新し

い力を含んだものであつた。同時に一般作者の文學的理論と世界の作家についての紹介の仕事も着手し進行し始められた、一九二五年（？）長報副刊に載つた「世界八大文學家評傳」（作者は多分周君であつた、但し上海で出版されたもの及び英文から抄譯したもので、三ケ月續いて出た）、及び一九二六年、哈爾濱日報副刊に出た「明日之文學」（作者は秉鈞、半ケ月續いた）、前者は滿洲文藝界がすでに世界の作家の生活、修養、作品、について知ることを求めてゐる、ことを示し、後者は滿洲の文藝界がすでに新しい方向へ移動しつゝあること、その一部分ではあつたが、そのことを示してゐた。

一九二六年の夏になつて、一つの新しい文學團體『滿洲』が奉天で組織された、だがその組成分子は南滿の文藝研究者に限られずに、多くの北滿の文藝研究者を包含してゐた、幹部は蕭軍、蕭鳴等の人々であつた、この文藝團體は過去のよりは稍組織化されてゐた、それに大衆藝術といふことを主張し、參加者は百餘人あつた、出した雜誌は『漫聲』で、『漫聲』の第一の論文は……（原文四字欠）を高唱したものだつた、不幸この團體は翌年の初春、自發的に解散した、『漫聲』は一號が出ただけだつた、その後は出なかつた。しかしこの團體の分子は依然各新聞紙上に彼等の作品を發表した、また『青年』を地盤として、具體的に多くのものを發表した。

一九二六——二八兩年の滿洲各新聞の副刊は悉く新しい作品を收容した。盛京時報の『綠野』、民報、晨光報、新亞日報……等の副刊には、多くの比較的好いそして意識の比較的淸い作品が載つた。一七年秋に、新亞日報は又『綠蔭』を出し、奉天商工日報も『文學副刊』を附錄として出した。作者は前の時期よりも增加した、前の時期の作者が書き續けた外に、新人作家では王[illegible]森、孫[illegible]生、楊[illegible]、張[illegible]、張笑濤、王[illegible]綬、[illegible]女士……等の人の作品も甚だ多かつた。

この時期の作品が前の時期より進步したのは內容が比較的に充實したことだつた、題材も戀愛のみには限られなかつた、そして大部分は一つの出路を示してゐた、この出路ははつきりとはしてゐなかつた、正確でもなかつた、だが過去の憧憬だけよりは勝つてゐた、今や行動への準備の如くであつた。一九二八年の各新聞の新青年募集で載つた小說や詩歌は殆んどみな××的色彩を含んでゐた。

一九二八年の夏、又一つの文藝團體が結成された——東北文學研究會である。主樞は多分、王[illegible]を[illegible]であつたらう。この團體が春潮社と異つてゐたのは、春潮社は○○○的意識形態を代表し、東北文學研究會は代表したのは○○○的意識形態であつた、參加者も甚だ多かつた、南北滿の文藝愛好者と作者を包含してゐた。この團體は別に刊行物は出さなかつたやうである。

この外に、東北文學の數人の學生が定期刊行物『夜燈』を出した、張士丐は個人で『長虹』を出し、宋[illegible]は『[illegible]』の編輯をやつた。この三つの刊物は二つの派別を代表してゐた。その他、國際協報、泰東日報の副頁もみな改新された、延吉の民聲報の副刊『荒原』に出た作品も殊に尖銳であつた。要するに、社會の新しい流轉に應じて、新興文學思潮も滿洲文藝界に流れ始めた、意識は充分に正確でなく、取材と技巧も尙研究を欠いでゐたが、しかしこの傾向は總じて我々の注目に値ひする。其他……種々の意識形態を代表した作品など少くなかつた、文藝の路は自づと一致しない、それに非常に複雜である。私はもともとこれらの形態に分析と批評とを與へようと思つたが、まだ手許に參考材料がないので、他日に讓らざるを得ない。

滿洲の新興文學が多くなり、資本力は擴大し、貿易指數も增加し、農村にも漸く資本主義が侵入し、一九二九年にはすでに最高潮に達した、かゝる狀態下に、文藝は量的方面では當然に巨大な生産能力を有つた、嚴密にこの一年について論じても、單行本は多數出て居る、趙鮮文の『明陵紅葉』、張[illegible]藝の『[illegible]』等、みなこの一年に出たものである。同時に作者も非常に增加した、作者が代表した意識形態は表面上から見れば甚だ複雜だつたが、詳細に考査すれば、それも二つの大きな流れに外ならなかつた、一つの流れは更に一步を進めて新興文學へ邁進しようと

し、一つの流れは小市民的根性を固守し――或ひは半騒を發洩し、或ひは彼等が認むる所の光明を追求し――てゐた、その實、この光明が彼等に與へたものはただ幻滅であり、或るものは悲しみ傷んでゐた。

過去の作者は或る者は實生活へ走り、或る者は滑り落ちて行き、すでに續けて書かなくなつた人々もゐた、新しく起つた作者[illegible]、白[illegible]、[illegible]、李[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]……の如きは、みな悲壮努力して不斷に書いた、好い作品は依然あまり多くはなかつた、ただ量の方面ではいかなる時期よりも多かつた、同時に各學校の校刊も前後して出た、内容は自然に文藝が主要地位を占めてゐた。

一九三〇年秋に至り、滿洲の農村はすでに實質的に恐慌の路に入つてゐた、その年は豐作だつたが、しかし穀價は特別に廉く、農民一年の辛苦の代價は一年食ふのに足りなかつた、各地には土匪が續いで生じ、商號の倒閉も愈よ多く、黄金の國として著名な滿洲が、すでにその沒落と恐慌を表示した、錢價は各處で人を食つた、社會的不安は悲壮顯然と浮動してゐた。このやうな大きな時代が到來しようとする前夕を、數人の感覺の鋭敏な作者はすでに感じ始め、農村に向つて材料を尋ね、求め、この恐慌をすつかり暴露しようとした。當時の作者の中で[illegible]は、すなはちその一人であつた、彼は農村[illegible]した大數多くの小說を書いた、[illegible]上、[illegible]上[illegible]十分に巧妙でなかつたが、しかし當時の[illegible]は[illegible]滿洲經濟の進展の動搖といふこの事實[illegible]認識され、表現されようとした、それは確かに不可避であつた。

この年の春、[illegible]は[illegible]」を出し、多くの比較的好い作者を網羅し、發表された作品は殆んどみな[illegible]であつた、[illegible]の「白村的風光」はいかにも當時らしい作品であつた。

簡略であるが、この時期の概況は以上の通りであつた。要するに、滿洲文藝の發達期は五四以後であつた。初期の色彩は完全に小市民的であつた、進んで文藝團體が組織され、時代の進行に伴つなつて滿洲經濟の進展の動搖のために、比較的に我々の求める作品も發出された。

内容について言へばこの期の作品の大半は空虛であり、何もつかんではゐなかつた、實は滿洲に於いて意味ある材料を求めることは何も難しくはない、しかしこの時期の作品中にこの種の材料を利用して書いたものは見出せない、その原因は作者の社會觀察力が強くないこと、思想上に徹底した自覺がないことに在る。技巧の方面について言へば、記述に傾ひする數篇としてもない、當時の滿

洲の作者はまだ材料を選用し得ず、まだ描寫し得なかつた、これは彼等が修養を欠いてゐるためである、それなのに多くの作者はなほ自ら狹い領域に在つて滿足してゐる、一歩前進しようとしない。同時に滿洲の文藝批評といふこの仕事が確立されてゐないのも遺憾である。

我々はこの時期の作品に對して自然不滿足である、だが初期の成績は以上の如くですでに充分であつたらう。我々の期待は將來に在る、將來の成績に在る。

最後に、この時期に長篇で譯されたものには王?譯のダヌンチオの「死の勝利」（泰東）、偏巧譯のユーゴーの「レ、ミゼラブル」、大デューマ作の「モンテクリスト伯」（以上盛京）、直哉譯のデフォーの「ロビンソンクルソー」及び?作の「小公子」（以上泰東）があつた。

右は龍德光氏五月、六月の『風風』に載つてゐる部分である。その『風風』誌第三卷第三期三期である点、その第三卷の主要な目次を示すと次の通りである。

藝術的社會化與社會的藝術化　怡蓁
現段階的世界經濟　向華
現代戰之若干作戰的一般過程　晛空

滿洲文藝與詩

詩
雪夜送　海鷗
天、海　栗田夫郎
生活的詩子　君何
紅的一點　摩耳
海　青

歌
白蘭渡口的採蕨謠（美國新作家哥德的散文詩）　景朝
高爾基的著作生活　北胡譯
五月雨（小品）　白相譯
商生　素食與肉食對於人體營養之比較　何共
女戲子與少婦（趣味的對話）　米勒耳
學校衣與高跟鞋　伍建
李館

婦女服裝美——旗袍的革新　秀中
服裝美　年青姑娘的服裝美　琪子

女界瑣聞

中國年青作家之通信與消息　巴金　遠子　移時　英　徐卿　遠　何家槐

書評：戰鬪的細人（三）（談手）　麗鶴　女士　輯

新社會經濟學全部　荒野生

創作：蘇種　晉波合作

「調女招待的三方面」　文泉

翻譯：詩　玉文芝

補殷　翻

附注をすると「與」は「と」（及び）、「皆」は「……の」、「高爾基」は「ゴオリキー」、「女戲子」は「女役者」、「高跟鞋」は「ハイヒールの靴」、「年青姑娘」は「若い娘」、「女招待」は「女給」である。

これで見ると、この雜誌は昔には文化綜合雜誌を標榜してゐたことがわかる。また若い女性へ呼び掛けようとしてゐたことも知られる。それと、詩欲の中に「深田次郎」といふ日本名があることなども注目される。

創作を書いてゐる文泉、晉波の本名である。——彼の長い作家經歷を知るべきである。

中國の若い作家についての通信、消息があるのは、「支那文化——上海文化への滿系青年の關心を示すものとも言へよう。それをちよつと、紹介してみると、巴金については

「目下の中國文壇を作品の最も多いのは巴金である、彼は佛國留學生である。彼は現在すでに三十餘歲である、だがまだほころびた服を着た獨身者である、彼は奇妙な癖を持つてゐる、それは彼は女が嫌ひなのである。普通の一般文學作家は多くは女の友達を有つてゐる、女の友達を追ふ、まるで韓信將兵の如くで、多々益々善しだ、だが彼は女と交際しない。彼の作品は澤山あるが、でも

彼は甚だ貧乏であると、いふのは彼は多くの友人を助けねばならぬからだ。彼は家庭はあるが、しかし彼は漂流生活を送つてゐる。彼は各處に旅行するのが好きだ、いつも旅行中に、書くものの材料を得る。書くことが彼の生活なのだ。」

また[illegible]——この、和平陣營に來てテロに倒れた作家——の若い日の生活が語られてゐる。

「穆時英は若い色男である、『小說月報』に發表した「南北極」の一篇で文壇に出た。彼が光華大學に學んでゐた頃、教室では彼の姿は探し出せなかつた、だが光華大學は甚だ嚴格である、課毎に教務處から人が來て點呼をする、缺席が多いと退學の可能性が生ずる。ところが彼はその毎日缺席しても退學を命ぜられるには至らなかつた。何でもその點呼係は三十前後の未亡人だつた由。彼女は彼を甚だ愛してゐた。

彼の小說はうまいのだが、彼の習文學は甚だ駄目だつた、そして光華大學の國文教師は老人で、教へるのも、書かせるのも悉く之乎者也天爲哉であつた、彼はさういふ文字の筆法に巧みでなく、又起承轉收の語句も用ひ得ず、ために彼の國文は落第點だつた。彼に一つ悪い癖があつた、彼は同級生たちの新しい洋服を借りて着るのが好きだつた、一度借りると脫ごうとしない、若し再三要求しないと、破れるまで着てゐるのだつた。人間は極めて聰明だつた、何でも多くの女同級生が彼のために不眠症になつたといふことだつた。毎日午後、夕陽が西に沈む頃、よく彼が運動場の一角で、女友達と閑談してゐるのが見られた。誰にも彼に文章を書く暇があらうとは思へなかつた。彼は光華を卒業すると、ちようど父が死んだので、そこで彼は歸つて何軒かの家を賣り、思ひ切つて上海へ引越して來た。新文壇の各雜誌への原稿を書く外は、よく月宮跳舞場へ踊りに行つてゐる。

この『鳳凰』は飯河道雄氏の主宰下に發行されたやうである。飯河氏は東方印書館といふのを經營し、滿系のための教科書的書籍をいろ〳〵出版してゐた。上海方面の文藝作品の選集なども刊行してゐる。飯河氏は記者の父君だつた。『鳳凰』永く續かなかつたのは惜しい。

康德十三年十月號『新青年』が創刊された。創刊號の內容は次の如くである。

民族協和之眞精神　　愷
英法德之航空政策　　鄭欣譯述
論法國古代民歌（法朗士）　　邵飛譯

讀書記率增進概論（高鋒譯）
隨筆
談小品文　金白譯
直譯之故　花子譯
藝術之意義及價値　楊嶔
宵行　子赤葉
淚的故事　雛弟
生的開拓　天源
灰色的命運與戰慄的人　老移
詩
雨　外二章　姜蘊非
暮　外二章　雛弟
路人及初秋小景　可欽
明月集　成弦
無題　楊任伯
春日偶成　西鷗翰
前人

陶醉記　蘊文譯
四個德國文人　哲
秋菊　陳健男

その「發刊詞」は日譯すると——

一、民族協和の眞精神を表現す
一、青年の思想を統一す
一、學術を探討し文化を發揚す
一、外來の思想不良刊物を駁斥す
一、滿洲文藝を復興し並びに出版界の沒落を挽救す

「新青年」の發行者は東傑、編輯は陳健男、蘇非、成雪竹であつた。
寄稿者のうち、蘇非は曾つて傷魂と名乘つた人。

雙弟、天源、老舍はすでに讀者に知られてゐる人々とある。雙弟は後の金音か。

『新青年』は協和會の奉天省事務局内に置かれた新青年旬刊社の發行であつた。

『興滿文化月報』も康德二年に創刊されたと考へられる。（私はその古い資料を持たない。康德五年一月に第四卷第一期が出てゐることから、さう推算するのである。）

『新青年』一卷四期を見ると、「ALBUM（續）」といふのが劉偉青の署名で出てゐる。おや、と思つて、前號を見ると「ALBUM」は劉偉といふ署名だ。すなはち知る、可欽は偉青であることを、なほ、遜丁も偉青だ。彼自身、いろんな筆名を使つた、一々覺えてゐないといふ程だから……。が、推算すると、彼は隨分早く文學活動を始めたことになる。

『新青年』の康德三年新年號は通卷第六、七、八期の合併號で四六倍百頁の大册。裏表紙の「灰色的命運與戰慄的人」が續き、劉偉青の「ALBUM」は本號で終り、ほかに秦雲の「昆蟲學教授」、盤古の「老劉的年」等が出てゐる。盤古の「老劉的正月」は拙譯を『新潮』に載せ、後に『原野』に收めた。

二月に出た十、十一、十二期合刊には遜丁の「哈爾濱」が出てゐる。すなはち偉青で、これは『滿洲行政』に拙譯を載せ同じく『原野』に收めた。前後するが、『新青年』第五期には、偉青は劉偉の本名で「哈爾濱的獨唱者」といふ小說を發表してゐる。

大同報では同紙副刊に載つた文藝物を康德二年秋以降『滿洲帝國國民文庫』といふ叢書として刊行した。

第一集は『新小說』で、

愉快的故鄉　禾
平凡的事　沛生
天下太平　醒微
城中　馮碩
誰是火種？　北星
梅花村　南波
蝦米　蕭然
王道下的新生命　林篤

少女的日記　　王　痕　青

以上九篇が載つてゐる。些か王石泯淆の嫌ひはあるが、[illegible]が當時活躍してゐたことを知り得る。

なほ關東君の『滿洲文學闡義』を更に補遺的資料としてこゝに寫して置こう。

滿洲は、萬里人無き草原だと言へる。二、三百年前に、我らの父祖が漢民族の拓荒者となつた。その頃の滿洲には、何も無かつたが漸く揚子江流域出身の官吏が書翰文字、詩詞、詞文字を輸入し、ここに於いて地方の縣志といつた類の史書にも「藝苑」といふ欄が附け加へられることになつた。新文學が生れたのは最近二、三十年の事でしかない。

私の記憶に最も深く刻まれてゐるのは『關外』である。それは滿洲新文學の河源を創造したもので、やがて『冰花』『現實』等の同人刊行物によつて引繼がれ、多くの新文學の青年鬪士が、舊文學、準舊文學（禮拜六派の白話文――大內註、民國初年上海で盛んだつた通俗小說作家の一派）とその腐臭を打ち破り、文化の上で一つの地位を獲得した。この時期を中國文學界では「東北文學」と呼んでゐる。地理から見れば、滿洲は中國の邊陲に位置してゐる。文化の上では、滿洲も中國の邊陲であつた。中國でどのやうな變革が生じても、この邊陲の滿洲では事毎に中國よりは一歩も二歩も遲れた。

東北文學の時期は、まさに中國の五四、五卅運動後で、彷徨、苦悶の氣分が青年の血流の中で唐「忘れてならぬのは、時代精神を持たぬ作品には偉大さがないことである。東北社會の情形を分析し、時代の基調を把握して東北民衆の苦悶を描く、若しこの地歩に達し得なかつたら、東北文學は建設されず、國內文壇の注意を惹くことも出來ない。」

當時の文學者が、中國文壇の注意を惹き得ずして苦悶したのは面白いことである。「東北文學」から出て來た作家には、蕭軍、蕭鳳、林蓁蓁、李鳳苓、陳凝秋、王[illegible]、張弓、趙鮮戈、蒼格等諸氏である。これらの中には現に中國文壇の健將たるものもあり、すでに消息不明となつてゐるものもある。「東北文學」は事變を分水嶺として一變し、謂ふ所の南滿とは奉天以南、撫順、營口大連一帶を包括し、北滿は哈爾濱、新京等數ケ所を指してゐる。このやうな地域的區分は、一つは當時の作家たちの活動範圍から、一つは兩地の作品の風格がはつきりと異つてゐる所から來てゐ

る。

南滿の作家たちが盤踞した刊行物は、大連の滿洲報の「星期副刊」、奉天の民報の「蘿絲」「海燕」、撫順民報の「鷹爪」等で、發表した作品の多くは纖細優美、技巧的處理に重きを置き、ために詩歌と論爭が盛んであつた。

北滿の作家たちが依據したのは哈爾濱の國際協報の「文藝週刊」、哈爾濱の盛京の「公園」、新京の大同報の「夜燈」「滿洲新文學」で、これらの刊行物に登載された作品は、粗壯豪放を表現し、正確な意識的追求があり創作と戲曲が多かつた。異民族の文學の影響を受けた點から分析すれば、南滿の作家たちは多く日本、英米文學の薫染を受け、北滿の作家たちは露國文學の顰捷を受けてゐるのが多い。當時海外文學を移植した事情を見てもこの影響は相當なものであつた。「蘿絲」は專ら英米文學を紹介した。「海燕」が多くの英國の詩歌小說を譯し、「鷹爪」は長篇「歐洲十九世紀以後と近代文學」を譯述し、八、九兩號ではヴイクトリア朝の大詩人テニソン特輯をやつた。その他多數の宗教味の濃い譯文の如き、若し後に孟繁等の作家が加はらなかつたら彼等は基督教徒の作家だと誤認せしめたであらう。

「蘿絲」は多く日本文學を紹介し又歐米の作品を譯載した。「星期副刊」が小泉八雲の文章を譯し、「傷

が「頹廢派とアランポオ及びボードレル」「自然派の詩」を譯述した如きである。

反對に、哈爾濱の國際協報の「文藝週刊」では專ら露西亞文學が紹介された。「花生」が田園詩人エセーニンの詩歌を譯し、「蘿絲」がペビル?の小說、ゴオリキーの小說を譯し（「夜の宿」を連載した）「滿洲」、「國際」の二人でゴーゴリの小說を譯し、「玉符」が「ドストエフスキー年譜」を譯し、「GM」がトルストイの童話を譯し、「我生」が「唯美主義文學の露西亞初期の文學に與へた影響」を譯述した等々である。

このやうに對立した移植は、當時の文壇に何も摩擦は生させなかつた。北滿の作家は從來南滿の刊物に注意を拂はず、南滿の理論家が論爭で烏煙瘴氣をあげてゐる時、北滿の作家はすでに甚だ立派な作品を書き、「跋涉」「黃鶯」「小陸克」「小愛娃」等の作品集が相繼いで出版された。「跋涉」が北滿から南滿へ屆き、各刊行物は爭つて批判し珍しい收穫だと賞讃した。この南北滿の大きな溝はずうつと今日まで深い遺痕となつてゐる。だが一九三五年以後、北滿文學は著も出色の作品がなく、甚だ凋落してしまつた。

「南滿文學」から出た作家には、秋螢（秋螢）、姜園（小松）、孟繁（孟繁）、劉偉（爵青）、蘿非（未名）、吳彰（田兵）、廣雪竹（成弦）、文泉（石軍）、石

蓬（陳因）等がある。これらの人は現在も括弧内の新しい筆名で滿洲文學創作に從事してゐる。南滿といふ土地の粘着力が執拗にこれらの作家にも粘りついてゐると言へる。

「北滿文學」から出た作家には三蘭（譚軍）、雁冰（蕭紅）、洛紅（羅洛）、雙莉（戈白）、程堡、田來、默默、金人（金人）梅陵（孫陵）、文遠、小眞、雲鶴、達秋、芳芳（田瑯）等がゐる。或る者は粘性の土地を脱け出し括弧内の新しい筆名で國外文壇に活躍してゐる。或る者は筆を投げて「文學無用論」を唱へ、或る者は閑づぶしの文章を書いてゐる。

多くの作家が出て行き、程なくまた多くの文學上の新進がその後を補つた。作家たちは漸次新京に集中した。この新活動によつて多くの立派な作品が出た。そして文學は終始その嚴肅な表情を堅持して現在に至つてゐる、これがこれまで日系作家によつて「滿系文學」と呼ばれ、日本文壇によつて「滿洲文學」と認められて來たものである。

滿洲文學は恰も愛すべき雛菊が温室に置かれてゐる如くに、この盛代に點綴されてゐる。

滿洲の文學作品は、批評家が言ふやうに「暗い！」。過去も現在も、どの創作もが農民の憂鬱、小市民の感傷、一般大衆の歎息を見出してゐる。憂鬱、感傷、歎息を以て滿洲文學を組み立ててゐる。これは時代の深く濃い陰翳でないのはない。だが、文學の本道に在つて、この陰翳は盛代に妨げないものである。身に添ふ陰翳がなくては陽光の明朗さもないこと、むしろ陽光は陰翳が祈求するものと言ふべきであることを知るべきであらう。

現下の滿系文學者について見れば、作家たち——土地に粘着する作家たちは、身近な日系作家たちの激發扶掖を受け、その作品は人類の魂の門に進み入り、濃厚な時代の氣息を蒸發するに至つてゐる、近い將來史詩のやうな作品も生れることであらう。

今、私は私に隨つて南船北馬各地を流轉した文學刊行物を繙へし、挨の中から頭を抬げさせて來ると、過去の、それら新文學開拓者の面影が又浮んで來る？彼等は非常に苦しい條件の下に在つた文學青年群であつた（原稿料收入はなく、無料で輸血するだけだつた）、彼等の手から、新文學の種子は蒔き纒かれて今日のやうな盛況になつたのである。彼等が私達に殘した遺産は複雜、混亂して居り、且つ確かにそれは「寄生的」存在であつた。が、この存在は、粉飾に巧みな歴史家でも恐らく抹殺することは出來ないであらう。

歴史とは人間の歴史である。時間は英雄の敵である若し我らの作家が時間を征服し歴史を足下に踏まへ得ないならば、作家となるとも浪費であらう。

こゝに、私は何も批評家たらうとしたのではない。又作家たる友人たちを紹介しようとしたのでも

ない。ただこの盛大に生き、新生の希望が今年より展開するのを感じ、ために深く埋もれた過去を掘り出し、私達の新しい將來の歴史の糧にしようとしたのである。

山丁君の一文は「閑談」と題してはゐるが、滿洲文學の本質を語り、また、貴重な滿系文學史の資料をも提供してゐる。吾輩は曾つての文墨であること、秋影すなはち明兵であることなどもはつきりと知られるのである。

その後、私は泰東日報で赤雲といふ署名の「文壇十年印象記」四―六回を見付けた。全文でないのが殘念だが、四―六回のみでもこゝに紹介しよう。（誤植などもあるやうだが、姑くその儘とする。）

……それに披露されたもので、穆文の「費家之春」、楊慶豪の「祈雨」等、そして我蓋は更に「殘蝕的高粱」を以て、中國東作家の作品に雷同してゐるとの嫌疑で、筆戰を展開した、ほかに晶報での阿鳳の「修花匠」及び文藝泰報に鷹鳳が譯した「夜鶯與玫瑰」も一讀の價値あるものであつた。

この一年の新聞の副頁は、前出の「文學七日刊」「文藝週刊」「滿洲新文壇」「曉潮」「北風」及び、「明日」の外、民報には「平凡週刊」の誕生があり、泰東日報には「泰東文藝」主編の「開拓」があつた。

「平凡」は蕭紅、羌笛、李翠、外交などが組成した社刊だつた。「開拓」は「譯海」後身だといふこと で、執筆者には秦墨、王曙、玫泉、若今、吳瑞曦などがゐた。

「平凡週刊」と並立したものに、民報に更に「大地」が發刊された、それは比較的優秀な文藝刊行物であつた。それに出た作品で人の注意を惹いたものに莫尼の「安祿山的死」及び豊已の「秋夜」があつた。前者は歴史故事を題材とした短篇創作で、後者は妓たちの性的苦悶を描寫したものだつた。撫順民報の二つの週刊「晨」及び「語絲」は比較的幼稚な刊物で、終始批評家の注意を喚起しなかつた。

この外に創作小說集に『風夜』（大內記す――これは秦明といふ作者になつてゐて上海で發行されたといふ形式になつてゐる。今明は今の顧行建である。私は『風夜』から數篇譯し『滿洲行政』に載せ、また一篇は『原野』に收めた。）及び「永遠的微笑」が出版されてゐる。そして大同報は更に「國民文庫」を發行した。毎月一度出版し、新小說、新劇本、新詩集三種に分けてゐる。（大內――これは少し違ふ。上記の外に、學生文藝、傳奇小說があつた。）同紙の毎月の蒐集作品をと とめたものだつた。

一九三六年は滿洲文化が沒落した年であつたと言へる、また出版業が停滯狀態に陷つた年だつたとも言へる、以前にはまだ『鳳凰』及び『淑女之友』等の月刊の出版があつた。だが、この年には『新青年』『興滿文化月報』及び『斯民』等二三の刊行物が出ただけであつた。

『斯民』は編者の低能のために、すうつと文藝から隔絶してゐた、『興滿文化月報』は南虹民が大いに努力したが、內容はなほ我々をして荒涼を感ぜしめ、見るに足るのは『新青年』旬刊のみであつた。

それには僞青の「廢人」「天才者的悲哀」「住民墓地旁的少女」等の數篇が出た、作者の筆調は、中國作家の流從文によく似、技巧も構成も獨特のものがあつた。その外にまた黃夏穆の「經曲」があつた、それは百八十行の長詩で、この荒蕪した園では珍貴な種子であつた。

新聞の副刊は、この年に增加はしなかつた、そしてそれまで比較的眞摯だと認められてゐた「開拓」「平凡」「大地」等は前後して停刊し、その他の歷史性を有つた副刊も、もとの狀態を保ち得ず、一種の衰老した沒落を形成した。

盛京時報の三十週年紀念の募集文は、題目は「いかにして滿洲文藝を振興せしめその獨立した色彩を持たしめるか」といふのであつた。それはひろく注意を惹き起したが、當選した作品は多く空談で、切實でなかつた。同時に同紙には盛京文藝賞が設けられた。これは滿洲では全く奇擧であつた。だがこの年度の該賞の獲得者は滿洲國國務院の「紅樓夢別本」であつた。疑ひもなく、我々が熱心に期待してゐたのを失望させた。

この文壇の不景氣だつた一年に、我々が忘れてならぬのは、僅かに曇花一現的な『滿洲文藝』の出版であつた。それには巻頭（盖然）の「寂寞」、楊進の「菱蓮」が出、比較的に進步した刊行物であつた、だが僅かに二輯を出して、永逝した。

この年、孫徽予の『小姐集』が出版された。疑ひもなく、これはこの文壇の沒落した年の一つの喜ぶべき收穫であつたらう！

一九三七年の春、滿洲報副刊の編者趙孟原は、文壇の再建設を謀るために、終に「北風」及び「曉潮」を合併して、「文藝專刊」とした。だが「文藝專刊」が十期まで出ぬうち、同紙は廢刊になつた。その他、民報、關東報等、文藝に對して曾つて相當な推進力を有つた新聞も同時に廢刊が宣告された。そこで我々の文壇は僅かに一片の荒涼さを剩さざるを得なくなつた。

しかしこの文壇の不景氣は、思ふに根本的な沒落ではなく、まさに偉大なる潛修期であつた。といふのは我々の作家は、決してこのために寫作する熱力を失ひ去ることなく、終に一度の沈默を經

て後、又『明明』なる純文藝雜誌が創刊された。

『明明』は曙光を代表した刊行物であつたと言ふことが出來る。我々のこの荒蕪した文壇に對して、相當に貢獻し得た。形式に於いても內容に於いても、我々に比較的好い印象を與へ得た。

一年來、該刊に發表された創作には、國棟の「火油機」、書玉の「提琴」「皮箱」、疑遲の「山丁花」「北荒」及び「夜車」があり、これら數篇の作品のみを觀察しても、確かに相當に成功して居り、現實の表現に對してもやはり前進的であつた。

該刊の編者は陳雪利君で、その全力をあげて『明明』を健康な殿堂な段階に邁進させるべく努めた。この一年中に、三つの特輯が出現した。それは八月號の創作特輯、十一月號の魯迅紀念特輯及び十二月號の日本文學紹介特輯であつた。

創作特輯には六つの短篇が收められてゐた。書玉の「嗜」、小松の「夕刊的消息」、國棟の「老師的威風」、疑遲の「江風」、徐狄の「雨夜」、潛影の「請老師」である。これらを通觀するに、偉大なる成熟とは言へないが、粗製濫造のものでは絕對になく、少くともそれらは當時の文藝で多くを得られない作品であつた。

十一月號の魯迅記念特輯には毛澗、羅蓽、徐狄たちのこの文學界の巨人を哀悼する文章があつた。どれにも、熱淚をものてする追悼と悲壯な哀鳴を含んでゐた。そして書玉の「魯迅著書解題」は更に完全に魯迅一生の著述の概要を分析してゐた。まさに編者が後記に書いてゐるやうに、これは落葉林中の一枝の紅葉であつた。

十二月號の日本文學紹介特輯には、書玉、文泉、裏夫等六人の譯述を收めた。それは我ら直接に日本文學を讀み得ない者に一つの甚だ好い食糧を供給した。

一九三八年に至つて『明明』は更に新しい企圖を有つた。質の充實の外に、量も前に比べ幾らか增加した。一週記念號には百紙長頁の書予「原野」及び書林の「非流的陰影」が出た。この二篇は當時の文壇に於いて大きな波紋を惹起した。各刊には續々批評文字が出現した。この外、羅蓽の「鑄劍」があつた。二百行の史詩で、それは詩人に一條の新しい路を開いたものだつた。

その他、各期に散見した有章の「野背嶺」、國棟の「阿了式」、疑遲の「鄰三人」「十天」等は、物語の結末に於いて悲觀沈淪の描寫がなく、一條の明朗な出路を暗示し、この年の文壇の珍貴な收穫と言へた。

この年、明明社は「苦民の嘗むる所」といふ口號で、「城島文庫」を刊行した。第一輯は古丁の『蟲飛』で、「吉生」「頌歌」「荒原」「原野」等八つの短篇創作が收めてある。古丁書の一九三三年から

一九三八年に至る結晶作である。第三輯は吳瑞の『花期集』で、「山丁花」「江風」等が收められた。多くはすでに『明明』や『新青年』に載つたものであつた。第三輯は小松の『蝙蝠』で『病患』『夕刊的消息』『月亮笑了』等九つの短篇がある。この外に『百合の綜文集』『一知半解集』、『百靈』の詩集『大荒』が出版された。

『城島文庫』の刊行に續いで『詩歌叢刊』の出版を見た。既刊の詩集に『白丁』の『浮沈』、『百靈』の『未明集』、小松の『木筏』、『虞絃』の『青色詩抄』がある。

本來彼等は城島文庫の刊行の辭で「萬民の籠むる所」「文化と萬民の距離を短縮さす」といふこと、とも高く叫んだのであつた。ところで彼等の『詩歌叢刊』は、僅か百部を印刷したといふ笑ひ事をやつた。先には人々は奇異的に待望したのが、漸次惡意ある攻擊に轉じて來た。

最初、吳瑞が大同報で「藝華的外衣」を發表し、彼等の寫印の態度を指摘した、續いで葉白が『華文每日』に「文化人的本體」を書き吳郎の文章と相應じた。之に因り『明明』に、蘇吉子、辛嘉、鳥人等の答辯の文字が出、そこに文壇で白熱的な論戰が形成された。

不幸、『明明』はこの年の九月に停刊を宣告した、これまことに文壇の最大損失であつた。

四年の歷史を持つ『新青年』は、依然進步もせず退步もしない態度で進んでゐた、年來、同誌で意に滿つ作品としては、蘇青の「巷」「群像」、李白の「夜會」「可歎的某夜」「男與女」、信風の「井」「亡命前記」、路翼の「人行篇」、吳瑞の「拓荒者」、採南の「老劉的煩惱」、程琳の「男女們的塑像」「蘇蘇飢餓を療治した點では同じ力を持つてゐた。作品は類らかにそれぞれ風味を持つてゐたが、しかし讀者の

この外に擧ぐべきは『斯民』であらう。以前には同誌は文藝に對しては重きを置かぬものの如くであつた。がこの年には、吳郎氏が大いに努力したので、文藝の推進にも相當な貢獻があつた。同誌に作品を最も多く發表したのは吳瑞であつた。彼女は曾つて瑛子、小夏等、幾つかの違つた筆名で多くの成熟に近い作品を同誌に發表した。「野孩子」「女叛徒」「庸醫」「新幽靈」等である。これが彼女がこの一年に『斯民』で努力した成績であつた。この外、梅雪の「迷落」「風塵」「應談受罪的人」等はみな極めて整つた人生の描寫で、輕浮な滑の文筆調は少しもなかつた。

「跑關東」を以つて人々に注意された鄉土作家山丁氏も、同誌に前後して「鄉土與鄉土文藝」及び「鄉土文藝與山丁花」を發表し、多くの反應と共鳴を激起した。この外また葉蒼の中篇「大荒」も年末に同誌に連載された。

以上二つの事實から、我々はこの刊行物に大き期待を持つやうになつた。少くともそれはもはや

文藝を蔑視し、文藝から遊離しなくなつたのである。

新聞紙上の文藝では、前には泰東日報の文藝週刊等があつたが、この年には大同報の文藝が比較的見るべき刊物であつた。それが過去の「滿洲新文壇」に較べると、質に於いても量に於いても劣るに貧弱であつた。それも週刊でも時には比較的好い作品を載せた。疑遲の「雁」、爵青の「[illegible]秋」、山丁の「不開花的春天」、疑遲の「新畔之家」及び白羅の「[illegible]風人與黄花蕨」等の如きである。この外、田瑯、小松等の散文も一讀に値ひするものであつた。「明明」の停刊から、我々の文藝界は昔の一度は淀澱の裏に沈んだ。それで我々の作家は、思を遙外に設延せざるを得なかつた。例へば小松、爵青、古丁、田瑯等、みな前後して大阪の「華文每日」に彼等の活躍の地盤とした。

同時に「新青年」月刊は、康德[illegible]によつて一期ならず改造され、一九三九年の新年號に於いて、同誌は一進歩の路程を我々に示した。の[illegible]面餘頁の刊物に、我々はまだ尊ら少しの満足をも見出せない。

新年號には小說の特輯があり、六つの短篇が收められてゐた。疑遲の「海岸」、袁犀の「郷愁」と「夜」、古丁の「鍍花記」、山丁の「紫波」、爵青の「小北河」等、ともに熟つた創作で、これは「明明」の創作特輯とまさに好個對照であつた。また我々のこの久しく冷寂たりし文壇に、燦爛なる點

綴を加へたともいへるとも言へた。

この一年に、同誌には三つの中篇が載つた。それは小松の「鉄」、袁犀の「流」と、疑遲が同誌に一部分を載せて中止した「渺茫」であつた。「鉄」と「流」はともに極めて鋭い筆で、人物を立體的に刻み描いてゐた。殊に古丁の「鉄」は救ひのない地獄を深く刺した一篇の力作であつた。

三八年以降、「新潮」が文藝に接近してから、同誌の編者は勝力前進せしめようとした。趣的方面では貧弱であつたが、創的方面では相當の表現が見られた。

この年、同誌に作品を最も多く發表したのはやはり袁犀であつた。我らのこの迅步的な女作家は、この一年中に、「雨樂」「折」「潮」「鉄四郎」等を發表した。外には小松の「拍加」、袁犀の「古墓」、疑遲の「渦六下」、金鉄の「朦」、爵青の「秋」、疑遲の「夜」、これらの作品も我等に好い印象を與へ期待させた。

奉天の「明明文化月報」はこの年、袁犀が主編で、新しい改革と希望があるさうであるが、内容はなほ空虚と貧弱を掩ひ得なかつた。この外、疑遲主編の「華文大阪每日」は同年四月號で、創作特輯を出した。執筆者は多く新人であつた。がそれらの作品には氷凍に遠しはものは見出し難かつた。

新京の文藝界は、これまで全滿文壇に新を臨へて來た。それは新京が文化の中心地であり、多くの作者たちを擁して居り、實力も甚だ雄厚だつたからである。だが、『明明』停刊後に、沈潤と靜寂を呈した。やがて今年、新京の數人の文藝人の努力により、茲に又一つの大型の同人雜誌が誕生した。それはすなはち『藝文志』である。

『藝文志』は『明明』の後身だと言へる。不定期の純文藝刊行物である。內容、形式ともに進歩的であつた。同作品も誇ることを得ず、また又ひに群擠をしなかつたが、發表された作品はみな相當な水準のもの、相當に成熟したものであつた。第一輯のみを見ても、誇るに足る。

第一輯には、爵青の「哈爾濱來的日子」がある。全篇の題材は頗るタイドの「哀兒睹る」に似てゐる。そして構成と技巧は又彌の巴金の風格を有してゐる。その外、疑遲の「新婚」、古丁の「原則」及び譯文では爵青の「一夜」、辛嘉の「盜賊」の如き、偉大なる成熟とは言へぬが、決して不人工で遊ばれて編み出された作品ではなかつた。

やがて、同年の十二月、奉天でも同人雜誌『文選』が創刊された。これも二百三十餘頁ある純文藝刊行物であつた。間もなく、滿洲の文藝界は、すでに發展の新時期へ踏み入りそして雙壯、殷盛へ邁進したのだつた。

同誌の第一輯で、すでに全篇の名家を網羅し、十一の短篇創作を收めてゐた。量の方面だけから言つても我々を驚かすに足りた。そして質の方面は、更に欣喜に值ひした。例へば山丁の「狭街」、小松の「赤手空拳」、袁犀の「三人行」、爵青の「歡喜曲」、爵青の「白城子記」の如き、技巧も構成もみな相當に洗練され成熟したものであつた。その外、石軍の「混沌」、田兵の「阿車者」は、ともに綿密した生活を取つて、農村の現實をつかみ、作者は強き同情と愛で、鄉城に住む農民の必死のもがきを描いてゐた。更に疑遲の「雪夜」、古丁の「酒場內幕」及び爵青の「月下」は幽默の筆調を以つて洗新な物語を描き出してゐた。

『大同報』の「文藝」はこの年編者の交替のために三つの違つた傾向を示した。すなはち陳世孝が編輯に當つた時代には新人の發掘に相當に努力し、季風が編輯するやうになつてからは外國文學の紹介に傾いた。

同年該刊には、前後して批評、譯文、詩歌及び藝文特輯等、幾つかの有價值のある特輯を出し、文化の推進に相當の貢獻をした。その外に滿外文藝紹介特輯が毎月に一回出た。それには海外で活躍してゐる數人の作家の原稿を掲載した。內容は譯文に重きを置いた。執筆者には田瑯、雷漢、閻鳳、辛嘉、爵青、外に盧瑞氏があつた。

年來該刊で最も活躍し、最も努力した作者としては、[illegible]を推すべきであらう。この一年に、彼は該刊に連續して三つの戰爭文學を譯した。それは[illegible]の「海と兵隊」「士と兵隊」「麥と兵隊」であつた。この外に「小說的立體的透視」等があつた。だがこの天才的熱力を有してゐた作者は[illegible]。これは我が文壇の一大損失であると言はねばならなかつた。該刊にこの大いに心血を酒いだ作者を追悼すべく、「記念故雪竺專號」を特輯した。執筆者は[illegible]、[illegible]、[illegible]、多く[illegible]氏生前の故友で、收められたものは悲哀な情緒の文字に滿ちてゐた。

この外、同紙に連載された長篇に、[illegible]の「壺與夜」、[illegible]の「同心結」があつた。この二篇は文壇で大きな波紋を捲き起し、文壇に長篇創作の風習を提起した、これは同紙の新し功績であつたとしなくてはならぬ！

[illegible]は流暢な大衆語で、農村での幾年代に滿ぜられた物語を描き出したものであつた。「同心結」は優しい暴風を以つて一編の生動する物語を綴り成したものであつた。だが作者の過去の鄕土味に富んだ短篇を以つて見れば「同心結」は疑ひもなく失敗であつた。その外、『健康滿洲』には[illegible]の「斷續層」があり、泰東日報には[illegible]「失了方向的風」があつた。ともにこの年度の大きな收獲であつた。

最後に言はねばならぬのは[illegible]の小說集『雨蔬』の出版である。それには「霧」「拆」「雨極」等、十の短篇が收められてゐる。ともに極めて整つた人生の寫照である。作者は女性の眼を以つて、地位を持たぬ、舊式の女の灰色な人生の悲哀を描き出した、髮蘭な堅練された筆調の中に、ゆるがせに出來ぬ人生味が躍動してゐる。

一九四〇年は、詩運建設の一年であつたと言へる。我々が健忘症でないならば、『[illegible]』停刊後、我々の詩作者は一時消沈し、一九四〇年に至つてやつと活潑猛進を示したことを思ひ出すであらう。

單に詩刊のみについて言へば、楊[illegible]が主編した『詩歌連叢』があり、前後して『地平線』『風景』朗な粗線を透出した。

『詩季』は時作、詩評、詩話、譯詩の四部に分れ、全滿の詩作者を網羅した。それは詩壇に一大波紋を激起した。執筆者には[illegible]、未名、[illegible]、[illegible]、[illegible]、金韓、楊[illegible]等三十餘名の詩作者があり滿洲詩壇上空前の創舉を形成した。

同時に、『新青年』月刊でも、毎期、新詩歌特輯をやつた、『詩季』が世に問はれてから終つた。

『新潮』本年の創作は、何としても以前より貧弱であつた。だが此處でも數篇の成熟した作品が出現した。石軍の「狩流」、霧寿の「大視圏」、雑誌の「十二燈」及び『水蓮』の中篇「家」等の如き、何れも我々の文壇に於いて多く得られぬ作品であつた。

『戰線』も詩運の再建設に應援するために、「詩運建設特輯」を出した。執筆者は已に名を成した詩作者の外に、文壇上の詩人をも廣く含んでゐた。記憶にある作者には蕭子、吳鄭、魔女、駝羊、蘆蕪、老翁、崔信蓁、陳蕪等の詩作と詩話があつた。

新年號の刊首の「一九四〇年的話」に、我々はすでに該刊の野心と企圖を見出し得る。該刊はまだ理想の夢境には達しなかつたが、事實上一つの進歩の烙印を押したのであつた。

この一年に、該刊の前記特輯の外に、「新人創作展」といふ輯成をやり、新人の發掘に相當の努力を盡した。執筆者は劉漢、胡琳、孟語、柯炬、克夫、姚遷六氏であつた。そして劉漢の「旱魃」は殊に極めて優れた鄉土代表作で、文壇の注意と好評を激起した。この外、馮蕭の「前路」、克夫の「過禮」、姚遷の「平在上海」、長谷の「暗屋之書」及び柯炬の「悠遠的家」は同年度の文壇での珍貴な收穫であつた。

平靈所持の良雲の一文は右で終つてゐる。ここにも、種々と資料が提供されてゐるのを知り得た。

いま『明明』の創刊號を見ると、彩虹は昭和十二年三月の發行であり、稻川朝二路氏が主幹となつてゐる。

創刊號は今月の「麒麟」とあまり違はぬやうな、大衆向きの編輯である。ただ、創作に袁丁の「又一年」、百靈の詩「敏于」、史之華（古丁）の雜文「閑話文壇」、ゴオリキー「本」（劉郎譯）等が文藝の範疇に屬するものである。

第三號に徒香子の「皮箱」「山丁花」が出た。同號に『大連文藝界小紀』（野月）といふ一文があり、雪柔、田軍等が滿洲笙令を作つた。王文鳳の北上作、滿洲笙令も不振になつた。留日した學生により『遼水週刊』が出てゐる。大連には翻譯者は多い事、作家は少い、といふやうな旨が書いてある。

第四號には、青年書局主催で日滿文藝座談會を新京圖書館で催した旨の記事がある。

第五期に田兵の「T村的年暮」、苦土の「皮鞋」、疑遲の「雁南飛」、古丁の「小巷」が出てゐる。

第六期は前出の創作特輯、なほ秋蛍の「滿洲新文學的踪跡」二十六頁がある。これまた些か主觀的に過ぎたとは批評されたが、豐富な資料を提供した一文であつた。なほ、この號で楊朔氏は退いてゐる。更に第二卷第二期に同じ題で長篇の一文がある。これも一見に値ひしよう。

なほこの頃、株式會社が日本文による詩集『新しき感情』を東京で刊行してゐるのが注目される。

なほ又、話題が別になるが、康德四年末に滿洲弘報協會の肝煎りで文藝親話會といふのを開催し、滿洲文藝協會の設立を議したことがあつた。仲賢穆、磯部秀見、赤川幸一、穆六田、吉野治夫、鬼村義信、大内隆雄、今井一郎、坪井與、武藤富男、板垣守正、柴野為玄知、杉村勇造、陳啓雄等がこの會に參加した旨、『明明』の二卷四期の記事にある。

『新青年』第五十八號（康四、七）以下に「滿洲新文學之發展」を寄せてゐる。『新青年』、第六十一號（康四、九月）は日支事變特輯であるが、同號に秋蛍の「滿洲創作界小顯」がある。『明明』の創作特輯の作品を批評したものである。また同じ號に可欽の「妓術與船上」がある。「妓術與船上」は後に譯して『滿洲評論』に寄せたことがあるが、刪除されてしまつたことがある。

康年五年一月の『新青年』には方志の「文壇一年的回顧」がある。

同年三月の『明明』は前出の一週年記念號、「原野」などが載つた分で、百六十頁の、豐富な一冊。

『明明』三卷四期には、秀馳の「黃昏後」、小松の「人絲」石軍の「風雨」、李蘇の「玩弄者青春」、君默の「霧」等の作作が出てゐる。

『新青年』康德六年十一月號には小說特輯があり、雅東の「家行記」、舒柯の「雲台」、老鼎の「記姐姐」、田泰の「砂金夫」、小松の「書」、秀馳の「濱」が載つてゐる。

ここで『藝文志』について書くべき順序となつた。前引稿にもあるが、『藝文志』第一輯は康德六年六月の刊行である。關田象吉が「滿洲の文學者に望む」といふ一文を寄せ、鄭孝胥氏の「金石叢談」があり、少虹の「鄭海藏先生的詩」（鄭孝胥氏の詩について書いたものである。）があり、鶴壽、王學目叙傳」（「列女傳」）石軍、赤巷、秀馳、西原、君默、金音、袁犀が彙を並べてゐる。私の「非定成的文」といふ一文も中に插まつてゐる。いろいろなものを載せるといふ始めからの建て前だつた

のである、四六倍二百十余頁、重厚味を持つた出發であつた。

その第三輯は同年末に出た。今度は三百六十余頁といふ前にもましての大冊。書簡の「平沙」、松の「蒲公英」はこれに載つたのであつた。ほかに、李家驤の建國文藝常選作「春の復活」、蘇陣の戲曲「金絲籠」、百靈の史詩「成吉思汗」（これは第一輯からの續き）、寶驥、劉慶榕、陳蒼蘆の詩、長倉朋澤の「大同大街」を悲嘆が譯したもの、泰嶸龍の「我的文學十年」等があり、更に創作に裏龍の「鄉仇」、石軍の「麥秋」、蘇靈の「廢墟之書」、裴穆の「馬成驗」、劉行遠の「桃色輪廓」があつた。

『藝文志』第三輯は康德七年六月の刊行、實に四百二十余頁の大冊で、日本紀元二千六百年紀念特輯を含み、次のやうな內容であつた。

特輯

藝文雅頌　　榮厚

奉祝二千六百年　　沈瑞鱗

日本文學的特性　　大內隆雄

日本文學的語言性格　　杜白雨

關於明治大正的二名作　　非斯

古事記選譯　　木崎龍

芭蕉俳句選譯　　光天

井原西鶴　　百靈

海彥山彥　　武者小路實篤　古丁譯

阿部一族　　山本有三　外文譯

紀元二千六百年紀念東亞操觚者懇談會經過實錄　　森鷗外　莫伽譯

現代朝鮮文學論　　疑遲

和蒼虬索牛花　　李台雨

奉迎元初太守柳壽圖　　劉思格

昨非

牡丹園雅集分詠得花字　少丸
讀張文襄公杜少陵詞感賦　眞如
三代金文中女姓釋例　羅福頤
旅窓卽稿　辛嘉
閑話北京　少丸
半生之記　北村謙次郎
我的語錄　莫伽
半生雜詠（詩）　外文
漂流曲（詩）　刁陵
馬家溝　竹内正一譯
麥（二百枚）　共鳴
創作　幾檻（百枚）　爵青
　　宰地　小松
　　同歸線　石軍
　　　　　　燮運

戲曲　金泰淺
　　漢塞（獨幕）　杜白雨
　　春秋（四幕）　君頤
編輯後記　辛實

右の内、山本實彦氏の「海彦山彦」を勧めたのは私であつた。本嶋龍君の「明治大正の二名作」についても書き卸しの力作であつた。

『藝文志』と對應するやうに、『康德文化年鑑』が天から刊行されたのが『藝文誌』であつた。（同仁）

その内容は――

刊行緣起　秋螢
三個運動　丐

滿洲文學別論　石　卒
藝文志考斜謬　靜　窓
狹　衾　山　丁
赤字會計　小　松
日　子　崔　東
擺　脫　石　軍
傍晩的喜劇　梅　娘
五個夜　李　喬
北　京　成　弦
文・影・劇　遲　二郎
消閑雜記　古　丁
浮瓜沉李　吳　郎
翠　紅　吳　瑛
同車者　田　兵

二人行　姜　菲
飲血者　白　樺
白癡知識　爵　青
分　配　島崎藤村
運命的人　共鳴　譯
姜氏老店（戲曲）　シェンキウィッチ　李牧之　譯
後　記　安　犀

『文選』の第二輯は翌年十月に出た。收むるところ——

創作・戲劇

贖　罪　秋　螢
率牛花　石　軍
原　鈴　山　丁
明　鈴　夷　驄

黃昏　田間
荒　田間　吳瑛
清街　吳瑛
三遷　戈禾
媽媽記　老舟
鑛金的像（中篇）　李妹
血刃圖（獨幕劇）　李喬
逃婚（獨幕劇）　單慕
蓮居士畢業　蕭客
花皮驛亭　余小天

新詩・散文

鄉下人　楊野
五月之吟外二章　吳郎
希望的象徵　崔伯常

河　詩　可
愛恕峽　金山　龍
我與寂靜與夜・靈魂的獨語　金音
一九三〇年代的文學　馬爾甘・高里
關於日本目前的譯界　莫伽
文藝復興時代的美學　紅本多年顯彰
湖畔詩人華茲華綏（ワーズワース）　杜德郁介

愛　詩

雨　極　白永雨
平沙　李文湘
山風　鍾
無花的薔薇　鍾

譯　文

官能之書　陳因

村員們　竹内正一
一杯啤酒　牧之譯
我裝語　T・O・ピーチクロフト
　　黄河譯

關於雜文　顧盈
我與文學　田卿
人與文　李喬
漫筆　陳因
關於二輯文選　李妹
編後雜感　秋萤

『藝文志』同人は「讀書人叢書」として『讀書人』『文學人』『評論人』『詩歌人』を出し、文選刊行會では「文選叢編」として『文最』『文潮』を出した。

更に『作風』が出たが、その第一輯は譯文特輯であつた。

その他、單行本がいろいろ出たことは前引文章にある通りである。

第十九章　滿洲文藝家協會結成さる

ここで、滿洲文藝家協會の設立へ移らう。

藝文指導要綱の發表されたのが康德八年三月、その後種々協議を進めて七月二十七日協會の正式設立を見た。

その經過は、協會で出した『藝』に次のやうにある。

「我滿洲國の藝文政策は、本年三月政府發表。藝文指導要綱の如く、その確立を見るに至つたが、その後この藝文指導要綱の理念に基き、藝文各界の有志の間に、各その專門藝文團體結成の準備が政府と緊密な連絡の下に進められ、七月五日、先づ滿洲劇團協會の誕生を見るに至つたが、[illegible]滿洲文藝[illegible]長[illegible]大[illegible]以[illegible]田邊三郎、大內隆雄、高見順、古丁、高木俊一、樋本榮一、遠見猶吉、山崎宗[illegible]滿洲國の有志が、武藤弘報處長、中島同參事官、破龍同係員と數次會合、政府肝煎りの下に、團體の[illegible]の準備[illegible]が[illegible]たのであるが、七月二十七日國務院講堂に開かれた弘報處長招集による滿洲

昭和二十三年八月二日發行第二〇

文藝家協會設立會議によつて、即日、本協會の創立を見るに至つたのである。設立會議は、弘報處長より報告を受けた全滿各地（關東州を含む）の文藝家（作家、詩人、文藝評論家）總數百名のうち、交通その他の關係で缺席を餘儀なくされた若干の人たちを除く多數の出席者を得て、折柄の雷雨を侵奏に午後三時半開會。岸本參事官より設立會議開催までの經過報告があり、弘報處長の挨拶の後、弘報處長を議長に推して議事は進められ、準備委員の間に練られた滿洲文藝家協會設立要綱を檢討、愼重審議をつくして滿場一致これを會規として承認、窓外の雷雨に和する嵐の如き拍手裡に我滿洲文藝家協會の成立が宣せられたのである。

この頃の、小生の日記から書き拔いて見る。

一　月

李樹の「本」を譯す。

傅藝の『第二代』受贈。

傅藝の「窓巷」を譯す。

滿新へ「中國作家案內」を書く。

石軍「牽牛花」譯着手。

秋蓉の「磚坑」譯着手。

『日滿露在滿作家選集』到着。

二　月

今日の報告文學應募作品を選衡。

秋蓉の「新開風景」を譯す。

塙本譯『科爾沁旗草原』譯着手。

「血刃國」譯す。

「新葉」譯す、『滿洲』へ。

『奥藝』出版。

長谷川泰『虎』出版記念會。

三　月

晃耶「豆腐生涯」譯。

「滿洲出版界への一提言」を『收書月報』へ。

昭和二十三年八月二日第三種郵便物認可

「群星亂墜」譯。
小松の『北歸』受贈。
國興會吉君離京。
文話會臨時總會。

四　月

「回憶中的上海」執筆。
哈日、報告文學發表。
『雜感之感』出版。
「鈴蘭花」譯了。
「鑛銀之像」譯。

五　月

『僻土殘歌』出ヅ。
米名の「おとなしい男が天國へ行つた話」を譯し、滿日へ。
「感銘を覺えた本」大日へ。

六　月

「春光」着手。
文話會役員會。
瀬沼三郎氏死去。
「大陸生活者の反省」『滿洲評論』へ。
獨ソ開戰。
『新文化』へ原稿送る。

七　月

盤石、樟甸、西安等へ旅行す。
ラヂオドラマ放送。
滿日藝文講座へ出講。
文藝家協會準備會。（七、一七）
「事業開拓」譯了。
文藝家協會成る。（七、二七）

國立國會図書館蔵書

文藝懇話會幹事會（七月一日）

「滿洲文藝家協會」に代表を送る。

八月

文藝懇話會幹事會。（二日）

「改造」誌上で、「日本の風俗」を。

「日語新聞」廢刊。

文藝懇話會。

「五日、藝文懇話會。

九月

農村と文藝について、滿洲紅書會

「國民文藝」廢刊。

十月

藝文懇話會。

「滿洲文藝懇話的構想」講演。

「滿洲評論」「滿洲文藝」廢刊。

「我々の文藝活動と勤勞青年團」講演（。「小説」上の「野蕃人」發表。

「文藝懇話會は何をなすか」會合（。

文藝懇話會月例會。

「國民文藝」廢刊。

十二月

「滿洲國の文藝」講演。

「民主主義」講演。

「滿洲文藝の二十年」執筆。

「我が地帶」講演。

「小説」誌上で「長篇」

「新天地の文學」「滿洲」（。

十二月

八日、對米英開戰。

文藝家協會委員會（七、二九）

「滿洲文藝家協會の仕事について」を滿新へ。

八　月

文藝家協會座談會。（滿日）

「皮膚」譯了、『日本の風俗へ』。

「白痴知識」譯着手。

文協委二回。

二五日、藝文聯盟成る。

九　月

戰爭と文學について、滿新社會欄

『蠟燭』出版。

十　月

藝苑書房開く。

「滿系文學理論的構築」滿日へ。

『滿洲評論』講演會滿鐵、西廣場厚生會館で、「滿洲文化の諸問題」を講述。

「我々の文學活動と勤勞者精神」滿新へ。[illegible]より「野葡萄」受領。

「文藝家協會は何をなすか」哈日へ。

文藝家協會月例會。

『藝文』準備進む。

十　一　月

「歌場家の人々」譯了。

「天主」に着手。

「滿洲文學の二十年」着手。

「城壁地帶」譯了。

『小工車』受贈

「新支那の文學論」滿日へ。

十　二　月

八日、對米英開戰。

昭和二十三年八月二日印刷納本二一〇

「南人の滿洲開拓」『緑光東北』へ。

「青服の民衆」譚書手。

長谷川濬、三河へ。

アイグルトに會ふ。

『藝文』創刊號出づ。

「戰爭と文學」『藝文』時刊號へ。

「壊園」擱了。

「大東亞建設と藝文」略目へ。

以上で、この大東亞戰爭が起るその年の事迄をそれが回顧開幕のものだが、少しく補遺を加へよう。

滿洲文藝界は、新しい藝文團體の組織結成を機として、各地においての藝文翼贊團體として再出發することに定められた。しかし、實際には、この藝團は所期のやうには進まなかつたやうである。尤も、所によつては、別な形を取つてそれは具體化されてゐるとも言へる。各地での藝文協會といつた團體がそれである。それらは、專門家の組織で文藝家協會とはその質に於いて異際と限制あるべきものを持つてゐる。素人愛好家をも併合するといふ良さはあるのだが、文

藝家協會には、また今日の時局下に藝能分子を結集するといふ意圖が存してゐることを忘れてはならない。

文藝家協會は山田清三郎を委員長とし、古丁、疑遲、爵青、大内隆雄、[illegible]、高川坤、逸見猶吉、筒井俊一、宮井一郎、藤田菱花、野川隆を委員とし、（野川は後に退いた。委員は「文選」派の[illegible]、[illegible]）今村榮治、上野市三郎、稲村[illegible]、上[illegible]、牛島春子、[illegible]、[illegible]、大内隆雄、[illegible]、[illegible]、岡本隆三、呉一、神戸梯、外文、北尾陽三、北村謙次郎、北小路功光、[illegible]、李季瘋、[illegible]、[illegible]、呉瑛、古丁、[illegible]、[illegible]、坂井艶司、山丁、小松、[illegible]ふみ、辛嘉、[illegible]、高森文夫、檀一雄、[illegible]、筒井俊一、[illegible]、仲賢禮、長谷川濬、逸見猶吉、松畑優人、丸山[illegible]、綠川貢、三好弘光、宮川靖、望月百合子、山田清三郎、山崎末治郎、李季瘋、[illegible]、[illegible]、青木實、[illegible]、小杉茂樹、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、富田壽、中山美之、日向伸夫、町原幸二、宮井一郎、三宅豐子、山田健二、[illegible]、[illegible]、[illegible]、加藤郁哉、[illegible]、[illegible]、平八郎、[illegible]、竹内正一、[illegible]、[illegible]、[illegible]、杉本[illegible]、上野凌嵱、[illegible]、古屋重芳、秋原勝二、[illegible]、[illegible]、鈴木啓佐吉、石軍、高木恭造、工藤[illegible]、櫻木一良、[illegible]、[illegible]、野川隆、[illegible]を最初會員とし、關東州在住の[illegible]練太郎、井上麟二、加納三郎、島崎恭爾、城小碓、武田[illegible]、西村眞一郎、古川賢一郎、古川哲次郎、[illegible]、八

木橋雄次郎、[illegible]、吉野治夫[illegible]会友とした。なほその後、高橋勇、尾田幸夫、島田清、林田茂雄、小林貢、大野澤緑郎、八木義德、山口正幹、酒井美津子、横田文子、石河薰、菅忠行、楊逵、[illegible]、[illegible]雄[illegible]会員に、川島盟歌、福家富士夫、田村昌由、[illegible]会友に加へた。なほ、死亡、國外移居、國內移居等によつて若干の變動を生じてゐる。

前に觸れられてゐない「[illegible]」について。これは專ら[illegible]の努力によつて[illegible]から刊行された文化、文藝の刊行物で、二輯出てゐる。[illegible]の「歐陽家的人們」などもはじめこれに出たのであつた。[illegible]「[illegible]」と書くと、最も古くは今の[illegible]、當時の[illegible]の紹介で間接に知つた。また[illegible]と[illegible]も此の紹介で直接知つた。

[illegible]八面城から手紙を寄越し、文通を繰り返した。

その他は、新京での交際である。古丁、小松、舒青、外文、疑遲……吳郎、吳瑛、金音……杜白鵑、辛實、山丁、戈末、楊絮……冷歌……夷夫、……劉漢……安犀、黑風。また奉天から來る秋螢、佟千松、成茨、田兵……。北方にゐる石軍。楊絮。一々書けば、きりがない。若干の連中は、今北京にゐる。柳龍光、百靈、王則、梅娘、辛嘉、共鳴……曲傳政……等々。張政國も忘れ難い人物である。

第二十章　康德九年以後の概況

康德九年(昭和十七年)以後、本稿を閉ぢることとしたい。

先づ概說――昭和十六年が滿洲文學界にとつて組織確立の年であつたとすれば、昭和十七年(康德九年)は、この組織確立のあとを受けて、作家が一方には沈潛的に精進制作にいそしむとともに一方には公的なつながりの線に沿つて外面的に且つその間に自己を鍛へ來つた時期であつたと言ふことが出來るであらう。大東亞戰爭の勃發は、この時の滿系知識階層の意識をとみに明朗にしたと言はれてゐる。そのことは文學の部門にも反映されたことを指摘出來る。

一月十八日には、滿洲文藝家協會主催で新京に於いて[illegible]大會が開催された。

一月、雜誌『藝文』が創刊された。一說ではもつと文藝方面に力を入れることと期待したやうであつたが、さうも行かなかつたやうである。時局の反映でもあり、營業上の理由もあつたであらう。一

電話二一三三八二番　新京一一〇

方、多年の歴史を有し同人雜誌的境域からよりひろく發展しようとした『作文』が三月に出、十二月つひに終刊號を發行するに至つたのは惜しむべきことであつた。單行本の刊行はかなりに多くなつた。

外的活動としては國家的各種行事への參加、滿洲國新國歌制定への協力、政府及び軍の各種報道隊への參加、華北との作品交驩、大東亞文學者會議への代表派遣等が擧げられる。諸行事への參加とは、協和會臨時全滿への藝文人代表としての古丁氏の出席、興亞勤員大會への文學者の參加、建國十周年式典への作家の參加、民族藝文祭に際しての作家の勤員等を指す。報道隊への參加は、戰車隊演習への參加、開拓地報道隊への參加、產業報道隊への參加等であつた。これらはそれぞれ報告文學、詩文として結實してゐる。

華北との作品交驩は滿洲文藝家協會と華北作家協會との間に行はれ、滿洲の『新滿洲』、華北の『中國文藝』にそれぞれ次の如く相手方の作品を發表した。

△滿洲側＝爾雅「賭博」、小松「老屠夫與其妻」、奥瑛「墟園」、袁青「認姊底悲哀」、疑遲「不歸鳥」、杜白雨「春底流」、顧行建「少男少女」、劉漠「野猪打的喜劇」

△華北側＝張愛春「匡超人」、紅鷗「我的童年」、蔡楚生「初春散記」、姜採蘋「未竟完的牡丹」、鹿茜「哭吶」、麥禮「風沙夜」、程心勝「靴城」、葉方衛「養子」

大東亞文學者會議に傳壽、吉岡、小松、奥瑛、バイコフ、野田清三郎の六氏が出席した。

日本で發行した選集に『滿洲國各民族創作選集』『滿洲短篇小說集』があり、小說單行本に北村謙次郎『春靜』、バイコフ『さわめく密林』、紀行、評論類に山田清三郎「私の開拓地手記」、嶺山敏男『蘇聯紀行』、報告文學集『地平線を行く』等がある。滿洲で出たものには小林實『開拓祭』、青木實『部落の民』、樣本捨三『阿片戰爭』、高木恭造『奉天城附近』、竹內正一『復活祭』、工藤定『迎春花』、北尾陽三『明暗』、大內隆雄『或る時代』、鈴木啓佐吉『愛情の緩急』、爲青『歐陽家的人們』、小松『人和人們』、秋螢『河流的底層』、疑遲『天雲集』、飜譯で『デルスウ・ウザーラ』『春』（藤村）等がある。

新聞に發表された長篇小說には尾田幸藏『曉の滿洲』、山田清三郎『建國列傳』、北尾陽三『白い庭』、車丁『綠色的谷』等がある。

次に注目すべきことは各地に於ける藝文人團體の組織並びに活動が大いに進展したことである。すなはち關東州藝文聯盟に屬する諸團體をはじめ、哈爾濱藝文協會、四平藝文研究會、安東文話會、海拉爾文話會、牡丹江藝文協會、佳都文化協會、吉林文話會等の活動である。なほ各方面の職場での文

國語二一三三八二振替新京二一〇

芸活動も盛んになってきたこと、満系の方でも旧文学作家の新しい活動、若い文藝人が育ちつつあることも注目に値ひする。

評論──その部門は、文藝評論、本質論、作家研究等の各方面に亘って相當に賑かであった。年頭先づ宮井一郎は『作文』五十輯に「戦争といふものと文學といふもの」を載せ、清水實しかつ文學的者文學論の締め括りとした。山田清三郎は『藝文』に「満洲文藝界の展望と課題」を書き、日系文藝の課題を論じた。同誌には又吉野治夫「文化の反省」、序平、武者正義「文藝統制の問題」があり、同誌第四號にはまた大内隆雄「戦争と文學」があった。大内隆雄はまた「満洲文學二十年」第一部を十ケ月に亘り『藝文』に連載した。

二月の『藝文』に宮井一郎「文學の精神」、古丁「日本文學の在り方」、石塚喜「大東亜戦争と文化共同體」、池辺青春「戦争と美術」、緒方貞一郎「文化と技術と精神」、仲賢禮「高山樗牛よ評論活動について」があった。

満系の側では三輯に兆堅「新文學的退路説」、「新時代」があった。ほかに吉野治夫「満洲語を健康に読む」（満日）、加藤三郎「大東亜戦争と知識人の任務」（哈日）、上野市三郎「新秩序文藝運動の提唱」（同）、山崎末治郎「開國文化の歎説」（満日）、大内隆雄「最近の小説に現はれた新しい男女の型」（満日）、山口慎一「満洲文化の諸問題」（『満洲評論』）、藤原定「詩論」（『満洲詩人』）、瀧吉雄「防人の歌について」（満日）、大内隆雄「新支那の文學論」（同）、高橋重信「防人の歌」（哈日）、柳生昌勝「大伴坂上郎女とその作品」（『文藝満洲』）、細川政次郎「民族協和文化建設論」（満日）、有賀清刀「藝文と用和の文化」（同）等があった。

『藝文』三月號には宮井一郎「新興満洲文學論・建國精神より出發せよ」、西本實「生活の文學を確立せよ」、緒方「満洲に於ける農村演劇と演劇工作隊」が掲載された。『作文』には宮井一郎「藝術の機能に就て」、鈴木啓佐「文明開化について──森鷗外──」があった。外に『文藝満洲』に竹内正一「在満文化の道」、大内隆雄「大陸生活者の心構へを」があり、また古川賢一郎「戦時の現實文學」（哈日）、山田清三郎「新時代の現實文學」（満日）、宮井一郎「戦争と文學精神」（満日）、水上開拓地の短歌風俗」（哈日）等があった。

四月には青川文夫「夕暮の詩論文學」（『藝文』）、林田茂雄「個人主義の超越と」（同）、林房雄・古丁對談（同）、鈴木啓佐「満洲文學の批評について」（『満洲』）あり、西・五月に上原篤「満洲演劇運動の動向と検討」（満日）、山田清三郎「満洲文學の行方」（哈日）あり、また森諸作家論叢論、満洲國と著作權問題について論稿が出た。

六月には遊田民夫「鼻を探す文學」（『藝文』）、北小路功光「滿洲の文學と風土」（同）、金丸精哉「滿洲の夢々について」（同）、七月には桐天吉「現代生活の問題」（『藝文』）、大内隆雄「日本の青年文學」（滿新）があった。

八月には桐天吉「練習と修業」（『藝文』）、橋本八五郎「滿洲文化の場と人」（『滿洲』）、大内隆雄「作家に要求される新課題」（同日）があり、九月には金原省吾「滿洲文化の單一性」（『藝文』）、上野市三郎「文藝時評」（同）、板井興司「ノ滿洲詩ノ鑑抄」（同）、岸本實「文藝十年の回想」（『新天地』）等があった。

十月には藤乳潛「滿蒙青少年への文化提携」（『藝文』）、山田清三郎「奥村文學の方法」井の他（同）、大内隆雄「最近文藝界の近況」（滿新）、大内隆雄「金野と藝文」（同日）、秋野「滿洲文藝計話」（『觀光東亞』）、牒因「滿洲文壇月評第一章」（『新滿洲』）等がある。

十一月には横山敬男「具體的個性の創造」（『藝文』）が出た。

十二月には林田茂雄「民族の藝術」（『藝文』）、高田譯「滿洲文學概觀」（同）、秋原勝二「滿洲の文藝批評」（『作文』）、吉井一郎「文化の種子蒔」（同）、山田清三郎「文學者大會に參加して」（『滿洲藝文通信』）、上原篤「國民演劇の構想と金國」（同）、大内隆雄「文藝問題」（同）があった。

以上のほか鶴見三郎『滿洲文藝年表』が年頭に單行本として出てゐる。加藤氏がその後日本へ歸化したのが惜しまれる。

小說——主なる作品についても見よう。北村謙次郎「東北」（『藝文』一月）は日本東北の旅を描いて水際立つた短篇であつた。長谷川濬「星雪・序章」（同上）は建國當初の青年群を扱つた野心作の序章。山丁「樹性地帶」（同上）は酒を滿洲を鋭く抉剔したもの。日向伸夫「多摩川」（同上）は病的な在滿日系を扱つて才能を示した。高木恭造「酸平」（『作文』一月）も在滿日系の型の一つの型を描き出した。秋原勝二「河や山」（同上）も同じことが言へる。上野政雄「蟻江祭」（同上）は異民族協和の實相を基調ある筆で描き出した。中山藝之「征塵」（同上）は旅は深い山征記。鶴田和平「蟹」（『滿時』一月）は異色あるものだつたが、惜しむらくは完つた。時實「實服的民族」（『新滿洲』建設）は古い有能階級一家の離散を背景に人物心理の動きを精細に追究した長篇。犬谷年内「死靈に惹られながら」は北滿の農村を背景に若い男女を彫塑した。奥藤「處女」（『民藝』一月）は都會の女を描いたもの、劉浩「大青」（同上）は少年の見た農村風景を描いたもの。小松の「坪面海」（同上）は貧しい農村の男女の生活圖。長瀬「雪夜之祭」（同上）は北滿の山

に住む男女に扱つて現色があつた。前井俊一「三叉」（『藝文』一月）は巧みに若人の世界を描いた。

北原四三「野狐」（『藝文』二月）はこの作者らしい農村の面白さを充分に味はせた。坂井健吉「蔵にしあれば」（同上）は作者も評（ふ）ともに新鮮な若い可能性をはじめて日本に訪れた記録として注目された。吳濤「楊國」（同上）はたしかにもとの國もどこか古い國柄の姿を再現した。高木義雄「生地」（『新潮』二月）はまとまりのいゝ好短篇。『新潮』二月の新工『新興社』、冷井「夜桜」、矢野「蛍」の三人の新人の新篇、何れも嬉しいものであつた。

宮井一郎「都色的詩」（『作文』二月）は詩潮社市場設の和を微細に描かうとする野心作の部。麻川透「東光」（同上）は感覚的な人間を扱つて面白いのだが、かなりに非健康であると思へた。堀田四郎「ふるさと」（『藝』三月）、島田和子「孝道」（同上）はともに日本の詩と書いてある。

二月末刊行の『詩潮文学』は山丁「恋」、村村「母」、戈宗「春近村」、前野「人鬼通信録」、野口「埋葬」、前田「一個」を載せ、詩潮文学の黒柱となつた。

千島敏子「女」（『藝文』四月）は時代下の女の思想と感覚を描いたもの、我然とした作者にはたゞなるものがあつて評（へた。前野「亜麻」（同上）は作者の遺骨を示す一作、小島校の我員と我が題材する一浮浪少女を扱つて鮮彩を放つた。後野「雲母地獄」（『新潮』三、四月）は巧みな風刺的作品、島村辺「朝鬼女鬼」（同四月）は作者自身の部分群像を描いたもの。石垣「蛍動」（同四、五月）は農村の平俗を描いた力作であつた。

宮川一郎「農信」（『藝文』五月）はこの作者らしい現代のスケッチと言（よう。しかし自然は多彩なる向つた一作。黒澤「前野」（同五月）は一つの悲哀。

戈宗「大変月」（『藝文』）六月は所謂の農見の苦闘を新写した一篇。鼎恭子「蛍」（同）は詩の作法を初めて書いた時代物、竹林七賢の人物を扱つて現代知識人の苦悩を高揚したものと思はれた。御園「野前詩」六月は「林間詩」と書いた。

山田清三郎「老年」（『藝文』七月）は或る日本男女の婚姻を機会から結婚までのこと、それに配する二人の人女中の婚姻とを対比したこの作品としては珍しい回れを扱つたものである。

『藝文』八月号は加藤建夫「馬」があり、馬夫と馬を人々を描き、その対比で顕はすものがあつ

た。同誌、百瀬宏「燃える町」は戰記だが、文學としての燃焼の足りなさが感ぜられた。

八月には爵青が『麒麟』に「長安城的愛憎」を書いた。知識人陸顕にからまる戀と金との奇話を才筆で描出した異色篇であつた。

ほかに『北斗』で、木畑卯一「丘の子供たち」が美しい短篇として好評、また『新天地』で池淵鈴江「朝子」が氣のきいた一篇、一女性の信仰生活の變化を描いたものとして好評であつた。

九月には『藝文』神戸梯「縣城」が出た。匪襲に遭つた磐石縣城を守り通すといふ材料に半島人を配し、力の籠つた一作であつた。『青少年指導者』二十卷所載、天穆「献」も注目すべき一篇であつた。愛妻を亡くしての追憶記であるが、まことに眞摯、そして健康で、育ちつゝある滿系知識人の姿をこゝに如實に見得た。

『新滿洲』九月號には小松「法文教師知他的情人」が出た。悪い條件の中での貧しい知的女性の苦闘を描いたもの、また吳瑛「六月的姐」はアパートに住む女たちのいろいろな型を活寫したもの、また徐放「群」（同誌九、十、十一月）は小學教員群を描いて諷刺的な作品であつた。

九月の『中央公論』は爵青「凍つた蹄庭に降りて」、牛島春子「禰蘇草」を載せた。前者は大東亞戰爭勃發の前夜、哈爾濱郊外に集つた滿系、日系、露人、米國人等を扱ひ、民族の交錯、知的滿系青年の模索を描いたもの。書き足りぬ點もあるが、逞しい構想は日本の評壇でも注目された。後者は建國有後の地方に働いた警察官の苦闘をきつちりと描き出したものであつた。『新潮』は竹内正一「風俗國課街」を載せた。『新天地』九月には縣川透の「三人の遭難者」がある。南洋の思ひ出といふ形式で表題の物語が語られてゐる。

仁木良介「或る軍醫の手記」（『藝文』十月）は嚴肅といふに止まる。小林實「アパートの親分」（同上）は開拓地に取材したもので、餘裕のある書き方だが、些か戲畫化した手法が難點となつた。古梯「建」（『新滿洲』十月）、乙卡「安娜的懺悔」（同上）移山「恐怖」（同上）は何れも新人の作。『藝文』十一月には縣川透「河のほとり」、中山美之「路傍の花」を載せた。

十二月は『藝文』に秋原勝二「草葬唱」、冬木羊二「白鼠」があつた。前者は東吉林へ旅した一日系の思惟を描いて關心を呼ぶ内容を有してゐた。『作文』はこの月、終刊號を出し、小說は松原一枝「後姿」、新川透「海へ」、池淵鈴江「ペペルの塔」、長谷川潔「野火」、青木實「父の記」を載せた。「父の記」は眞摯な系譜もので注目された。高木恭造「再會」（『滿洲藝文通信』）も同じ種類の短篇。『觀光東亞』には加藤秀造「慰靈花」があつた。『新滿洲』には而已「濁流」があつた。

この月、青木實の小說集『北方の獸』が國民畫報社から發行された。

雜誌二一三三八二振替新京二一〇

た。同誌、百瀬宏「燃える町」は戰記だが、文學としての燃焼の足りなさが感ぜられた。

八月には爵青が『蝋鱗』に「長安城的愛戀」を書いた。知識人陸顕にからまる戀と金との奇話を才筆で描出した異色篇であつた。

ほかに『北窗』で、木畑卯一「丘の子供たち」が美しい短篇として好評、また『新天地』で池淵鈴江「朝子」が氣のきいた一篇、一女性の信仰生活の變化を描いたものとして好評であつた。

九月には『藝文』 神戸悌一「縣城」が出た。匪襲に遭つた磐石縣城を守り通すといふ材料に半島人を配し、力の籠つた一作であつた。『青少年指導者』二十卷所載、天穆「獻」も注目すべき一篇であつた。愛妻を亡くしての追憶記であるが、まことに眞摯、そして健康で、育ちつゝある滿系知識人の姿をこゝに如實に見得た。

『新滿洲』九月號には小松「法文教師和他的情人」が出た。悪い條件の中での貧しい知的女性の苦鬪を描いたもの、また吳瑛「六月的姐」はアパートに住む女たちのいろいろな型を活寫したもの、また徐放「群」（同誌九、十、十一月）は小學教員群を描いて調刺的な作品であつた。

九月の『中央公論』は爵青「凍つた園庭に降りて」、牛島春子「綱蓉草」を載せた。前者は大東亞戰爭勃發の前夜、哈爾濱郊外に集うた滿系、日系、露人、米國人等を扱ひ、民族の交錯、知的滿系青年の模索を描いたもの。書き足りぬ點もあるが、逞しい構想は日本の評壇でも注目された。後者は建國有後の地方に働いた警察官の苦鬪をきつちりと描き出したものであつた。『新潮』は竹内正一「風俗國課街」を載せた。『新天地』九月には藤川透の「三人の遭難者」がある。南洋の思ひ出といふ形式で表題の物語が語られてゐる。

仁木良介「或る軍醫の手記」（『藝文』十月）は殺菌といふに止まる。小林實「アパートの親分」（同上）は開拓地に取材したもので、餘裕のある書き方だが、些か戲畫化した手法が難點となつた。古梶「蹇」（『新滿洲』十月）、乙卡「安嬪的懺悔」（同上）移山「恐怖」（同上）は何れも新人の作『藝文』十一月には藤川透「河のほとり」、中山義之「路傍の花」を載せた。

十二月は『藝文』に秋原勝二「草葉唱」、冬木羊二「白鼠」があつた。前者は東吉林へ旅した一日系の思惟を描いて關心を呼ぶ内容を有してゐた。『作文』はこの月、終刊號を出し、小說は松原一枝「後姿」、新川透「海へ」、池淵鈴江「バベルの塔」、長谷川潤「野火」、青木實「父の記」を載せた。「父の記」は眞摯な系譜ものでこの月、高木恭造「再會」（『滿洲藝文通信』）も同じ種類の短篇。『親光東亞』には加藤秀造「慰靈花」があつた。『新滿洲』には前已「濁流」があつた。

この月、青木實の小說集『北方の歌』が國民畫報社から發行された。

なお、この選集の内容を紹介して置く。

◇『満洲国各民族自作詩集』上

木崎龍「ある少年の記録」、富田砕花「蒙山河」、横田公子「嫁しき母」、佐谷川計「白雲間所」、山下一郎「鉄道」、長田「吉王廟」、吉野治夫「手記」、石垣「国境の江洲」、ムーリスキー「断出」、野川隆「電子（行く人々）」、秋原勝三「磨」、高木恭造「風雪」、奥崎「皇都」、日向伸夫「窓口」、間宮茂輔「稚の歌」、分木孝作「十四」、牛島春子「母宮」、ネスメーロフ「稚の上の血書」、三宅幸子「記憶」、村井俊「科学図」

◇『満洲短篇小説集』

田井俊一「姉妹の道」、野川隆「駅舎」、田辺清人「愛はしき季節」（改造社）、北条誠「星紀」、北村謙次郎「母」、横光利一「ある時」（改造）、大内隆雄「満洲文学の展望」（評論）

満洲国の出版界、横光利一『同胞』は百年前の満洲を開拓し、満洲の計画経済史を提唱した、満洲の作品に関する最初の第一作。百年を開拓の中に移民の人々を活躍した手腕を見るべきである。佐藤観次郎『黄塵』は中支戦線に自動車部隊の計画者として出征勇躍した主人公を中心に書いた戦記文学である。

■■■■——創作家が少いためにこの年もまた多くの作品は出なかった。そのなかで、次のような作品が注目され、その或るものは改造された。すなはち日系の側では、中村秀男の「間諜分隊」（これは東北部（在満）国境警備隊員として出動しての所産として注目された）、横光利一「ルネッサンス物語」（改造）、『春文』三月、加藤多聞「暗は光へ踏み」（『北陸』）、五十嵐豊蔵「蔵秋」（『新潮』十八号）、江藤至一郎「つばめ」（改造社、同上）、五十嵐豊蔵「帝国軍の人々」（同、十九号）等がある。満系側では李霜「夜光」（『満洲文学』）、梓郁「蹄手」（改造社）、『新潮』四月）、李聖「国家行興野」（『彩・創』）、馬語「人心」（『国民新報』八、九月）、安曇「青軍節」（『同』十月）等がある。満系の読者層が開拓されたことは注目されることであろう。以上のうち「人心」は満系である外は、満洲の現代に輝いたものが多いのも記憶されるべきである。なほ公開されたものに『譚山峠』『林則徐』があり、思想上の史材として注目された。

■■——詩人を結合して出来た『詩洲詩人』は主として日系の作品を載せてゐる。その他は新聞、雑誌に詩作品を出すことは言ふまでもない。満系の間では昨年新聞社と共に作品を募集したのである。この年詩壇の刊行されたものには、大槻憲二『十一氏による』『■■■■』、島崎藤村の『千曲川』

中がある。また滿洲文藝家協會では建國十周年慶祝のための詞華集を刊行することとなつてゐる。はかに間島方面の半島詩人の『詩現實』が出てゐる由、近時振はぬやうである。

短歌――この日系特有の文學形式はなかなか盛んである。歌誌は曾つて『合萌』『滿洲短歌』『アカシヤ』が合流して『短歌精神』となり、一方北滿からは引續き『滿洲歌人』が刊行されてゐる。

俳句――俳句は關東州に『鵬』、奉天に『山楂子』（『白楊』を合併）、哈爾濱に『雛型』等の句誌があり、また新京に『柳絮』叢書があつて、活況を示してゐる。

川柳――新京から『東亞川柳』、大連から『川柳大陸』が出て居り、滿日、『觀光東亞』等が柳壇を有してゐる。

隨筆――隨筆、隨想、雜文等を書く人々は日系、滿系ともに多い。隨筆その他を集めた本に『蘭花香る國』一冊がある。

兒童文學――兒童文學では山田健二『國境お友達』矢澤邦彥『杏の花びら』が單行本として出た。

樣本拾三は少年讀物として「大日本戰爭史」を執筆した。

その他――前年末、文話會賞の作品賞が北村謙次郎「或る環境」及び爵青「麥」に、功勞賞が『作文』に與へられた。滿洲詩人會では詩作多年の古川賢一郎に第一回滿洲詩人賞を授賞した。

五月二十九日には、哈爾濱でバイコフの文學生活四十年を祝ふ記念の夕べが開催された。こゝで、滿系側の回顧を吳郎氏の一文に據らう。

康德九年は滿洲建國の十周年であり、滿洲藝文の指導中核と稱される「藝文指導要綱」が公布されて後の第二年、滿洲文藝家協會が結成されてからの第二年であつた。すでに激動する社會に於いて結實し、實踐の中に生長し來つた滿洲文藝界は、茲に於いて、一新された狀態の中に、既知と未知の藝文家を綜合し、その總力をもつて一つの新しい藝文時代の到來を作り出すこととなつた。

勿論、このやうな新しい傾向の氣分に隨繞され、この積極的に來つた氣息は染感して、作者は一時惝況と不安の中に陷てられ、反つて停滯の狀態に置かれた、これは決して偶然な事ではないと信ずる。然らば、我々は過去一年間の作品と評論を見、一般に批評して沈滯、低調、活動を缺くと言つてゐるのに對し、他の原因を思索する要はないのである。

康德九年の滿洲文藝界を綜觀するに、その活動力はまことに數年前の旺盛だつたのに及ばない、特に人を注目させる傑作もなく、論を立つること新鮮な評論にも乏しかつた、全般的な活動を見れば誠に沈滯低調の感があつた、だが前に述べた理由を見れば、奇異となす所もない。

しかし、反面から見、數字の比率を、過去と較べば、特に減少してもゐない。滿洲文壇に關心を持

會費 [illegible]
電話二一三三八二 振替新京二一〇

つ一日系作家[illegible]の統計に據れば、滿系で衍六十三篇の多きを有つた（評文を內に含む）、然らば、當田氏の遺漏で數に入つてゐないものもあらう、何としても、百篇以上の成績であつたらう。

現在、滿洲に在る發表機關で、文學に關係あるものは、凡そ雜誌で三種（『新滿洲』『興亡』『國民新報』）、新聞で二種（大同、盛京）があるが、以前の發表機關に比べると、今は非、昔は可だつたといふ感が確かにある。因つて、昨年一年間の文學活動を探討するに、その盛んでなかつた要因は、內在的な作家たちが新しい傾向のために惶惑不安となつたことの外に、その外在的原因は、次の通りであらう。

1 諸雜誌に於ける新文藝欄の量が減少した、間に二三種廢刊されたものもあつた。
2 新聞紙の文藝欄の活動の沈滯とその減縮、中には文藝欄を廢した新聞もあつた。
3 滿洲文藝家協會の活動力に不足の感があつた。
4 滿洲では專門の文藝雜誌を缺いてゐる、ために創作力に旺盛な指導力を缺乏せしめるに至つてゐる。

右の如くであるが、我々はなほこの過去一年間の滿洲文藝界の概觀的情形を指出する要がある。

先づ、單行本小說集について。その出版された作品集は、八年の數量を超えてゐる、凡そ次の通りである。

1 秋螢の第一、長篇小說『河流的底層』（實業版）
2 爵青の第一、短篇小說『歐陽家的人們』（九年盛京時報文學賞入賞作品、藝文版）
3 小松の第二、短篇小說『人和人們』（藝文版）
4 雙邊の第三、短篇小說『天雲集』（藝文版）
5 吳瑛三郎の短篇小說集『滿洲文藝』（滿圖版）

これに據れば、滿洲の作家たちが不斷に滿洲文藝の統程を跋涉したことを窺知し得る。次にこの五つの單行本について簡單に紹介しよう。

康德七年來、滿洲の多くの文學者は長篇小說を書き出した、先づ古丁の「平沙」、小松の「洪流的藝彩」の百枚が開端となり、その後、玉則、金音の二百枚乃至三百枚が出、終に秋螢の八萬字の「河流的底層」が出現した。

この八萬字の長篇は、過去の若い學生を描いたもので、場所は縣から省城へ來、その後又北平の青年の墮落生活に轉ずる、我々現代の青年の一つの巨きな影であり、それは實際に當時の社會の若

干の眞實な人物の面影を留めてゐる。この小說では、學生の外に、官場に於ける臨長、新臨長に取り結んで科長にならうとする男、ともに爲政者の面目を表現してゐる、登場人物の家庭、子女もみな實に卽してゐる。

物語の構成は、全體がよく整つてゐる結末の部分は急いでゐるが、なほ描寫すべき事物に照應してゐる。そして主なる人物にそれぞれの當然な路を進ませてゐる、張天嬌が再びその夫を愛すること、林夢吉が終に歸つて來ること、賀文が高壯な中學生となること、小香が一工人に嫁ぐこと、周濂英は特に哀頹腐朽した野草の中に一本の拔きん出た高草として描かれてゐて、なほ一つの希望がゐるやうで、一陣の暴雨の後、我々が虹の出現を望み得る如きである。

作者は執筆完成後に、自ら「精神的に弱せずして弱し、啞とならずして啞たり、同時に愛しつゝ愛し得ず、憎んで又憎み得ず、すなはちこのやうな苦しい氣持の中から押し出されて來た……」と述べてゐる。作者はこのやうに自說してゐるが、しかし我々は「河流的底層」はつひに「底層」的作品であることを信ずべく、同時に我々は更に作者がその艱苦の文學生活を放棄し得ぬことを信ずるのである。

次に作品集『歐陽家的人們』について語らねばならぬ。これは爵青の第一の作品集であり、また九年度の盛京文藝賞を獲得した作品である、本集には十二の短篇が包含されてゐる。中には爵青の「屢々少年時代の官能と感覺を見出し、更に私の快樂の、憂鬱的少年時代……」を記念するための最初期の作品も若干收められてゐる。

斯くして、我々は爵青の初期から現在に至る創作の全貌を見得る爵青は、滿洲で稀れに見る精力の旺盛な作家である、その作品は實にジイド、プローベルの脈絡に淵源してゐる、そしてそれを彼自身の思路の中に融溶してゐる、このため同一の知性の作者と稱され、甚しきは「鬼才」とさへ稱せられた。

作者は創作態度について、周邊の平庸な現實を描寫するのに反對し、創作の中に作者の哲學を有すべきことを主張した、これは作者が哲學的思惟思考となつたのである。『歐陽家的人們』集中にこのやうな香ひが濃く存してゐる。

集中の物語の題材について言ふと、半ば以上は一種の超現實的な奇蹟である。その中で「男女們的塑像」「斯賓拉霧先生」「青春冒險××」等々は、すなはち甚だ好い例である。作者は主觀的觀念で書き、彼自身の哲學を發揮してゐる。主觀の世界に於いて、多くの奇蹟的な故事を幻想し出してゐる。爵青初期の作品に、我々はその一般を現知し得る。

この頃の秋手部氏の作品「浪花」「大観園」「歌舞伎的人間」は、共に「心上文学」が発刊間に迫出された作品である。「浪花」は理智と面白の結合、矛盾、不安を描き、終に××の悲劇に終っている。「大観園」は大部分の書簡のやうな一隅に発生した問題で、それには倫理に通ずる多くの問題の裏、若い経営者の苦の旋しの表の点があり、短篇小説の能力を駆使してゐる、技巧、構成ともに記録の作と言ひたい。作品「歌舞伎的人間」は、同歌舞の六人の兄弟及び一人の姉の、社会的及び人間的な葛藤後の物語を主題として、大きな時代の新しきものと古きものとの衝突を描いてゐる、歌舞伎は既に古い時代の人間としては滅び行かなかつたが、歌舞伎守護はこの作品した歌舞を通じ出したのであつた。

この時は、作者は「このやうに我々は印しても、読者の心中には印し得ぬかも知れぬ……」と言つてゐるが、我々は確かにこれは一人の才能旺盛な努力的な作者の第一部作品であることを感じ得る。

第三に、小松の第二部短篇作品『人與人間』。

『人與人間』は四年前の『脱皮』とは全く違つた新しい作風を形成してゐる。この作品集に存する共通点は、「これ迄生活されてゐる十二篇の小説中の人的の「始んとすべて」が相違的な非難嘆を

『もゐることである。題材しか小市民知識階級分子、熱情盛夏の青年男女、利己的な無知裁断者、一生を言しかそれをいかなることとも知らぬ部落民、これらのやうな現実に対して責任を有たぬ無知無識者、作者も言つて「同時に彼等に少しの希望をも與へたかつた」と説明した。

これまで小松の作品に充満していた悲観的感情と絶望の感情は、『人和人間』の二篇では、明らかに変つたとの印象を與へる。それは彼が現実を描写することを企図し始めたからである。だがこの現実の描写は、往々その感傷を酔句のために新鮮の質量を欠いてゐる。そのため浮動、軽躁の感がある。これは母胎の作品に於いて、聞きなれぬ人々と不慣な生活を扱つてゐるのと同じやうに注意すべき問題であらう。

「人和」「結婚花」「赤子合計」「部落民」「初心」等は、一般読者界の好評を博した創作である。殊に「人和」「部落民」の取材上の新鮮さは、当時話題となつた。「赤子合計」の、舞台的な感傷に入つてゐる描写は、西洋新文学の必然的な傾向を表出してゐる等々、ともに作者の説明は描写の信念をあつた。『人與人間』を『脱皮』と比較すると、題材に於いても描写に於いても、明らかに見新しい領域を拡大した、若し作者が更に一歩を進めて物語の時代、さ巧を試すならば、必ず成る完璧せる小説家となるであらう。

第四に、疑遲氏の第三部の短篇集『天雲集』について述べる。

疑遲は『花月集』『風雪集』等一連の作品の後に、昨年またその第三部短篇集『天雲集』を世に問ふた。この三部の短篇を讀むと、一つの共通した感じを有つ、それは作者が滿洲の自然の風物を、處理するに慣れて居り、その文は質樸無華、冷靜で透徹した滿洲の自然風物の觀察者となつてゐることである、これは疑遲氏についての定評である。

『天雲集』には八つの短篇が入つてゐる、「酒家與鄕愁」「不歸鳥」「雪猫之祭」が本集の主力作となつてゐる、「酒家與鄕愁」は蒙古平原に近い寂しい場所の酒家の風味を、「情慾」的筆法で完全にぴつたりと描いてゐる、許正と張老人の旅愁と鄕愁が、紙面に活寫され、胸檻を跳り出て躍躍する心地がする。

「雪猫之祭」は密林生活に關する狩獵者を主題として始められた緊張人を動かす物語で、物語中の人物は、作者が過去に描いた典型と餘り大差無く、性格は依然として甚だ粗野であるが、洋溢する生命力を有つて居り、或る人間にひどく踏みつけられる、忍受の限りを盡すが、しかし時には粗暴な野性を發揮する。

作品では自づと周慶が主人公である、だが周慶の身邊を圍繞する人物、綠林より退身した于老頭、その子于亮、女人の張富、佟老四の如き、みな崇高な眞性を有つ鐵のやうな男である。しかしこれらの血氣あり、義勇ある錄汗子が、車輻臣のやうな人物に向つては、あつさりとやしつけられその長を施し得ない、ここに作者が最も關心を有つ事態が顯らかに示されてゐる。

この小說では人物の處理について、多くの義氣血性漢の中に、車輻臣のやうなこんな人物を置き、彼等の運命の主宰者として、彼等の生存の運命を布置してゐる。佟老四の妻が代りにかどはされ盜されようとする、周慶の女房が車輻臣とくつつく如き、一面愛すべき筆法で周慶の妻の運命を描き、更に憎むべき筆法で車輻臣の剝削と欺騙の手段を寫してゐる。

このやうな題材は、若し作者が生活の豐富さと觀察の精密さを持たなかつたら、決してこのやうに力強くは書かれ得なかつたであらう、ここに作者の創作への忠實さが見られる、我々はだがこのやうな作品が滿洲の文壇に於いて——疑遲氏以上にも見られることを願ふのである。

最後に、吳瑛主編の『滿洲文藝』について書く。

これは同人雜誌淵等の時代に出現した有力な創作集であつた。全滿の精力的な文學青年の原稿を集めたこの刊行物は康德九年度の文壇に一異彩を放つたものであつた。それ故、吳瑛は編後記に特に言つてゐる。「私は毎晩澤山の原稿を讀んだ時、私自身が文中の情緒に引き入れられて行つただ

發行所　會社　國民[illegible]
電話二一三三八二振替新京一一〇

けでなく、私は又これらの文章の中から、一層深く作者たちの精神を覗ひ覗た、この精神は端無くも私に一種名づけやうのない力を示してくれた、この力は暗かに私を推し動かした……」。

これらの言葉はまさに編者が滿洲新文學の力を說明したものである。我々は『滿洲文藝』を讀んで、表紙に題した「滿洲新文藝最高峰的代表作」が絕對に正しいとは承認しないものの、その內容に對しては驚喜に値ひするものがある。これらの作品は、作者の體質と精神が絕對に硬化してゐないことを表示してゐる。絕對に弱り衰へたのでない作品の出現は、やはり比較的冷淡だつた昨年度の滿洲文壇を點綴するに足りるものであつた。

それには、讀むに値むする作品が極めて多かつた、山丁の「熊」、舒柯の「覓」、戈末の「杏花村」、勵行建の「地獄譜」等の四篇の小說と、李喬の一幕物「夜航」は何れも廣大な滿洲を背景とし力強い手法で「人流」の動きを描いたものである。「杏花村」の村長と鄉紳の鬪爭は、鬪爭に憐れにされた無知無識な人々の群れを反映してゐる、また「地獄譜」では地獄に生活する魔鬼、太陽の光線のない生活者を描き、民族の頽廢と悔悟を描いたもので、洵に力作である。更に「覓」「熊」及び人を動かす一幕物「夜航」の如き、ともに作家が心血を濾いだ力作である。

爵青の「人鬼迴廊錄」は、遠く眞實を離れた警句を用ひ、智慧者の說教を濫用する所から更に一歩を進めて哲理小說の創作の例を開いたもので、これは爵青の企圖試作だつたと言へる。梅娘の三部曲中の「蚌」も全部がこれに發表された多くの女たちの蚌のやうな生活を主題とした物語で、相當にこれも人を感動せしめるものであつた。

外に、なほ金音、也麗の散文、それから未名の童話があつた。

次に、我々は雜誌に發表された作品を見よう。それは前述した單行本とは違ひ、新作品が發表されたものである。單行本は大抵過去の雜誌或ひは同人誌に發表された文藝である。

作品活動から見れば文壇の新人の活動はすでに知名者の績果に劣らぬものを示してゐる。我々は『新滿洲』の春秋一季の新人展に於ける作品を每號の知名の士のそれと比べ、新人の努力を見出すのである。

その中で我々の記憶に殘つてゐるのは、次の數人の作品である。

冷萍の「夜集」、夫琪の「暗」（『新滿洲』春季新人展の中）

乙卡の「安娜的懺悔」、古梯の「醫」（『新滿洲』秋季新人展の中）

王朗の「花」、蘇捷の「斷腸之書」、左蒂の「柳琦」（以上は『麒麟』に發表されたもの）、

この七篇の滿人の作品は、ともに稀れに見る成熟した題材であつた。殊に前の四篇は、作品の思

路と意識的展開を把握し、人を驚異せしむるものがあつた。

冷萍の「夜梟」の描寫は、ドズトエフスキーの「罪と罰」に於ける主人公の罪を犯した後の心理の變態によく似てゐた、「夜梟」は同じやうな生活で青年和尚の良心の自責を描き、それに同情、憐憫、及び警戒を混へ、期待すべき作品となつてゐた。だが作者が文中に宗教的信心を牽き入れたために、全篇の作品構成に甚だ大きな影響を與へた、若し全篇を天罰鬼神を畏れざる、心理の變化の發展を以つてこの物語を作り上げたら、その成功は更に大であつたらう。

夫琪は文壇で後から起つた努力家である、「暗」に於いて作者が題材の把握にいかに苦心をしてゐるかが判る、作者は初期の寫作の姿態を棄て、眞つ直ぐに暗い方面を追求した、しかも充分に愼重に處理した、この點で記憶に値ひした。だが處理能力を缺いたために、依然として素材小說の姿態を以つて出現した、それはちようど現段階の滿洲文學界が犯してゐる同じ弊害である、最後に梅姑娘の死をあのやうに粗劣に表現し、纖細な心理の變化を缺き、任意に小說中の人物の生死を處置してゐる、それは甚だよくない態度である。

冷萍の「夜梟」に續いで好評を獲たのは乙未の「安娜的懺悔」であつた。これは良知色能を純眞な素材と滲合させた作品であつた。彼女（作者）は小說の主人公を、最も細かな心理で描寫し、讀者をして知らぬ間に同情、默案に陷れる、その間に作者の寫作の力を表示してゐる。我々は禮教と純眞とがいかに仇隙を發生するかを眞に知らない、この作はこの仇隙を具體的に指示し出してゐる。「安娜的懺悔」も、人間の必然的運命を象徵したものである、作者はまさに年富力强な鋭い社會觀察家である、この希望ある文學の才に背かぬことを願はう。

古梯の「窖」も又自づと現段階の滿洲文學の素材小說の通病を犯してゐる。しかし古梯は確かに物語叙述の能手である。そのため結構と描寫との双方に於いて、顯らかに夫琪の「暗」に勝つてゐる、殊に「窖」は或る地方の生活の血口を表現し、その血口は勤勞者の金銀を吞食するのみならず、血と肉を吞食する、あらゆる地獄層の悲願がそれの原因の上に展開されてゐる、我々は指貲の手段でそれを除くべきである、古梯はこのやうな寫作の情緒下に、この一篇の創作の使命を完成させてゐる。

この四篇に反對なのは、愛情を重點とした新人の創作である。これは『蟹蟹』の昨年新文學に於ける稀れに見る貢獻であつた。

王朗の「花」と蘇捷の「斷腸之書」の二作では、その愛情の生發の描寫はみな所謂純情に發源した單一であらうと雙方的であらうとに論無く、みな距離に超らぬ、奇特な非理に走らぬ相愛を文章中

に発揮している。それで、人をして特別に同感を持たせる。聞くは「花」における解釈は人の片想と、「新聞之歌」で作者が時代に対する抗議のために登場を押収される保証を受の開設、何れも経験物語を高調し、純情化している。殊に主題の「花」は此道を記を以つて、この所謂な片面的愛情物語を叙述して居り、尚に一面の高級な「愛情賞物」である。

作者の「代行」は、物語は一人を外少女の愛情の苦悩を叙述したものである。彼女は純純な経験の上での問題である、生活を整理すべく、環境と生活の二重の圧迫下の苦悩に関聯する、年齢は相当に洗練されてゐた。我々はこの作品の作者に対して、今後の文学の発展上の行造を期待するものである！

その次に、十で上げた成した作者の話題数題を試てよう。唯惜ではなかつたが、その中には千秋の努力を持つたものがあつた。

知名な作者の作品数題の支持には、「新聞記」は最大の努力を持つたと言へよう。聞くは「詩歌文壇」「山国十年接吻小説」「海洋童話特輯」及び海外の文学は、尚しく一流の作家を動員した特殊の力作であつた。目指に値ひするものに、左の名篇があつた。

詩風「我が世界詩話」、作風「愛の設計」、林芳「四時深」、駅行程「男鬼女鬼」、石塚「島

侵」。里野「詩歌」、方之義「家郷風詩」、詩流「水仙祭」、曙光「恋歌」、小谷「温文教師和地的情人」、奥義「六月的風」

詩風の「我が世界詩話」は、心理描写をもつて、或る人間が無邪気なし間を示らめる所からも、風を示めなくなるまでの過程を優れた詩で叙述してゐる。「短唇数記」には、農村教育の実態が見られ、同貴の報告文学として面白れて愛受へないものであつた。駅行程の「男鬼女鬼」は恰も一篇の立派な教訓動物であつた。彼は小説の構造に、同片の書簡を以つて開拓の主題とした人生動かす物語をつくり出してゐる、そのため相当な成功を獲得してゐる。石塚の「海塵」は所謂「下江」「命の人と年を主題とし、一個勇者たる海神の語調を描写し、奥義「家の興衰を以つて北海洲の農村と人物を紹介してゐる。企図は敬佩に値ひするものであつた。犬が海事が過度に乱れてゐる。里野の「詩歌」は不幸な人間が歌唱した感謝を、全篇の詩力を以つて描写し、そして一つの問題の暗示を成してゐる。「女郎與面」は二人の違つた女を描いた、だがその運命は同じく、彼女等は若々たる人海の中で、生きるために闘ひ、みなり力強く描かれてゐる。奥義の「六月的風」は、やはり海洲の女の性格を描いたもの、ここには始めて接触、浮ける野蛮を有し意味を有ち女人

*お馬賊の話は、「風」としての命脈を断たされてゐた。

歴史小説は、去年話題となつた四作があつた。

「三国の三作家」、時雨の「長安城と殺生」（以上『改造』所載）及び[illegible]「林則徐」、[illegible]の「勝海記」（前者は『新潮』に、後者は『改造』）

歴史小説は今日、作家の一つの創作の路となつてゐる、（今後は旺盛な大元と称し出すかも知れぬ）、現在においても結構は出来ない、況もそれ程古の時代を復活させて人の情感を表現するだけでは、単に歴史小説の題材となすに足りない、我々は歴史小説に対して、もつと過去より探し出し、現代と同じ人間を歴史の舞台に登場させてこそ正しいのである。だが昨年のこの四篇は、それほどのものではなかつた。

「林則徐」は一例の通俗な英雄の前奏曲と見るべきもので、あの偉大な「阿片戦争」の描写としては極めて不足の感があつた。だが、「林則徐」の取材は、時代に作者が大いに着心したものである。「その成功は固らその失敗」といふ通りには、たとえ幾多の難点があらう、だが一方的な勝利を描いた描き方は、全篇の事実を説明きとよう。[illegible]の野蛮の間が油断として低上に踊り、近来稀に見る歴史小説を成してゐる。だがたゞ[illegible]情景を結調し、[illegible]と叙述、

酒杯の人生に通過叙述した物語を描くことは、三思すべきであらう。「長安城と殺生」「勝海記」はそれ以上に現在されてゐる歴史の題材を満足せしめるに足りないものであつた。

この外、雑誌に出た文芸評論は、[illegible]より無題であつた。もとより評論家の不振が問題してゐるが、雑誌のこのやうな文章を掲載したことは、やはり[illegible]であつた。記録にあるものに「新潮」に[illegible]の「新潮文芸月評」があつた、[illegible]、「[illegible]」には林[illegible]及び[illegible]の「[illegible]」[illegible]の全面的批判があつた。

次に記[illegible]ばならぬのは新聞紙の文学である。

新聞界の文学については先づ一つの提案をする、時勢に新聞に所[illegible]共[illegible]は中篇の小説を掲載し、次に新聞紙の面目について書く。

長篇小説には大[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]と、[illegible]日報上の[illegible]の[illegible]、「北洋時」があつた。一つは二十四字に過ぎず、一つは八百字以上の新聞小説である。

時間を理論と記事は、[illegible]民[illegible]現行本に伴した[illegible]に[illegible]に[illegible]ずもとして、[illegible]の[illegible]新小説の[illegible]を指摘しよう。「[illegible]」は[illegible]が発[illegible]している「[illegible]」といふ[illegible]に向つた出村の物語を主題とし、[illegible]の[illegible]なる[illegible]山村を[illegible]とし、その中に動く小さな人物のいきいきとした

形態と描写し、[illegible]時代の大自然及び封建的搾取の中に生を求める農民が、[illegible]に闘うてゐる。最後に山村の開墾、鉄道敷設から前後、隔世せう知く、この山村をして又一條の様を現ぜしめた……

この小説は、去年五月に始まり、十月に至つて終つた、同時に既小説は大内氏により日文に譯され「[illegible]」に掲載された。

[illegible]氏の第二部長篇「[illegible]」は、やはり氏の一貫した作品の性格を有してゐる。この小説は性格の作品を更に新展せしめたものであつた。それは花沼十里の新洲の母河松花江を背景とし、生動する物語を展開してゐる。殊に新聞小説的性格を加へたために、魅力が豊富り、各社新聞が愛すべきものとなつてゐる。

次に、農村時報は前年の計畫に引続き、左記諸氏の中篇小説を載せた。「月から七月まで掲載されたものは——

1 [illegible]の中篇「[illegible]」 2 [illegible]の中篇「月色」 3 [illegible]の中篇「金面的青春」 4 [illegible]の中篇「百」

[illegible]の「[illegible]」は更に一歩を進めた心理描写の作品であつた、彼女は一人の現代女性の苦悩を完全に描き出した、通俗は別しとまず問題とし、来除に種々な理論を持つ、貧力がないために、[illegible]を失つた島崎の人々の中での乱闘を数のように、「[illegible]」は[illegible]と成つて一人々の中に存在し、[illegible]し、追求する、だが何を追求すると言へるか？、本篇はどうでもいい女性を、仔細に描き、新型の作品と成つてゐる。

[illegible]の「月色」は未完成の作品である、[illegible]の作者とも性格の違つた作品は、「月色」に於いてもその奇警な作風を保持してゐる、それは一人の[illegible]に[illegible]の故郷に[illegible]故郷の[illegible]の家に帰つて来る、共産で久しく別れてゐた姉妹や[illegible]者と共に、老父一時の物語は故郷の情に[illegible]た一ア、そこで又彼[illegible]数年前の不良少年の面影を所謂し出すとともに、[illegible]でもあつて、未完成の作品と成つてゐる。これからは、[illegible]作者の[illegible]と[illegible]し、他人と違つた用語を[illegible]してゐるのが知られる。

全面的青年は[illegible]の一種の試作的企画によるもので[illegible]小説と認めるのは満洲では早い、一九三六年[illegible]のような[illegible]に[illegible]を作つたのだつた。彼は一塊の土の上に生活してゐる二人の男つと農村の活動、この新動が[illegible]貨や[illegible]の導入から、不可避的に[illegible]な葛藤関係を生ずることを知らん。作者は[illegible]の[illegible]を摘出し[illegible]活不潔の[illegible]流の[illegible]し、更に一つを[illegible]で[illegible]書の説明を出現[illegible]とし、満洲新文学の[illegible]に於ける[illegible]を、満洲人文社会の[illegible]と光示

ようとした。作者はこのために確かに苦心したのだが、後半が故あつて完成し得なかつた、でも滿洲の現勢に害あるものでは決してなかつた。

最後は野鶴の「盲」で、これまで軍事小說を書くことで有名だつた野鶴が、今度は新作風で、動搖する社會と男女間の愛情の紛糾を詳しく指摘した、歪路は大衆小說の形式に近かつたが、文藝の範圍たるを失はなかつた、少くともその物語叙述の故に。

以下、滿洲の新聞紙の文藝副刊を一瞥しよう。文藝副刊は今日では、もはや昔日の滿洲新文藝を助長した底力を失ひ去つてゐる。原因は國內弘報新聞制に伴ひ、紙面を縮少し、停止せざるを得ず或ひは減じねばならなかつたからに外ならぬ。斯くて、新聞紙の文藝版は、かかる傾向の下に、消沈の一途を顯示した。

しかし、その中で昨年、なほ言及し得るものに、大同報の「我們的文學」、同報の「新文壇」及び盛京時報の「文學」の三者があつた。外には、大北報の文學版の取消、及び泰東日報文學版の完全は通俗雜興化したこと等、均しく新聞紙副刊文學が最大の刼運に遭つた一年であつた。各地方新聞が小型となり、地方文學者の活動を容るべき場所が無くなつたこと等も、否定出來ない滿洲文壇全體の一損失であつた。

斯くて、「我們的文學」「新文壇」「文學」の三つについて語る外ない。

大同報の「我們的文學」は昨年の一月から四月までに合せて七期出た、前年「我們的文學」が始まつてから合計して三十一期の壽命であつた。その後は發展解消の運命に面した。それについては、吳鄭游「關話滿洲文學十年」と題してその所以を說明したことがある。

昨年僅か七回出た「我們的文學」は在京文壇の士を動員し、全力を發揮して經營したものと言へた。それは記念すべき作品が極めて多かつた。就中、雜文隨筆に於いてさうであつた。吳鄭の「去年滿洲文壇回想記」、鄭孝胥の「養齋隨想」、吉丁の「談」等である。創作方面では徐歌の「人群」「小藝の「柴米」等があり、詩と散文では田瑯の「綠色的靈音」、徐歌の「山洪」、外交の「迎新」「年」等があつた。

この外、滿洲文藝家協會が九年一月十八日、文藝家愛國大會を開いた際、該刊は特に專號を發行して、この意義ある行事を記念した。それは滿系文學者の時局認識を具體的に表現したものであり、また文藝者の時局への初陣でもあつた。この特輯には、大會宣言、決議文の外に、爵青、吳郎疑遲、小松、山丁、外文、金音氏等が執筆した。

「我們的文學」の發展解消の後を繼いで、昨年九月一日、張羅氏の主編する「新文壇」が大同報

發行所　會社　日日畫報社
電話二一三三八二　振替新京一一〇

に出現した。これは四日毎に出る文學副刊で、發刊の初めに讀者への挨拶もなく、讀者はこの文學の外衣を着て突然出た副刊に、妙な感じを抱いた。がその壽命は今日まで延びて來てゐる、主編者が相當に滿洲文學に對して熱力的充進を揮つてゐることが知られる。

「新文壇」は一般に文學青年倶樂部的な傾向に入つてゐる、大體に新進の、或ひは潛心的な文學青年を主體とし、理論及び小品散文が多く、記憶すべき作者に之倉、長蘆、方思、高揚、遲鏡識、高揚、蘆燈等があり、その中には好評だつたものも乏しくなかつた。

ただ期日が短い關係（出版に）で、編者が發稿の際に、より嚴しくやる暇がないためであらう、時には低調な作品も出現した、甚しきは一篇の文章に、思想が統一されず、技巧も鍊れてないものがあつた。この點は改充せねばなるまい。滿洲の文壇のために、若し週刊か半月刊に改めたら、その效果は現在の陣容よりずつと好くなるであらう。

主要な評論は、大體一致して明朗な性格の、文學を創造することを希望した、これは喜悅の文學とその論調はあまり差がなかつた。だが惜しむらくは事に就き事を論ずる現實性を缺いてゐた、殊に架空的に東亞文化を討論した一論一駁は、愈よ讀者をして迷宮に趨入させた。だがその中で蘆蕃の「滿洲文學管見」、蘆蕃の「今日文學作品的技巧論」は誠に二つなき作であつた。

文學的動力を缺いだ活動は、ただに「新文壇」がさうであつたのみではない。私は我々共同の課題であると思ふ。一つの文學副刊を活潑にし大と熾んならせることは、亦實に滿洲文學を前進せしめる一辦法である。「新文壇」の行事として十月の滿華文人座談があつた。これは武德報社編輯部長柳龍光氏の來滿を機會とし盛會を現出した。更に大東亞文學者大會滿洲代表歸國の際に、列席座談會を催した。華甲、蒙疆及び滿洲の各代表が大會に出席しての意見を網羅し、特刊を出した。

我々は「新文壇」が今後一歩を進めることを、更に嚴肅に進むことを期待する！

盛京時報の文學版は、毎週一回で、突擊的性格の文學副刊である。その主力は時事的評論で、雜誌の文藝作品、一小說集が出ると、直ちに批評が出る。斯くして滿洲文藝の前進を輔導する。それは意義ある事で、盛京時報文學版の一大特色である。

それから、編者が滿洲文學に貢獻した事項がある。譬へば數回連載された谷靈の「滿洲新文學年表」及び周氏の「建國十年滿洲文藝書提要」等、ともに編年體の史實を煩を厭はず詳述したもの、滿洲新文學史に絕大の史料を提供したものであつた。

該刊は主に文學短評を原動力とし、傍ら詩、小品文、文學題答、文學紹介等に及んだ多光多采な內容で、殆んどみな地元の文學の當面の問題と關係あるもので架空的高論と違ひ、そのため文學を

發行所　會社　國民畫報社
電話二一三三八二　振替新京一一〇

熱愛する者の好評を博し、當代滿洲の最も好き一文學副刊と認められた。

記憶してゐるものに「關於通俗小說」なる奉東日報との論戰、滿洲の大衆語の問題の檢討、最近滿洲に流行してゐる所謂「實話小說」への論及あり、その他短評は均しく鋭利で利刃の如く、言骨を刺し、全滿洲文藝界に對して、縱橫の忌憚無き批判を加へ、何れも當面に最も求められ、現社會環境に最も適合したものであつた。

該刊の理論上の主要な作者には雷雨華、陳因、祝菱、吳郎、秋螢等があり、詩及び散文には吳瑛、山丁、林緯、田琳、未名、駱行建、傅青、虞弦等があり、紹介方面には歐陽萬舞、葉雲、林靖があり、譯文は林鼎、明朗等がある、ともに文學工作に努力してゐる人々である。

最後に、文壇での特殊な行事について書こう。例へば滿華作品の交驩、滿洲童話特輯の發行、及び詩運と譯文界の活動狀態等である。

先づ華北作家協會が滿洲文藝界に推薦した華北の八作家の作品、その內容は張金壽の「匡超人」公孫嬿の「未繡完的牡丹」、慕容雅文の「初春散記」、幻鷗の「我的童年」素靜の「風沙夜」、東方雋の「養子」、程心扮の「靴戟」、蕭菱の「嗆吶」で、前後して『新滿洲』四卷七、八兩月號に發表された。

華北の作品についての認識と批判は滿洲で相當に旋潮を捲き起した。多くは張金壽等八氏の寫作意識に不滿であつた。殊に盛京文學版の來旅、春雲等は徹底的に痛擊を加へた、その中で春雲は「私が見得たものは何であるか？或るものは塡詞をよくし月琴彈く佳人を描いてゐる、……或るものは身邊瑣事の隨記で、既にして不健全な行進であり、更に個人的哀愁に限られてゐる……ここから我々はこれは完全に題材の紊亂に陷つてゐることを規納し出す……これら華北の作家は、迷途を模索し、寄くべき方向が何處に在るかを見付け得ずにゐる……」（「華北的文藝」）と言つてゐる、これは滿洲の大部分の評論家を代表した意見であつた。

それはまゝ實際の所であらう、だがこの八篇にはやはりその特別の長處があつた、小說、散文ともに沖淡雅麗な作風に滿ちてゐた。細膩な描繪、微に入つた刻畫は、軟な線條で長を見せてゐる滿洲の作品には決して見られぬものであつた、同樣に滿洲の作品の渾雄豪邁は、華北方面ではなかなか見出し難いのである。ここで、我々はすでに華北・滿洲の文藝が今やそれぞれの路を進んでゐることを見得る。

なほ滿洲文藝家協會から華北へ送つたのは傅青、小松、吳瑛、駱行建、疑遲、杜白雨、金音、劉漢等八氏であつた。

以下、滿洲の童話について概說を試みよう。大體、滿洲の童話の發育は、これまで他の文藝各部門に比べて蹉跌的であつた。だが去年以來、滿洲童話界は聲誠を奏樹した。作者あり、なほ專門に童話を執筆した作家がある。こゝに我々は慧燈を紹介すべきであらう。それは眞に孜々として滿洲童話に奉仕してゐる者で、彼はすでに二冊の童話集を出してゐる。『月宮裏的風波』はこの年に出たその童話集であつた。

現下の滿洲童話界は、四種の型態を具備してゐる。一つは文藝童話の徑でメルヘンへの抗議たるもの、一つは奈くメルヘンの意味でいきいきとした「兒童讀物」を書いてゐるもの、一つは情操教育の任務を負ひ教育思想を混へた、兒童文學童話の途に入つたもの、最後は寓話文學で、新しい寓話を創作して我々現代人の感情を寄託し、哲學的源泉、教育的輔俾より發したものである。

今、未名、巻巻、巻巻、古巻四氏を代表として擧げ得る。そこでこの四人の力作で「滿洲童話輯」と題し『新滿洲』四卷十一月號に發表した。かかる企圖は滿洲童話界に不拔の地位を樹立したものであつた。因つて特に記して置く。

蓮の物興を繼承した前二年は、今や甚だ寒涼憐れむべきものとなつた。「詩」は冷落の段階に擲げられ、新聞紙の副刊、雜誌の補豐の用となつて、顯らかに又夕陽の歩伍に歩み入つた。新聞紙上、「我們的文學」には會歌の「山洪」といふ長詩が出たが、外には賭るべき作品は少なかつた。これに對し『新滿洲』は「滿洲詩作介紹」なる一欄を設け、冷歌、雷力普、魔女、崔伯常氏等の詩作を登載した。だが惜しむらくは規模小に過ぎ、義退に趨入した詩の命運を補ふ所がなかつた。だがこれに反し詩集の批評は、盛京文學版にはいろいろ出た、陳因の「季季草」や「青色詩抄」の評等の如きである。

最後に譯文界は亦特に低調を呈した、藝文書房は曾つて日本文學全集を問はうとしたが、結果は僅少、文華の譯した谷崎潤一郎集以外は、再刊印されず、『新滿洲』は昨年掉尾に「日本文學介紹特輯」を行つて、この一年來の貧しい譯文界を點綴した——（十二、廿二）（大內記——吳郎君の譯文界についての記述は些か遺漏がある。藝文書房からはなほ島崎藤村集などが出てゐる。）なほ『新青年』は年末に、新裝號を數ケ月の休刊の後に發行した通卷一三〇號である、疑遲「氷流」石軍「非超人」、也麗「綠洲」第一回等、石軍、金音、老翼、勵行建等の「私と文學」特輯等を載せてゐる。

書き來り、こゝに至つてなほ遺漏の少くないことを思ふが、枚數の關係もあり、一應こゝで擱筆しよう。

追記

この原稿を書き上げたのは去年の春であつた。その後、一年以上が經過した。その間に數多くの物故者が出た。

堀井正一　アッツ島で戰死
晴山昌勝　昨年病死
横澤宏　蒙疆で病死
遠藤美津男　昨年病死
加藤正　昨年夏病死
川島薫　昨年秋病死
陳國（姜靈非）奉天で昨年病死
城島舟禮　本年三月新京で逝く
高原富士郎　同じく新京で急逝

李心炎　本年七月病死
蘇正心　本年八月病死
藤井圖夢　本年春南方で戰死

敬んで冥福をいのる。

なほまた、多くの若人たちが長期出張してゐる。彼等ははげしい戰の場に在りつつ、劍光銃影の間に在つてその文學魂を錄りつつあることであらう。切にその武運長久を祈る。

今年七月二十九日、私はこの本の出版者與謝野晶子とともに大連にゐた。そして警報下、相携へて地下室に入り待機した。その時に持つてゐた亡友加藤正の遺品たる白扇に書きつけた小詩をここに抄して敵覆滅の誓ひの記錄とし、且ついま大東亞の各地にたたかふわれらの同志の健闘を祈願しつつ本書を了ることとする。

われらまた戰場に在り

七月二十九日
南滿戰場と化せり

われこの日　大連に在りて
二時間餘を地下にゐたりき
遠く又近く
砲音傳はり來れり
眦を決して
われら　敵打倒を誓ひき
老いも若きも
悠々として防諜團指揮下に行動したりき
女子また戰列につき　餘裕綽々たりき
われらまこと必勝を信じ勝ち拔かん

一刻の後　街は平靜にかへり
整然と市民動けり

卷頭を賞る赤き花の鮮かなるが
烈日のもと眼に沁みたりき

勝利へ
ひたすらに勝利へ
われら
われらの全力を獻げむ

昭和十九年九月五日

大内隆雄

發行所　會社一四四番　幸一郎
電話二一三三八二　振替新京一一〇

著者略歴

本名は山口愼一、明治四十年福岡縣柳河町に生る。大正年代より大内隆雄の筆名を用ひ來つた。昭和四年、東亞同文書院卒。滿鐵本社（情報課、經濟調査會）新京日日新聞社を經、現在は滿洲映畫協會（現映畫部）文藝課長。滿洲文藝家協會委員。大同劇團文藝部長。滿洲雜誌社編輯長。滿洲國編譯館責任者。住所　新京特別市曙町二ノ一六。

著書に『支那研究論稿』『支那革命論文集』『滿洲文學二十年』、小說『或る時代』、評論集に『東亞新文化の構想』、譯書に『原野』『蒲公英』『平沙』『石軍沃土』『綠なす谷』『黃金の聲』『門』『歐陽家の人々』等がある。

康德十一年十月一日印刷
康德十一年十月五日發行

（三、〇〇〇部）

定價 ㊀ 五圓
出協會員價格一〇〇三
出協業務價格二二

著者　大內隆雄
株式會社國民畫報社販賣部長

發行人　奥一
新京特別市吉林大路五〇三

印刷人　津島七郎
新京特別市吉林大路五〇三

印刷所　滿洲軍援產業株式會社

配給元　滿洲書籍配給株式會社
新京市長春大街一一〇

發行所　株式會社　國民畫報社
電話二一三三八二振替新京一一〇

國民畫報社文學書

北方の歌	2圓50錢	青木實 短篇集
歸心	2圓50錢	北村謙次郎 短篇集
野狐	3圓50錢	北尾陽三 短篇集
烏蘭順河	3圓50錢	長谷川滿 短篇集
阿片戰爭	3圓50錢	樣本捨三 長篇
アロー戰爭	2圓80錢	樣本捨三 短篇集
タルチユフ役者	3圓50錢	樣本捨三 戲曲集
園花	3圓30錢	工清定 短篇集
滿洲渾沌記	3圓30錢	工清定 短篇集
石牌樓	2圓30錢	冬木羊二 長篇
凍原の記	2圓80錢	日向伸夫 短篇
縣城	3圓00錢	神戸悌 短篇集
頃々祭の頃	2圓20錢	山田健二 童話集
韃靼みやげ	2圓20錢	岡田文枝 紀行集
縣城の空	3圓50錢	上野市三郎 農村、漁村
歐陽家の人々	3圓50錢	爵、青 譯集
滿洲文學二十年	5圓00錢	大內隆雄 文化史

滿洲を代表する作家